
とある魔術の禁書目録 外典

天照

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の禁書目録 外典

【Nコード】

N8046Q

【作者名】

天照

【あらすじ】

”第三次世界大戦”。——フィアンマを倒し、インデックスを助け、大天使を止める為に”ベツレヘムの星”と共にその姿を消した”上条当麻”——22巻の終わりから始まる、パラレルエピソード。行方不明になった”上条当麻”がどうなっているのか、ぜひご覧あれ！！

”新章”開幕！！

おかげさまでアクセス100000人突破！！

第一章 残された者達と残した者（前書き）

独自のオリジナルで描いた禁書目録の小説です！
どうか感想をお願いします！！！！

第一章 残された者達と残した者

10月30日。

この日、科学と魔術、
ふたつの相対する力が衝突した戦い”第三次世界大戦”がその幕を
閉じた…。

この戦いに幕を降ろした1人の少年の消失と引き換えに……。

2

11月1日、

”第三次世界大戦”の終戦宣言から2日がたったこの日ローマ教
皇からの言伝て（ことづて）が世界中に伝わった……。

『私たちは大きな過ちを犯しました。今回の戦いによって多くの人
々の血が流れ世界は不安と絶望に覆われてしまいました。

だが、その絶望を打ち砕いた者がいました。彼は罪深い私たちの
愚かな幻想をも打ち砕き、この戦いに終止符を打ちました。

その代償に、彼は私たちの前から姿を消してしまいました。彼が
生きているのかは分からない。だが私たちは彼に償わなければなら
ない。

世界中の皆さんに罪深い私の言葉を聞いてほしい。どうか彼を一
緒に探してほしい。この戦いの一番の功労者である彼を……』

この言伝てと同時にローマ教皇の探し人の顔写真が出回り、その
顔写真を提供したと思われる科学の総本山である学園都市にも内容
は伝わり、この一連の行動により、顔写真の少年、
”上条当麻”の顔と名前は世界中に知れ渡った。

窓の無いビル。窓がないせいで光が入らず暗く沈んでいるそのビルの中の中心の位置からオレンジ色の人工的な光が放たれ周囲を薄く照らしていた。蛇のようにうねりを作っているパイプが地面を這うようにつたい、それがオレンジ色の光を放っている円形の装置に装着されていた。

その装置・生命維持槽の中に緑色の手術服のようなものを着た1人の人間が逆さまになって浮いていた。その人間は男にも女にも見え、少年にも老人にも見えた。

この科学の総本山である学園都市を納める統括理事長であり、また魔術の世界では良い意味と悪い意味の2つの意味で歴史的に有名な魔術師・アレイスタークロウリーだ。

《ふう……………》

弱アルカリ性の培養液に満たされたビーカーの中でアレイスターは小さくため息をついた。そのため息にはどこか疲れを感じさせるような雰囲気漂っていた。

アレイスターは10月30日、つまり一昨日、彼は生命維持槽の中から魔術を使い”第三次世界大戦”の勃発したロシアへと赴き、秘密に近づいた”神の右席”の1人、”右方のフィアンマ”の口封じに行つたのだ。

アレイスターは生命維持槽にすることで寿命をいちじるしく延ばしている。本当ならば彼は既に死んでもおかしくない年齢なのだ。今の彼は推定でも1700歳は行っており、彼はもはや生命維持槽がなければ生きてはいけない身体だ。

ロシアでのフィアンマとの戦闘で彼を圧倒したアレイスターだが、フィアンマが雪山から落ちたのを見て後を追おうとしたが、身体の不調を感じ、恐らく生きてはいないだろうと思い、フィアンマの死を確認せず魔術を解いたのだ。

《やはり久々に魔術を使ったせいか…しばらくは出れそうにないな……》

アレイスターはビーカーの中で嘲るような笑みを静かに浮かべ、いつもと同じように浮いていようと思っていたが、突然”ビュンッ！”と空を切り裂くような音が内部に響き、その音が再びした時アレイスターは笑みを浮かべた時に閉じていた瞼を開けた。

そこにいたのはアレイスターの思った通りの人物だった。薄い黒のグラサンと胸が大胆に開いている緑色のシャツを着て、ところどころをワックスで固めたように跳ねている金髪をした青年。

土御門元春は目の前にいるビーカーの中で逆さまのまま浮いているアレイスターにイラついたような口調で話し掛けた。

「アレイスター、何故外に出た！？」

《ほう、私が外に出たことをもう知っているのか…》 アレイスターは土御門のイラついたような口調を気にせず、いつものように透明な声で土御門に言葉を返した。

「当たり前だ！俺はネセサリウス（必要悪の教会）の一員だぞ。イギリス清教のサーチ術式にお前の力が反応したんだ。馬鹿でもすぐ分かる！」

《そうか、そういえばそうだったな…》

「……お前、自分が何をしたのか分かっているのか…」

何の感情も沸いていないような口調で喋るアレイスターに対し、土御門は気になっていたことをとうとう本人に問いただした。

《それは一体どういう意味だ…？》

「お前は魔術界では知らない者はいないほどの歴史的に有名な魔術師だ。そのお前が学園都市のトップだという事実はいギリス清教のアークビショップ（最大主教）は確実に気づいているぞ！」

ローラ・スチュワート。イギリス清教のアークビショップ（最大主教）である。容姿はまだ年若い少女に見えるが、実際はかなりの年齢であり頭のキレも凄まじく良い。

学園都市とイギリス清教は小さなパイプを持っている為、トップであるローラとアレイスターは直接会ったことはないが、テレビ電話などで何度も顔を見ている。

「魔術師であるお前が科学の中心である学園都市のトップであるとバレ、それが広まれば魔術側からの反発は大きいぞ」

アレイスターは元々魔術師でありながら科学に手を出した者として魔術師達に追われる立場にあるのだ。現に魔術師達に追われた末アレイスタークロウリーはとうに死んだ人間だと思っている魔術師は多い。

だがその魔術師が生きていて、しかも科学の街の長になっていると分かれば間違いなく魔術師達は何かしらの行動を起こすはずだ。それこそ、10月30日に終戦した”第三次世界大戦”を繰り返すことになるかもしれない。

「ようやく収まった戦争を、お前はまた繰り返すつもりか!!」
科学と魔術の争いを止めるポストに土御門にとってアレイスターのとった行動は、上条当麻によって閉じ始めた溝を再び開くようなものだった。

命を懸けて戦争を止めた上条当麻の行動を無二帰すかのようなことをしたアレイスターへの、土御門の怒りの言葉だった。

しかし、当のアレイスターは魔術師の反発など興味がないような顔をしていた。

《科学と魔術の争いなど、私にとって何の興味も沸かないことだ》

「お前に興味があるうとなかろうと、科学と魔術、

2つの相対する力がぶつかれば必ず世界的な影響を及ぼす」

《相対するものが衝突することなど、いずれ起きることだ。今が衝突する時だった。ただそれだけさ…》

土御門はアレイスターの言葉を聞いて黙り込んでいた。科学と魔術のパワーバランスを調整することが仕事の自分も、いずれは争いが起きるだろうと心のどこかで思っていたからだ。

自分がやっていることが気休め程度のことではいかないと分かっていた。そしてそのパワーバランスがとうとう崩れ”第三次世界大戦”という巨大なものに発展してしまった。

そしてその争いを止めた”上条当麻”という自分の親友が行方不明になり、土御門は行き場のない後悔に取り付かれていた。

”自分がもつと上手くやっていれば彼は行方不明になどならずに済んだのではないか”もし自分に力があれば…”などと自分を責めていたのだ。

突然黙り込んだ土御門を見てアレキスターはなぜか笑みを浮かべながら喋り始めた。

《さっきも行ったが、私は科学と魔術の争いなど興味がない……》
アレキスターが喋り出したのを見た土御門はグラサンを掛けたまま睨み付けるように目を細めた。

《私が目指しているものは、科学でも魔術でもないのだから……》
「幻想殺し（イマジブレイカー）か……？」

土御門の問いにアレキスターは返答をせずにただ笑みを浮かべ、その様子を見た土御門はずっと気になっていたことをここぞとばかりに聞いてみた。

「上条当麻はどこにいる？」

《私がなぜ行方を知っている……？》

「とぼけるな、上条当麻はお前の計画に必要な人間だろ。お前がいつをみすみす死なすとは思えん」アレキスターにとって上条当麻は自分の計画に必要不可欠な存在だ。その上条当麻は現在行方不明だが、アレキスターなら何か情報を掴んでいるのではないかと土御門は踏んでいる。

だが、アレキスターの返答は土御門の予想とはだいぶ違っていた。

《幻想殺しが死ぬ訳がない。わざわざ見つける必要はない、それに

……》

アレイスターはそこで一旦言葉を遮り、何か確信があるかのように続きの言葉を発した。

《アレは必ずここに戻って来る。必ず……》

4

アレイスターのいる窓の無いビルから出た土御門は学園都市の第七学区のとある道を歩いている。

行き先は自分や上条当麻の通っている第七学区のとある高校だ。だが今は既に昼の12時を過ぎているので遅刻扱いになることは確実だ。

それを分かっている土御門は今日高校に行くのだ。土御門は高校のクラスメイト達の様子が個人的に知りたかったのだ。上条当麻のことはローマ教皇の話によって学園都市のほとんどの人間が知っている。

上条当麻はなんやかんやいってクラスメイト達にとっても評判が良かった。幻想殺しのせいで不幸体質に変わりはないが、それでもクラスでは土御門や青髪ピアスと同様にムードメーカーのような存在だったのだ。しかも上条当麻は幻想殺しだけではなく、土御門達の言う女性にすぐフラグを立ててしまう”カミジョー属性”というものを持っていて、クラス内にも上条当麻に好意を寄せている女子はかなりいた。

そんな彼が行方不明だと聞いたクラスメイト達は大丈夫だろうかと土御門の優しさから来る行動だった。そして案の定……。

「ニャー……これはかなりキツイぜよ」

高校に到着して自分のクラスである1年7組に行った土御門の目に映ったのは、やけに顔を俯かせている女子達と、上条当麻の座っていた席を見たままじっとしている男子達の姿が目に入った。そんなクラスメイト達のせいかクラス全体が重たい空気に包まれていた。

今はお昼休みらしく机の上にお弁当を出している者がかなりいたがあまり手についておらず、橋を手に持ったまま固まっている人が多かった。

「よ、よお皆さん、暗い顔してどうしたんだニヤ〜？」

重たい空気に包まれた教室に新鮮な空気を送ろうと少しひきつったような笑みを浮かべながらクラスメイト達に話し掛けた土御門の言葉に反応して何人かのクラスメイトが土御門の方を見てきた。

そんな中、土御門に歩み寄って来る1人の男子生徒の姿があった。

「土御門……」

「お、おう青髪、どうしたぜよ？暗い顔して……」

土御門に歩み寄って来たのは上条当麻と同じくムードメーカーの1人である青髪ピアスその人だった。

青髪も他のクラスメイト同様にかなりテンションが下がっており、その青髪の暗さに土御門は一步後退ってしまった。

「カミヤんが、カミヤんが……」

「お、おいしっかりするぜよ！カミヤんがそう簡単にくたばるわけないニヤ〜」 暗い声で上条の名前を呼ぶ青髪を土御門は慰めるように喋り出した。

「でも……」

が、しかし、青髪の後方から土御門の言葉を否定するかのような女子の声がし、土御門と青髪ピアスがそちらを見ると、そこにはロングヘアをした2人の女子生徒が向かい合うように座っていて、片方の女子は腕を組んだまま目を瞑っていて、もう片方は他の女子と同じように顔を俯かせていて、顔を俯かせている方の女子・姫神秋沙が土御門達に話し始めた。

「上条君だつてどんなに凄い力を持っていたって所詮人間だもの……もしかしたらもう……」

そこまで言つて姫神は言葉を遮り、俯かせている顔をさらに俯か

せてしまい、俯いた姫神からぐすつと鼻をすすするような音が聞こえた。

そんな姫神を見て青髪も同じように顔を俯かせてしまい、どうしようかと土御門が頭を悩ませていると、姫神の正面に座っている女子・吹寄制理が閉じていた口を開いた。

「あの馬鹿が生きてるかなんて分からないけど、あいつが戻って来るって信じられなければ、それで終わりじゃない？」

「ぐすつ、吹寄さん」

「もう少しだけ、あの馬鹿のこと信じてもいいんじゃないの？ 姫神さん」

顔を上げた姫神の目には涙が溜まっていて、吹寄はそんな姫神の肩にポンと手を置いて優しくそんな表情を浮かべて言うと、姫神は両の手で目に溜まった涙を拭いながら首を上下にコクコクと動かして吹寄の言葉に返答した。

それを見ていた土御門は少しだけ安堵の表情を浮かべていた。上条当麻がいなくなったことで暗くなっているクラスメイト達はかなりいたが、吹寄のようになんとか明るく振る舞っているクラスメイトもいるんだと思った。

それと同時にどこか無理に明るくしているようにも土御門には思えた。

だが、落ち込んでいるのはクラスメイトだけではなかった…。

「土御門ちゃん…」

安堵の表情を浮かべていた土御門に再び嫌な予感が漂ってきた。やけに子供っぽい声が聞こえてきた土御門が後ろを振り向くと、そこにはピンクのショートヘアと同じ色をしたカーディガンを羽織った背の小さい人物が立っていた。

月詠小萌は自身の担当している教科の教科書を腕を交差するように抱きしめていて、その瞳は先ほどの姫神と同じように涙を溜めていて、その瞳で土御門のことを見つめていた。

「小萌先生、一体どうしたんだニヤー…。泣きそうな顔をして……」
「上条ちゃんか…上条ちゃんがぁあゝ！」
小萌はいきなり土御門の前で泣き出し、それを姫神や吹寄、青髪などと協力して何とか泣き止まりました。
この状況を知らない人が見れば小さい子供を何とか泣き止まそうとしている学生達、というような図に見えるだろう。

5

御坂美鈴はとあるスポーツジムにあるプールサイドにいた。

（はぁ、はぁ、よし…またタイムが縮んだ…）

彼女は見た目は大学生くらいしか見えないが、これでも中学生の娘を持つ立派な母親だ。このスポーツジムに通っているのも、適度な運動と肌などの美容の為だ。

彼女はかなりの時間をスポーツジムに費やしているので、泳ぐスピードも速く隣のレーンで泳いでいる女性に何分もの差をつけて50mの距離を泳いでいた。

プールから上がった美鈴は顔についている水滴を両手で拭い、辺りを見回してから誰にも気付かれないほどの小さなため息をついた。

（…上条さんは今日も来てないか……）

上条詩菜、上条当麻の実の母親だ。彼女は美鈴と同様にこのスポーツジムに通っていて、家も近所であり、学園都市に子供も置いてある割りと自分と同じ境遇の人物だ。

このスポーツジムで何度も顔を合わせたこともあり一緒にここに来たこともある御坂美鈴の友人ともいうべき人間だが、美鈴はここ最近詩菜の姿を見ていない。

（来るわけないか、上条君があんなことになっちゃったんだもの…）

美鈴はローマ正教と学園都市の争いが活発化し始めた時、子供達

を争いから遠ざける為の行動（回収運動）を行っている時に、それを排除しようとした暗部に襲われたところを詩菜の息子である”上条当麻”に助けられたことがあるので面識はあった。

その彼が行方不明になったと聞けば自分にも悲しいものがある。だがそれ以上に美鈴には気になることがあった。

友人である詩菜の状態と学園都市にいるはずの自分の娘、御坂美琴のことだ。娘が上条当麻に好意を寄せていることは大覇星祭での美琴の反応を見てすぐに分かった。自分が好意を寄せていた人が行方不明になれば、その悲しみは自分より何倍もあるだろう。

（美琴ちゃん…大丈夫かしら……）

美鈴は今ここにはいない娘への親心からくる心配で胸を一杯にしていた……。

6

御坂美琴は、自らが在籍している常盤台中学校の寮の自分の部屋にいた。

この部屋のもうひとりの住人である後輩の白井黒子は今授業でここには居らず、美琴は1人この部屋に残っているのだ。

だが、よく考えてみると、白井黒子が授業中ということとは同じく学生である美琴も授業があるはずなのだが、とある都合で美琴は授業に参加することが出来ないのだ。

美琴は”第三次世界大戦”において現在行方不明の上条当麻を追いかけてロシアに渡ったが、結果彼を助けることが出来ず、学園都市のよこした部隊によってこうして連れ戻された、というわけだ。しかし問題なのは御坂美琴がロシアに渡ったことではなく、ロシアに渡る為におこった行為が問題なのだ。

”第三次世界大戦”勃発間もない頃、美琴は上条がまだ学園都市に戻っていないことを感じ、上条を助けようと行動を開始した。

その行動の結果上条当麻がロシア付近にということと、学園都市が上条当麻に回収命令を出したことを知った美琴は、その命令を実行しようとした襲撃部隊を能力で蹴散らし、単身ロシアに向かったのだ。

その行為が、学園都市上層部の間で問題になり何人かは御坂美琴の監視も提示していたが、最終的に御坂美琴はしばらくの休学扱いということになった。

そのようなことがあり、美琴は今自室のベッドで横になっているのだ。これは学園都市上層部の決定にたいしての不満が募っているため、ふて腐れているわけではない。

今の美琴には後悔や悲しみ、悔しさなどがこみ上げ、落ち込んでいるのだ。

(…助けられなかった……助ける為に行ったのに……)

ベツレヘムの星にて、救出に來た美琴の手を取らなかった上条当麻、”まだやることがある”と言った瞬間、VTOL機の安定が保てずにベツレヘムの星から離れ、それに比例して遠ざかる彼の姿をただ見ていることしか出来なかった。それが美琴の見た上条当麻の最後の姿だった…。

今、美琴の右手には彼の乗ったベツレヘムの星が落下した北極海で見つけた、9月30日に彼と一緒に手に入れたゲコ太ストラップが握られている。

今の美琴にはそのストラップだけが彼との絆を紡ぐ唯一のものに思えていたのだ。

(結局あたし…あいつの為に何も出来なかった……)

美琴は目に溜まった涙を隠すように枕に顔を埋めた。顔を埋めた美琴の肩が震えていること知る者がいるはずもなく、誰もいない部屋に美琴の小さな嗚咽が響いていた……。

イギリス・ロンドンのランベス区にあるネセサリウス（必要悪の教会）の女子寮。長い黒髪をポニーテールに束ねた女性、神裂火織はその女子寮の中を歩いていた。

（はぁ……やはり五和は今日もでしたね……）

眉を寄せ、少し暗い顔をしながら神裂は心の中でそう呟いた。

五和というのは、神裂がプリエステス（女教皇）を務めている天草式十字凄教に所属する少女だ。五和は”第三次世界大戦”終戦の時から、天草式のメンバーが生活しているアパートの自室に閉じ籠もり、塞ぎこんでいるのだ。

理由は簡単。五和が好意を寄せていた上条当麻の消失が彼女の心に深い悲しみを与えたのだ。

”上条当麻が消失した”その言葉を聞いた直後の五和はあまりのことに錯乱してしまい、落ち着かせようと止めに入った建宮や他の天草式のメンバーに彼女の武器である槍を振り回し、最終的にプリエステス（女教皇）である神裂に手刀を決められて気絶し、ようやく収まったのだ。

その後、意識を取り戻した五和は上条の消失の事実を再び突き付けられ、1日中泣いた後、自室に閉じ籠もってしまった。

”とりあえず今はそつとしておこう”という決断を下した神裂や建宮達は、

食事などを五和の部屋の前に置いている状態なのだ。

それでも、なんとか五和に元気になつてもらおうと神裂などがドア越しから声を掛けているが、何の返答もなく、今日も同じようなことを繰り返し、神裂はこの女子寮に悩みだけを膨らまして戻ってきた。

そして女子寮にある自室に向かおうと足を進めていると、不意に

聞き覚えのある声がつきあたりの廊下の方から聞こえてきた。

「ここに置いておくのでございますよ……」

神裂は気になって声のした方向に歩いていき、つきあたりの廊下の通路にひよこつと顔だけを出してみた。そこにいたのは真つ黒な修道服で髪の毛から足の先までの全てを覆っている女性。元ローマ正教に所属していたシスター、オルソラ・アキナス。

オルソラは1つの部屋の前にパンや焼き魚、サラダなどが乗ったトレイを置くと前方で手を組んで神裂のいる方向に歩き始めた。そして案の定、神裂に気づいたオルソラはニツコリと笑みを浮かべて神裂に歩み寄ってきた。

だが、神裂はオルソラの笑みにどこか悲しげなものを感じた。

「神裂さん、こんなところで何をしているのですか？」

「いえ、今自分の部屋に戻るところだったのですが、オルソラは……」

オルソラの質問に答え、こっちも質問をしようとしていた神裂だったが、オルソラがトレイを置いた部屋に視線を移し、何か思いあたる節があったのか突然言葉を遮った。それを見て、オルソラも神裂が何を思ったのかを見抜いたように話を始めた。

「食事はきちんと取っているのですが、彼女が部屋から出ることを、まだ見たことがないのでございますよ……」

「……そうですか」

オルソラの悲しげなものをおびた言葉を聞き、神裂は一言だけ呟いた。

それからオルソラは”用がある”と言って神裂に頭を下げてから静かに歩いて行った。神裂はそんなオルソラの後ろ姿を見送った後、視線を再びトレイの置いてある部屋に戻した。

この部屋にいる人物も、五和と同様に神裂の悩みの元になっているのだ。

”あの少年”の消失によって悲しみに捕らわれた人間が大勢いることを、神裂は改めて実感した。先ほど話をしていたオルソラもその1人だと神裂には分かっていた。

分かるのだ。なぜなら自分もその1人だから…。

なるべくいつもと同じように振る舞ってはいるが、それもただのかりそめでしかない。神裂は彼が消失したと聞いてから、自分がどれだけあの少年のことを大切に思っていたかが、よく分かった。

Salver000（救われぬ者に救いの手を）

自分の魔法名であるそれを五和やあの部屋にいる人にすることは不可能だ。

五和達を救うことが出来るのは五和達の悲しみの原因となっている彼しかない。なぜなら神裂自身も五和達と同じ、救われぬ者になってしまっているからだ。だが、その彼は自分達の前から姿を消してしまった。神裂にはただ祈ることしか出来ない。

彼が、”上条当麻”が再び自分達の前に姿を現すことを……。

神裂は視線を外し、自分の部屋へと歩き出した。

新しい一歩を踏み出すように先を見据えて…。

彼が戻ってくることを信じて……。

8

ネセサリウス（必要悪の教会）の女子寮。

その女子寮にある部屋の一角に、純白と金の刺繍の入った修道服を着た、長い銀の髪と緑色の瞳をした少女の姿があった。

イギリス清教に所属するシスターであり、頭の中に10万3000冊の魔道書を保管している”魔道書図書館”である、インデックス（禁書目録）だ。彼女のいる部屋のドア越しから、今日の食事

当番であるオルソラ「アキナスの声が響き、カシヤンとトレイを床に置いたような音がすると同時に、コツコツとオルソラが部屋から音をたてて遠ざかって行くのがインデックスの耳に聞こえていた。それから少したって、インデックスはベッドの上で体育座りをし、両膝の間に埋めていた顔をあげて、ゆっくりと立ち上がり、同じようにゆっくりとした動きでドアを開けて、床に置いてある食事の乗ったトレイに両手を伸ばして持ち上げ、部屋のテーブルにトレイを置いてからボタンと開いているドアを閉めた。

テーブルの近くに置いてある椅子に腰掛け、テーブルの上に置かれた食事にゆっくりと手をつけ始めた。その様子には、いつもように料理を食べている時に見せる笑顔は微塵もなかった。

そもそも、なぜインデックスがこの女子寮にいるかという点、”第三次世界大戦”が終わりを告げると同時に、自分の前から姿を消した”上条当麻”が強く関係していた。

イギリス清教にとって、”上条当麻”という存在はインデックスの管理人というものが大部分を占めている。その管理人が居なくなつたとなれば、当然インデックスを学園都市に戻すことなど到底出来ない。

今のインデックスはほぼイギリス清教によって監視されているような状況なのだ。

最初はローラ「スチュワートの住んでいる”ランベスの宮”で監視するという意見もあったが、そこはローラ「スチュワートの優しさなのか、彼女の知り合いの多い女子寮に來たのだ。それ以前に今のインデックスは”上条当麻”の消失によって五和と同じように、精神的に不安定な状態だった。なんとか食欲はあるものの、それもお腹がただ満たされるだけで、インデックスには食べ物を味わうこともどうでもいいように思っていた…。

「あはは、オルソラの料理はやっぱり美味しいな……………」

食事をしながら一人言を呟くインデックスだが、その言葉には何の感慨も浮かんでいないかのようだった。

「本当に…本当に美味しい…当麻にも見習ってほしいかも…当麻にも……」

そう呟いたインデックスの目元には涙が溜まっていて、溜まりに溜まった涙がピチャツ…と音たてて、フォークを握っているインデックスの手に落ちた。

そして食べる気が失せたのか、インデックスはフォークをテーブルに置き、顔を俯かせて両手を膝の上に乗せ、嗚咽と一緒に大粒の涙をポタポタと膝に乗せている両手に落とし始めた。

「ひぐつ…グスツ…当麻、どこ行っちゃたの…？」

学園都市に来て、見ず知らずの自分を守る為に命懸けで戦ってくれた彼。そのせいで記憶を失ったことを自分にずっと隠し続けていた彼。いつもいつも文句を言っていた自分の為にいろんな料理を作ってくれたりした彼。何か事件が起こるたびに違う女性を連れてくる彼に怒り、何度も何度も噛みついていたりしていた。

でも、それでも彼と過ごす1日1日がとても楽しくてこのままずっと一緒にいたいと思えた彼。

だが、彼は消えてしまった。

自分や周りのみんなを助ける為に……。

ベツレヘムの星で霊装越しに自分に記憶喪失であることを明かした彼への言葉は、彼の無事を祈る言葉だったが、その祈りは叶わなかった…。

「生きてるよね……。他のみんなが無事でも……。当麻がいなきゃ意味ないよ………」

そう呟き、インデックスは涙を流し続けていた。

上条当麻の消失によって心を痛めた人々の悲しみを代弁するかのように……。

行間・1

イタリア・ミラノ。

イタリア北部において、工業、商業、金融などの中心地であり、イタリアの首都であるローマに次いで第2位の街。

その街の一角に存在するこげ茶の色で全体を塗ってある、大きくも小さくもないアパートに3人の人間の姿があった。

1人はアパートと同じこげ茶色の髪を肩ほどまで伸ばし、着ている黒の上着のパーカーと同じ、黒のシャツを内側に着ていて、下にはところどころが破けた青のジーンズを履いている男。

1人は金髪をセミロング程に伸ばし、隣に立っている黒の服とは反対の、真っ白の毛がついたパーカーの上着、内側に綺麗な青色の服を着て、男とは色違いの黒のジーンズを履いた女。最後の1人は、赤みがかかった茶髪をワックスをつけたように跳ねあげ、先ほどの男と同じほどの長さをした、灰色のパーカーに黒のシャツ、青のジーンズを履いている男。

「で、準備のほどは……？」 黒のパーカーを着ている男は、側に立っている灰色のパーカーを着た男に話し掛けると、話し掛けられた男は、

「問題ない、”アレ”の準備が出来しだい計画を実行に移す」

「準備って言ったって……、”アレ”は事前に準備するようなものじゃないでしょ？」

灰色のパーカーを着た男の言葉を聞いていた白のパーカーを着た

女が、反論するように語り掛けたが、男はそれに何の迷いもなく答えた。

「"アレ"を使うにはそれぞれのポイントでなければならない。ズイード"の言っていたことを忘れたのか？ハリミア…」

灰色のパーカーの男に

ハリミアと呼ばれた女は、男の言葉を聞いて苦そうな顔をして灰色のパーカーの男から顔を背けた。

それを見ていた黒のパーカーの男が、

「じゃあ俺達も行くべきところに向かおうぜ、ユベリス」

「ああ、行くぞ…」

そう言って歩き出したユベリスと呼ばれた者の後に続いて、ハリミアと黒のパーカーを着た男も歩き出した…。

ロシア、"第三次世界大戦"の始まりの地であるこの場所の人里離れた一角にポツンと存在する木製で出来た小屋。

そこに2つの影があった。

「ああああッ！！、

もう寒いわね！！この寒さどうにかしなさいよ、この没落貴族！！」

「そ、そんなこと言われても！ストーブに使う灯油とかはもう"あつち"のやつに使うちゃったし、ここは我慢するしかないって！！」

「たく！"魔神"になれるほどの魔術師が聞いて呆れるわ！！」

シルビアの言った言葉にたいし、オッレルスの方も、

「そ、それを言うならシルビアだって！"聖人"のくせにまったく役にたつてプギャッ！！」

文句を言っているところにシルビアの顔面への蹴りが入り、オッレルスは蹴りが入った方の頬を押さえて床を転げ回っていた。

2人は今、ベージュ色の毛布を1人一枚使って体を暖めているが、

11月に入ったロシアの気温は比べようがないほどの寒さ、到底毛布一枚で足りるわけがない。それに比例してシルビアの機嫌もどんどん悪くなって行った。

現に……、

「役に立ってないねえ……。ふうん、アンタからそんな言葉が出るなんてねえ……」

「あ、あの……シルビアさん……」

「いつもいつも、面倒事をどこかに行くたびに持ち帰ってくるアンタにそんなことを言う資格があるのかしら？アンタが何かやらかした時、大抵世話を掛けさせられるあたしに向かって役にたつてない？どの口がきいてんだこらアアアあああああああッ！！！」

「ひイイイイイイイイ！！！」

あまりの恐さに悲鳴をあげたオツレルスの姿を見たシルビアは二ヤリと不気味に笑い、

「そうねえ……たまにはアンタに役にたつてもらおうかしらねえ、アンタ今すぐここを出てきなさい」

「なッ！何で出ていかなきゃいけないんだ！？それにここをでたら外は超極寒の嵐ですぞ！！私を凍死させるおつもりですか！？」

今、外はちらほらと雪が降り始めていて明らかに体感温度が下がっている。この状況で外に出れば確実に風邪をひく。オツレルスは全身全霊を懸けてなんとかシルビアを落ち着かせようと心みるが……、

「アンタが外に出れば、あたしがアンタの分の毛布を使うことができる。良かったな、アンタもようやくあたしの役にたてる時が来たぞ」

「嫌アアアああああああ！！他の時に役だててくれて結構ですから、今日のところはどうかご勘弁をオオおおお！！」

ロシアの人里離れた小屋に、魔神になるはずだった男の声が響いた……。

あの後、なんとかシルビアの機嫌を取り戻したオッレルスは、自分達のいた部屋とは違う部屋へと足を運んだ。そこはストーブがついていて部屋全体が温まっており、冷えた体が暖まっていくのをオッレルスは感じた。

体が暖まっていくのを心地よく感じていたオッレルスだったが、そこに”ウツ…”と人の呻き声がオッレルスの耳に届いた。

オッレルスはその呻き声のした方に目を向けると、ホツとしたように息を吐き、優しそうな笑みを浮かべて呟いた……。

『やあ…体の調子はどうだい……？』

「君の記憶は脳細胞ごと死んでる…」「僕は失敗し、そして君は成功した…僕らの違いはたったそれだけさ……」「私はもう誰も殺したくはない…」

「カミヤん、俺って実は嘘つきなんだぜ…」「私の前であの子を助けた時のように、今度は私の命を助けてもらえると助かります…」

「あたしはアンタに死んでほしくないんだと思う……」

『インデックスは…インデックスは当麻のことが大好きだったんだよ……？』

「やあ…体の調子はどうだい……？」

突然声を掛けられた人物は、その問いに答えることが出来なかった。体や口が思うように動かず、答えようと思っても答えられなかったのだ。

そしてそれを察したかのようにオッレルスは、

「ああ、無理しなくていいよ。まだ体があまり動かないだろうしね……。でも一応聞いておきたい。君、自分の名前は分かるかい？」

その問いに、ベッドで寝そべっている人物はまだあまり動かない口を、力を振り絞って動かし、声を出した。

自分の名前を言う為に……。

『……上条…当麻…』

第一章 残された者達と残した者（後書き）

最後にあつたのは、当麻の周りにいるみんなのセリフを書いたものです。

あれを見て、当麻の記憶がなくなっていないことを分かってほしかったんです。

第二章 訪れた平穩（前書き）

今回は禁書目録には欠かせないやつらを書き上げました。

よろしければ感想をお願いします！！

第二章 訪れた平穩

「上条…当麻…」

自分の名前を呟いた当麻の言葉を聞いたオッレルスは、少しホツとしたような顔をした。

オッレルスは”ある人物”から上条当麻の名前とどういう人物なのかをある程度聞いていた。だからオッレルスは上条当麻が自分のことが分かるかを試したのだ。これで彼が記憶喪失などになっていれば、色々と面倒になるからだ。

安堵の表情を浮かべていたオッレルスに、まだ上手く喋れないはずの当麻はゆつくりとした口調で喋り始めた。

「…ここ…は…一体……」

「ロシアさ。と言つてもロシアの人里離れた山小屋つてところかな？」

「あなたは……誰……？」

「ん、そうだな…」

オッレルスはそこまで言うと、近くにポツンと置かれていた木製の椅子に腰掛け、再び話を始めた。

「まあ簡単に言えば…魔術師だよ」

「魔術師…」

「うん、オッレルスだ。」

よろしくね、え〜と…上条当麻くん、でいいのかな？」

オッレルスの問いに当麻はあまり動かない首を、今動ける力を最大限に使って縦に動かした。

その後、いい加減体を動かさなくなった当麻はせめて上半身だけでもと思い、体全体に力を入れたが、まったく言っていないほど体が動かず、力を入れた時に使った体力をただ消費するだけに終わった。

はあはあと息を切らしている当麻を見ていたオッレルスが、

「まだ無理はしないでいいよ、体がまだ動かなくても無理はない。君には魔術による回復が出来なかったからね」

アレキスターにやられたフィアンマを助けたオッレルスとシルビアは、オッレルスの肩に担がれたフィアンマが、

「ベツレヘムの星に…上条当麻がいる…アイツも助けてくれ」

そう言っただけでフィアンマの言葉を聞いて、オッレルスは一旦フィアンマをシルビアに任せ、魔術を使って北極海に高速で移動し、そこで死んでいるかのように浮いていた上条当麻を発見して肩に担ぎ、その後すぐやってきたロシア軍のVTOL機に見つからないようにその場を後にした。

その後、シルビアと気絶しているフィアンマと合流したオッレルスは、今いる小屋にたどり着き早速2人の治療を始めようとしたが、上条当麻にたいして、どうやっても魔術が使えず、困り果てた2人は魔術ではなく、手を使っただけの治療を始めた。

当然、上条当麻に回復魔術が使えなかった理由は言うまでもなく、当麻の最大の武器であるあらゆる異能の力を無効にする右手。

「幻想殺し（イマジンプレイカー）」だ。

当麻はオッレルスの言葉を聞いてチラリと自分の右手を見ていたが、すぐに視線をオッレルスの方に戻したが、不意に左の方を見てみると、そこにはセミロングの髪を枕にばらまくようにして床に伏せている、「神の右席」の1人、「右方のフィアンマ」の姿があった。

「…ッ！フィアンマ！！」

フィアンマの姿を見た当麻はいきなり声をあげたが、無理に声を上げたことで体に衝撃が伝わり、くっ…と苦しみの声を上げた当麻を見て、オッレルスは片手の手のひらを当麻に突きだし「落ち着け」と意志表示を出し、それを見てオッレルスの言うことを察した当

麻はふうと息をつき、オッレルスは床についているフィアンマのことを当麻に話し始めた。

「大丈夫。彼も命に別状はないよ。ただ…」

「…ただ…?」

少しためらうような様子を見せたオッレルスを、当麻が不思議に思っていると、

「…右腕を切断されてしまったんだ」

「なっ!ど、どうして!?!」

「君が彼を逃がした後、彼はアレイスター・クロウリーに襲われてね」

フィアンマの右腕のことを聞いた当麻の慌てようを見ながら、オッレルスは冷静に当麻の問いに答えた。オッレルスの答えを聞いた当麻は目をパチパチとまばたきをして再びオッレルスへ質問をした。
「ア、アレイスターって…誰ですか?」

当麻の言葉を聞いて、今度はオッレルスの方が目をパチパチとまばたきさせていた。

「君はアレイスターのことを知らないのかい?」

「は、はい、誰すかそれ?」

当麻の回答にオッレルスは驚きを隠せなかった。自分の言葉にちんぷんかんぷんと言うような当麻の顔を見て、彼が嘘を言っていないということは分かり、オッレルスは少し苦笑いをしながら当麻に話し始めた。

「アレイスター・クロウリー。彼は魔術界において歴史的に有名な魔術師でね。」

”法の書”という魔道書を書いたのも彼だ」

「”法の書”って、ローマ正教が持つてるっていう!」「その通り。それと同時に、彼は君が住んでいる学園都市のトップに君臨している」

「学園都市の!?!」

当麻はオッレルスの話の大きさに少し頭が混乱していた。突然学

園都市のトップが、歴史的に有名な魔術師だという事実を聞かされれば誰でも混乱することは明白だからだ。

オッレルスはそんな当麻の姿を見て、

「詳しい話はまた今度にしよう。君はまだ休んでなきゃいけない体なんだ。無理はしないほうがいい」

オッレルスはそう言うと、床に伏せているフィアンマに視線を移しながら当麻に喋り出した。

「彼も、君より早く一旦意識が戻ったんだけど、君やアレイスターとの戦闘で疲れていたんだろ。また寝てしまったんだ」

「そうですか……」

当麻はその言葉を聞いて少し安心したような顔をしているのを見たオッレルスは、不思議そうな彼をして当麻を見ていた。

上条当麻にとってフィアンマは、生死を懸けた戦いを繰り広げた敵。それ以上でもそれ以下でもない存在だとオッレルスは思っていた。

その敵に向ける顔を上条当麻はフィアンマにたいしてしていなかったのだ。

どちらかと言うと、自分の友人の心配をしていて、命に別状はないと知ってホッとしたような顔をしていたのだ。

（彼は…変わった人間なんだな……）

オッレルスは当麻を見ながら心の中で呟いた後、

「とにかく、今日のところはまだ休んでいるといい。今は休んでいることが君のやるべきことだ」

「ん…はい……」

オッレルスの言葉に当麻は何も文句は言わずに頷いた。さすがに体が限界に近いことが自分でもよく分かる。それほど当麻の負ったダメージは大きいのだ。

オッレルスは当麻が頷いたのを見て、自分がいてはゆっくり休めないと思い、部屋から出ていった。

それを見た当麻は床に伏したまま天井に向かって溜め息をついた。
そして気持ちの整理をつけ始めた。

自分がこうやって無事だったこと。
学園都市のトップがアレイスターという魔術師だということ。

そして、自分の右手のこと……。

「……………」

ベツレヘムの星でフィアンマによって右腕を切断された時、フィアンマとは違いこの右腕は再生した。

あの時はフィアンマを倒し、インデックスを助けることで頭が一杯で、右腕のことを考えている暇などなかった。

だが今考えると、明らかにこの右腕は異常だ。普通に考えて、切断された腕が元に戻るわけがない。

「今考えると俺…この右手の力のこと、何にも知らねえや……………」

幻想殺し（イマジンプレイカー）

あらゆる異能の力を無効にする力。

この力を使えば、超能力・魔術、テレズマ（天使の力）でも打ち消すことが出来る。

自分が知っているのはこれだけ。これだけのことしか知らない。
でも他にも何かある。

右腕が復元したことでそれがはつきりと分かった。

だが自分の頭ではこの右手のことは分らない。考えるだけ無駄だ。
しかしもしかしたらオッレルスの言っていたアレイスターというやつならこの右手のことを何か知っているかもしれない。

「でも今は……早く動けるようになるまで回復することだな……」

この右手も気になるが、当麻にはもっと知りたいことがあった。

「インデックスやみんなは元気かな……」

12

学園都市・第三学区

学園都市外部から来た人間が滞在するホテルなどが建ち並ぶ学区。ホテルの他にもカラオケのついた個室サロンなどが存在し、学園都市に住む学生、特にお金の裕福な学生が頻繁に利用する場所。

その個室サロンの一角の部屋に3人の人間の姿があった。

「あああー！また67点だったって！ミサカはミサカは一向に上がらない点数に憤慨してみたり！！」

「まあ、そんなどこかのガキ大将みたい歌ってたら上がらないですよ」

「むつきイイイイ！！」

「だってミサカワースト
だったら番外個体も歌ってみればいいって、ミサカはミサカはあまりの怒りにマイクを思いつ切り突きつけてみたり！！」

番外個体の言葉に怒りを覚えた打ち止めは、手に持っていたマイクを番外個体に突きつけ、それを受けて番外個体は……

「へっ、上等だ。ミサカと打ち止め（ラストオーダー）の格の違いを見せてやる」「やって見る！ってミサカはミサカはここに宣戦布告してみる！」

打ち止めと番外個体がバチバチと火花を出して睨みあっていると2人の近くにあったソファーからギシッと何かが動くような音が聞こえると同時に、未だに火花を出している2人にたいして声が聞こえてきた。

「チッ、ためエらいい加減うっせエぞ。ちったアおとなしくしろ」

ソファで寝転がっていた、学園都市第一位のレベル5、一方通行^{イタ}は寝起きのせいかいつもより眉間にシワを寄せて、打ち止めと番外個体を見ていた。

一方通行のイライラが溜まった言葉を聞いた打ち止めと番外個体は即座に抗議を始めた。

「私は悪くない！悪いのは番外個体！ってミサカはミサカは番外個体に指をさしながら抗議してみたり！！」

「ミサカは悪くない。」

今までずっとバカみたいに歌いまくってた打ち止めが悪い！」

”バカって何！？ってミサカはミサカはバカ呼ばわりされたことに凄い不快感を覚えてみる！”と言って、番外個体の言葉に食いつく打ち止めを見ていた一方通行は、はぁと溜め息をついて再びソファに寝転んだ。

ロシアでの戦いの後、学園都市の回収部隊に回収された一方通行は、同じく回収された打ち止めと番外個体を学園都市第一位の力を使い、回収部隊をなぶり殺しにして救出し、この学園都市に秘密裏に潜入した。

潜入した一方通行達は、まず顔馴染みであるカエル医者のところに行き、打ち止めと番外個体の調子を見てもらうことにした。

打ち止めは”ドラゴン”であるエイワスの影響で体に負荷がかかっていたが、一方通行が魔術の逆算・解析をし、打ち止めの治療をすることが出来た。

番外個体は一方通行との戦いで彼にボコボコにされた後、一方通行と手を組んで学園都市に処分されない方法を探ることにした。

どっちにしろ、2人の体は完全には回復しておらずまだ治療する箇所があるかもしれないと思い、カエル医者に見てもらうことにしたのだ。

結果、打ち止めと番外個体は安静にしていれば大丈夫との告知を受け、3人がこれからどうするかを考えていると、カエル医者が、

「個室サロンとかはいんじゃないかい？あそこなら監視はされないし、年間契約すれば、少なくとも一年間は暮らせると思うよ」
その言葉を聞いて打ち止めと番外個体は”そこに行く！”と言出し、一方通行は何か釈然としない気持ちで個室サロンの年間契約をすることになった。

お金の方はそれなりにかかったが、一方通行は研究などで得た金を全く使っておらず、以前純白の修道服を着た銀髪シスターにたらくく食われ、かなりの出費をしたが、それでもまだまだ一方通行には金がたんまりあった。

そして一方通行には、サロンを契約する時にバレないように偽名を使っていたが、自分達が学園都市にすることが上層部にバレていることを薄々気づいていた。

だが、肝心のアレイスターや統括理事会が動くような予兆が全くと言っていいほどなく”とりあえず様子を見ているだろう”と、一方通行は考えた。

アクセラレータ

「ねえ！聞いているの一方通行！？ってミサカはミサカはどうでもいいってというような感じをかもし出してるあなたに尋ねてみたいり！！」

「ああ、聞いているからお前エはバカみてエに歌ッてるオ……」
アクセラレータ ミサカワースト

「一方通行まで番外個体と同じこというの！？ってミサカはミサカああ…分かったからもうねむらせろオ」

”言葉の途中で口を挟まないでよお！”と文句を言う打ち止めの言葉を無視して一方通行は再び眠りにつき始めたが、打ち止めの文句を子守唄のように聞きながらある考えが一方通行の頭の中によぎった…。

『「こいつのも、まア……悪くねエか……」』

「ちょっと…、何で私がこんなことさせられてるんですか…超説明を求めたいんですけど」

コンビニの袋を手にかけている絹旗最愛は、頬を膨らませていかにも不機嫌だというような顔をし、隣で自分と同じようにコンビニの袋を下げている少年に説明を求めた。

「知るか、説明を求めたいのは俺だっつーの」

絹旗の問いに自らの不機嫌その口調で喋る浜面仕上は、さらに絹旗に向かって、

「大体、何で俺は未だにパシリにされてんだよ!？」

俺もうパシリじゃないじゃん!ちゃんとした”アイテム”のメンバー
ー
だろ!？」

何でこんなことやられてんだ!！」

溜まっていた鬱憤を、怒鳴りつけるように話し始めた浜面の声を聞きながら、絹旗は浜面を見ずに冷静に理由を話し始めた。

「”アイテム”に正式に入ったと言っても、浜面の役目は移動手段の確保か、パシリとして超働くかのどちらかです」

「以前とまったく変わんねえじゃねえか!！」

”第三次世界大戦”が勃発した時、学園都市から逃げロシアにいた浜面は、その時に学園都市の機密事項である”パラメーターリスト素養格付の存在を知った。

パラメーターリスト
素養格付

学園都市にいる学生達、1人1人の能力者としての素質を秘密裏に調査し、それをまとめたリスト。

このリストが公になると、科学の総本山である学園都市そのものが根底から覆ると言われている。

その存在を知った浜面は、計画の邪魔な存在としてアレイスターに追われている今の自分の立場をなんとか出来るのではないかと思いい、^{パラメータリスト} 素養格付を手に入れ、学園都市上層部との交渉に使うことを誓い、その結果、交渉に必要不可欠な”それ”を懷に忍ばせ、この科学の街に戻ってきた。

その後、学園都市上層部が接触してくるのを待っていた浜面だったが、待てど暮らせど一向に上層部が来る気配がなく、なんとも言えない緊張感に襲われながらも、浜面は平穏な日々を過ごしていた。だがしかし、浜面は度々、一般人が出くわさないようなことに四六時中巻き込まれている。

学園都市に戻ってきた浜面は暗部である”アイテム”を仲間達と再び結成した。今、浜面の隣を歩いている絹旗最愛ともう2人。

「おう、買ってきたぞ」

コンビニの袋を持った浜面と絹旗は、そのままある場所にあるファミレスに入り、その中のテーブル席の一角まで歩いていき待っていた2人の人物に片手に下げている袋を見せるように掲げた後、水の入ったコップしか置いていないテーブルの上にコンビニの袋をドサツと音を立てて置いた。

「ああ、買ってきたんだ」

「お疲れ、2人共」

コンビニの袋を置いた浜面と絹旗に声を掛けたのは、既にテーブルに腰掛けていた、あと2人の”アイテム”のメンバー。

滝壺理后と麦野沈利。

「ほら浜面、私が頼んだやつは？」

麦野は未だに立っている浜面に片手を差し出しながら自分の注文したもの出すように言い、

「ああ、ほら、これでいいんだろ？シャケ弁」

浜面はそんな麦野の手にコンビニの袋からシャケ弁を取り出して置き、”サンキュー”と笑みを浮かべながら返事をする麦野の声を聞きながら、滝壺の隣に腰を降ろし、絹旗もそんな浜面の後に続くように麦野の隣に腰を降ろした。

浜面から見て斜め横に座っている麦野の片目には黒い眼帯のようなものがされており、それが麦野の存在を異様に目立たせていた。以前、滝壺を巡っての死闘のすえ、浜面に片目を潰され、その後能力の暴走によって片腕も使いものにならなくなり敗北した麦野は、アレキスターによって治療をほどこされ、義眼、義手の体になってしまった。その後、ロシアでの浜面との三度目の死闘のすえ、体晶を無理に使ったせいで体に負荷がかかり敗北した麦野は、浜面の説得により再び手を組み、こうして”新生アイテム”を結成させたのだ。

「つーか、ひとつ聞きたいんだが…」

「ん？なあゝに？」

ファミレスで普通にコンビニの弁当を食べている麦野に、浜面は思いきったように聞いてみた。

「俺って”アイテム”の正式なメンバーになったんだよね？」

「え？ああ、そうだけど」

「その俺が何でパシリだった頃のことと同じことしなきゃいけないんだよ！？」

浜面はずっと抑えていた不満を爆発させた。

「確かに、ちゃんとしたメンバーじゃなかった時の俺ならパシリにされてもおかしくなかったけどよ。ちゃんとしたメンバーになった俺の役割が、何で最初からパシリにされることに決まってるんだよ！？」

”新生アイテム”を結成した時、何故か浜面は必然的に他の3人のパシリにされることに決まっていたのだ。

「普通パシリとかは下のやつがやるか、みんなでじゃんけんとかして決めるもんだろ！？」

「ちゃんとじゃんけんしたじゃん。私と滝壺と絹旗で」

「俺にもじゃんけんさせるオオオオオオオッ！！！！」

最初は浜面だけがコンビニに行く予定だったのだが、今回はみんなの頼むものが多かったので、（浜面以外は）じゃんけんすることになり、その結果負けた絹旗が浜面のパシリに付き合ったということだ。

「超うるさいですよ浜面。他のお客さんに超迷惑です、黙ってください」

「うるせえッ！そもそもファミレスでコンビニの飯食ってる時点で迷惑かけてんだろぅが！！」

麦野の横で映画のパンフレットを読み始めた絹旗に文句を言っていた浜面だったが、そこに今までずっと黙って”ぼあ”””としていた浜面の恋人である滝壺が……、

「大丈夫だよはまづら。はまづらは人にこき使われている時が一番輝いているよ。私知ってるからね」

「滝壺オオオオオオッ！！その言葉って褒めてるのか貶してるのか理解しにくいんですけどオオオオオオオオオッ！！！！」

ファミレスの中に浜面の悲鳴が響き渡り、迷惑をかけられているはずの浜面は、今一番ファミレスに迷惑をかけている人物になっていた……。

行間・2

「父さんッ！！父さんッ！！」

少年の父親は暗く沈んだ街路樹の地面にうつ伏せの状態で倒れていた。

少年は何度も父親を呼び続けたが、その内うつ伏せになっている父親の体から血が地面に流れ出し、徐々にその血は地面を伝い、拡大して行つた。

「父さアアアアああああああアッ！！！！」

「…ハッ！！」

少年から青年へと成長した男は目が覚めたばかりの体で、自分が横になっていたソファから立ち上がり、近くにあった椅子に掛けていた黒のパーカーを羽織つた。

（嫌な夢を見た……）

そう心の中で呟いた黒のパーカーを羽織つた青年に近づくひとつの影があつた。

「オルシユア兄さん…大丈夫？うなされてたみたいだけど……」

「ああ…大丈夫だハリミア、心配ない……」

オルシユアと呼ばれた青年は不安そうな顔を浮かべている妹のハリミアに少し笑みを浮かべながら答えると、ハリミアはオルシユアの前まで足を進め呟いた。「もうすぐね……」

その言葉にオルシユアはどこか遠くを見るように目線を上にあげ、ハリミアの言葉に続いた。

「もうすぐだ…。」

『神判の日』は近い……』

第二章 訪れた平穩（後書き）

始めに言っておきたいのですが、このお話は魔術側のお話と覚えておいてください。

なので一方通行や浜面にはあまり出番はありません。今はね……。

第三章 思惑と疑問の刹那（前書き）

1人、喋り方がよく分からなかったキャラがいます。なので少々疑問に思いかもしれませんが、どうかよろしくお願いいたします！！

第三章 思惑と疑問の刹那

イギリス・ランベスの宮。

イギリス清教、ネセサリウス（必要悪の教会）の最大主教、ローラ「スチュワートの住まいである。

建物全体が強力な防衛魔術によって守られていて、その防衛魔術の数は、イギリス王室のトップである今の代の女王エリザードの住まいであるバッキンガム宮殿よりも上だ。

しかし、”ランベスの宮”は一部の場所が一般公開されていて、一種の観光地となっているがその一部の場所以外は完全に非公開となっている。

その非公開となっている場所の一角に、この”ランベスの宮”の主である人物がいた。

白とベージュの色が程よく色分けされたもので壁一面が覆われ、オレンジの色をおびた光がその部屋を照らし、清潔感に満ちた部屋の片隅に、最大主教・ローラ「スチュワートはいた。「ふううう、気持ちいいイイ」

部屋の片隅でローラは、ひとつの椅子に腰掛けていた。実際にはローラが座っている椅子の他にも同じような椅子が複数置いてあり、ローラが座っている白色の他に、黒色やベージュ色などがあった。「はあああゝゝやはり、マッサージチェアと呼びけるものは、いつやりても良いものなのよ……」

ローラは腰掛けている椅子、学園都市製のマッサージチェアに体を預け、顔を緩めながら幸せそうな笑みを浮かべ、呟いていた。

が……

「……ッ！！アークビショップ（最大主教）！！」

ボタンツ！と扉を勢い良く開けて部屋に飛び込んで来た人物によって、ローラの細やかな幸せは一瞬にして彼方へと消え失せた。

長い赤髪と黒の修道服の裾を風に靡かせて押し掛けてきた、頬にバーコードのような刺青をつけた人物・ステイル・マグヌスは眉間にシワを寄せながら、マッサージチェアに座っているローラに小走りで近付いて行った。

「アークビショップ……、少しお話があるんですが……」

ローラの目の前まで来たステイルは少し冷静な口調で話し掛けていたが、その言葉には明らかな怒りのオーラが滲み出ていた。そんなステイルのオーラなど気にせず、ローラは、

「何かしらステイル。」

私は今多忙なりけるのよ、報告なら後に出来とるかしらー？」

その瞬間、ブチツ！という何かがちぎれるような音がした。

「……言いたいことはそれだけでしょうか……」

「……え？」

ローラが疑問の声を上げた途端、ステイルの片手の手のひらから炎が噴き出し、ステイルは炎の噴き出している手を、ローラの座っているマッサージチェアの背の部分に押し付けた。

その瞬間、ローラは”あつつウウうつういッ！！”と声を上げ、マッサージチェアから跳ね返るように飛び退いた。

ステイルの炎を受けたマッサージチェアは、まるで最初からあったかのように穴があいていて、今も炎の熱によってマッサージチェアはところどころ溶けていて、ボタボタと地面に落ちていた。

「ス、スステイル！！いきなり何をやらかしたりけるのかしら！？」

「申し訳ありません。アークビショップの為にこの部屋を暖めようと思っていたんですが……チッ」

「今の舌打ちはいかような意味がありしなの！？」

ステイルの言葉にバカな日本語を使ってツツコミを入れていたローラだったが、ここで、

「ん、なにかしら、このにおいは……？」 ローラは鼻から吸い込む空気から、何かが焦げたようなにおいを感じた。そのにおいの元を追ってみようと、キョロキョロと首を振っていると、首を振ることで風になびく髪から灰色の煙が出て、空中に浮いていくのが見えた。

「き、きやあアアあああああッ！。わ、わた、わたくしの美しき髪から煙がアアああッ！」

「良かったですね。その無駄に長い髪を切る機会ができて……」

「まったく良しにあらずよ！！だ、だれか、水を、水をオオおおおおお！！！」

「……それで、なに用なのかしら、ステイル」

あの後、ステイルの持つて来た水を使ってなんとか煙を消したローラは、今別のマッサージチェアに腰掛けながら、焦げてしまった髪を気にしているのか、髪を指でいじくりながら、そんな自分を黙って見ていたステイルに話しかけた。

「アークビシヨップ、これは一体どういうことですか？」

そう言っただけステイルが見せたのは、一枚の羊皮紙だった。

その羊皮紙には……。

『魔術師、エドワード・アレクサンダー＝クロウリーの搜索、及びその存在の殲滅を不許可とする。』

イギリス清教・最大主教、アークビシヨップ

ローラ＝スチュワート』

「……どういふことですか！？ なぜ殲滅命令を許可しなかったんですか！？」

ステイルは眉間にさらにシワを寄せて、ローラに羊皮紙を突きつけながら問いただした。

エドワード・アレクサンダー・クロウリーの殲滅の不許可。魔術師でありながら科学の力に手を出した歴史的に有名な魔術師。

魔術を愚弄した彼を殲滅しようとして動いた魔術師達は何人も存在し、その結果彼は死んだということが、今活躍している魔術師達に伝わっていたが、それは上条当麻の消失とほぼ同じタイミングで過去は覆った。^{くっがえ}

イギリス清教の仕掛けたサーチ術式に、クロウリーの力が引っかけ、彼が生きていることが明らかとなった。

”第三次世界大戦”終戦後、イギリス清教の魔術師達はこのことを十字教であるローマ正教・ロシア正教・スペイン星教などと話し合う機会をえようとしているが、終戦直後ということもあり、色々した後始末が忙しく未だにその機会がない。

その為、イギリス清教所属の魔術師達はせめて自分達だけでもと思い、行動を起こそうとした矢先に、今回のローラの執行の命令書が出回ったのだ。

「奴を倒すことは、魔術側の人間の必然のようなものでしょう！」
イライラが溜まっているようで、ついに怒りを表し始めたステイルに、

「……ステイル……」

ローラは先ほどのはしゃぐ姿が嘘だったかのように冷静に話を始めた。

「確かに、き奴を倒すことは魔術師達の掟のようなものよ。しかしステイル、仮に奴に出おうたとしても、あなたに奴を倒せるかしら……？」

「……ッ！……それは……」

クロウリーは歴史に名を馳せた伝説の魔術師。その魔術師の力を相手にするとなれば、確実に怪我をし、悪ければ死ぬ。

ステイルがたえイギリス清教でもトップクラスの实力を持って

いたとしても、勝てる確率はほぼ0%に近い。

「そういうことよ、スタイル」

「……………」

ローラの言葉に何も言い返せないスタイルは、視線を地面に移し、黙りこんでいたが、”分かりました……”と、小さな声で一言だけ呟き、ローラに背を向けて歩き出した。その時、悔しそうに唇を噛んでいるのをローラはチラリと見た。再び、自分以外だれもいなくなった部屋で、ローラはスタイルに焼かれたのとは別のマッサージチェアに座り、機能を何も動かさずにただじっとしていた。

殲滅命令への不許可。ローラはそれをどうしてもしておく必要があった。ローラはクロウリーが、学園都市の理事長、アレイスター・クロウリーと同一人物だということが分かっていた。

元々魔術師である者が科学の街を作った。それを世界中に公表すれば学園都市は魔術との関係を切るに切れないだろう。

なにせ、今は科学の街のトップだとしても、彼は魔術師なのだから。そしてそれを引き金にして学園都市そのものが魔術側のものだということを世間に信じさせ、学園都市を総取りにする。

その為にも、今はまだアレイスターに学園都市のトップでいても構わないと困る。魔術師である彼が学園都市のトップだからこそ、この話は成立するのだ。

「……………ふふ……………」

ローラはマッサージチェアに体を預け、天井を見上げながらニヤリと笑みを浮かべた。

その笑みにどんな意味があるのかは、まだ誰にも分からない……。

11月5日

”第三次世界大戦”終戦宣言から6日がたち、ローマ正教やロシア正教などの後始末も終わり、ようやくことが収まりを見せていた。そんな世界のとある場所に、4つの人間姿があった…。

「ちよつと、何でこんなところで止まるのよ…」

「い、いや…あの、その…さすがにお腹がすいたというかなんというか…ねえ…当麻君？」

「は、はい…さすがにまる1日何も飲まず食わずっていうのはちよつときついというかなんというか…」

オッレルスに言葉を掛けられた上条当麻は、オッレルスと同じように冷や汗を掻きながら、喋っていた。なぜ冷や汗を掻いているか…簡単だ。

2人の前に立っているシルビアがとてつもなく怖いのだ。

「あのねえ…上条当麻、あんた自分の立場が分かってるの？」

「と言いますと…？」

シルビアの言葉に引っ掛かった当麻が質問をしてみると、シルビアは”はあ…”とため息をついた後、額に怒りのマークを浮かべて話し始めた。

「あんたはローマ教皇に行方を捜されていて、名前と顔が世界中に知れ渡ってんでしょ…！」

「お、おっしゃる通りです…！」

「そのあんたがそこら辺に顔出したら、すぐにバレちゃうでしょうが…！」

シルビアの言う通り、上条当麻という名前は、ローマ教皇によって世界中に知れ渡ってしまった。

その為、世界中の魔術師達に”上条当麻”という存在を教えたしまった。当麻は学園都市に住んでいる科学側の人間なので、魔術師達の間では、当麻を危険分子として警戒している者達も少なくない。

さらに今回のことなどで当麻のことを科学と魔術の間に隔たっている壁を崩す重要な人物だと認識されるようになった。その為魔術師の中には、魔術と科学の壁を保つ為に、上条当麻を殺そうという思想を持ち始めた者もいる。

その為、今の当麻はあまり人前に顔を出すわけには行かず、今も着ている黒のロングコートに付いているフードをかぶり、顔を出るだけ隠している。

「大体その没落貴族も、そんなことは百も承知のはずでしょうが！何であんたもこいつと結託して飯にありつこうとしてんだ！」
「い、いやだつて、当麻君の言った通りまる1日何も飲まず食わずはきついじゃないか」

「1日何も食わなくなつて死にはしないわよ！とにかく今はさっさとローマ教皇のところに行くわよ」

当麻達は今、ロシアを離れイタリア・ミラノに来ている。

理由は先ほどシルビアが言った通り、ローマ正教のトップ、ローマ教皇に会つたためだ。オッレルスからローマ教皇が自分を探していると聞いた当麻は、その感謝などを兼ねてローマ教皇と話がしたかったのだ。それに、当麻達がローマ教皇のところに行く理由ももうひとつある。

「たくつ、あんたらも少しはあいつを見習え」

シルビアは苦い顔をしているオッレルスと当麻から、近くに立っている赤色のロングコートを着てフードをかぶっている”神の右席” 右方のフィアンマの方に視線を移した。

オッレルスとシルビアの助けでロシアにある小屋にいたフィアンマは、やっと動けるようになった当麻に頭を下げて謝った。

当麻はそんなフィアンマを見て、何も文句は言わずにフィアンマに頭を上げるように言って、フィアンマを許した。

元々当麻はフィアンマに憎しみがあつたわけではない。インデックスを取り返す為に戦った相手ほどにしか考えていないのだ。それ

に当麻は一度戦った相手だろうと、その人物がピンチになればすぐに駆けつけて助けようとする人間だ。

そんな行動のせいでいちいちフラグを立ててしまうことを、本人は気付いていないが。

当麻は自分達の話聞いていたフィアンマに、

「フィアンマ、お前は腹減ってないのか？お前だって昨日から何も食ってないだろ？」

「腹が減っていないと言えば嘘になるが、もう少しくらいなら平気だ」

フィアンマの言葉聞いたシルビアが”ほら見る”というような顔をしていた。当麻はそれを見て”うつ…”と声を出していたが、オッレルスはそんなシルビアを見て…

「シ、シルビアはただ飯を食いたくないだけだろう？この前一人言で、”服のサイズがヤバくなってきゴキッ！！”

オッレルスは言葉の途中で顔面にストレートにパンチをくらいい面に倒れ、当麻はそれを見て冷や汗を掻きながら一歩後ずさっていた。オッレルスは片手で鼻を抑えながら上半身を起こし、恐ろしいものを見るような目でシルビアを見ていた。

当のシルビアは……、

「へえ……一体いつそんな言葉を聞いたのかなあ……？」

「い、いいいや…あのシルビアさん……？」

「とりあえず、あんたを半殺しか全殺しにするか決めないとね……」
完全にキレていた。

「殺すことは確定ですか！？出来れば半殺しのほうがいいです！」

「よし決めた……殺そう」

「結局半も全もねえじゃねえか！！ひイイイイイイイッ！！」
！」

悲鳴を上げたオッレルスはなぜか当麻の片腕を掴んでシルビアか

ら逃走し始めた。それを見ていたフィアンマは”アホか…”と呟いて”はあ…”とため息をついた。

片腕を掴まれ引きずり出された当麻は何度もオッレルス呼び止めようとしたが、シルビアが余程恐ろしくオッレルスは当麻の言葉を全く聞いていなかった。

その時、オッレルスと掴まれている当麻を追っかけて来たシルビアが、

「待てやアあッ！！お前ら2人共、あの世に送ってやるウウッ！！！！」

「何で俺まで殺す対象に入ってたんだ！？」

シルビアの抹殺の対象になぜか加えられた当麻は力づくでオッレルスの手を振りほどき、自らの足でシルビアから逃げ出し始めた。

「はあッ…！はあッ…！」

…ッ！くそッ！まだ完全に体力回復してないのに何でこんな！不幸だあアアアあああああああッ！！！！」

1人の怒り狂った女性から逃げる2人の男。その存在はミラノの街の人達に異様な光景として移っていた。

道行く人々が走り去って行く当麻達を見ている中、当麻の近くにあるひとつの街路樹から人が現れ、シルビアから逃げることに必死だった当麻はその人を避けられずに、ドンッ！と音を立ててぶつかり、当麻とその人物は地面に倒れてしまった。

「いてて…、す、すいません！大丈夫ですか！？」

いきなりのことに動揺した当麻は普通に日本語で話していたが、そんなことは本人は気にする気もないようで、ぶつかった人の肩に手を置いた。

パキイインッ！！

「…え？」

当麻が肩に置いた手。

右手、幻想殺し（イマジネブレイカー）

その能力の発動、ということはつまり……。

「……ッ！チイッ！！」

ぶつかつた男が舌打ちをしたその瞬間、ひとつの血飛沫が飛び、それが地面へと付着した……。

第三章 思惑と疑問の刹那（後書き）

次から少し戦闘描写を入れようと思っているので、次話もよろしく
お願いします！

第四章 新たなる事件への扉

当麻は動けなかった。

右手のせいで回復魔術を使えず、人間の持つている自己修復の力で徐々に回復し、ようやく動けるようになった。だが、その期間中はあまり動くことも出来ず、その結果体はなまってしまっていた。

当麻とぶつかった男は懷から、短剣と呼ぶほどの長さの剣を瞬時に取り出した。だが、剣の刀身は日の光に当てられて輝くのは別に、白い光に包まれ、輝いていた。

そしてその剣を当麻の腹に向かって突き刺した。

に、見えたが……、

「……ッ！」

目を見開いて驚愕した男の目の前には、刀身を片手で握りしめている金髪の男・オッレルスがいた。

刀身を握りしめたオッレルスの手からはポタポタと血が流れ、それは時間の経過とともに地面に落ちて拡大していった。

啞然とした表情でいる当麻を尻目に、オッレルスは剣を握りしめたまま、刀身を自分の方へ思いつきり引いて、それと同時に剣を握っている男も同じように引つ張られて行くが、それを察した男は即座に剣を離しオッレルスと距離を取ったが、

「ちよつと！あんた邪魔よ……！」

男の背後に回り込んだシルビアは、自分の声に反応して後ろを振り向いて来た男の顔面を横から思いきり殴り飛ばし、殴り飛ばされた男は背中から地面に叩きつけられグッタリと倒れた。

「すげえ……」

一撃で男を倒したシルビアに感銘の言葉をあげていた当麻だが、

シルビアは世界に20人といない、神裂火織と同じ”聖人”の1人。
”聖人”は普通の人間とは身体的な能力に差があり、筋力や反射神経がずば抜けている。なので、そこら辺の男ならば一撃で簡単に倒せるのだ。

普段付き合っているオッレルスが普通じゃないということなのだ。

「ふう……大丈夫かい当麻君？」

「えッ！？あ、はい、大丈夫です！」

当麻の言葉に”そうか、それなら良いんだ”と言ったオッレルスは、地面に倒れている男を睨み付けているシルビアに近付いて行った。

「この男は……」

「さあ？めちやくちや弱かったし、アンタが狙いつてわけじゃないでしょ。」

でも一般人でわけでもないことは確かね」

そう言いながらシルビアは男の持っていた剣に視線を移した。地面に無造作に置かれたそれには、オッレルスの血が付着していた。その血を見たシルビアはオッレルスの手に目をやり、今もポタポタと血を地面に垂らしている手を見て、難しそうに眉を寄せた。

そして”ちょっと”とオッレルスに声をかけたシルビアは、

「アンタいつまで血イ流してるつもりよ。止めてあげるからこっち来なさいよ」

「ああ、自分としても早く治したいが、さすがに人目につきすぎた……」

オッレルスはそう言って辺りをキョロキョロと見渡した。一部始終を見ていた周囲の人達は、ひそひそと話をしていたりしていた。一般人からすれば、今ここで起きていたことは自分達とは無縁の世界のことなのだ。

いきなり街中で血を流した戦いなどが始まれば、驚かない方が無理だ。

特に倒れている男と、手から血を流しているオッレルスが目立ちすぎている。

オッレルスは倒れている男を肩に担ぎ、”ここは目立ち過ぎたから一旦どこかに隠れよう”と言って当麻達は走り出した。

15

「まったく、何でこんなことになったのよ？」 シルビアはオッレルスの傷の手当てを回復魔術を使って治しながら呟いた。

人通りの少ない路地裏に隠れた当麻・オッレルス・シルビアは、とりあえずそこに座り、シルビアが殴り飛ばした男を縛りあげた後、シルビアはオッレルスの手当てを開始した。

「さあ？とりあえずその男がなぜ当麻君を襲ったのかを知らないと、もし彼を狙っていたとするならば、敵は彼だけじゃない。恐らくどこかの魔術結社だ」

淡々と話すオッレルスに今まで黙っていた当麻が、「いや、多分俺が狙いじゃないと思います…」

「…？、どうしてそう思うんだい？」

そう聞かれた当麻は自分の右手を見た。

あの男の肩に触れた時、何かが壊れるような音がした。当麻にはその音がひどく懐かしく感じられた。

インデックスの”歩く教会”やアニエーゼなどの魔術的な要素の込められた修道服を壊した時にした音とひどく似ていたのだ。

だが、男には何の変化もなかった。しかし男には自分が何をされたのが分かっていたらしい。だからこそ、彼は自分に剣を向けてきたのだろう。

一体この右手は何を破壊したのか？
当麻にはそれが分からなかった。

何か思い悩んでいるような当麻を見て、オッレルスは話を変えて喋り始めた。「とにかく今は、彼が起きるのを待って、それから話を聞き出そう」

「いや…その必要はないと思うぜ」

オッレルスの言葉を遮るかのように、声が響き、当麻達はその声のした方向に目を向けた。

「フィアンマ……」

フィアンマはかぶってフードを取りながら当麻達の方に歩いてきた。この路地裏についたオッレルスは、離れてしまったフィアンマとの連絡手段として、もしもの時の為にと、フィアンマに渡していた通信用の霊装を使ってフィアンマに連絡をして、ここに向かわせたのだ。

だが、オッレルスには計算外のことが起きた。

現れたフィアンマは黒色の大きなものを肩に担いでいた。オッレルスがそれは何か尋ねようとした時、フィアンマは担いでいたものを勢いよく地面におろした。

「「！！！」」

それを見て当麻とオッレルスは驚きの表情を浮かべた。人だったのだ。オッレルスやシルビアが捕まえたのと同じ年ぐらいの男だった。

男を地面におろしたフィアンマは疲れたように「ふう…」と息を吐き、当麻達のように腰をおろした。フィアンマが腰をおろすのを見ていた当麻は、そこからフィアンマが担いできた男に視線を向けた。

よく見ると男は身体中がボロボロで、着ている服もところどころ

が裂けていて、焼け焦げているような部分もあった。

「一体何があったんだ？」

当麻がフィアンマに向けて質問をすると、

「お前らが走っていった後、すぐに追いかけようと思っていたんだが、なにやら殺気を感じて辺りを探ってたらいきなり襲って来てなまあ弱かったから軽くひねっていたら、オッレルスから連絡があり、路地裏を通ってここにこいつを担いできたってわけだ」

フィアンマが倒れている男を指さしながら説明していると、その瞬間男が”う…”と声を漏らして体が震えた。フィアンマによって気絶させられていたが、意識が戻ったようだ。

「ッ、こ、ここは…ガアッ…！」

意識は戻ったが、まだ朦朧としているようで、頭を抑えながら体を起こそうとしたが、地面から立ち上がったフィアンマに足で思いきり横腹を抑えられ、少し起きあがっていた体が再び地面に叩きつけられてしまい、男は突然腹を襲った衝撃で”ゲホッ！ゲホッ！”とむせていた。

しかし、フィアンマはそんな男の状態など気にすることなく、冷たい声で喋り始めた。

「おい…なぜ突然俺を襲った。お前はどこの回し者だ……」

「……ッ、くっ……」

フィアンマに抑えつけられている男は悔しそうに呻きながらフィアンマを睨んだ後、目を動かして座っている当麻達を見回し、当麻達の横で倒れているもうひとりの男に目がいき、驚いたように少し目が見開いていたが、気付かれないようにすぐに元に戻った。

が、オッレルスやフィアンマがそれを見逃すはずがなく、男を踏みつけているフィアンマは男の横腹に置いている片足に、さらに体重を乗せ、それを受けた男は”ぐッ！”と呻い。

「どうやら、あそこで倒れてるやつと知り合いらしいな。なら、尚更喋ってもらうぜ……」

「…ぐッ！…がはッ！！」

「さあ…吐け……」

徐々に足に力を入れていくフィアンマの冷たい声と、男のうめき声が路地裏に響き、なにやら暗いものが路地裏を包んでいたが、そこにフィアンマの行動を見ていた当麻が言葉を発した。

「お、おい、さすがにやりすぎじゃないか？そんなに抑えつけられてたら話せないだろ」

その言葉を聞いてフィアンマは男を抑えつけたまま当麻の方を向き、

「はあ…あのなあ上条、俺達はひよつとすると命を狙われてるかもしれないんだぞ。悠長にしてる暇はない。今はこいつから一刻も早く情報を聞き出すことが最優先だ」

当麻にそう言ってフィアンマ再び抑えつけている男に視線を向けた。だが当麻はそんなことでは納得できるわけがなく、またフィアンマに話し掛けた。

「でもよフィアンマ…」

当麻はそこで口を閉じた。フィアンマは何かを見つけたように固まっており、瞬きすらしていなかった。それを見て不審に思った当麻はフィアンマの視線を追ってみると、男の着ている長袖のシャツの手首の裾の部分から、何か黒いものが見えた。

「……なんだ？」

そう言って当麻は、男の手首に手を伸ばしていると、

「触るなッ！！」

手首を掴む前に、掴まれそうになった男ではなく、フィアンマが大声で叫んで当麻の肩を掴んだ。

「…ッ！な、何だよ急に、ビックリした！！」

「お前は触るな、

おい…オッレルス傷は？」

フィアンマは当麻の肩を掴みながら後方にいるオッレルスに話しかけ、オッレルスは手をフィアンマに見せながら”大丈夫”と告げ

た。どうやらシルビアの回復魔術が終わったらしく、オッレルスとシルビアは立ち上がってフィアンマ達に近づき、裾を捲られたくないのか男は手だけをじたばたと動かしていたが、それをオッレルスが押さえ、その隙にシルビアが男の服の手首の裾部分を捲^めった

「な、なんだこれ……？」

当麻は啞然としていた。捲った男の片腕にはなにやら黒いもので何かが描かれていた。それに続いてもう一方の腕の裾も捲つてみると、同様に黒いもの何かが描かれていた。

「どうやら、魔法陣の一種ようだね」

そこに真剣な眼差しで腕に描かれたものを見つめるオッレルスが呟いた。

「魔法陣……？」

オッレルスの言葉に反応した当麻が同じように呟くと、

「ああ、それも随分複雑なものだよ。シルビア、君は分かるかい？」
当麻の呟きを肯定するように話したオッレルスは、そのまま仁王立ちのように腕を組んでいるシルビアに話し掛けた。

「どっかで見たことがある気がするけど、そんなに記憶に残ってないわ。イギリスの英国図書館で調べれば、何か分かるかもしれないけど。そういうアンタはどうなのよ」

「僕も同じ感じかな？」

何か出掛かってるんだけど、なかなか思い出せないんだ」

オッレルスはそう言って困ったような表情を浮かべていたが、そこにフィアンマが、

「そんなまどろっこしいことをしなくても、こいつに聞けばいいだけだろう」

フィアンマはそう言って一回足を持ち上げて、再び男の横腹に足を叩きつけた。

「……ガハアッ……！」

「さあ……吐け、お前の知っていることを洗いざらいな……」

フィアンマがそう言うと、今まで何も口にしなかった男が口を開

いた。

「くッ……俺は単なる下っぱだ。詳しいことなんて何も知らない」

「じゃあ聞くが、お前の体に刻まれているものは何だ？」

「ッ……そ、それは……」

男がそこで言葉を濁した途端、

「ッ！な、なんだ！？」

フィアンマが驚きの表情を浮かべた。男の体に刻まれたものから紫色の光が輝き始めたのだ。

「ぐアアアあああああああああッ！！！」

男は何かに体を切り刻まれているかのように目をこれ以上開かないのではないかというほど開いて、断末魔のように叫び声をあげた。その後、男は口から大量に吐血を始めた。

突然のことに驚いていた当麻達だったが、オッレルスは何か閃いたように当麻に余裕のない口調で話し掛けた。

「当麻君！右手だ！！」

「え！？」

「あれが魔術によるものだとなれば、君の右手ならどうにか出来るはずだ！！」

先ほど当麻がぶつかつた男が今苦しみでのたうち回っている男の仲間で、尚且つあの男にも黒いもので刻まれたものがあつたとすれば、先ほど当麻が右手の幻想殺し（イマジンプレイカー）で破壊したのは、あの男に刻まれていた黒いもの。それならば！

当麻は駆け足で苦しんでいる男に近づき、思いきり右手を男の腹に押しつけた。すると、”パキイインッ！！”という音と共に男の体から刻まれていたものと紫色の光が消えた。

そして男は無意識の内なのか、当麻達にある言葉を呟いた。

「……し……神判の……日……」

第五章 崩壊への序曲（前書き）

先の地震で被災された方々へ、心からご冥福をお祈り致します。

私も関東に住んでいるので被災者には変わりはないんでしょうが、東北の惨状などを見ると、自分達がどれだけ好運だったのかと思いました。

現在も余震が続いていますが、どうか挫けずに頑張っていただきたいと思っております。

久々の更新になります。

短いですが、どうかご覧下さい。

”新約”を見た人は、”上条さん”がどうなったか知っているとありますが、この中ではまだまだです。

ですが、いつか”新約”と同じようになります。

第五章 崩壊への序曲

「ダメだ…手遅れのようにだ……」

口から血を流して倒れている男の脈を測ったオッレルスは、悔しそうに眉を寄せて呟いた。当麻の幻想殺しで何とか助けることが出来たと思っていたが、男の心臓は既に止まっていた。それを聞いた当麻達も悔しそうな表情を浮かべていたが、暗い雰囲気打ち消すかのようにフィアンマが口を開いた。

「こいつが最期なんて言ったか、聞いたか？」

「ああ、聞いたさ。」

『神判の日』、と確かに言っていた」

フィアンマの問いに答えたオッレルスは、いつもと違った真剣な表情をしていた。

「『神判の日』、これも先ほどの体に刻まれていた魔術同様に、どこかで聞いたことがある気がする」

「俺にはあまり心当たりがないんだが……おい、アンタはどうなんだ？」

フィアンマはそばに立っているシルビアへ問いかけると、

「うーん……あッ……」

シルビアは真剣な表情で何かを考え込んでいたが、突然、何か閃いたように声を出し、オッレルスやフィアンマや当麻は一斉にシルビアを見つめ、シルビアはそんな視線を気にせず、何かを思い出しているかのように眉を寄せながら話し始めた。

「以前イギリスにいた頃に、調べ物をしに英国図書館で本を読みふけていた時に、そんな言葉がどっかに載ってた気がする……」

「何でもいい、思い出せ。じゃないと……」

その時、シルビアに声を掛けていたフィアンマの言葉を遮るように”うくッ…”と苦しむような声が聞こえ、フィアンマ達がそちらを見てみると、声の主は先ほどシルビアがぶん殴って気絶させた男だった。

男はぼんやりとした頭で辺りを見ていたが、地面に血を流して倒れている人間を見て、一気に意識が回復したらしく、さらに視線を移し自分をじっと見ているフィアンマ達の顔が視界に入り、”あ、あああ…ああ！”と男は奇妙な声を出しながら、たちまちパニックに陥っていた。

「落ち着いてくれ、僕達は危害を加えようとは思っていない」

錯乱している男に、オッレルスは少し気の入った声で話し掛けた。オッレルスも相手が危害を加えてこなければ、別に戦おうなどとは思っていないのだ。まれに、自ら戦いを仕掛けることはあるが、それは善意でやっていることなのだ。

「君はそこに倒れている彼を僕らが殺したと思っているのかも知れないが、違うということだけ言わせてくれ。僕らはただ話を聞きたいだけなんだ」

オッレルスの真剣な顔と言葉を聞いて、少しではあるが気持ちが悪くなり落ち着いたらしい男は何か喋ろうと口を開いたが、何を思ったのか声を出す前に口を閉じた。

それを見たオッレルスは男が何を考えているのかが直感で分かった。

先ほどの男は、自分達に何か重要なことを口に出そうとした瞬間に体に刻まれた魔術が男を苦しめ始めた。恐らく刻まれた魔術に、余計な事を他の人間に知られない為の特殊な術式が組み込まれていたんだろう。だからこそ、先ほどの男は突然苦しみだしたのだろうとオッレルスは考えていたのだ。

「体のことなら心配しなくても大丈夫さ」

自分の言った言葉に不審そうに顔をしかめた男を見たオッレルスは少し笑みを浮かべて、

「忘れたのかい？さつき君が彼に何をされたのか」

後ろに立っている当麻を見ながら喋っているオツレルスの言葉を聞いて、男は”ハッ”と何かに気づいたかのように目を開いた後、自分の着ている服の襟を片手で引いて、服の中を見た。「…ッ！こ、これはッ！」

驚きの表情を浮かべた男に、オツレルスが話し掛けた。

「君の体に刻まれていた魔術はとくに消えているよ。彼の右手のおかげでね」

「い、一体どうやって！？」

男は驚きの表情を浮かべたまま、立っているオツレルスに話し掛け、話し掛けられた本人は何も言わずにチラッと視線を当麻の方に向け、男もそんなオツレルスの視線を辿って当麻を見つめた途端、男は先ほどよりもさらに目を開いて当麻を見つめた。

「ま、まさか、この少年は……」

「そう、ローマ教皇の話聞いた人物なら、彼が誰なのか一発で分かるだろ？」

「上条…当麻…か？」

男は驚きを隠せないまま確認するように、当麻に名前を聞いてきたので、その当麻は”へ？あ、はい、上条当麻です”と呑気そうな口調で答えた。

当麻の言葉を聞いて男は口をポカンと開けて固まっていた。どうやら男は自分とぶつかった人物が当麻だとは気づいていなかったらしい。

男はなぜ自分の体から魔術が消えたのかを納得せざるを得なかった。魔術師である男は”上条当麻”という人間のことを多少耳にしていたのだ。

魔術が全く効かない幻想殺し（イマジンブレイカー）を持ち、さらについてこの前終戦を迎えた”第三次世界大戦”の幕を引いた人物。行方不明となり、ローマ教皇が探していた人物が今自分の目の前

にいるのを見て男は驚きの表情を隠すことなくその状態で当麻を見つめていた。

「さて、早速話を聞きたいんだが、いいかい？」

呆然としている男に痺れを切らしたのか、オッレルスは本題へと話を切り出した。

「今の君にはおそらくないと思うが、君にもあの男と同じようなものが身体に刻まれていたはずだ」

「……ああ、その通りだ」

「なら聞こう、”アレ”は一体何だ。僕としては何らかの魔術の一つだと推測しているんだが……」

「”アレ”は……」

男はそこで一旦話をうち切ったが、決心がついたように喋りだした。

「確かに”アレ”は魔術の一つだが、俺は詳しいところは何も知らない。俺が言われたのは、あの魔術を身体に刻んだ状態のまま指定された場所に向かうということだけだ」

「”指定された場所に向かう”？、それは誰に言われたんだ」

男の言葉に疑問を抱いたフィアンマが腕を組みながら、男に問いかけると……

「そ、それは……」

「何だ、早く言え」

「……”オルシュア”という男だ」

「……ッ……」

その名前を聞いて、シルビアは驚きの表情を浮かべた。それを見た当麻とフィアンマ、オッレルスの3人は視線をシルビアに集中させた。

「シルビア、心当たりがあるのか？」

当麻とフィアンマの気持ちを代弁して、オッレルスが眉を寄せて

何か考えているシルビアに話し掛け、シルビアは深刻そうな表情を浮かべながらで口を開いた。

「"オルシュア"フェルシード"、私と同じ"聖人"の1人よ」

「強いのかい？」

「さあ？実際に会ったのは一回だけだし、その時は顔をチラッと見ただけだし」

シルビアの答えに苦い顔をしたオツレルスは、次に、自分達の話聞いていた男に視線を移した。「それで、さつき君は"指定された場所"と言ったが、それは一体どこなんだい？」

「ローマにある"クイリナーレ"という場所だ」

「クイリナーレ？」

男の口にした言葉に当麻は、いかにも"聞いたことがない"というような口調で話していたが、そこにシルビアが、

「"クイリナーレ"はイタリアの首都であるローマの元になった『ローマの七丘』の1つね。伝説だと、サビ二人が信仰していたローマ神話に登場する"クウィリーヌ"という神の名を、丘の名前にして、"クイリナーレ"ということになったらしいわ。今はイタリアの大統領官邸があつたはず」

「でも、そこに行つて一体何をするんですか？」

「そんなことあたしが知るわけ……」

当麻の質問に呆れたように応答していたシルビアだったが、突然何かを思い出したかのように、言葉を遮り、それを見ていた当麻が「あ、あの…、どうしたんですか……？」と、急に黙ってしまったシルビアに恐る恐る話し掛けた。

すると……、

「なるほど…、そういうことか……」

「な、何か分かつたんですか？」

「ええ、分かったわ。

”クイリナーレの丘”に”身体に刻まれていた魔法陣”。そして、さつき死んだ男が最期に口にしていた『神判の日』ってやつが」

そう言ったシルビアは、考えていた問題が解けてスッキリしたかのように笑みを浮かべていたが、次の瞬間に深刻な表情に変わり、その口を開いた。

「簡単に言っちゃえば、そうねえ……」

シルビアの話を瞬きせずに聞いている当麻やフィアンマ、オツレルスの期待に応えるように、シルビアは言い放った。

『ローマの壊滅。と言ったところかしらね……』

行間・3

時間は数時間前に遡り、

ローマ正教、「神の右席」。その組織の元メンバーである「前方のヴェント」は、「エスクイリーノ」という『ローマの七丘』の1つである場所に来ていた。しかし、ヴェントがここに来たのは、プライベートというわけではない。仕事だ。

ローマ正教のトップである、「ローマ教皇」のマタイ・リースの命令で、ヴェントはローマ正教の本拠地であるローマの見回りをやっているのだ。

（ちっ……、何であたしが不穏分子の排除なんてやらなきゃならぬのさ……）

第三次世界大戦、終戦後、十字教内最大宗派であるローマ正教と言えど、戦争によって兵力はかなり疲弊していた。それは、同じ十字教であるイギリスやロシアも変わりはないが、先ほども言ったように、ローマ正教は十字教内で最大の宗派だ。

どんな戦いにおいても、力ある者ならば、必ず頂点を狙ってくるはずだ。先の戦争で兵力の疲弊したローマ正教を狙う者が現れるかもしれない。

ローマ教皇のマタイ・リースはそのようなことを危惧して、疲弊した兵力の中でも、特に力のある「神の右席」の元メンバー、「前方のヴェント」を選んだというわけだ。

だが、当の本人は…、

（ああゝ……、かつたるい。もうめんどくさいから、帰ろっかなあ…）

ヴェントはそう心の中で呟きながら、”はあゝ…”とあからさまにため息をついていた。
だが……、

「ん？…」

無意識の内に視線を張り巡らしていると、ヴェントの目に1人のガタイのいい男が映った。一見すると、他の一般人と何も変わらないが、だがヴェントは違った…。

数々の戦いをくぐり抜け、戦場を生き抜いてきたヴェントには、その男が体から放っている悪意にも殺意にも似た何かを感じ取った。ヴェントの視線の先にいる男は、ただただゆっくりとヴェントの視線に気付くことなく、2人の距離は徐々に開いていった。

自分から離れていく男の後ろ姿を見ながら再び盛大にため息をつ

いたが、その男の後を追って歩きだした。

（はああああ……、また、別の意味でめんどくさいことになりそう……）

ヴェントと男の距離は再び、縮んでいった…。

17

「ロ、ローマの壊滅!？」

当麻はシルビアの言葉に驚きの表情を隠せないらしく、えらくすつとんきゆうな声色で叫んでしまった。

「そ、ローマの壊滅。これが悪意ある行動なら、間違いなく敵の目的は”ローマの壊滅”ね」

「でも、どうしてそんなことが分かるんですか？」

「随分前に、イギリスの英国図書館で本を読みふけていた時に、こんな感じの魔術のことを読んだの」

当麻の問いにスラスラと答えていくシルビアに、オッレルスが真剣な表情を崩すことなく、

「具体的にいうと、どんな魔術なんだい？」

「『ローマの七丘』って、さっき言ってたの覚えてる？」

「ああ。」

「この魔術は、その『ローマの七丘』を核にしたものよ。ローマという街はそもそも、『ローマの七丘』を元にして作られた街よ。

さっき言っていた”クイリナーレの丘”以外の、”アヴェンティーノ”、”チエーリオ”、”エスクイリーノ”、”パラティーノ”、”ヴィミナーレ”という丘にも、身体に魔法陣を刻んだ人間を置いて発動させる」

「発動させるとどうなる？」

シルビアの言葉を聞いて問いかけたフィアンマにシルビアは、
「『ローマの七丘』は、1つ1つの丘がローマを作り出した起源そのもの。敵の狙いはその丘の破壊。つまり、丘の破壊は”ローマを壊滅”させることに繋がる。簡単に言えば、”七つの丘”と”ローマ”はリンクしてるのよ。”丘が消えればローマも消える”、そんなところかしらね。そして、その破壊するための魔術の名前が『神判の日』ってわけ」

「なるほど、そういうことか…」

シルビアの話を聞いたオッレルスは、その真剣な表情を崩すことなく、同様にシルビアの話を黙って聞いていた男に視線を向けた。

男はシルビアの話に口を開いたまま聞いていた。その様子から察するに、”本当に何も知らなかったんだろう”とオッレルスは考えた。

「シルビア、1つ聞いていいかい？」

「何よ？」

「丘に魔法陣を刻んだ人間を置くと言ったが、もしその魔術が発動したら、その人間は一体どうなるんだい？……」

オッレルスの言葉にシルビアは眉を潜めた。オッレルスが自分に何を聞きたいかがはつきりと分かったからだ。

そして……、

「……そうね…」

「………」

「これだけの大魔術をなんのリスクも無しに発動出来るとは思えない。恐らく、”死ぬ”わね」

瞬間、オッレルスの近くいた男が目を見開いて驚きの表情を浮かべていた。

もし、このまま麻達と遭遇することもなく、指定の場所に行つ

ていたら、自分は死んでいたかもしれない。驚かないわけがなかった。

「そ、そんな……」

男は、まるで全ての希望が打ち砕かれたかのように、手足から力を抜いてうなだれてしまった。

当麻もそんな男の姿を見て、複雑な気持ちになっていた。だがそこに、そんな空気を振り払うようにフィアンマが言い放った。

「上条」

「……………」

「もしこの魔術が発動すれば、大勢の人間が死ぬ。

それで、お前はどつする？」

「……そんなもん……」

当麻は右手を握りしめ、「止めるに決まってんじゃねえか!!」

そう言った当麻の目には、炎が灯っていた。そんな当麻の姿を見て、フィアンマ、オッレルス、シルビアは軽く笑みを浮かべていた。「さて、そうと決まれば、早速出発しよう。もう何かが起こっているかもしれない」

「ハイハイ」「…おう」と言っただけで返事をしたシルビアとフィアンマを見て、再び笑みを浮かべたオッレルスは、未だに呆然としている男に、

「君には彼のことを頼みたい。さすがにずっとあそこに置いておくのは忍びないからね」

「…あ、ああ、分かった」

なんとか返事をしてきた男を少し心配そうに見ていたオッレルスだが、「ほら！早く行くぞ没落貴族!!」というシルビアの怒号を聞いて、気持ちを切り換え、男に背を向けてオッレルスは当麻達の後を追って走り出した。

日射しの入らない路地には、気持ちの整理のついていない男と、既に亡骸となっている男が残っていた…。

オッレルス達と一緒にローマへと向かって進んで行く当麻は、心の中で静かに呟いた。

（こりゃ…インデックスに謝るのは、もう少し先のことになりそうだな……）

行間・4

エドワード・アレクサンダー「クロウリー」。

魔術師であるにも関わらず、科学の力に手を出した歴史上、最悪の魔術師。

しかし、魔術師でありながら科学の力に手を出したのは、”彼だけ”ではない。

昔、あるところに

”サファイリッド”という名前の男がいた。妻は幼い2人の子どもを残して病気で死に、彼は1人、魔術の研究に没頭していた。

しかしそんな中でも、彼は2人の子どもを熱心に育てていき、3人は仲むつまじく暮らしていた。

だが、ある時彼は魔術から離れ、科学の力に手を出した。そしてその噂を嗅ぎ付けたローマ正教の魔術師によって、彼は肅清された。妻同様に2人の子どもを残して。

その2人の子どもの名は、

”オルシユア”フェルシード”

”ハリミア”フェルシード”という。

第六章 戦いの口火を切る者（前書き）

更新遅れてしまって申し訳ありません。

やっとな話目です。

どうぞご覧ください。

第六章 戦いの口火を切る者

18

ハリミア「フェルシードは『ローマの七丘』の1つである”チェーリオ”の近くにあるカフェに佇んでいた。

一見すると、女性が暇な時間を使ってカフェでのんびりしているように見えるが、実際は違った。

ハリミアは右手をテーブルに置いてあるエスプレッソの入ったカップに添え、左手を膝の上に置いて軽く握りしめていた。

だが、その握りしめた左手には、何かをメモする時に使うような小さな紙が存在していた。通信用の霊装だ。

「それで、そっちの準備は出来たの？」

「ああ、問題ない。ユベリスが逐一連絡を入れてくれてる、全て予定通りだ。

だが……」

「だが？」

「『神判の日』に使うはずだった奴らの内の2人の人間の発信が消えた」

「あちゃー、何かトラブルだったかね。まあいいじゃん。使える駒はまだあるし。こんな時の為に魔法陣に組んでおいた術式が役にたったね。あれのお陰で駒の動きが監視できるんだから」

ハリミアは笑みを浮かべて、右手に添えていたカップを持ち上げ、ゆっくりとした動きで、飲むために口に近づけていったが、カップが口に付く寸前のところでピタッと動きが止まった。

「あーあ、どうやらこっちもトラブルみたい」

「何かあったのか？」

「ええ、”エスクイリーノ”に向かっていた奴の発信が消えたみた

い」

「こつちも今感じた。どうする？立て続けに消えられたら、さすがに準備するのが面倒になってくる」

「そうね。もしこれが私達に敵対する誰かの仕業なら、放っておくわけにはいかないわね。ちよつと様子を見てくるわ。」 エスクイリーノは”チエーリオ”から近いし、敵がいたらあたしが消しておくわね」

「分かった。そつちは任せる。気をつけろよ、ハリミア」

「ええ、心配しなくても大丈夫よ。オルシユア兄さん」

19

「あゝあ、やっちゃった。話をしてから消す気だったんだけどな。

力の加減が足りなかったか」

ヴェントはそう言つて、地面に血を流して倒れている男を見ながら呟いた。

男を追いかけていたヴェントは、男が”エスクイリーノ”と呼ばれる辺りに来てから、まったく動こうとせず、立ち止まってしまい、それを何十分か見ていたヴェントだったが、いい加減痺れを切らし、ヴェントは男の前に立ち、挑発を仕掛けたところすぐに襲いかかって来た。

しかし、ヴェントは元々「神の右席」のメンバーであり、その実力はそこら辺の魔術師とは比べ物にならない。

ヴェントは襲いかかって来た男を難なく足蹴にして、情報を吐かせようとしたが、力の加減を間違えてしまい、もう情報を聞き出せ

る状態ではなくなってしまった。

「さて、これからどうしようかねえ。情報を聞き出せてないし、とりあえずもう一辺街をブラブラ歩いてみるか。そうすりゃ何か……」

「……」
そこまで言ったヴェントは突然言葉を遮った。ヴェントの後方から炎の塊がヴェント目掛けて飛んできたからだ。

「……ッ！！」

ヴェントはとっさに、持っていたハンマーを使い、風を発生させ、その風を利用し炎の軌道を逸らしたが、反応が遅かったらしく、炎がヴェントの横を抜ける寸前に炎の一部がヴェントへと襲いかかったが、ヴェントはそれを真横にステップをして避けた。

「へえ、やるわね」

「一体誰かしらあ？」

「あたし達の邪魔する奴がいると思って来てみれば、あなた、ローマ正教の魔術師ね？」

「だったら何だったのよ？」

ヴェントが話し掛けた人物、ハリミアはその問いに軽く笑うと、今まで抑えていたかのように、ヴェントに向けて殺気を放った。

『殺す』

「はッ！！」

ヴェントはハンマーを横に一閃し、ハリミアに向けて風を発生させた。

ハリミアはそれを横に飛んで回避し、いつの間に出したのか刀身以外は黒色に包まれた槍を構えていた。その刀身からは赤く光るものが噴き出ており、ハリミアはその槍を思い切り地面に叩きつけた。

「はああああッ！！」

ボガアアアン！！という音と共に爆煙を巻き上げたハリミアは煙

に包まれ、ヴェントの視界から消えた。

やがて、煙が消えていくと、そこには何の怪我也負っていないハリミアの姿があった。

（ちッ！、あたしの風を爆風を叩きつけて相殺したってわけか…）

「その格好にさっきの風……あんたもしかして「前方のヴェント」とかいふ奴？」

「へえ、よく知ってるわね」

「ローマ正教の人間は、大体調べてあんのよおッ！」

ハリミアは持っている槍の切っ先をヴェントに向け、槍の先端から炎の球体を発射した。

「ちッ！！」

ヴェントはもう一度ハンマーを一閃し、軌道を逸らそうとしたが、炎の球体はヴェントの発生させた風をもとめせず、にまるで貫通したかのように、ヴェントに一直線に飛んできた。

だがヴェントはとっさにハンマーを地面に叩きつけ、ハリミアがやったのと同じように爆煙をあげ、3つの炎の球体は煙の中に消えていった。

「……………」

ハリミアは炎が消えていった煙をただじつと見つめていた。
すると…、

「…………ふん、あんた結構やるじゃない」

煙の中から声がした瞬間、ハリミアの視界にあった煙がビュウウッ！と音をたてて跡形もなく消えた。そこには、炎の球体などなく、ハンマーを肩に担いでいるヴェントだけが立っていた。

「てつきり雑魚かと思ってたけど、どうやら違ったみたいね」

「それはどうも」

「今日はついてるわね。これからどうしようかと思ってたんだけど、

丁度いいからあんたを半殺しにして、情報を吐いてもらいましょうかね」

「出来るかしら？」

「出来るわよ」

「そう…、じゃあやってみなさいよ！！」

ハリミアがそう叫ぶと、彼女の持っている槍が突如光りだし、徐々に槍が形を崩していった。

形を崩したその物体は球体の形になり、そこから突然その炎の塊がまるで鞭のようにしなりながら、ヴェントに向かって飛んできた。ヴェントは自分に向かって飛んでくる鞭のような炎に対し、まずは様子見という感じで、ハリミアを囲むように円形に走り始めた。
「ッ！逃げんなぁッ！！」

ハリミアが操っている炎の鞭は、ヴェントが避ける度に地面や壁に当たり、その度に爆発音と共に鞭が当たった場所が砕けていった（あの術式…、今まで見たことのないタイプだけど、ひょっとして武器としての性質を最大限組み込んであのかしらね……）

炎の鞭は的確にヴェントに照準を合わせて飛んでいるが、ヴェントはそれを軽々とかわしながらハリミアの行動を観察していた。

魔術師の戦闘において、相手の術式を分析し、そしてその隙を突くことは、かなり重要なことだ。ヴェントはハリミアの術式を観察していたが、ヴェントの知っている中では、ハリミアの術式は見たことのないものだった。

ヴェントは速度を下げずに持っているハンマーを振り回した。直後、3つの空気の鈍器がハリミアに向かって直進していった。

「……チッ！！」

ハリミアには攻撃を防ぐものがなく、ハリミアは横へ転がるように鈍器を回避し、それに続いて炎の鞭もゆらゆらと宙を舞って

いたが、シュツ！と音をたててハリミアの元に戻り、先ほどのように鞭は形を崩し、球体に一瞬なり、すぐにまた違うものに形を変え始めた。

それを見ていたヴェントが、

「ふん、

便利な霊装ね。それ」

「ていうか、アンタも本気だせば？随分余裕そうじゃない」

「そうね。さっさとアンタをぶっ潰して、情報を吐いてもらおうかしらねッ！」

そう言つてヴェントは懷からチェーンのようなものを取りだし、引き抜かれたチェーンの先には何かの動物を表現したような小さいものがついており、チェーンはまるでなにかに操られているかのようにはヴェントの片腕に巻き付き、その状態のままヴェントはハンマーを掲げるように天に向け、円を描くように振り回し始めた。

「何それ……一体何をして……」

振り回されるハンマーによって風が生まれ、それがハリミアの髪を撫で、ハリミアは髪を押さえながらヴェントを訝しげに見ていたが、彼女の視界におかしなものが入った。

ヴェントを見るハリミアの視界に突如、何かボヤがかかったように白いものが発生し、時間がたつにつれ、それは徐々に拡大していき、ついにハリミアの視界からは、ヴェントの着ている薄黄色の服すらも見えなくなった。

周囲を見回したハリミアだが、いつの間にか自分の周りは白いものによって外界から完全に遮断されていることに気づいた。

（これは…霧…？でもどうやって……）

霧を見つめながら周囲を見回すハリミアの耳に、

「どう？、何か見えるかしら……？」

ヴェントの声が霧に覆われたどこかから聞こえた。

その瞬間、ブオオッ！！と周囲に覆われた霧を切り裂くような音と共に、ハリミアの全身に冷気のようなものがぶつかった。

そしてその冷気から少し遅れて、霧を巻き込むような螺旋状の風の凶器がハリミアを襲った。

「……があッ！……くッ！」

螺旋の風は、急いで回避しようと動いたハリミアの片腕の服を容易に切り裂き、それと同時に腕自身もまるで引つ張られるように風に吸い寄せられ、腕の何カ所かが裂けた。

ハリミアを襲った風は、そのままハリミアの後方にある霧を巻き込みながら、アスファルトの地面をガガガッ！という音と出しながら削つていき、一瞬霧が晴れた場所は、再びその白い霧によって塞がれた。

「ハア……ハア……、チッ……、やってくれたわね」

ハリミアは裂けた片腕のもう一方の腕で抑えながら霧によって視界から外れたヴェントに話し掛けた。

「ありがとね。でもまあアンタもやるじゃない。」

「こっちとしては今で決めるつもりだったんだけどね」

「あたしはそう簡単に殺られる訳にはいかないのよ」

「あら、そう。じゃあ避けてみるッ……！」

その瞬間、再び冷気を纏った風の凶器が、霧を巻き込みながらハリミアに飛んできたが、ハリミアはそれを真横に転がることで回避したが、ヴェントはそれを先読みしていたかのように、ハリミアの回避した場所に2つの風の鈍器を放った。

ハリミアは球体の形を変化させておいた炎の剣を飛んで来た風の1つに狙いを定め、凄まじい速度で切り裂き、残った風の鈍器を回避しようとバックステップをしたが、鈍器はハリミアのいた場所のアスファルトに突き刺さり、アスファルトの破壊と共に発生した強風により、体勢を崩しアスファルトの地面に尻餅をついてしまった。

（くそッ！この霧、鬱陶しいたらありやしない！）

舌打ちをしながら、この霧の対策を練るハリミアに、霧のどこかにいるヴェントが、

「どう、この魔術を使ったのはアンタが初めてなのよ。感想は？」

「ふん、さつさとここから抜け出して、ぐちゃぐちゃにしてやる」

「ふ〜ん、じゃあ種明かしをしてあげましょうか？」

瞬間、まるで霧は何かの意思を持っているかのように動き、ハリミアの視界にヴェントの姿が映った。

「種明かし？」

「そう。この魔術はこの腕に巻いている霊装によってなりたっている」

そう言いながらヴェントは片腕に巻いている霊装を見せつけ、さらに話を続けた。

「ギリシア神話における、アネモイの4つの柱。その柱の1つである”エウロス”は暖気と雨を司る風」

「暖気と雨……ッ！まさかこの霧は！」

「そう、暖気と雨による湿度の上昇によって発生した霧。そして……」

これが……、と言ってヴェントはハンマーを振り回し、冷気を纏った螺旋の風をハリミアに放った。アスファルトを砕きながら飛んできた風に、ハリミアは風の攻撃範囲から出るために真横に走り出し、ギリギリのところで回避し、砕けたアスファルトの粒が風に巻き込まれながら過ぎ去っていくのを見ていた。

「”エウロス”と同じく柱の1つである”ボレアース”。その風の力よ。この風は”むさぼりつくす”という意味もある柱の中でも一番の破壊力を持つ風。あともう2つあるけど……その前に……」

ヴェントは話を止めたと思った途端、ハンマーを横に一閃し、その瞬間辺りを覆っていた霧がまるで最初から無かったかのように吹き飛んだ。

その行為にハリミアは不審な眼差しでヴェントを見つめるが、
「あたしも本気を出してるんだから、そろそろアンタも本気を出し

てくくない？…アンタ、本当はこんな霧だつて、やろうと思えばすぐに吹き飛ばせたんじゃないの？」

ヴェントはハリミアに苛ついているかのように鋭い視線を向け、それを見たハリミアは顔を下に下げ、ヴェントに見られないようにニヤリと笑った。

ハリミアは無言で片手に持つている炎の剣に両手を添えた。

その瞬間、ボオオオッ！という音と共に凄まじい量の炎が吹き荒れ、その炎が爆音と共にヴェントに向かって放たれた。

「……ッ！！」

ハリミアの力を読んでいたヴェントも、この規模の攻撃はさすがに予想外だった。とっさにヴェントはハンマーを縦や横に振り回し、吹き荒れる冷気の風が1つの氷の槍のようになり、炎に向かって飛んで行った。炎と氷の衝突によって、ジュウウッ！という氷の蒸発する音が響き、炎をしのげるかと思つたが、わずかな質量の差により小さくなった炎がヴェントに飛んできた。

が、ヴェントはそれを風を利用した魔術で上に飛び炎を回避した。宙に浮いた状態のまま、ヴェントはアネモイの柱の1つである”ノトス”の力を使った。

振り降ろしたハンマーから熱気と共に風の鈍器がハリミアに飛んでいったが、ハリミアはそれを避けようとせず、ハリミアの片方の手には炎の弓のようなものが握られ、ハリミアはもう片方に持つている矢を弓に添え、自分に向かってくる風に向けて弓を引いた。

炎の矢は、熱気を纏った風をいとも簡単に破り、風を貫いた矢は、ヴェントの頬をかすり、上空へと飛んで行った。

地に足を降ろしたヴェントは頬から出る血を気にすることなく、ハリミアを睨みつけた。

「やっぱり強いわね。アンタ」

「まあね」

「その霊装の力かしら？」

”その通りよ”と言ってヴェントの問いに答えたハリミアは、ヴェントに手に持っている弓をかざした。

「レーヴァテインの武^ぶ”よ」

「レーヴァテイン”？」

「そう。北欧神話に登場する。伝説の武器の名を持つ霊装よ。と言っても私たちもそれなりの仕掛けを施してるけどね」

ハリミアはかざしていた弓を降ろし、再び話を続けた。

「神話では”レーヴァテイン”はどんな形の武器なのかが判明していない。この霊装はそのことを魔術的な意味として最大限に利用した霊装。つまり、この霊装に武器としての形はない。剣にだって槍にだって、こんな風に矢にだって形を変化できる」

「でも、神話における霊装の力を引き出すには、それなりの何かが必要なのは」

「そうね。確かにあたしは、「神の右席」のアンタみたいな特殊な力は備わっていない。でもあたしは別のやり方でアンタみたいな力を手にすることが出来た」

「別のやり方…？」

「おっと、これ以上話す訳にはいかないわね。聞きたいならあたしを倒してみなさいよ」

「へえ…、じゃあそうするわー！」

ヴェントはハンマーを横殴りに振り回し、発生した複数の風の鈍器が渦を巻き、1つの杭になりハリミアに襲いかかった。

ハリミアはその杭を避ける動作をせずに両手を広げ、その両手に2つの炎の剣が発生し、その剣を前方にクロスするように突きだし、自分に向かって飛んできた杭を両手の剣で受け止めた。

その隙にヴェントはハリミアに向かって突進するように身体を前のめりにしながら走り出し、追撃するかのように今度は冷気を纏う

風を、未だに最初の一撃を受け止めているハリミアに向かって繰り出した。

ヴェントはその隙に横に回り、風の鈍器を繰り出そうとしたが、その瞬間、ハリミアが口元に笑みを浮かべたのをヴェントは見逃さなかった。

(……ッ！まさか！！)

ヴェントが舌打ちをした瞬間、ハリミアが握っていた炎の剣の刀身の方から莫大な量の炎が噴き出し、その炎は風の杭と、冷気を纏う風を炎で押し返すかのように吹き飛ばした。

炎はそのままハリミアの近くの地面を覆うように燃えていき、ヴェントはここから一旦距離を取ろうと考えた時、ヴェントは感覚的に気づいた。自分を狙う何かに。

その感覚に身を任せ、辺りを見ると、そこには燃え盛る炎の中、自分に向けて弓を引いているハリミアの姿があった。

ヴェントはハリミアを凝視し、ハリミアもヴェントを見つめ、ヴェントの驚愕そうな表情を見て、本人にも分かるほどにはっきりと笑みを浮かべた。

その笑みを見て、ヴェントは自分の考えが当たっていることを悟った。

ハリミアは自分の攻撃を受け止めていたが、それは自然なことではなく”わざと”だということを。

自分はまんまとハリミアの誘いにのり、自ら敵に近づいてしまった。

それが一体どれほどの屈辱なことか、ヴェントにははっきりと分かった。

「くそがアアアあああああッ！！！」

ヴェントの叫び声と共に1つの矢が弓を離れ、それは直線のルートを描きながら1人の人間に命中した。

第七章 神の力と人間の狭間（前書き）

短いですが、

どうぞご覧ください。

連続更新はやっぱり疲れることを実感しました。

第七章 神の力と人間の狭間

行間・5

「このペースじゃ、ローマに着くのは最低でもあと2時間は掛かる。彼の右腕の力は幸い左腕にはなんの力も働いていないようだが、やはり影響は出るらしく、今使っている魔術の力はいつもの半分ほどしか発揮出来ていない」

じゃあどうする。このままローマが壊れゆく様を見物でもするか？
「いや、僕としては先に君だけを向こうに送ろうと考えているんだが……どうだい？」

俺を先に行かしたところで、何をさせようって言うんだ？

「僕達が到着するまで、出来るだけ時間稼ぎをしてほしい」

ハッ、この俺様をこきつかおうってわけか。

「強制はしない。君も彼と同じく病み上がりだ。だが我々にはあまり手段がない。どうか、やってくれるかい？」

……ふん。いいだろう。やってやるさ。

「助かるよ。だがあまり無理はしないでくれ。君の力は前より衰えていることを自覚して欲しい」

いらん心配だ。

この俺様を誰だと思ってる。

ヴェントは自分のやらかした失態と屈辱に憤りを感じながらも、ハリミアの攻撃を避けられないことが本能的に分かった。

この燃え盛る火の中では動けるスペースがあまりにも限られている。しかもハリミアのあの矢はその速度も去ることながら、自分の放った風をいとも簡単に打ち消す破壊力も持っている。

この限り無く狭い場所では、あの矢を回避することは不可能。

ヴェントの悔しさを映したような顔を見ながら、ハリミアはその手から矢を離れた。

ヴェントとハリミアの脳裏に敗北と勝利の2文字が浮かび、ハリミアの放った矢はその速度を維持しながら標的であるヴェントを貫いた。

に見えた、が…矢はヴェントを貫くことはなく、人間の手には見えないが、手の形をしたなにかに阻まれた。

「……!!」

驚愕の表情を浮かべたヴェントとハリミアの視界に、赤色のロングコートを羽織った人間の姿が映った。そしてその人物の右肩の部分からは炎の矢を掴んでいる手の根のようなものがあり、手は肩から浮き出るような状態になっていた。

ヴェント達の視線がその人物に集まる中、その人物の肩から浮き出る手が掴んでいる炎の矢を握り潰し、矢は形を失ない空气中に塵となって消えた。

「こつちに先に飛ばされてからどうしようかと思っていたが、着いた途端爆音と爆煙が俺の視界に入ってきて来てみれば、どうやら当たりだったか……」

矢を握り潰した手を肩から浮き出す人物『右方のフィアンマ』はハリミアを見ながらそう呟き、ヴェントはフィアンマの姿を見て、ハリミア以上に驚いていた。

第三次世界大戦の最中、サーシャ・クロイツェフを守っていたヴェントは、サーシャを狙ってやって来たフィアンマにやられ、その後、教皇のマタイ・リースから上条当麻同様にフィアンマも行方不明になっていることを聞いていたヴェントにとって、ここでのフィアンマとの再会は衝撃的なものだった。

しかも今、フィアンマは矢を止めた。有り大抵に考えれば、自分を助けたとしか考えられない。

それがヴェントにとっては信じられないことだった。そしてさらに、フィアンマの右腕の部分の服が風になびいてひらひらと揺らめいている。まるでそこに腕がないかのように。それを見てヴェントは、フィアンマの右腕が無くなっていることを察した。

「な、なんでデメエがここに、それにその右腕……」

そう呟いたヴェントの声に反応したのか、フィアンマは後ろを振り返り、

「勘違いするな。俺はただ”アイツ”に借りを返す為にここに来た”アイツ……?”」

「まあ、どうせ”アイツ”もここに来る。俺はそれまでの間に1人でも多く殺るだけだ」

そう言ったフィアンマはヴェントから顔を背け、自分を見ているハリミアの顔を見つめた。

「アンタ、もしかして「神の右席」の”右方のフィアンマ”って奴……だったら何だ」

「アンタもあたしの標的の1人ってことで、悪いけど殺すわね」

「奇遇だな。俺も貴様を殺……、いや、ここに来る前にあいつらか

ら極力殺さずに情報を聞き出せと言われてるから、半殺しにしてやる」

その瞬間、ハリミアはフィアンマに向けて矢を2発放った。だがフィアンマは避けることもなく、右腕のない肩から自分の力”第三の腕”を出し、矢を横殴りに払いのけた。その瞬間肩から出ていた”第三の腕”が粒子のようになって消えていった。

「ヴェント、邪魔だ。下がってろ」

フィアンマはヴェントの方に振り返ることもなくそう言うと、ハリミアは”レーヴァテインの武”を再び炎の鞭に変え、両手に持った2つの鞭をフィアンマに向けて振るった。鞭はまるでゴムのように伸び、フィアンマの元へと飛んで行った。

が、フィアンマは自分に向かってくる2つの炎の鞭をただじっと見つめていた。ハリミアがそれを見て不審な表情を浮かべた瞬間、フィアンマの姿がフツと消え、標的を失った鞭はアスファルトの地面を砕いた後、ハリミアの元に戻った。

（チッ！どうやって攻撃をかわした！？）

ハリミアの視線の先には、いつの間にか自分の背後に移動したフィアンマの姿があった。

ハリミアは鞭を剣に変化させ、フィアンマに向かって走り出した。「ほお、貴様も火の属性の魔術を行使するのか」

フィアンマの声を無視して、ハリミアは手にしている2つの炎の剣をフィアンマに振り降ろした。

”斬った！”と思ったハリミアだったが、ハリミアの剣は、”第三の腕”によって阻まれた。

しかし、それを見ていたヴェントはある異様なものを感じた。ヴェントの視線の先には、ハリミアの剣を受け止めているフィアンマの”第三の腕”があるが、それは今までヴェントが見てきた”第三の腕”とは全く違うものだった。

第三次世界大戦の時や、先ほどの”第三の腕”は明らかに右腕のない肩から出ていたが、今目にしているものはまるで右腕の代わりをしているかのようにフィアンマに付いていたのだ。

さらにその腕は、炎のようなものを出していて、その姿はまるでフィアンマの右腕が剣を受け止めているようだった。

「な、なによ、その腕!？」

それを見ていたハリミアも異様な右腕に不審な表情を浮かべていた。

フィアンマはその問いには答えず、ハリミアの剣を炎の出る腕で押し返した。それからフィアンマは自分の右腕を見て、閉じたり開いたりを繰り返し、まるで右腕の確認しているかのようなだった。

「奴”に右腕を切断されてから、弱まった力をどう補うかずっと考えていたが……、なるほど、この方法が一番だったか」

「……ッ！何なのよその気味の悪い腕は!!」

右腕を見ていたフィアンマは、気味の悪い腕と言って睨みつけているハリミアに視線を向けた。

「わずかに残った”神の右席”としての力と”人間用の魔術”を組み合わせで完成した力がこれだ」

「バカなッ！神の力と人間用魔術の組み合わせなんてできるわけが

!!」

「出来るさ。この俺を誰だと思っている。”右方のフィアンマ”だぞ。確かにこの術式は、天使としての属性は弱まるが、その代わりに天使の属性が弱まったことによってある程度の力を操れるようになった」

瞬間、フィアンマは右腕の手のひらを地面に叩きつけ、それに呼応するかのように地面から幾つもの火柱が天に向かって伸びていった。

そしてハリミアの立っている場所に、狙ったかのように火柱が地

面から突き出てきたが、ハリミアはそれを横に飛んで、すんでのところで避けたが、後ろに殺気を感じ振り返ると、ちょうどフィアンマが右腕で燃えている炎を手のひらに集め、それが徐々に剣の形を成していく瞬間だった。

「……ッ！！」

フィアンマの振り降ろした炎の剣と、ハリミアの炎の剣がぶつかり、火花を撒き散らした。フィアンマはそこで片足を軸に回転し、横殴りに炎剣を振るったがハリミアの2本の炎剣に邪魔され、フィアンマは前に体重を掛けて徐々に力で押して行った。

「……う、くうッ！！」

フィアンマの攻撃に、ハリミアは苦しそうに声を上げた。フィアンマは片手で剣を振るっているにも関わらず、2本の剣で受け止めているハリミアを徐々に押している。力押しならば、”第三の腕”の力が働いており、いくらハリミアと言えどこの力を押し返すのは至難の技だ。だが、ハリミアの片腕はヴェントの攻撃によってダメージを負っており、あまり力を入れる事が出来ない。

「ふん、その程度か」

ハリミアの耳にフィアンマの落胆のような声が届きハリミアは沸き上がってくる怒りを抑えながら、早くこの状態をどうにかしなければと考えていたが、次の瞬間、ハリミアの目にフィアンマの左手に炎が球体の形で集まっていくなが見えた。

（……ッ！しまった！！）

その時、両腕に掛かっていた力がフツと抜けた。フィアンマがバツクステップでハリミアから距離を取ったのだ。そしてフィアンマの左手に集まっていた炎の球体が、突然自分に掛かっていた力が抜けたせいで前屈みに体勢を崩したハリミアに放たれた。

ボオオオオッ！！という音と共にハリミアのいた場所が炎に包ま

れた。

フィアンマはそれをじつと見つめていたが、突然右腕がピキツという音と共に形を崩し腕だった残骸が塵となって空気中に消えていった。

「……チツ…天使の属性が弱まったことによって多少操れるようになったが、やはり長時間腕を保つのは無理か……」

フィアンマが無くなった右腕を見ながらそう呟いていると、フィアンマの炎によって巻き上がった煙の中から、チラツと炎が見え、フィアンマがそちらに目をやった瞬間、ブオオオオッ！という音と共に莫大な炎が舞い上がり、辺り一帯を照らした。炎と共に莫大な風が生まれ、それがフィアンマと戦いをずっと見ていたヴェントに襲いかかった。

フィアンマはそんな風を気にすることなく、炎の巻き上がった場所をじつと見つめていると、体に火傷を負ったハリミアが姿を見せた。

ハリミアは体のあちこちが黒く汚れていて、彼女の着ている白いコートはもはや見る影もなかった。

ハア、ハア、と息継ぎをするハリミアの目には明確なフィアンマへの殺意が見てとれた。ハリミアは胸の前で両手のひらで円を描いたようにすると、そこに炎の球体が発生した。

発生した球体を、ハリミアは片手で鷲掴みにした時、球体は再び剣に形をとった。

が、先ほどの剣とは明らかに違う部分があった。

剣から出る炎の質量が明らかに先ほど剣とは段違いに多かったのだ。

「あたしは負けられない。こんなところで負けてたら、あたし達の目的は達成できない！！」

「……………」

「だからアンタはどうやっても倒す！あたし達の長年の目的の為にッ……ッ！」

ハリミアの言葉には強い覚悟が混じっていた。

自分を睨みつけるハリミアを見たフィアンマの右腕に再び腕が現れ、ハリミアの剣と同じように右腕から出る炎の質量が上がった。

「貴様の目的が何であろうが、俺は負ける訳にはいかない」

「なら…あたしを倒してみろオッ……ッ！」

2人は同時に走り出し、お互いの力がぶつかった瞬間、今までよりもさらに莫大な炎の火柱が天に舞い上がって行った。

やがて2人の激突した場所の煙が晴れていき、そこには1人の人間が倒れ、もう1人の人間は立った状態で、その人間を見下ろしていた。

次の瞬間、立っている人間からピキッという音と同時に、1つの戦いがその幕を閉じた。

第八章 新たな局面へ（前書き）

この話から当麻の呼び方が上条になっています。
ご了承ください。

ではどうぞ。

ご覧下さい！！

第八章 新たな局面へ

行間・6

「ハリミアの発信が消えたか……どうやら敗れたらしいな……」

オルシユアは『ローマの七丘』の1つ、カンピドリオにいた。『神判の日』の発動の為に必要な7つの丘に配置される人間で、オルシユアがカンピドリオの配置なのだ。

だが、オルシユアはハリミアや他の配置の人間の発信が消えても、臆することなく自分の配置のところに立っていた。

ハリミア達の発信が消えたことで、術式発動に必要な存在が欠けてしまった時点で、この術式を発動不可能になってしまったのだ。

だが彼にはある秘策があったのだ。

オルシユアには、この魔術をどうしても発動させたい強い思いがあるのだ。

自分と妹であるハリミアが長年思い続けてきた目的の為に、彼はこんなところでつまづいてはいられない。

（ハリミアの思いを、無駄にする訳にはいかない……）

オルシユアは目的の為に、行動を起こそうと体を動かした。

目的を達成する魔術を発動する為に。

ではなく、“目的の達成”。それを邪魔する者を排除する為に。

彼は気づいていたのだ。自分に近づいてくる者の存在を、そしてその者は自分の目的を阻害する為に来たのだと、ハリミアがやられた今、彼には本能的に分かっていたのだ。

オルシユアの耳に、背後からこちらに向かって歩いてくる足音が

響いた。そしてその足音は、オルシユアの手前で立ち止まった。
オルシユアは自分の元にやってきた、” 目的を邪魔する者 ” の方に視線を移し、問い掛けた。

「何者だ……？」

20

「終わったのか……」

ハリミアとフィアンマの戦いの幕が降り、その戦いをずっと見ていたヴェントは、この戦いの勝者、フィアンマの側に近寄り話し掛けた。フィアンマは無くなった右腕の部分を見つめており、ヴェントの呟きを聞いていなかったらしく、フィアンマは懷から小さな紙を取りだしてそれを耳に当て、喋り始めた。

「聞こえるかオツレルス」

『ああよく聞こえるよ』

「とりあえず敵の主力らしい奴を1人片付けた。おまえらは今どこにいる？」

『もう片付けたのかい？』

さすがと言っておくよ。それでこっちはもう到着した。今は別れて” 七丘 ” に配置されている人達を倒しているところさ。フィアンマ、君は” パラティーノ ” に向かってくれ。場所は分かるだろ、君なら』

「…分かった。” アイツ ” はどこに向かったんだ？」

『ああ、彼かい？彼は”カンピドリオ”に向かったよ』

「何者だ……？」

オルシユアは自分の元に来た人物に話し掛けたが、その人物の顔を見て、少し驚いたような顔をしていた。なぜならその人物は、今世界中で行方を捜されている有名な人間だったからだ。

その有名な人間、上条当麻はオルシユアの問いに真剣な顔つきで答えた。

「ただの無能力者さ」

「無能力者？」

「ああ」

「にしても、こんなところで、戦争を止めた有名な人物に会うとは、光栄だな」

「俺は有名じゃないぞ？」

「有名さ。君は今世界で一番有名な人物だよ。で、その人物がこんなところに何の用だい？」

上条はその瞬間、オルシユアの出す雰囲気が変わったのを感じた。自分がここにきた目的を、この男は頭の中で理解していると上条は悟った。今自分の目の前に立っている男は、自分の口からここに来た目的を語られるのを待っているのだと。

そして上条は自分の拳を握りしめ、オルシユアに自分の目的を告げた。

「おまえらの計画を潰しに来た」

その瞬間、オルシユアから眩い光が発生し、それは不規則な動きをしながら上条に向かって放たれてきた。上条は自分の手元までそ

れを引き寄せ自分に当たる直前に右手を突きだし光を打ち消した。

上条はそれからオルシユアに視線を向けたが、そこには既にオルシユアの姿はなく、その瞬間上条の真上からバチバチツ！という音がし、上条は前方に転がるように飛んだ瞬間、上条の立っていた場所が光の直撃を受け、地面のアスファルトは砕けていた。

次に上条の視界の端から先ほどと同じような光の線が2本同時に上条に襲いかかり、2本同時に打ち消せないと思った上条は、体を地面に伏せ攻撃を回避した。

「ほお、さすがだな。上条当麻。俺の攻撃を回避し続けるとは」

体を起こそうと考えた上条の耳に、背後から自分を呼ぶ声が聞こえ、そちらを振り返ると、細長い剣を持ったオルシユアが伏せている自分目掛けて切っ先を突きだそうとしていた。

上条は咄嗟に地面を転がりにオルシユアの剣を回避し、標的の居なくなつた剣はアスファルトに突き刺さっていた。

地面を転がりながら、手をついて体勢を立て直した上条を追撃するかのようにオルシユアは剣をアスファルトから抜き、そこから横に一閃すると、まるで空間が裂けたかのようにそこから光の線が幾つも飛び出し、上条目掛けて飛んでいった。

「……ッ！くっそオツ！！」

上条は自分に向かつてくる光を避けようとせず、それどころか前に飛び出して走り始めた。

オルシユアはそんな上条を見て不審そうに見ていたが、上条は不規則に動く光の線の自分に近づいてもものだけを的確に右手を振るって打ち消し、それ以外のものは足を使って避けて行き、全ての攻撃を回避した上条はオルシユアの手前まで接近した。

が、オルシユアは上条の接近に微動だにせず、先ほどのように剣を地面に突き立てた。その瞬間、突き立てた場所から光が溢れ出し

オルシユアと上条の前に一瞬壁を作った。

上条はそれを右手を出して消し、再びオルシユアに接近しようとしたが既に上条の視界にオルシユアの姿はなかった。

（くそッ！どこにッ！？）

そう考えた瞬間、上条は背後に人の気配を感じた。首だけを動かしてみると、オルシユアが片足をあげていくのが見えた。

次の瞬間、オルシユアの蹴りが上条の横腹に入り、上条は横向きにふっ飛ばされ地面に倒れた。

「ぐッ…ガハアッ！！」 倒れた上条は片手を蹴りが入った横腹を抑えながら、もう一方の手を地面について起きあがった。

（くそッ…やっぱり病み上がりの体に”聖人”の蹴りは堪えるな…）

上条は今こうやって戦えているにしても、実際上条はまだ病み上がりなのだ、そこまでの強い攻撃に耐えられるわけではない。

しかも、それが上条の知る神裂やアツクア、シルビアと同じ”聖人”の攻撃なら尚更耐えられない。

普通の魔術師と聖人では身体能力があまりにも違いすぎるからだ。

しかもオルシユアは神裂と同じく刀を使っている。魔術によって作られた剣ならば上条の右手で打ち消すことが出来るが、オルシユアの剣はどう見ても鉄で造られたものだ。

霊装としての力を消すことは出来るが、魔術の關係ない鉄の剣では上条の右手はなんの効果もない。右手を出したところで切断されて終わりだ。

接近してもオルシユアには刀があるから、上条はそれを回避しな

がら倒すしか術はない。^{すべ}

しかもオルシユアは”聖人”としての力も持っているので、身体能力も半端なものではない。

上条にとってオルシユアは、あまり得意ではないタイプの魔術師なのだ。

「さすがだ。戦争を止めたただけの実力はあるようだな」

「そりゃどうも」

「だが、逃げてばかりじゃ俺には勝てない」

オルシユアは剣を天に向かってかかげた。

「闇に閉ざされし世の理。その理を照らし、汝を導く光と成せ」瞬間、オルシユアの真上の空が曇りをなしていき、雷雲と思わしきものから一筋の雷が現れ、オルシユアのかかげている剣に直撃した。

直撃した雷はそのまま剣に取り付いたように剣に留まり、オルシユアがその状態で剣を上条に向かって切っ先を向けると、切っ先に蓄電していた雷が飛ぶ斬撃となって上条に襲いかかった。

「おおオオオッ！！」

上条はその雷の斬撃の軌道を読み、右手を突きだした。

その瞬間音を立てて消えて行った雷に続く形でオルシユアは剣を振り回し、3つの雷の斬撃が上条を襲った。上条はいち早く向かってきた2つの雷を右手で打ち消し、遅れてやってきた1つの斬撃を体を逸らして回避し、上条の横を突き抜けて行った後、上条はオルシユアの宣言通り、逃げることはせずにオルシユアに向かって突進して行った。

オルシユアは向かって来る上条に対し、上条が走ってくるであろう場所に斬撃を飛ばした。

斬撃の飛んだ場所は爆風と共にアスファルトが砕けたことにより発生した煙に包まれ、上条が走る速度を遅めた瞬間、煙の中から斬

撃が突如出現し、いきなりすることに反応が遅れた上条は右手で防ぐことはせず、横に転がることで斬撃を回避したが、煙から晴れた場所からオルシユアを確認した上条の目に、オルシユアが地面目掛けてその雷の剣を振るっているのが見えた。

すると、まるで雷が地面を波のよう伝い上条に襲いかかった。

上条は膝を地面についた状態で襲いかかってきた雷を打ち消し、打ち消したと同時に足を震い立たせオルシユアに再び接近して行った。

するとオルシユアもそんな上条に対抗するように自らも上条に向かって走り出した。

上条は向かって来たオルシユア目掛けて握りしめた右手を突きだした。

しかしオルシユアはそれを横に足を動かして避け、右手を突きだしたことによってがら空きになった上条のみぞに膝蹴りを入れた。追撃に上条の背中を肘鉄を入れようと剣を持っていない左腕を顔と同じくらいの高さまで上げたが、オルシユアは自分の膝に違和感を感じた。

上条はオルシユアの膝蹴りをみぞのギリギリのところまで左手で止めていた。

膝を抑えた上条は空いている右腕を使い、オルシユアと同じように肘鉄をオルシユアの腹におみまいした。

「ぐふうッ!!」

腹に肘鉄を喰らって体内の酸素を一気に吐き出し、若干力が抜けたオルシユアの間隙について、上条は続いて左手を握りしめてオルシユアの顔面にストレートのパンチを喰らわせた。

パンチを喰らって後ろに傾いたオルシユアは、殴られたことによって強制的に横を向いた顔の目だけを上条に向け、右手に持った剣を自分を殴った左手目掛けて振り上げた。

「…いッ!!」

上条は自分の左腕に目を向けると、左腕が斜めに切られていて、血がポタポタと指先から地面に垂れていた。

オルシユアは後ろに傾いたものの、地面に倒れることはなく、片足を支えにして持ち堪えていた。

どうやら口の中が切れたらしく、唇から血が少し溢れていた。オルシユアは口の中に溜まった血をぺっと吐き出してから、今までとは違った目で上条を見つめた。

顔面にパンチを喰らったことがよほど許せないらしく、オルシユアからわずかに怒りのオーラが滲み出ていた。

「やってくれたな上条当麻。まさか俺が一撃を喰らうとは」

「そうかい。じゃあ後2、3発ぶちこんで楽にしてやるよ」

「ほざけ…」

オルシユアはそう呟くと、“聖人”の持ち合わせる身体能力を発揮し、恐るべき速さで上条へと向かって行った。

（……ッ！速いッ!!）

上条の反応速度がまるで追いつかず、オルシユアはあっさりと上条の懐まで接近していた。

「お返しだッ!!」

オルシユアは先ほど上条がやったように自分の左手で上条の顔面にパンチを入れた。

（……がつ!!……あ……）

オルシユアのパンチを受けた上条は、その異常な筋力によって少し脳震盪と起こした。

それを見てオルシユアはさらに上条のみぞおちに渾身の蹴りを入れ、上条を地面に叩きつけた。

地面に仰向けに叩きつけられた上条を狙って、オルシユアは剣を

両手で持ち、地面ごと串刺しにしようと大きく振り上げた。

「死ねッ!!」

オルシユアは剣を思い切り振り降ろし、上条の串刺しを狙ったが、上条はすんでのところで横に転がって回避した。

転がって回避した上条目掛けて、オルシユアは雷の斬撃を飛ばした。上条は転がる速度を上げてギリギリのところまで斬撃を避け、転がる力を使って先ほどよりも素早く起きあがった。

「チツ…いい加減うんざりしてきたぞ上条当麻」

「だったら、戦うのを止めて帰ればいいじゃねえか」

「ふざけるな、俺はこんなところで負ける訳にも、帰る訳にもいかない。こうなったらもういい。このローマの消滅と共にお前の存在も消してやる」

オルシユアはそう言うのと、突然自分の着ていた上半身の服を脱いだ。

オルシユアの上半身の素肌にはここに来る前に会った男の肌に描かれていたものと酷似していた。

だがおかしい。と上条は感じていた。

「何するつもりだ？」

てめえらの目的の『神判の日』とやらは、何人かの人間が必要じゃなかったのか？」

そう、『神判の日』は複数の人間による同時展開の大魔術なのだ。だが上条達の活躍によって、その内の何人かを行動不能にしたのだ。実際今もフィアンマやオッレルスによって残りの人間を排除している最中であり、現時点で『神判の日』は発動不可能になっているはずなのだ。

だが、オルシユアはそれを嘲るように笑い、

「ふん、確かにその通りだ。『神判の日』は複数の人間によって発動するが、ハリミアの発信が消えた今、それも不可能になった」

”だが…”と言ったオルシユアは、再び剣を天に掲げた。

すると先ほどのようにオルシユアの真上に黒雲が渦を巻きながら出現した。

「それは”正規”の方法で発動した場合だ」

「正規…？」

「『神判の日』は元々、神話に登場する”ユーピテル”を讃える魔術だ。ユーピテルは神話では”天空神”と呼ばれ、天空を支配する神、特に雷を操る神と呼ばれている」

その瞬間、渦を巻いた黒雲から先ほどとは比べものにならないほどの雷がオルシユアに落ちていった。

だが、先ほどとは違い、雷は掲げられた剣には留まらず、オルシユア本人に当たった。

「う、うおおおおオオオオオオオオツ！！！」

「お、おい！！」

雷の直撃を受けて叫び声を上げたオルシユアを心配そうに見つめていた上条だったが、直撃を受けたにも関わらずオルシユアの意識はあり、体から煙を出していた。

しかし次の瞬間、煙を出しているオルシユアに刻まれた術式が突然赤く光り出した。

「な、何だ一体…？」

上条は今自分の目の前で起こったことに理解出来ず、あまりのことにオルシユアから一歩後退ってしまった。

依然として赤く光る術式を刻んでいるオルシユアは次の瞬間に剣を横に振り、再び上条に向かって雷の斬撃を飛ばしたが、その雷の

質量が明らかに雷を直撃する以前とは段違いに大きくなっていた。

上条はすぐさま右手を出して打ち消したが、先ほどよりも長く時間がかった。質量の大きな変化によって”幻想殺し”の働く時間が長くなってしまったのだ。それはつまり、一度に複数の斬撃を飛ばされた場合、1つ目を打ち消している最中に2つ目が押し寄せてしまうというわけだ。

「……ッ！お前、一体何をするつもりだ！？」

「決まっているだろう。お前を殺し、この街を滅ぼすだけだアッ！」
オルシユアは剣を振り回し、2つの巨大な雷の斬撃を放った。

「……ッ！！」

上条は襲ってきた斬撃の1つを右手で受け止めた。が、受け止めている内に2つ目の斬撃が上条に向かって来たが、上条は受け止めていた斬撃を右手で掴むように握り、向かってきた2つ目の斬撃と衝突させる為に斬撃を右手の腕力だけで動かした。

瞬間、2つの斬撃がぶつかり生まれた爆風によって上条は少し飛ばされてしまい、爆煙が上条の視界を覆う中、その煙の一部から雷が線のように複数飛び出し、上条を襲ってきた。

その雷は今まで斬撃とはスピードがまったく違い上条は横に飛んで回避しようと試みたが、反応が遅れ、1つの雷が上条の背中を抉った。

「……あッ……があッ！！」

服ごと抉られた上条の背中から大量に血が出た。

前から地面に倒れた上条は、背中 of 激痛に堪えながらなんとか体を起こした。体を起こした上条の耳に徐々に煙が晴れたことで姿を確認出来たオルシユアの声が聞こえた。

「もうすぐだ。」

もうすぐこのローマは守護神の裁きによって無に帰る。まさしく『神判の日』だ」

「……ッ……くそッ……」

「お前には俺と一緒に死んでもらうぞ」

「……？一緒に、だと？」

「そうだ。こうなったら」

『神判の日』を俺1人で発動させる。その発動の代価として俺も死に、俺はこの街の魔術師達を道連れに死んでやるんだ」

オルシユアのその言葉を聞き、上条は齒をくいしばった。

「……ッ、何で……」

「………？」

「何でそんなことをする！？自分を犠牲にしてまで、何でそこまでこの街を破滅させようとする！？」

上条の怒りの声を聞いたオルシユアは何か思いつめたように目を瞑ったが、すぐにまた目を開け、上条にまっすぐな視線をぶつけた。

「……俺の父親は、ローマ正教の者の手によって殺された」

「……！！」

「俺の父親は少ばかり名の知れた魔術師だった。」

だがある時、父は科学の道に手を出した。それを知ったローマ正教の魔術師は、父を肅清したんだ」

オルシユアの言葉が響く中、オルシユアに刻まれた術式が赤く点滅を繰り返し、まるで鼓動しているようだった。

「確かに父は魔術師でありながら科学に手を出した。それには俺も少し憤りがある。だが、そんな父でも俺と妹にとっては大切な父親だった！！」

母親のいない俺達を1人、育ててくれた大切な肉親を殺され、俺は妹と2人で生きてきた。

そんな中、俺達は最近になって”奴”の噂を耳にした」

「……奴？」

「その噂を聞いた瞬間、俺達の中に父親を殺された時の強い憎しみがぶり返してきた。だからこそ俺達はこのローマ正教への復讐を決意したッ！！」

そしてローマが終わった後は”奴”を殺る！科学に手を出した魔術師のくせに、父親と違って、1人のうのと生き延びている”奴”をオッ！！」

「………」

「……だがもういい。」

こうなった以上、俺はこの街と共に死ぬ。”奴”のことは”あいつら”に任せておく」

そう言ったオルシユアはまるで戦う気力を無くしたように腕から力を抜いた。だが、そんなオルシユアの姿を見て、さらに上条は歯をくいしばり、両手に力を込めて握りしめた。

「ふざけんなよ……」

上条はオルシユアの悟ったような目を睨みつけながら、

「ふざけんじゃねえ！」

何が魔術師を道連れに死んでやるだ！この街には普通に暮らしている一般人が沢山いるだろうが！

何の関係もない人達を殺して、お前はそれで満足なのかよ！！」

「………」

「もし父親が、自分のせいでお前達が死んだって知ったらどう思う！？お前らの父親は死なせる為にお前らを育ててきたんじゃないか！お前らに笑って生きていつてほしいからだろ！？」

「うるせえ……」

「それなのに、こんなところでその命を捨てちまうつもりか！てめえは！！」

次の瞬間、上条の言葉を聞いていたオルシユアは突然その目に強い怒りを表しながら上条を睨んだ。

「うるせえって言ってんだろーが！！」

お前に何が分かる！？

家族を失った俺達の気持ちがお前に分かるっていうのか！！」

「分かるさ…家族は失ったことはない。でも俺はそれと同じくらい大切なものを失った……」

そう言った上条の目は、強い悲しみの色を帯びていた。

生まれてから今年の夏までの、自分の記憶。

それまでの自分を形作っていた記憶を失い、一度上条当麻という人間は死んだ。

だが、

「だけど今の俺には、失った時間を取り戻していく時間がある。生きていく限りな。」

それなのにてめえは、その時間を自分で終わらせるつもりか！！」

「お前の失ったものがなんだろうが俺の知ったこっちゃねえ。なんと言われようが俺の意志は変わらねえ」

その時、オルシユアに刻まれた術式が今までよりも輝きを増して赤く光り出した。

眩いばかりの光を放つその術式を刻んだオルシユアは両腕を広げ、笑みを浮かべた。

「どうやら時が来たようだ。俺の死と共にまもなく全てが終わる」
「終わらせない。」

このままじゃこの街にいる人が全員死んじまう。
それにてめえも死なせるつもりもねえ。

でもその前に、てめえのその歪んだ考えと幻想をぶち壊してやる！
」

右手をオルシユアに突きだした上条を見たオルシユア本人は、雷の力を剣に集中させ、オルシユアは上条を睨みつけながら眩い光を放っている剣を構えた

「やってみろ！

ここで死ね！！上条当麻アツ！！」

その瞬間、剣に留まっていた雷の力が球体のように膨れあがり、オルシユアがその剣を振るつたと同時に雷の球体が上条目掛けて飛んで行った。

上条は逃げることなど考えずに球体に向かって駆け出し、その幻想を壊す右手を球体に突きだした。

「うおおおおおおおおおおおッ！！！！」

上条の出した右手に当たった球体は、その莫大な質量によって簡単には消えず、逆にその質量によって右手のほうが限界間近に迫っていた。

右手はその質量によって指の何本かが折れるほどに曲がっていたが、上条はその苦痛に堪えながら球体を受け止めていた。

（……ぐッ！…がッ、ぐウッ！、負けられない！！）

上条は負けるわけにはいかなかった。ここで負けたらこの街の人々や、オッレルスやフィアンマ達、そしてオルシユアや自分も死んでしまう。

そして上条にはもう一つ、負けられない理由があった。

（ここで負けたら、インデックスや皆に謝れないじゃねえか！！）

「ぐ、うおおおおオオオオおおおおおッ!!」

上条は自らの力の全てを自分の右手に注ぎ込んだ。その瞬間、雷の球体はまるで空気のように消えていき、上条はそんなことはお構い無しにオルシユアに向かって駆け出した。

「……なッ!!」

球体を打ち消した上条を見てオルシユアは驚愕の表情を浮かべた。いくら上条当麻と言えど、この質量の攻撃は打ち消すことはできない。

オルシユアは最後の最後に”上条当麻”という存在を軽視したのだ。

そしてその報いと言わんばかりに、次の瞬間、オルシユアの顔面に上条の右手の拳が炸裂した。

地面に仰向けに倒れたオルシユアはそのまま気を失ない、それと同様にオルシユアに刻まれた術式が、パアアン!と拡散するようにオルシユアの体から離れ、空気中に塵となって消えていった。

それをハア、ハアと肩で息継ぎをしながら見ていた上条は、突然足がカクンとして力が抜け、地面に片膝をついてしまった。

病み上がりの状態で戦っていたせいで、やはり体力もかなり底に近かった。

それに今も切られた左腕から血が溢れ肘から地面に落ち、背中 of 傷からも血が出ていた。

「終わったか…」

すると、どこからか聞き覚えのある声がし、上条がそちらを見てみると、そこにいたのは途中で別れたフィアンマと、第三次世界大戦の時に再び顔を合わせたヴェントだった。

ヴェントは上条を見て目を丸くしていた。

何せ上条は今自分の上司であるローマ教皇が捜している人物だ。

しかも戦争の時に対決したはずのフィアンマと親しそうにしていることにも驚いていた。

フィアンマはそんなヴェントを気にせずに上条の横に倒れているオルシユアに目を向けた。

「こいつがオルシユアって奴か？」

「え？ああ、そうなのか？」

「お前、名前も知らずに戦ってたのか？」

「……恥ずかしながら」

”ハッ…”と呆れたような声を出したフィアンマは、気持ちを切り替えて、上条に言い放った。

「こいつの妹って奴から話を聞き出した。上条、今すぐ”イギリス”に向かうぞ」

「……………は？」

上条の荒い息はこの瞬間収まった。

第八章 新たな局面へ（後書き）

ここからこの話は後半戦に突入します！。

ご期待ください！！

第九章 英国に渡る悪意（前書き）

この章から

イギリス編に突入します！

どうか最後まで応援よろしくお願いします！！

第九章 英国に渡る悪意

1

上条はフィアンマの言った言葉の意味を理解出来ず、地面に片膝をついて口を開けたまま動きが止まっていた。

「おい、聞いてんのか上条？」

「え、ええ」と……もう一度言ってくれませんか？」

フィアンマは上条の態度にため息をつきながら、上条のその要望に応えた。

「今から”イギリス”に行くって言ってるんだよ」

「今から”って……、何でそんなまた急に……」

上条にしてみれば、イギリスには知り合いが沢山いるのであまり拒否する理由はない。

だが、フィアンマの口振りから察するに、フィアンマも上条と一緒にに行くように聞こえた。

フィアンマにとってイギリスに行くことは、たとえ戦争が終わった今となってもあまり気分の良いものではないと上条は思っていた。結果はどうであれ、フィアンマは第三次世界大戦の黒幕としての認識が人々の中に強く残っている。

そんな人物が急にイギリスにやってきたら、イギリス清教の人間達がどういう対応をしてくるのかと、上条は少し不安に駆られていた。

だが、

そんな不安を打ち消すかのように、

「俺はお前の言っていた”世界”というものを見てみたい。だがその前に、お前に借りを返すのが先だ」

フィアンマにとって、”世界”というものはどんなものであるのか。

そんな考えを自身に突きつけてきた上条に対する、フィアンマの精一杯の恩返し。

しかし、上条にしてみれば、あの『右方のフィアンマ』が誰かに対して恩返しをしようとしていることに驚きを隠せなかった。

ベツレヘムの星で相対したフィアンマとは明らかに違っていただ。

上条はそんなフィアンマの変化に驚きと嬉しさの感情を滲ませながら、フィアンマの真っ直ぐな瞳を見つめた。

そこには、”絶対についていく”というかのように瞳を輝かせたフィアンマの姿があった。

そんな姿を見て少し口元を緩めながら上条はフィアンマに話し掛けた。

「つーか、イギリスに行つてどうするんだよ？お前何かやりたいこととかあんのか？」

「ある。上条、お前は疑問には思わなかったか？」
「……え？……何が？」

フィアンマは少し顔を険しくしながら、

「この街に魔術師が腐るほどいることは確かだ。だが、今ここには”あの老人”がいない」

「あの老人？」
「ローマ教皇のマタイ・リースだ」

「ああ俺を捜してくれてるっていうあの……って、何で教皇がこの街に居ないんだ？」

上条が問うと、フィアンマは自分の右隣にいるヴェントに視線を向け、その視線を追った上条に、ヴェントは今まで閉じていた口を開いた。

「教皇はイギリスに行っちまったのさ」

「ローマ教皇がどうしてイギリスに？」

「イギリス清教の最大主教のローラースチュワートによって招集の通知が来て向こうでトップによる会議が開かれることになったのさ。そんでトップである教皇自らイギリスに行ったのさ。アタシにこんな雑用押し付けてね」

”まったくもうすぐ教皇を辞めるっつーのに”と愚痴をこぼすヴェントを見ていた上条に、一緒にヴェントの話を聞いていたフィアンマが、

「で、俺が疑問に思ったのは、こいつらはローマを滅ぼそうとしてたんだよな？」

倒れているオルシユアを見ながら言葉を続けるフィアンマに、上

条は”ああ”と言って肯定すると、

「なら、おかしいと思わないか？」

「……おかしいって……あつ……」

そこで上条はあることに気づいた。

オルシユアは本当にこのローマを恨んでいた。

なら、ローマ教皇もその対象の筈だ。だが今そのローマ教皇はこの街にはいない。

上条が考えにふけっているとそこにフィアンマが、

「こいつらがローマを滅ぼそうとしてんなら、何で教皇のいない今を狙った。」

こいつらが教皇の不在の情報を察知していないとは思えん。なら話は簡単だ。

このローマ壊滅は、こいつらの目的の一部に過ぎない」

「目的の一部……」

そこで上条はオルシユアの発言の1つが頭の中で再生された。

『 ” 奴 ” のことはあいつらに任せておく 』

（ ” 奴 ” …… ? 奴って一体誰だ ? ）

オルシユアの言っていた ” 奴 ” と ” あいつら ” という言葉に上条は頭を悩ませた。オルシユアの目的がここだけじゃなく、他にあったとするなら何故オルシユアはローマ教皇のいない今を狙ったのか。ローマ壊滅はもしかすると、その別の目的から魔術師達の注意を逸らす為のものだったんじゃないだろうか。

つまり囹。

そしてオルシユア自身もその為の囹だったのではないだろうか。だとすると、それを仕組んだ誰かが存在する筈だ。その誰かは、オルシユアにローマ教皇の不在という情報を隠し、オルシユアにまんまと計画を実行させた。オルシユアのローマ正教を恨む心を利用して。

だが、一体誰だ ?

オルシユアの口にしていた ” あいつら ” という奴らだろうか。

だとしたら、そいつらの目的はまだ完遂されていない。今ならまだ間に合うかもしれない。

上条は未だに癒えていない傷を抱えながらゆっくりと立ち上がった。

「フィアンマ……」

「何だ？」

「別の目的って言うのは、具体的な内容は分かってんのか？」

「いや、そこまでは知らんが、俺達が行く場所は分かってる。それが……」

「イギリスか……」

「ああ、そういうことだ」

”そうか……” と言って呟く上条の目に再び闘志が上がるのをフィアンマは見た。

「イギリスに行く前に、お前のその怪我をどうにかしろ。そんなことでイギリスに行っても役に立たないぞ」

「わ、分かってるよ。」

でも、俺回復魔術とか効かないぜ。この”右腕”があるから」

右腕を掲げながら喋る上条を見ていたフィアンマは呆れたような顔をして、持っていた通信用の霊装を耳に当てた。

「オツレルス、聞こえるか？」

『ああ、聞こえるよ。』

君は今どこにいるんだい？』

「上条と一緒に”カンピドリオ”にいる。すぐにこっちへ来い。」

それと、シルビアは回復魔術じゃなく一般人の使う医療は使えるか？』

『うーん、彼女なら多分使えると思うよ。じゃあ今すぐそっちに向かう』

「ああ、分かった……」

そう言って通信を切ったフィアンマは上条の方に視線を向けた。
「もうすぐオツレルス達が来る。それまでそこに座ってる。お前の

傷が治った後、ローマに來た時のようにオッレルスの魔術ですぐにイギリスに向かう。早ければ1日でイギリスにつけるだろ」

「ああ、分かった。

じゃあすぐに治さないと」

上条はそう言つて空を見上げ遙か向こうにあるイギリスの方角に顔を向けた。今からイギリスに行つてオルシュアの言う”あいつらの目的を阻止するにしても、イギリスには知り合いがいる。目的を阻止したら皆に顔を見せに行こう。心配してくれている人もいるかもしれない。

それにもかしたたら、俺という管理人が居なくなつたという理由で、イギリスに残っている”あいつ”がいるかもしれない。

その時は真つ先に頭を下げ謝ろう。

そして一緒に学園都市に帰るんだ。

上条は考えを巡らせながら、オルシュアによって発生した黒雲が消えたことで再び現れたどこまでも青く広がる空を仰ぎ見ていた。

2

眠れない。

学園都市第一位の能力者の一方通行が心の中で呟いた言葉を主張するかのように、眠れない原因を作っている2人の声が一方通行の耳に響いた。

「だからミサカは大丈夫だって言ってるでしょ！ってミサカはミサカはあまりのわからず屋の態度に憤慨してみる！！」

「何度言ってもダメだね。もし打ち止めが居なくなったら、あの寝坊助さんに血祭りにされるのはミサカだし」

「大丈夫！。

ミサカは見た目より大人だから迷子になったりしないもん！て、ミサカはミサカは胸を張って高飛車に宣言してみる！！」

「そのどっかの推理漫画で見たような設定はスルーするとして、ミサカから見れば打ち止めはまだまだケツの青いガキだね」

「ううゝ、ミサカより胸も身長も大きいからって、調子に乗らないで欲しい！

て、ミサカはミサカはその脂肪の塊を指さしながら頭の上に？マークを浮かばせてみたり！！」

「だって大きいのは事実だし」

ミサカワースト

番外個体のあつさりとした対応に”むきイイいいい！！”と言って地団駄を踏む打ち止め（ラストオーダー）の言い合いに、いい加減我慢の限界が来た一方通行はソファーに倒していた身体を起こし、打ち止めと番外個体を睨みつけた。

「うっせエンだよオ！！」

てめエらア少しは静かに過ごす気はねエのか！？」

「だって番外個体がミサカを外に出してくれないんだもん！って、ミサカはミサカは全ての責任を番外個体に擦り付けてみたり！！」

「人のせいにするは子供ものすることだとおもうよ」「だからミサカは子供じゃない！って、ミサカはミサカは力強く言い放ってみる！！」

「だからうるせエツて言ッてンだろ！！」

それから1時間がたち、結局打ち止めは外に出ることが出来ず、拗ねるように一方通行の寝そべっているソファーに顔を付けてうずくまっていた。

その一方通行は突然自分にのし掛かって来た打ち止めを降ろそうと試みたが、打ち止めはガンとして動かず、既に諦めのついた一方通行は上に乗っかっている打ち止めを気にせず眠りにつくことにした。

しかし実のところ、打ち止めは一方通行の上に乗っかっていることが楽しく、今も顔を隠しているが、実はかなり機嫌がいい。

一方の番外個体は買い物に行くと言って少し前にこの部屋を出て行った。

部屋に残っている一方通行と打ち止めはしばし静かな時間を過ごしていたのだが、突然打ち止めが伏せていた顔をガバッ！と上げたかと思いきや、一方通行の顔に接近して喋り始めた。

「ねえ？一方通行。外に出ちゃダメ？って、ミサカはミサカは可愛いげな雰囲気であなたに頼み込んでみる」

「あア？ふざけんな。」

また迷子になったお前を捜すのが面倒なんだよクソガキ」

「ミサカは迷子になったりなんかしないもって、ミサカはミサカはあなたの過保護っぷりに嬉しさを覚えつつ、ちよつと不貞腐れてみたり」

「つーか、何でそんなに外に出てエンだよ。何をするつもりだア？」
一方通行の問いに、打ち止めは少し躊躇ったように口を閉じたが、

言いにくそうしながらも一方通行に話し始めた。

「お姉さまにね、会いたいんだって、ミサ力はミサ力は正直に告白してみる」

打ち止めのお姉さま。

つまり、全ての妹の生みの親である、常磐台の超電磁砲・御坂美琴だ。
シスターズ

それを聞いて一方通行は何も言わずに黙り込んだ。一方通行は、打ち止めの親でもある御坂美琴とは、あの無能力者に負けてから一度も顔を会わせていない。

いや、どんな顔をして会えばいいのか分からない。向こうからしてみれば、自分は妹達を殺した人間であり、一方通行はそれを御坂に許してもらおうなどとは思っていない。

それ以前に、許してもらうべきではないのだ。

自分があの実験の後、どんなことをしてきたとしても”一方通行は妹達を殺した”。

これは決して消えることのない真実なのだから。

そして向こうはまだ依然としてこちらを恨んでいるだろう。

もし顔を合わせれば、何の迷いもなく超電磁砲をぶちかましてくるかもしれない。

そんなことが頭の中で巡っている一方通行は、未だに御坂と会おうなどと考えたことは一度もない。

だが、そんな一方通行とは裏腹に、打ち止めは御坂に会いに行きたいと言いつ出した。

会いに行つて一体何を話したいのか？

一方通行の頭の中でそんな疑問が浮かび上がっていると、そんな一方通行の考えを呼んだように打ち止めが、

「お姉さま。」あの人”が行方不明になってから落ち込んでると思

って……」

「……………」

”あの人”。

一方通行に浮かんだのは、あの男の持つ不思議な右手の力で敗れ、ロシアで自分が負けたあの男の姿だった。

戦争の終結後、ローマ教皇によってその行方を捜され、今現在も見つかったという情報は入ってくることはない。

「だから少しでも元気なつて欲しくて、ミサカネットワークでもあれこれ皆で話したりしてるんだけど、お姉さま、全然寮から出てきてくれなくて。だからこっちから会いに行こうと思って、ミサカはミサカは決意を固めながら宣言してみる」

「お前エが行ったところで会える訳ねエだろ。なんつって会うつもりだ？」

「妹です！と宣言してミサカはミサカはすんなりと寮に入って行って……」

「無理だな。御坂美琴の親類かなんかのデータを調べられたら終わりだ。」

いくら顔が似てるつつたところで、データにねエンじゃ話しにならねエ」

”だから今は諦めろ”。

一方通行がそういうと、打ち止めは頬をムスツと膨らませながら、一方通行の胸をその細い両腕でポンポンと叩き始めた。

一方通行がそんな打ち止めに気にせず目を見つめていると、やがて打ち止めは諦めたように両腕を振り降ろすのを止め、一方通行の胸に額をコツンと置いた。

その際に打ち止めの髪が一方通行の肌にチクチクと刺さり、いち

いち刺さる髪にうざったさを感じながら一方通行が目を開けると、打ち止めは悲しそうな目をしながら、どこかを見つめていた。

「ミサカも、あの人が居なくなつて寂しいんだよね。って、ミサカはミサカは本音を暴露してみたり」

「……………」

「お姉さまが今どんな気持ちで過ごしているか、ミサカはちょっと分かるなつて、ミサカはミサカは大人びた雰囲気で独り言を言ってみる」

そんな打ち止めを見ていた一方通行は、あの男の姿がはつきりと頭の中に浮かんだ。

自分がやらなければいけないことを代わりにやり、妹や打ち止めを死の連鎖から解き放ったあの無能力者。 いや、ただの無能力者が自分に2回も勝てる訳がない。

あの男も、何か特別な力を持った人間なんだろう。おそらく自分よりも特別な力を持った。

”なら…”と、

一方通行は考える。

あの男がそう簡単にくたばる訳がない。時がたてば必ずこの腐った街に戻ってくるだろう。

その時こそ、自分はあの男に詫びか礼の言葉を言つべきなのだろうか。

自分を変えるきっかけを作ってくれたあの男に…。

そんなことを考えていると。いつの間にか打ち止めはスースーと息をしながらも一方通行の胸の上で寝ていた。

それに続いて一方通行も眠りの中へと落ちて行き、部屋には2人の息をする音だけが聞こえていた。

3

11月7日

ステイル「マグヌスは自分の上司であるイギリス清教の最大主教・ローラ」スチュワートの住まいである、”ランベスの宮”に来ていた。

その中の一角にある長い廊下を歩いて行くステイルはとある1つの扉の前で立ち止まり、スウー…ハー…と一回深呼吸をしてから扉をボタンと大きな音を立てて開けた。

開けた扉の向こう側にいたのは数え切れないほどあるバスタブの1つに足を入れて足湯をゆったりと堪能しているこの場所の家主である、ローラ「スチュワート」の姿があった。

あれだけ音を立てて扉を開けたにも関わらず、ローラはそんな音を気にしないというような感じで、未だに足湯を続けていた。

”無視かよ…”と心の中で呟くステイルは、顔を引き吊らせながらスタスタとローラの近くまで歩いて行った。

アイクビショップ
「最大主教……」

「んん？何けるかしらステイル？」

「何をやってるんですかあなたは……？今日はローマ正教・ロシア成教のトップ達との会議なんですよ。」

しかも、会議にはエリザード女王陛下も来られるんです。にも関わらず、あなたはこんなところで何をやってるんですか？」

「見てお分かりでしょう？足湯をしているの」

自分のペースを崩さずにステイルの問いに答えるローラは相も変わらずに足湯を続け、さらに足をバシャバシャと子供のようによろよろに動かして、鼻唄を歌い始めた。

それによって、さらにステイルのイライラゲージがアップし、ステイルは無意識の内に片手を炎を出す時にする手つきにしていた。

「そろそろお時間です。」

すぐにそこから出て足を拭き、支度をしてください」「ええ、もう少しくらい良きにけるのよ。すぐに支度など手につけられるのだから」

「……いいから早く支度しろってんだよ……」

その瞬間、ローラは殺気を感じて足を付けているバスタブから前方にジャンプをした。

直後、バスタブから水の蒸発する音が辺りに響き、バスタブから抜け出して前方に転がっていたローラがバスタブのあった後ろに目を向けると、そこには炎によって湯が蒸発しところどころ黒く焦げているバスタブと、身に包んでいる真っ黒な修道服から黒いオーラを放つ、自分の部下の姿があった。

「ス、ステイル。」

いい加減にバスタブを黒焦げにするのは止めにするけるのよ。以前にもこのようなことがあったと、私の脳がはつきりと覚えになりけるわ」

「私としてはバスタブよりも、誰かさんを使いものにならなくする予定だったんですがね……」

「そ、そう……。」

一体誰のことにけるかしら？私が叱ってやらなければいけないにつ
きるかしら……」

「そうですか……。」

なら…、今すぐ灰になれエエええええッ！」

「いやアアアあああああああッ！！」

こんなことをしている内に、また時間を無駄にしていることに気
づかない2人だった。

それから自分の役目をなんとか思い出したステイルは、ローラの首
根っこを掴んで使用人にローラの身なりの整えを頼み、ローラが出
てくるのを待っていた。

その時、上司であるはずのローラの首根っこを掴んでやって来た
ステイルの姿を見て、使用人達が少し引いていたのはここだけの話
だ。

少し時間がたち、ローラの入った部屋が開く音がし、ステイルがそ
っちを振り向くと、風呂場で暴れたせいで少しボサボサになってし
まった髪と服も綺麗になっており、ステイルはため息をついてから、
歩き始めたローラの後ろに付き添う形で歩き始めた。

「で、ステイル。」

他の者達はもう到着しているのかしら？」

「いえ、到着はまだです。ですがもうすぐお着きになるでしょう。
その時は、ローマ教皇の護衛に着いている”神裂”と、ロシア総大

主教の護衛に着いている”ナイトリーダー”から連絡があるはずだ”「そう、では私達は颯爽とバッキンガム宮殿に行きにけりましようか」

そう言ったローラに、

”元々この会議を始めようと思った張本人が一番最初に行くのは当たり前でしょう……”と言って愚痴をこぼすステイルを尻目に、ローラは笑みを浮かべながら、バッキンガム宮殿に向かう為に、ランベスの宮の敷地から出ていった。

行間・1

『で、オルシユア達の方は失敗したと。そういうことが、ユベリス』
ええ。どうやら邪魔が入ったらしいですよ。どこの誰が邪魔したのかは知りませんが……

『まあいいさ。元々あの兄弟にそこまで期待はしていない。もし俺に邪魔が入るならまとめて潰す。それだけだ。ユベリス、お前は早速行動を開始しろ。俺もそろそろ動く』

分かりました。

あなたに従いますよ。

では、またお会いしましょう。

”ズイード”

第十章 "長"達の会談（前書き）

長いこと更新が遅れて申し訳ありませんでした。

短いですけどご覧ください。

第十章 “長”達の会談

4

神裂火織は、

イギリスのエリザード女王の住むバッキンガム宮殿へと足を運んでいた。

ただし1人ではない。

彼女の後ろには護衛の対象である、ローマ教皇のマタイ・リースと、さらに後ろに、彼女が女王を務める天草式十字凄教に所属する人間がおり、ローマ教皇を三角形に囲む形で、会議の行われる場所に着々と足を進めていた。

やがて神裂達は1つの扉の前で立ち止まり、先頭にいた神裂が扉越しに、

「イギリス清教所属の神裂火織です。ローマ教皇をお連れしました」
すると扉の向こう側から”入れ…”という男の声が神裂の耳に届き、一度自分の後ろにいるローマ教皇を確認してから、その扉の取っ手に手を掛けてゆつくりと開いた。

そこで神裂の視界に入ったのは、丸い形を帯びた白い椅子に腰を降ろしている英国王室のトップ、エリザードとロシア成教のトップである、クランス・R・ツァールスキー。

そして神裂と同じく護衛任務についていた騎士団長がエリザードの背後で後ろに腕を回して立っているのが見えた。

神裂は自分の後ろにいるマタイ・リースに前を譲るように横に体

をずらした。その神裂の行動の意味を理解したマタイ・リースは、神裂の横を通りすぎて、近くにあった空いている席にエリザードやクランスと同じように腰を降ろした。

チラッと視線を動かしてみると、自分達が座っているのと同じような椅子が1つだけ空席になっており、それを見たマタイ・リースはそこに誰が座るのか瞬時に理解した。

自分やロシア成教のトップを招集した張本人だ。

その時、

まるで狙ったかのように、自分が入って来た扉がバンツ！と音を立てて大きく開いた。

この清廉とした空気を瞬時にぶち壊した人物を見ようと部屋にいたほぼ全員が扉の方を向くと、そこにいた人物を見て、大抵の者は”やはり…”と言った感じで呆れたようにため息をついていた。

そして入って来た人物が、「あら、どうやら私が一番最後になってしまつとろつかしら？」

と言っているローラ・スチュワートは、他の人達の呆れたような目線を見無視して、1つだけ空いていた席にドサツと腰を降ろした。そこに皆の考えを代弁するかのよう、立っているナイトリーダーはため息をつきながら、

「この会議を主催した人間が一番最後に来るとは、まったく、呆れすぎて怒ることがバカみたいに思えて来る」

「そういうところが私らしいではなくて？」

「ああ、そのバカみたいな日本語もあなたらしいよ」

ナイトリーダーの言葉を聞いたローラは”うつ…”と痛いところを突かれたように、苦い顔をしているが、すぐさま顔の表情を整え、

「こ、これでもかなり良くなりているのよ。前より善きになりているでしょ?」「いや、あまり変わっていないが…」

顔を引きつらせながら喋るローラに、ナイトリーダーはあっさりとした口調でローラの言葉を否定した。

「お二人さん。そろそろ本題に入ってもいいかな?」

すると、

ローラとナイトリーダーの話を聞いていた内の1人であるエリザードが、見るに見かねて口を挟んできた。エリザードに口を挟まれたナイトリーダーとローラは大人しく口を閉じ、

”ゴホン…”と一回咳をしたナイトリーダーを一瞥したエリザードは、ここに集まった人々を一回見回した後、再び口を開いた。

「さて、今回集まって頂いたローマ教皇とロシア総大主教にお話があるのよね。ローラ」

「ええ、十字教三大宗派で、私が最大主教を務めるイギリス清教と、ローマ正教にロシア成教。

そのトップでありし2人に伝えたいことがありけるのよ」

「伝えたいこと?一体何だというんだ?」

ローラの言葉を聞いたマタイ・リースはローラに話の催促をする
と、ローラは少し顔に不気味そうな笑みを浮かべながら、言葉を続けた。

『アレクスター・クロウリーの事にけるのよ』

瞬間、

皆の集まっているこの部屋の空気が一気に重たいものになるのを、部屋にいる全員が感じた。

その名前の意味を、魔術師ならば誰でも理解できるのだ。

それほど、今ローラが口にした人物の名前はとてつもないものなのだ。

「どういう事ですか？」

アレキスター「クロウリーは既に死んでいるはずではないんですか？」

ローラの言葉にロシア成教のトップであるクランスは、他の誰も口を開けない中1人だけ口を開けた。

「死んでいなかった」。

私はそのことをあなた達に伝えたるのよ。

戦争の終戦間際に、私達イギリス清教の所有せしサーチ術式に、アレキスターの反応を感知したりけることが出来しなのよ」

「ですが、アレキスター「クロウリーは何十年も前の人間です。既に寿命が尽きているはずでは？」

アレキスターは今から7・80年前に活躍していた魔術師であり、その年月によって彼の魔術を模した亜流の魔術などが出回るようになった。

普通ならば、アレキスター「クロウリー」という人物は既に寿命が尽きて死亡しているはずだ。

クランスはそれを前提に話をしているが、ローラは「アレキスターは魔術界でも指折りの魔術師。

奴ならば何らかの方法を使って寿命延ばしていたとしても、おかしきことはなきにしもあらずよ」

ローラの言葉にはどこか納得出来るものがあつた。アレキスターほどの魔術師ならば、そんな魔術を使ったとしてもおかしくはないと、皆心のどこかで思っているのだ。

そこで今まで黙って話を聞いていたエリザードが口を開いた。

「その話が本当だったとして、奴は今どこにいるかは見当はついて
いるのか?」「いいえ。そう言ったことはさっぱり分からないのよ
ね」

「それでも、奴が生きていることは確実なのね?」

「ええ、ほぼ間違いなきにけるわ」

それならば、

イギリスとしてもローマとしてもロシアとしても、動かない訳には
いかない。

アレイスターは魔術界において忌むべき存在であるということは、
今も多くの魔術師達を感じており、その奴が生きていると知れば、
世界中に存在する魔術師達によって大規模な搜索が行われるだろう。

そしてその搜索を一番に始めるのはやはり、三大宗派であるイギ
リス・ローマ・ロシアだ。

そして今この場所には、

その三大宗派のトップが揃っている。

つまり、今この場で搜索をするかどうか決めることが出来る。

そしてエリザードは早速その話を切り出した。

「なら、直ちに奴の搜索隊を編成する必要があるかしらね。お二方
はどうですか?」

エリザードは視線をマタイ・リースとフランスに移し話し掛けた。

「搜索隊を出すのに反対はしないが、今は戦争が終わったばかりな
ので、人員をあまり提供することはできないんだが、それでも良い
なら協力しよう」

「私達もあまり人員は提供出来ませんが、ロシア成教は搜索に大い
に賛成です。他に何かやることがあれば進んで協力しましょう」

「協力感謝します。」

ローラ、あなたも良いわね？」

「ええ、別に構わなしにつきるわ。イギリス清教だけでは時間がかかりてしまいにけるもの」

ローラがそう言つて笑みを浮かべているのを見ていたエリザードは、少し違和感を覚えた。

ローラはアレイスターの搜索に賛成したが、エリザードの直感ではローラはあまり搜索に興味がないように思えた。

元々ローラ「スチュワート」という人間は、普段はおちゃらけているイメージが強く、イギリス清教のトップであるにも関わらず、部下である神裂火織やステイルなどに何度か痛い目に会わされていたりする。

だが一度真剣になると、

自分を圧倒するほどの策士として行動し、その時の彼女の力は凄まじいまでの力を発揮する。

だからこそローラ「スチュワート」はイギリス清教のトップとして君臨し続けている。

そのローラの興味がなさそうな姿を見て、エリザードはある一つの疑問にたどり着いた。

『ローラ「スチュワート」はアレイスターの件で、何か情報を握っているんじゃないか』

そう考えれば、ローラのあの態度にも説明がつく。

アレイスターの搜索に興味がないということは、元々アレイスターに興味がないのか、それか既に搜索する必要がないと感じているのか。

つまり、ローラは既に、アレイスターの所在を掴んでいるのではないか。

エリザードの中にはそんな疑問が浮かび上がっていたが、今その疑問を口に出したところで、恐らくローラは何も語ろうとはしないだろう。

はぐらかされるか、
とぼけられるか、

そのどちらかをされて終わりだろう。

少なくとも、ローラはアレイスターのことでは何か情報を掴んでいる。エリザードは心の中でそう思いながら、搜索隊の件についての話を再び切り出した。

「では搜索隊の編成は、
イギリス・ローマ・ロシアのトップに主導権を託します。今後のことは3人に任せます」

「分かりました。」

すぐにロシアにいるものに連絡を取りましょう」

「私も自分がいない間、
ローマの留守を任せたものに連絡を取って、今後のことを話し合ってみます」

フランスとマタイリースの言葉を聞いたエリザードは、1人沈黙していたローラに目を向けた。

すると、ローラは首を下にコクンと動かしてそれ以降沈黙を続けた。

それを賛成と読んだエリザードはローラから視線を外し、部屋中に響き渡るように発言をした。

「では、これにて会議は終了とします。皆さんお疲れ様でした。ローマ・ロシアのトップのお二方には、イギリス王室の方で宿泊先をご用意しますので、今日はそちらでごゆっくりお休みください」その発言を聞いて、椅子に腰を降ろしていたクランス・マタイリス・ローラの3人は一斉に立ち上がり、部屋の隅に立っていた神裂と、エリザードの側にいたナイトリーダーは、部屋に5つほどある扉の中の2つを開け、そこからクランスとマタイリスを部屋の外に誘導し、ローラは部屋の外に立っていたステイルが会議の終了を感じ、ローラの入って行った部屋の扉を外側から開け、クランス達と同じように部屋の外に誘導した。

開いていた扉は、ローラ達を出すと、ボタン、と同じような音を立てて一斉に閉まった。

トップ達の居なくなつた部屋には女王であるエリザードと、彼女の護衛である何人かの魔術師達が残った。

エリザードは彼らに続いて、部屋から出ようと思い、椅子の肘掛けに手を置いて力を入れて立ち上がるうとした瞬間、

キィィ、と先ほどとは違う音を立てながら扉が開いた。

エリザードは肘掛けに置いていた手から力を抜いてそちらに目をやると、そこには扉の立てた音を肯定するような凜とした態度と大人としての知性を持った女性があり、女性は足音を最小限に抑えるかのように全く音を出すことなく部屋の中へと入ってきた。

部屋に入ってきた女性。

エリザードの長女であり、イギリス王室の第一王女であるリメエアは、部屋に入ってきた時と同様に全く足音を立てずに徐々にエリザードへと近づいていった。相変わらず側には誰にも置かず1人我が道を行っており、ナイトリーダーがここにいればまたため息の1つくらいするかもしれないが、慣れているエリザードは別に護衛

などがないことを気にしない。

エリザードは近づいてくるリメエアをじっと見つめていたが、そうしているのに飽きたのかエリザードは近づいてくるリメエアに話し掛けた。

「なんだい？」

やっと会議が終わったっていうのに、何か気になることでもあったのかい？

どうせこつそり聞いていたんだろう？」

「やはり看破されていましたか。でも盗み聞きしていたのは私だけではありません。キヤーリサもです」

「知ってるよ。」

私は母親だよ。母親を欺こうなんて百年早い。で？一体何なんだい？」

エリザードの質問と同時に進めていた足を止めたリメエアは、座っているエリザードを見ながら口を開いた。

「確かに少々気になることはありますが、それよりも私はお伝えした方がいいことがあると思ひまして」

「伝えること？一体なんだい？」

エリザードの問いに、リメエアは左目にかけている片眼鏡を指で位置を整えながら答えた。

『この英国に不快感を煽る影が2つほど動いています』

イギリス清教

ネセサリウス（必要悪の教会）。

そのイギリス清教に所属している人間が生活している女子寮に、アニー・ゼンサンクティスという人物がいる。

元タローマ正教に所属していた彼女は色々な事情によって現在はイギリス清教に所属しているアニー・ゼンは今、1つの部屋の前に立ちつくしていた。

この部屋には交代制で何人ものシスター達が訪れているが、アニー・ゼンがここに来るのは初めてだった。

同じようにこの女子寮に住んでいるオルソラや神裂からこの部屋の話を聞いてはいたが、実際この部屋の前に来ると、彼女達から聞いていたことなどまったく何の参考にもならないことをアニー・ゼンは悟った。

この部屋に住んでいる、インデックスという少女は部屋に入ってから出たとこを見た人間は1人としていない。

実際は出てはいるのだろうが、恐らく皆が寝静まった頃に外に出ているんだろうと、アニー・ゼンは考えていた。

（うう…これ、どうすればいいんですか……）

自分が持っている昼食の入っているトレイをどうしようかと迷っているアニー・ゼンだが、オルソラ達が部屋の前にトレイを置いておくと言っていたことを思い出し、少し硬い動きでトレイを床に置いたアニー・ゼンはゆっくりとした動きで部屋の前から去ろうとしたが、何故か緊張感に包まれてしまい何とも言えない動きを始めた。

他の誰か今のアニエーゼを見れば、明らかに挙動不審に見えるだろう。

するとその時、

「ねえ……そこにいる人……」

部屋から去ろうとしたアニエーゼの耳に、部屋の中にいるインデックスの声が響いた。

「誰かは分からないけど、あなたに聞きたいことがあるの」

アニエーゼの耳に聞こえているインデックスの声は、自分の知っているような明るさがなく、食べ物食べているはずなのに、喉が枯れているのではないかと疑うような声を出していた。

「……とうまの…情報なんかはある？」

それを聞いてアニエーゼは何とも言えない悲壮感に駆られた。

第三次世界大戦終戦後、

上条当麻の消失によって、管理人を失ったインデックスはこの女子寮で生活をしている。

イギリス清教のトップであるローラからすれば、上条当麻は所詮今までの管理人の内の1人だろう。

だがインデックスには違う。彼女にとって上条当麻は、自分の運命を変えてくれたかけがえのない存在だっただろう。

その存在を失った彼女の精神的なダメージは相当のものであり、だからこそ彼女はここに閉じ込もっているんだろう。

アニエーゼにはその悲しみが痛いほど分かった。

アニエーゼ自身も、上条当麻によって助けられ、こうやってこの女子寮に立っているのもひとえに、上条当麻のおかげだ。

悲しくない訳がない。

インデックスの問いにアニエーゼは少し悔しそうに下唇を噛み、その体型に合った小さな拳を握りしめながら、

「いえ、そういう情報はなにも……」

「……………そっか……」

呟いたインデックスはそれ以上言葉をアニエーゼに発することはなかった。

自分の回答にそれ以上なにも言ってこないインデックスの部屋を少し見つめていたアニエーゼは、その後、なにも言わずに部屋から背を向けて歩き出した……。

第十一章 終わりに向けて

6

イギリスの一角にある、長い直線を描いた通りに、黒の修道服に身を包み、長い赤髪と吸っている煙草の煙を風になびかせながら歩く、ステイル・マグヌスの姿があった。

彼は自分の上司であるローラ・スチュワートを、彼女の住まいであるランベスの宮へと送り届けたあと、こうしてひとり帰路についている。

周囲にいる人々は、その全身真っ黒な格好と滅多に見ることのない赤い髪をした長髪の背の高い男の存在がやけに気になるらしく、ちらちらとステイルを見ている者が多い。

そんなステイルは自分を見つめる人々の視線などに気づくこともなく、先ほどまで一緒にいたローラに対する愚痴でいっぱいになっていた。

今日はいつにも増してだらだらとしていたせいで、会議を提案した張本人の癖に一番会議に遅くきたりなど、終わったことをぐちぐち言ってもどうしようもないことは彼自身が一番分かっていることなのだが、それでもやはり愚痴が出てしまうのだ。

（はあ……本当に、あの人の側にいるとどんどんストレスが溜まっていく……）

そう思いながらも、今のステイルにはもうひとつ、自分をイラつかせる存在に気づいていた。

少しばかり目を閉じてみると、思い浮かぶのはこの間自分と通信

機越しに会話をしていたあの憎つたらしい男のアホずら。

ベツレヘムの星と一緒に天使に突っ込んだ挙げ句に行方不明になり、未だに消息が判明しない上条当麻の顔を頭に浮かべたステイルは、次に彼が居なくなつたことで意気消沈の自分の大切な人を思い出し、下唇を苦そうな表情で噛み締めた。

酷く辛そうな顔であの男の所在を聞く彼女に何も言うことが出来ずに、ただ彼女のあの男のことを喋り続ける声を耳にしていることしか出来なかつた自分への悔しさと、自分では今の彼女に何もしてやれないと理解出来てしまう歯がゆさ。そのふたつがステイルの心に重くのし掛かつていた。

（あのバカめ……、あの子を泣かせるようなことをしたら今度こそ焼き殺してやろうと思っていたのに……）

”行方不明になられたら出来ないじゃないか”

ステイルは今居ない上条当麻が目の前に居ると言わんばかりの鋭い目付きで誰も立ってなどいない目の前を睨み付けた。

が……、

ステイルの目の前には、ひとりの青年が両手を履いているズボンのポケットの中に締まっっている姿が映った。

誰もいないだろうと思っていたステイルは、その青年の姿に少し驚きの表情を浮かべていたが、すぐにその顔は仕事の時の表情、敵に向ける表情へと変化していった。

ステイルはいつの間にか自分の周囲にいた人々の気配と、騒がしさが消えたことに気がついたのだ。

そしてそれが人払いのルーンだとすぐに判断でき、そのルーンを使った人間が今自分の目の前にいる青年だと言うことも一瞬で理解した。

この手の魔術は彼自身が良く使っているからだ。

ステイルは目の前に立っている青年の視界には入らない服の中でルーンを2、3枚手に取りいつでも動けるように構えをしながら目

の前にいる青年に話し掛けた。

「誰だ。こんなところでイギリス清教の人間に戦いを挑むなんて、ここがどこだが分かっているのかい？」

イギリス清教の総本山だよ。今にこの魔術を感知した僕の仲間がここに来る」

ステイルの言っていることは最もだった。

ここはイギリス清教の総本山。ネセサリウスに所属している魔術師達がわんさかいる。

そこでこんなことをすればイギリス清教の魔術師達が今にでもここに来るかもしれない。

たとえステイルをここで倒したとしても、次々に襲い掛かってくる魔術師達に対処など出来る訳がない。

だが……、

「……フツ……フフフ……」 ステイルの目の前にいる青年はまるでステイルの言ったことがバカらしいかのように肩を揺らしながら笑い始めた。

そして青年は、自分の笑っているその姿を見て少し眉を潜めているステイルをじっと見つめて、

「大丈夫ですよ、この結界には少し細工を施してありますから。それに今回僕はあまり戦いたくないので」「細工……？」

「ええ」と言っただけの軽い笑みを浮かべた青年は、笑みを浮かべたままたステイルに向けて、

「今回の僕の役目はちよつとした足止めなんです。だからまず最初はおあなたから倒させてもらいますよ」

瞬間、ブワッ！と音を立てて青年から放たれた異質なものがステイルに向かって飛んでいった。

「……なッ！？」

突然のことに対処が遅れたステイルは、すぐさま懐で手にしていたルーンを取り出して、自分に向かって放たれたものに対して防衛の為の魔術を解き放った。ブオオオッ！！という衝突の音と共に

スタイルと青年の間に赤い炎が炸裂し、辺りは炎の光によって包まれた。

7

イギリス清教・ネセサリウス（必要悪の教会）の女子寮にある食堂で、黒い修道服に身を包み頭のフードだけを外して、今日の料理の当番として厨房に立っていたオルソラ「アクイナスは、完成した料理を他のシスター達と共にテーブルに運び込み、今日の昼食にありついていた。

オルソラが周りにいるシスター達の会話を料理を口にしながら耳にしていると、空席になっていた左隣の席にひとりのシスターがどさつと腰を降ろした。

「あら、もう行ってきたのでございますか？」

オルソラが食べるのを中断して左隣に座った人物に話し掛けると、話し掛けられた人物、アニエーゼ「サンクティスは、なにやらどつと疲れたような溜め息を吐きながら、ちらりと視線をオルソラに移し、

「ええ、行って来ましたよ。彼女のあの状態を見るとなんだがこつちまで気持ちが悪く感じます」

「そうですか……やはりまだダメのようですね」

そう言っただけでオルソラが思い浮かべたのは、「法の書」の事件の時に仲良くしていた上条当麻とインデックスの姿だった。

あの時からインデックスという少女がどれだけ上条当麻という存在を大切に思っているかが良く分かった。

彼の怪我の具合を気にして慌てていた彼女の様子。気絶した彼の

名前を呼びながら落ち着かない様子。

しかし今回の戦いによって、上条当麻が居なくなりすっかり塞ぎ込んでしまった彼女を見て、オルソラも同じように悲しみに囚われていた。

インデックスほどではないが、自分も彼に対してそれなりの好意を持っていた。悲しくない訳がない。

天草式の五和という少女や、親しくしている神裂という女性も、彼が居なくなったことにショックを受けているのが分かった。

だがいつまでも落ち込んでいるわけにはいかない。こんなことをしていてもあの少年が帰ってくるはずがない。

自分達に出来るのは彼が帰ってくることを信じて待っていることしかできないのだから。

（彼女も、それを分かってくれると嬉しいのでございますが………）
オルソラが心の中で呟いていると、まったく話をしてこなくなったことを不思議に思ったアニエーゼが、「どうしたんですか？急に黙っちゃって……」

その瞬間、オルソラの耳に届いたのはアニエーゼの疑問の声ではなく、何かが音を立てて崩れる音だった。

「……！！？」

食堂に響く爆発音とその衝撃によって発生した揺れが料理の置いてあるテーブルを小刻みに揺らし、アニエーゼやオルソラを含んだ食堂にいたシスター達は、一斉に音のした方向に視線を集中させ、やがてその音が小さくなっていくのと同時に、アニエーゼが食堂に響き渡るように声を発した。

「すぐに霊装を準備出来る者は直ちに用意を！それから防衛の為に術式を組める者は急いで始めちゃってください！！」

その声にアニエーゼ隊を含めた大多数のシスター達が「はいッ！！！！」と返事をし、シスター達は食事を止めて一斉に動き出した。
「隊長！！！！」

シスター達が一齐に歩き出す音が食堂に響き、その内の何人かのシスターがアニエーゼの前に立ち、その先頭に立っているシスターがアニエーゼに声を掛けた。その声を聞いたアニエーゼは側に置いていた杖を手にとってそのシスター達と共に食堂を飛び出して音のした方向へと進んで行った。

「……………」

そんなシスター達の様子を見ていたオルソラは、不穏な気配を肌を感じながら、自分も何かを手伝う為に真剣な表情を顔に浮かべて小走りで行動を開始した。

「ここか……………」

複数のシスターを引き連れたアニエーゼは、女子寮の直線の廊下を走り抜けて、音のした場所へとたどり着いた。

その場所には大きな穴が空いており、女子寮の一部だった残骸がその姿を残すことなく床に辺りに散らばっていた。

残骸をチラチラと視界に入れながらこの爆発の元凶を探しているアニエーゼ達だったが、そこに、

「うーん……………十字教内三大宗派の一角の施した術式も…この程度か……………」

期待外れというようながっかりした声がアニエーゼ達の耳に届き、声のした方に目を向けてみると、そこにいたのは体にピツタリと張り付いているような黒のコートを白い髪を風になびかせて立っている男の姿だった。

その姿に何か不吉なものを感じたアニエーゼは、喉の奥でゴクツと息を飲み、冷や汗で肌を濡らしながら後ろに一歩後ずさっていた。その時、アニエーゼが後ずさった場所に小さな石があり、アニエーゼが後ずさったことによって音を立てて転がった石の音に反応したのか、男は顔を音のした方向、アニエーゼ達の方を向いた。

男の視線にアニエーゼ達がたじろぐ中、男は別にアニエーゼ達を警戒する素振りすら見せずにアニエーゼ達に口を開いた。

「お前らに用はない」

男の声にはアニーゼ達にも言わせないような強烈な覇気のよ
うなものが漂っていた。

そんな中で男はさらに言葉を続ける。

『禁書目録はどこだ』

第十二章 来たるべき人間達

アニエーゼ達は目の前に立つ男の鋭い目付きに少しの恐怖を覚え、男の質問に答えることを忘れてしまった。

アニエーゼ達の目線に立つ男は、自分の問いに答えようとしないアニエーゼ達にイラつきを覚えたのか、目をさらに鋭くして、

「聞こえなかったのか…？禁書目録はどこにいる」

男の覇気を纏った声を聞いて自分の後ろにいるシスターが後ずさる音を聞いていたアニエーゼ、ゴクツと息を呑んだあと口を開いた。「あんたに教えるいわれはねえっすよ。敵に簡単に情報を与えると思ってるんですか？」

冷や汗を流しながらそう答えたアニエーゼの言葉を聞いていた男は、アニエーゼ達に微かに聞こえるような小さな声で「そうか…」と呟いたあと、今まで一步も動くことのなかった足を動かした。

”来る”と思ったアニエーゼ達は目の前の男の攻撃に対応出来るように各々が持っていた武器を構えた。

その瞬間、武器を構えたアニエーゼの横を爆発的な光が通り抜け、彼女の後ろにいたシスターの内のひとりを吹き飛ばした。

「えッ……」

突然のことに呆気にとられていたアニエーゼ達は、勢いよく後ろを振り返って見たのは、シスターが壁に叩きつけられて地面に倒れ伏す瞬間だった。

その光景に、アニエーゼの後ろにいたシスターのふたりが、倒れ伏したシスターに駆け寄って行った。

うつ伏せに倒れているシスターの体の周囲では、バチバチと雷のようなものがスパークをしており、それを見ていたアニエーゼは、間違いなくその原因を作った男の方を、攻撃的な目で睨み付けた。

その視線を受けている男は、何の感慨も浮かばないように平然とした態度でアニエーゼを見ていたが、やがてニヤリと不気味に笑みを浮かべ、

「何を驚いていたんだ？俺は敵だぞ。敵が攻撃して何かおかしいところがあるのか？」

「今の…一体どうやって……」

アニエーゼが男の力に困惑していると、男はズボンのポケットにしまっていた片方の手を取り出し、人差し指だけをアニエーゼ達の方に指した。

人差し指を自分達に指されているアニエーゼ達は、その男の仕草にゾワッ！と全身が震え、それを感じ取ったアニエーゼは後ろに控えているシスター達に向けて大声で切り出した。

「全員回避ッ！！」

アニエーゼの声に反応したシスター達は、気絶して抱えられたシスターを含めた何人かが固まって左右に避け、アニエーゼもそれに続く形で横に飛んだ。

瞬間、アニエーゼ達の立っていた場所に光の集合体が一気に押し寄せた。

ガギギギッ！と地面を削る音と共に光はアニエーゼ達を通り過ぎていき、やがて女子寮の壁に爆音を立てて激突し、何もなかったように跡形もなく消滅し、跡には破壊された女子寮が残った。

間一髪アニエーゼの掛け声によって難を逃れたシスター達は横に飛んで倒れた体を起こし、目の前に立つアニエーゼに視線を集中させた。

そのアニエーゼは目の前に立つ男に向かって杖を構えたまま突如として走り出した。

アニエーゼは眼前にたっている、再びズボンのポケットに手を入れて平然としている男に視線を集中しながら、持っている杖を構えて女子寮の残骸の転がっている地面に向けて、杖の先端を横殴りに叩きつけた。ガンッ！という鈍い杖を叩きつける音がした数秒後、

アニーゼの目の前に立っていた男は、ドンツ！という音と共に右の脇腹に衝撃を受け、それによって体が90度曲がった。

そうアニーゼは頭の中で予測していたが、現実とは違った。

男は、まるでアニーゼの動作の意味をあらかじめ知っていたかのように、ちらりと右に目線を動かしたあと、後ろにバックステップをしてアニーゼの攻撃を回避した。

「なッ！！」

自分の攻撃を初見で避けられたことに動揺の色を見せたアニーゼを尻目に、男は再びポケットから手を出して人差し指を自分に向かってくるアニーゼに向けた。

すると、男の人差し指に段々と輝きを放つ光が螺旋を描くように集まっていき、やがて丸い形をとった光は、自らを抑えていた鎖が外れたかのように、一気にアニーゼに向かって拡散していった。

「ちッッ！！」

自分目掛けて放たれた光を真横に飛んだアニーゼは、横に転がりながら体勢を整えたアニーゼは片膝を地面につけたまま、杖をトンと地面に触れさせた。そして、人差し指を指した状態のまま固まっていた男は、その状態のままで先ほどよりも強く地面を蹴り、バックステップをした。次の瞬間、男の立っていた場所が下から何かに突き破られたようにドシャッ！！と音を上げて炸裂した。「くっそッ！！」

再び自分の繰り出した攻撃を避けられ、アニーゼは舌打ちをしながら悔しさの声を上げた。

（何で攻撃が当たらないんですかッ！？一体どうやって攻撃をよんでいやるんですかね……？）

アニーゼの攻撃は、目には見えないという最大の強みがある。

そして初見では自分の手の内が分からない以上、どんな攻撃が来ても初っぱなで対処するのは難しい。

まして、それが見えない攻撃ならば尚更だ。

しかしあの男は、初見であるにもかかわらず、アニエーゼの攻撃をいとも簡単に回避した。

未だに敵の攻撃の仕組みがいまいち分からないアニエーゼにとっては、あまりいい状況ではない。

すると、男はポケットにしまっていたもう片方の手も取り出し、何か仕掛けてくると身構えたアニエーゼの考えを否定するように、男は何の動作もすることなく、両手をただぶらんと体の横に置いて立ち尽くしていた。

「…？、一体なんのつもりですか？」

男の行動に疑問が募るアニエーゼは、目の前で立ち尽くしている男に向かって話し掛けた。

男はアニエーゼに示唆されたその状態を変えることなく、

「……おまえらに聞くのはやめだ。そろそろ消えてもらおう」

男のその言葉を聞いたあと、アニエーゼの視界に入ったのは男の周囲で雷のようなものがバチバチと音を立ててスパークを繰り返している場面だった。

それを呆然と見つめるアニエーゼとシスター達を尻目に、男は眼前にいるアニエーゼ達を見たあと、ニヤリと笑みを浮かべ、

「あとは自分で勝手に探さ。消えるゴミ共」

その瞬間、男の周囲でスパークしていた雷が急に動きを変え、何本もの雷の光がアニエーゼ達の位置を正確に把握しているかのようにして、アニエーゼ達に襲いかかった。

「……ッ！全員回避ッ！！」

アニエーゼの言葉に、自分達に襲いかかってくる雷の光をなんとか避けようと行動を始めたシスター達は、ひとりひとりに別れて雷の光を回避し始めた。

だが気絶しているシスターを抱えていたシスターは、雷のスピードに対応することが出来ず、雷の直撃を喰らった。

「グッ…アアアアッッ！！！！！！」

抱えられていたシスターは雷の攻撃を喰らい絶叫の悲鳴を上げて

いるシスターのつつさの機転によって離れていたので再び雷を喰らうことはなかったが、雷を喰らったシスターは力を失ったように膝から崩れ落ちた。

それを見ていたアニエーゼは、部下の悲鳴を聞いて悔しさのあまり下唇を噛んでいたが、助けようにも自分に襲いかかってくる雷の光がそれを阻害して、助けることができない。

そんな中、アニエーゼの耳に再びシスターの悲鳴が聞こえ、またひとりやられたことをアニエーゼは理解した。

それをずっと見ていた男は、雷を回避していくアニエーゼ達にイラついたのか、雷の力を上げて再びアニエーゼ達を襲った。

力を増した雷に当たったことで悲鳴を上げたシスターの声を聞き、次々とやられていく部下達の悲鳴を聞いていたアニエーゼは、この男の強さが自分とはまるで次元の違う領域だと悟った。

そしてその感情が体に影響を及ぼしたのか、アニエーゼの体は突如としてキレを失ない、その一瞬の隙をつき、雷がアニエーゼを襲った。

『あまり勝手にやられては困ります』

その瞬間、アニエーゼを襲うはずだった雷の光は、突然方向を変えた。

他のシスターに向かっていった雷の光もなぜか方向を変えた。

「……ッ、な、なにが……」 驚きの声を上げたアニエーゼが雷の向かった方向を見ると、自分の至近距離に光を浴びて輝く鉄の線のようなものがあちこちに地面に向かって突き刺さっており、それに向かって雷が炸裂していた。

その鉄の線のようなものが一定の距離に何本も打ち込まれることで避雷針のような役割を果たしたのだ。「綱糸……」

アニエーゼやシスター達の耳に聞き覚えのある声が響いた。その声を聞いたアニエーゼの中に、ひとつの希望が見えた。

その声の主はイギリス清教の中でもダントツの実力を持っていて、世界に20人ほどしかいない聖人のひとり。そしてアニエーゼが声のした方を見てみると、そこにいたのはアニエーゼの予想通りの人物。

イギリス清教所属の聖人神裂火織だった。

雷を放つ男の後ろで自身の持つている長剣、七天七刀に手を添えて構えを取っている神裂は、背中越しに男を睨み付けていた。

そして睨み付けられている男は、雷が神裂の仕掛けた避雷針によって無駄になったことを悟り、体の周囲に張り巡らせていた雷を解除して、後ろにいる神裂の方を振り向いた。

「ほう、次は聖人の登場か」

「私のことをご存知なんですか……？」

「世界に滅多にいない聖人のひとりだ。それくらいは常識の範囲内だと思うが……」

そう言った男は、さらに話を続けた。あくまでも余裕は崩さずに。

「俺の敵ではない」

「そうですか……」

『だったらあたしも混ぜろよ』

神裂と男との間に不穏な空気が生じ、今まさに何かが起ころうとしたその瞬間、その空気をぶち壊すような、この状況をまるで楽しんでいるような声色で喋る女性の声が響いた。

その女性の声には、どこか気品と気高さがあり、神裂にはとてつもなく聞き覚えのある声だった。

男と神裂、アニエーゼ達が声のした方を見ると、そこにいたのは金髪を風になびかせて全身真紅のドレスを着た人物。

イギリス王室第二王女・キャーリサその人だった。キャーリサは崩れ掛けた女子寮の高いところに笑みを浮かべながら立っており、その姿を見た神裂は少し気を抜いたように溜め息をついた。

「何をしているのですか。こんなところで」

「いーだろ別に。なんか騒がしいから急いで駆けつけたんだよ」

「大丈夫です。私ひとりで十分です」

「なんだよ神裂火織、こんな楽しそうなことをあたしから奪うのかよ。いーから仲良くやろうぜ」

男を間に挟んで会話をしている神裂とキヤーリサだったが、さすがにイラついたのか男が怒りを表したような口調で挟んで来た。

「おい、俺にはきさまらの無駄話に付き合っている暇はない。話なら他所でやれ」

それを聞いた神裂は再び真剣な表情で男に視線を向け、キヤーリサは先ほどから変わらない表情で男を見つめた。

ふたりの視線を受ける男は、ニヤツと笑みを浮かべると、懷から赤い色をした液体の入った細長い小瓶のようなものを取り出し、

「イギリス清教の聖人に、英国の軍事的な力を持った王女が……、まあ、悪くない」

そう言う男は手にしていた小瓶の蓋を開け、首を上に向けて大きく口を開けて中に入っていた赤い液体を飲み始めた。

神裂とキヤーリサがその様子を黙って見ていると、やがて小瓶の中身を全て体内に流し込んだ男は空になった小瓶を地面に叩きつけ、パリンツ！という小瓶の割れる音のすぐあと、男は笑みを浮かべたまま、構えを取っている神裂や先ほどよりも真剣な面持ちのキヤーリサ、3人の様子を黙って見ていたアニエーゼ達に聞こえるようにドスの聞いた声で言葉を発した。

『さあ、始めようか。』

少しは楽しませてくれよ。聖人、王女様』

その瞬間、三つの強力な力が激突した。

第十三章 『彼』の姿（前書き）

遂にクライマックス突入です!!。

どうか最後までよろしくお願いいたします。

良ければ感想もお願いします!!

第十三章 『彼』の姿

もはや次元が違う。

腕から流れる血を手で抑えながら、アニーゼは目の前で繰り広げられる自分とはまったく別の次元に立っている人間達の戦う姿を呆然と見つめていた。

「はぁッ！！」

七天七刀を横殴りに一閃する神裂と男の雷の閃光の剣が衝突する。たったそれだけでふたりの周囲を球体状の衝撃波が拡散し、女子寮の破片が地面を転がり、そのすぐ側に建造されている女子寮には衝撃波が押し寄せた。

ビリビリと小さな音を立てて振動をする女子寮を背中にして、神裂は再び男に対して七刀七刀を振り降ろした。

衝撃波を発生させる両者の力は衰えという言葉を見せず、さらに力と速度を増してつばぜり合いを繰り広げる。

ガガギガギツギツガギギッ！！と互いの武器を叩きつけるように振るい、神裂と男は互いの力を衝突させる。

その時、互いの武器をぶつけ合う男の背に影がさした。

チラリと後方に目をやると、そこには金色の髪と、全身を深紅のドレスに身を包んでいる女性。

恐らく崩れた女子寮の瓦礫の上から跳躍したであろうその女性は、風にその髪と服をなびかせていた。

その女性、キヤーリサは何も存在していない虚空に手のひらをかざした。

次の瞬間、何も存在していなかったその虚空に突如光が溢れ、輝きを放った。輝きと共にその光はまるで意思があるように徐々に形を取り始め、やがて光は輝きを放つ閃光の剣と化した。

その一部始終を見ていた男は、剣を握りしめていた両手の内の片方の手を剣から離れた。

手のひらを下に向けた男の手の中には、いつの間にか閃光の剣がもうひとつ握られていた。

同じくカーテナの閃光の剣を手にしたキヤーリサは、剣を両手で力強く握りしめ、その一撃で男の所持している閃光の剣を叩き折ると言わんばかりの勢いで自らの閃光の剣を振り降ろした。

「ふッッ!!」

ギィィィィン!!と剣と剣が音を鳴り響かせて衝突した。

男の閃光の剣はその形を保ったまま折れることなくキヤーリサの剣を受け止めた。

右に神裂。

左にキヤーリサ。

各々の剣を右腕と左腕の片方ずつで受け止めている男の力が計り知れないものだということを、ふたりは改めて自覚し、そして同時に剣を引き、構え、動いた。

その時、男が両手に持っていたふたつの剣を消滅させ、何も納めていない両手を左右に大きく伸ばした。

ゴッ!!と、

男の周囲から円状の衝撃波が神裂とキヤーリサの肌を引き裂くように押し寄せ、その数秒後、男の周囲を囲むような形で、幾千の雷の凶器が炸裂した。

「ッッ!!」

「ちッッッ!!」

幾千の雷の刃がバチバチとスパーク音を大気中に鳴り響かせ、神裂とキヤーリサに襲いかかる。

拡散していく雷の猛攻によって、地面や壁が轟音を響かせながら爆散し、壊れていく中、神裂とキヤーリサは細かいステップで足を軽やかに動かせ、雷の猛攻を避けた。

神裂は回避行動に集中しながらも片手を前に突きだし、鋭く尖って太陽の光を反射させる氷の塊を放った。

すぐに雷に碎かれその形を消失させると思っていたが、それとは裏腹に、氷は太陽の光の他に、男の放つ雷の凶器をも跳ね返し、一直線に男めがけて勢いを殺すことなく突き進んだ。

それを見た男は風を掴んで操るような動きで片手を動かした。

すると、何の攻撃パターンもなくただ周囲に向かって拡散を続けていた雷が、男の手につられるようにしなやかにカーブをしながら一斉に氷への侵攻を開始した。

瞬間、パシヤアアアアン！と、耳の中にまで響くような音と共に氷はその形を崩し、大気中に存在する水分と同化するように消えて見えなくなった。

その後、神裂は次々と炎や氷の魔術を男に向けて放ち続けた。

だがどれも雷の凶器に阻まれ男に命中することはない。

しかし神裂はそれでも魔術を放つことを止めようとはしない。

それを見ていた男は少し哀れみと自慢気な声色で神裂へと言葉を発した。

「その程度の力では俺を傷つけることは出来ないぞ！貴様の聖人としての力はこんなものか！？」

期待外れ。

その言葉が男の脳裏に浮かんだが、神裂はそれでも攻撃を止めはしない。

その神裂の姿勢に飽き飽きした男はいい加減決着をつけようと、神裂の放つ魔術を全て叩き壊し、それに続く形で神裂に向けて雷の凶器を飛ばした。

その瞬間、男は目を見開いた。

雷を放たれ、そこに立ち尽くしている神裂は剣を構えることもなくただ、

その顔に笑みを浮かべていた。

瞬間、ドン！！と、衝撃音が男の鼓膜に響くと同時に足元が微かに震えるのを男は感じた。

（なにッ！？）

震えを感じて足元を見た男の視界に、地面に青く光を放つ何かが男を囲むように円の形で描かれていた。（まさかこれはッ！！）

「ようやく気づいたようですね」

男の驚愕の顔色を視界に納めていた神裂が顔を少し俯かせ、地面描かれたものを見ながら口を開いた。

「ずっと待っていたのです。準備が出来るのを」

「準備…だと？」

『その通りなのよな』

男の耳に声が聞こえた。しかも全く聞き覚えのない声だった。

目の前に立ち尽くしている聖人の女でも、あの王女様でもなく、どこかゆったりとした男の声。

男は、ゆっくりとその声のした方向に目を動かした。

そこには柄が異様に回転している長剣を肩に乗せたまま男の方を、正確には男の延長線上にいる神裂を見ながら笑みを浮かべている男と、その男の手前で青く輝く円形の魔術に手を当ててなにかを呟いている若い青年。

しかもよく見渡すと、その青年と同じような動作をしている者達が男を囲んでいた。

「…くッ」

男は自分がまんまとはめられたことを強く実感し、しかも首からしたがほとんど動かない。

この青く輝くもののせいだということは嫌でも理解出来た。

悔しさで少し呻いた後下唇を噛んで神裂達を睨みつけた。

男の睨みつける視線をものともせずにいる男、建宮は、

「第二王女様から拝借したこの霊装を使ってみたんだが、どうやら

ドンピシャリだったようなのな」

建宮は赤い十字の描かれた服の懷から木製で出来た長さの短い杖のようなものを取り出した。

建宮が取り出したものを見ながらカーテナの欠片の剣を携えたキヤーリサが言葉を発した。

「どーもテメーの力はただの魔術師のそれとは違う。聖人の神裂火織の剣を片手で受け止めてる時点でただのゴロツキじゃないとは思ったし、それにこの霊装で体が動かないところを見るとやっぱ正解だったし」

それに続いて神裂も言葉を発する。

「今使っている霊装は、イギリス清教の中でも滅多に使われることのない霊装です。理由としてはこの霊装はただの魔術師には何の効果も発揮しません。この霊装がその効果を発揮するのは、”聖人”や”神の力”を行使し、それを操るものだけです」

「戦争の時に神の力と戦ったから分かるんだが、あんたの剣とぶつかった時に、微弱ながら奴と同じような力をあんたから感じた。だからもしかすると思ったんだし」

一定の言葉を発したキヤーリサと神裂はそこで言葉を止めた。

そして、次の瞬間、青い輝きがさらにその光を増して輝き始めた。

「…ッ、くそッ!」

「無駄です。動くことは出来ません」

逃げようとなんとか体を動かそうとする男に向けて神裂は冷静に言葉を告げた。

「言い忘れていましたが、この霊装は単に動きを止めるだけのものではありません。対象を動けなくしてから、力を奪うのです」

「くそッ!この俺がッ!」

「あなたは戦闘の時に目の前の敵に集中するあまり、周りが疎かになっってしまう」

「くそッ!くそッ!」

「それがあなたの最大の敗因です」

「くッそおおおおおおおおおおおおッ!!!」
瞬間、男を囲んでいた術式が膨大な光を放ち、術式が描かれた場所に青白い光の柱が立ち上り、男の姿は柱に包まれその姿を消した。

「少し力が強いではありませんか？」

神裂は自分の側に笑みを浮かべて歩いてきたキヤーリサに向けて天に昇る光の柱を見上げながら言葉を口にする。

さすがの神裂もここまで強力な力を持つ霊装とは思わなかったのだろう。

「これでは死んでしまうのでは……？」

「大丈夫だろ。神の力を持つ奴がそんな簡単にはくたばるわけねえし」

「いやしかし、さすがにこれは……」

「つーか、あのシスター達に聞いたところ、こいつは禁書目録が狙いだったらしい」

禁書目録。

その言葉に神裂は苦い顔をした。

この前の戦争の時にもインデックスは右方のフィアンマに利用され、しかも今回も。

（やはり、あの子はそこらじゅうの魔術師にしたら、ただの道具でしかないということですか……）

抗えないインデックスの運命のようなものに神裂はただ顔を歪めることしか出来なかった。

「仮にそうだとしたら、一体何がしたかったのでしょうか？」

神裂の問いにキヤーリサは「さーな」とだけ言った後、勝利したことに嬉しいのか、少し笑みを作り、

「それはこいつに聞くのが手っ取り早いだろ。さっさと牢にぶち込んで」

キヤーリサの言葉に耳を傾けている神裂だったが、その次のキヤ

ーリサの言葉が神裂の耳に届くことはなかった。

ゴバツ！！！と、

その音と共にふたりの目の前にあった光の柱が、何かに巨大な力に吹き飛ばされるかのように細長い柱はその形を崩し、膨張するように球体になったあと破裂し、衝撃波を発生させた。今までは比喩物にならないほどの強力な衝撃波によって女子寮全体の窓ガラスがひとつ残らず割れ、崩壊して場所の形を残していた部分は、その衝撃によって少し前に崩れた場所と同じように跡形もなく崩壊していった。

近くにいた建宮を含む天草式十字凄教の人間達もその衝撃波によって吹き飛ばされる中、キヤーリサと聖人である神裂でさえもこの衝撃波の強力な力に圧倒され、ふたりは地面にそれぞれの剣を深く突き刺して前傾姿勢になり吹き飛ばされるのをなんとか耐えた。

「……一体何が……」

衝撃波の力をこらえしのいだ神裂は頭に多少の痛みを感じながら、衝撃波の発生した場所に目をやった。

「何の為に？」

決まっているだろう。利用する為さ。『奴』と戦うためにな」

声が神裂達の耳に響いた。

その声はまるでスピーカーでも使っているのではないかというくらいに響きのある声であり、同時に何か恐ろしいものを神裂は感じた。

そして神裂の視界に入ったもの。それは。

「やれやれ。まさかこの俺がこんなところで本気の姿を見せることになるとはな。どうせなら最初からこの力で皆殺しにすればよかったのか」

先ほど光に包まれた男がかすり傷ひとつなく平然と立っている姿だった。

だがところどころに先ほどとは異なった点があった。

あれほど白かった髪が真っ赤な紅蓮の色を帯びていてキヤーリサの赤いドレスと同等にその髪は真っ赤に染まっていた。

そしてそんな髪に合わせるかのように男の目は赤く光を放っていた。

『悪魔』

その単語が神裂の頭の中に真っ先に浮かんできた。神裂に続いてキヤーリサもそれを呆然としたように見つめる中、男はどす黒い笑みを顔に浮かべ、先ほどのように神裂達の耳に響くように、言葉を発した。

「さあ、死の宣告はもう終わった。そろそろ俺の視界から消えてなくなるがいい」

それはまるで悪魔、もとい神からの御告げのようにも神裂達には聞こえた。

8

「ぐッ……がはッ……」

ロンドンの一角にある道。

人払いのルーンによって全く人通りのない寂しげな道の真ん中にステイルは口と脇腹から血を流しそれを円状に道に拡散させながらうつ伏せに倒れていた。

するとどこからか爆音が聞こえ、微かながらに地面を揺らし、その揺れを、ステイルは力の入らない体で感じていた。

そんなステイルの目の前に立つ男がひとり。

「ん？、こんなところまで衝撃が来るとは、ズールドも暴れているようだね」

ユベリスはどこか遠くの方を見ながらひとり呟いた。

微かに笑みを浮かべてその方角を見ているユベリスにステイルはその隙をついて反撃に出たいところだが、反撃に出るための自身の体がまったくといっていいほど動かない。

今自分の目の前に立つ男の不気味な攻撃によって体が動かずここで地面に倒れ伏し、腹から血を流していることしか出来ない。

ステイルはあまり動かない体を動かして悔しさで下唇を噛みしめた。

ステイルから目を離していたユベリスは、少したってから自分の目の前で倒れているステイルに視線を降ろした。

「あまり無理に動かない方がいいですよ。出血が余計酷くなりますからね」

「な……にが……ッ……目、的だッ……」

「目的？そうですね。実のところ私はそれほど大層な目的は無いんです。上の命令で少し暴走しがちな人物を監視する為にここにいます。もしくはサポートしてくれとね」

「上の……命……令？」

「おっと、これ以上は話せませんね。それにあなたにこれ以上構っている暇はありませんので。では」

そう言つてユベリスはステイルから背を向けてゆっくりと走り出しました。

「ッ……待……てッ……」

自分から遠ざかる男を持てる力のすべてを目に集中させて睨みつけるが、そんなことで止まることはないステイル本人が十分理解している。

視界から徐々に遠ざかる男に視線をぶつけながら、ステイルは徐々に力が入らなくなり意識が薄れていくのを自覚した。

もう目すらも開けていられないと徐々に閉じていく目を未だにユベリスに向けていた。

すると、止まるはずがないと思っていたユベリスが突然その足を止めた。

一瞬驚きの意思を見せたステイルだったがもうそんなことが疑問とも思えないほどに沈んだ意識ではなにも考えられない。

ユベリスがステイルの方を再び向いた頃にはステイルの意識は既に闇に沈んだ後だった。

再び後ろに視線を移したユベリスの目に映るのは、地面倒れたステイルではなく、そのステイルの後ろに立っているふたりの人物だった。

そのふたりを見て、正確にはその男女の内の男を見て、ユベリスは笑みを浮かべ、言葉を呟いた。

「おや、これはまた懐かしい顔だ。会うのは彼が『魔神』になる前だったか。

まあ結局ならなかったが」そしてその男の隣に立っている女性も、会話をしたことは一度もないが顔を見たことはある。

なぜならその女性は世界に20人といない”聖人”のひとりである有名人だからだ。

ユベリスはそのふたりに聞こえるように声を発した。

「やあ、随分久しぶりだ。オッレルス」

ユベリスの言葉に、じっと立ち尽くしていたオッレルスは、

「ユベリス」トロイザン。何故君がここに……？」

「なに、ちょっとした野暮用でね。丁度いいそこに倒れている彼を助けてやってくれ。そのままだと出血が酷くて死ぬかもしれない」

顎を動かしてステイルのことを指すユベリスの動きを追って血を流して地面に倒れているステイルに目を向けたオッレルスは、苦そうに顔を歪めると、

「君がやったのか？」

「まあな。殺すつもりはなかったんだが加減を間違えた」

少し笑みを浮かべながら喋るユベリスはさらに言葉を続ける。

「君とここでやりあうつもりはない。君たちが相手じゃ勝てるかどうか分からないからね。彼を頼むよそれじゃ」

” また会おう ”

瞬間、ユベリスの姿は消えた。

まるで最初からそこになかったかのように。

忽然と。

「追わなくていいのか？」 先ほどまで口を閉じていたシルビアが目の前に立っているオッレルスに向けて言葉を発した。

するとオッレルスは少しの沈黙の後、「ふう…」と溜め息をつき、背中越しのシルビアに喋りかける。

「いいんだ、ここでやりあえば必ずイギリス清教の魔術師が察知してやって来る。それに今イギリスにはローマとロシアのトップもいるんだ。今はあまり目立つことはしたくない」

オッレルスはそう言うと言いつと血を流して倒れているステイルに目を向け、

「とにかくまずは彼の怪我を治そう。手遅れになる前に」

「分かってるわよ。うるさいわね」

そう言ってシルビアは早速、ステイルの治療を開始した。

神の力。

『神の右席』右方のフィアンマの策略によって戦争の戦禍の中に出

現し、ロシアでその圧倒的な力を振るった異能の存在。

学園都市の近代兵器を軽々と破壊しロシアの地形をも変化させるその存在の力を実際に味わったことのあるキヤーリサにとって、今自分の目の前で猛威を振るうその力は、キヤーリサに再びあの存在の力を思い出させた。

周囲に存在するあらゆるものが衝撃波によって吹き飛び、壊れ、消滅していく中で、キヤーリサはその衝撃波を耐え凌ぐ為に両の手に片方ずつ持った閃光の剣を体の前にクロスするように突き出した。瞬間、衝撃波がキヤーリサの頬を裂かんばかりの勢いで激突した。
「ッ！……ッ！……ッ！」

衝撃波の強力さ故に剣を構えたキヤーリサの腕は押し返されそうになりながらも、小刻みに両腕を震わせながらそれに耐える。
そのキヤーリサに響く声がひとつ。

「おおおおおおおおおおッ！！」

神裂は衝撃波によって飛び、そのスピードによって凶器と化した木材の破片で頭を切り血を流しながら、七天七刀を振るった。

神裂の視界に入る男、ズイードはその攻撃になんの感慨も浮かぶことがないのか、神裂の姿を見ることなく片手に持つ閃光の剣で受け止めた。

「くッ……！！」

受け止められた七天七刀を血が滲むほど強く握りしめ足に体重を乗せ、押し返そうと試みるが、聖人である神裂の力を持つてしてもピクリとも動かない。

今の神裂とズイードにはそれほどの力の差があった。

真紅に染まった瞳をギロツと動かし神裂を視界に捕えたズイードは、受け止めている方とは別の手に持つ武器を握りしめ振るった。

ゴンッ！！と

七天七刀を通じて神裂の腕に衝撃が押し寄せた。

「…ガッ！…くウツ！！」 その衝撃によって押し返され、後ろに滑るように後退した神裂はグッと両足に力を入れ、これ以上の後退を凌いだ。

だが神裂の顔には先ほどよりも苦い表情が浮かぶ。（くッ…腕が…）

七天七刀を通じて神裂の両腕に走った衝撃は、聖人である神裂の腕力を軽く越えており、その衝撃によって神裂の両腕はビリビリと電気が腕の中を喰い散らかすような痛みが襲っていた。

痛みを感じながら、神裂はその原因であるズイードと彼が持っている武器を鋭い目付きで睨みつける。

ズイードが持っているのは先ほどから見せている閃光の剣と、変化を見せた後から片方の手に持っている、微妙に持つ部分の短さが気になる槌だ。

「なんだ、これが気になるのか？」

神裂の視線を追ったズイードは、その視線が自分の持つ武器に向けられていると分かると、その槌を見せびらかすように前方に突き出した。

「その武器、その力、一体何があなたをそこまで」

「ふっ…聖人、貴様は神の力を完全にコントロールしたいとは思わないか？」

「な、力のコントロールなど出来るわけが…ッ！！まさかあなたはッ！？」

ズイードは神裂の驚愕の表情を不気味に笑みを浮かべた。

「神の力を行使出来る聖人と言えど、完全なコントロールなど出来るわけがない。よほどの魔術師でなければな」

「だが…」とズイードは言葉を続ける。

「『果実』を使うことで、俺は神の力を完全にコントロールすることが可能になった。トールの力をな」

「『果実』？、それにトールとは北欧神話における神の一角のはず。するとあなたは北欧神話系結社の人間ということですか？」

「その通りだ」と肯定したズイードに神裂は言葉を続ける。

「ですが、北欧神話系結社のトップは壊滅したはず。あなたは生き残りだと？」

「貴様は”世界樹を絶やさぬ者”や”知を刻む鉄杭”のことを言っているのか？」

あんなゴミ共と同格とされるのは心外だ。あれはブリュンヒルド”エイクトベルなどという者に恐怖を抱いた挙げ句に壊滅した、ただの雑魚共だ。

北欧神話系五大結社などと言われて調子に乗った奴らとは違い、俺はずっと闇の中で力を蓄えてきた。神話における絶対的な神の力にな

「その力で一体なにをするつもりですか？」「なに、戦ってみた相手がいるのさ。俺のこの力が”奴”にどう通じるのか知りたい。それだけだ。

その為に禁書目録の10万3000冊が必要なのさ。

最も、俺としては幻想殺し（イマジンプレイカー）の力を利用したかったが、行方不明になられちゃ話しにならない」

”だからさっさと禁書目録のところに行かせてもらおう”

瞬間、ズイードが動いた。

だが神裂にはそれが判らなかった。

ズイードの速度は神裂の反応速度を軽く上回っていたのだ。

神裂の懐に入ったズイードはそのまま柄の短い槌を横殴りに振るう。

反応速度の遅れた神裂だったが、彼女も聖人としてのプライドがある。

このまま負けるようでは自分に付き従ってくれている部下や、同じ清教に所属している仲間に申し訳が立たない。

未だに痺れの取れない腕をなんとか動かし、神裂は七天七刀を自分に向かつてくる槌を受け止める為に構えた。

それをズイードは高飛車に嘲笑う。

「ハハッ！！そんな力で、俺のミヨルニルが防げるかアアッ！！」

ゴッ！！と

衝撃と共に七天七刀を構えていた神裂は、その力の差によって刀ごと弾き飛ばされた。

そしてそのまま体勢を整えることなく出来ず、神裂は女子寮の壁に向かって叩きつけられた。

「ぐッ！……ガッ、あ……」

肺の中の空気を一気に体内から吐き出した神裂はそのまま地面に向けて倒れていく途中だったが、

「悪いが、俺は徹底的に敵を潰す質なんだ。これで終わると思うなよ」

いつの間に接近したのか、ズイードは神裂を下から覗きこむようにしながら呟き、うつ伏せの形で倒れていく神裂の背中目掛けて槌を振り降ろした。

だがそれは突如現れたふたつの閃光の剣によって阻まれた。

「ギイイイイイン！！」と音が鳴り響き、ズイードの目線の先にはうつ伏せに倒れた神裂を庇う形でその閃光の剣で槌を受け止めるキヤーリサの姿があった。「……ウッ……くッ……きつついね……これ……」

「貴様……」

ズイードの力に閃光の剣を握るキヤーリサの手が震える中、キヤーリサは後方で倒れ伏している神裂に話し掛ける。

「おい、神裂、いつまで寝てんだし。さっさと起きろ」

「……………」

神裂の返答はない。ただじつとそこにうつ伏せに倒れていた。

「テメー、守りたいものがあんだろ。だったら寝てる暇なんてないだろーが……」

キヤーリサの怒号が飛び交う。

「テメーの聖人の力はその程度かッ！！」

その時、神裂の体がピクリと動いた。

「……………う、るさ…いい、ですね……………」

キヤールリサの怒号が神裂の何かに反応したのか、体を震わしながら痺れる両腕にありつたけの力を込めて体を起こす。

「言わ、れ…なくてもッ……………起き上が、るッ…つもり…でした…よ」
「ならとつとと立ち上がれ」

キヤールリサの言葉で神裂は自分が守るものを思い出した。

ズイードの力によって圧倒され倒された自分に付き従ってくれる大切な部下達。

この女子寮で生活しているアニーゼやオルソラ、シェリーやシスター達。

そしてインデックス。

インデックスはあの少年が命を懸けてずっと守ってきた。

そしてあの少年がいない今、あの子を守るのは自分達しかいない。自分達があの子を守らなければならないのだ。

彼が戻ってくることを信じて。

だが、体が自由に動かない。

「ッ……………くッ…」

どうやら先ほどの攻撃によって片腕が折れてしまったようだ。

キヤールリサも限界が近いのだろう。

今、自分には目の前の男を倒す力はない。

だがやらなければならない。みんなを守る為に。

神裂は体が軋むような感覚に襲われながら次第にキヤールリサを押していく目の前の男を睨みつける。

「……………え……………」

神裂は無意識の内に声を発した。

今、神裂の目に映るのは目の前にいるキヤールリサやズイドなどではない。

そのもつと奥。

ズイドの後方にいつの間にか立っている人物。

恐らくキヤールリサにはズイドが邪魔で見えてはいないのだろう。だが神裂にははつきりと見える。あそこに立っている人物が。

見覚えのあるツンツン頭をしているが、見覚えのない黒のロングコートのようなものを着て、まっすぐにこちらを見つめている。

すると『彼』はこちらに向けて足を動かし始めた。

「おい、何してるんだ神裂!？」というキヤールリサの声も、今の神裂の耳には届かない。

じつと『彼』がこちらに向かって歩いてくるのを見つめていた。

そして……。

「おい」

『彼』の声が先ほどのズイドのように耳に響き渡った。

しかし先ほどのように不気味なものなど何も感じない。

何か暖かいものが神裂の中に流れてきた。

『彼』の声を聞いたズイドは槌をキヤールリサの剣と交えたままゆつくりと自分の後方を振り向いた。

そしてキヤールリサは、驚愕の表情に顔を染めている。

「これ以上好き勝手にはさせねえ」

そして『彼』の変わらない顔と声が神裂達の五感に焼きついた。

そして『彼』は帰ってきた。

上条当麻が。

第十四章 大切な人の為に・前（前書き）

今回は前後編に別れております。

どうかお楽しみください！！

良ければ感想もお願いします！！

第十四章 大切な人の為に・前

10

神裂の瞳に映る上条当麻。

これこそ幻想ではないかとも思ったが、現実には彼は存在し、今自分達の目の前に立っている。

今すぐに、この崩壊した女子寮の恐らく崩れていないであろう場所にいるインデックスに今すぐ会わせたい衝動に駆られた神裂だが、それに達するには障害がある。

神裂とキヤリーリサの目の前に立つズイードは、後方に立つ上条当麻の姿を見て驚愕の表情も恐怖の表情も浮かべることなくただ。

笑みを浮かべていた。

「ほう……行方不明というからてっきり死んだものと思っていたが、どうやら誤算だったらしいな。

まあ、嬉しい誤算ではあるが」

ズイードは上条当麻という最高の獲物を見つけたことで、もう神裂やキヤリーリサに興味がないのか、上条に目を向けたままだった。

神裂やキヤリーリサからすれば隙だらけではあるが、その隙をつく為の体が動かない。

ふたりの体はズイードの強力な力によって消耗し尽くしていた。

上条は歩いてきた足を止め、ズイードを見つめていた目を動かし、彼の後ろで消耗している神裂とキヤリーリサの姿を捕らえ、ふたりのボロボロな姿に少し悔しそうに唇を噛みしめた。 そんな上条

とは逆に喜びの色を帯びたズイードの言葉が響いた。

「嬉しいぞ上条当麻。貴様が生きていると分かれば、もう禁書目録を捕まえる必要もない。貴様に役に立ってもらおうか」

「一体何をする気だ？」

「なに、その右手で少しばかり壊してほしいものがあるのさ。最も、壊せるかどうかはあまり期待出来んが」

「そんな期待も出来ねえことの為に神裂達をボロボロにして、あいつらを、オルシユア達を利用したのか」　　「オルシユア？」と一瞬上条の言っている人物が誰か分からないような声色を上げたズイードだったが、思い出したように笑みを浮かべ、

「ああ、あのどうしようもない復讐心に駆られた低能な兄弟か。そうかあいつらを倒したのは貴様だったか」

「低能、だと……」

上条の声色が少しの怒りを帯びる中、それとは裏腹にズイードは楽しいような調子で、

「低能だとも。くだらない復讐心に駆られ、それを利用されているとも気づかずに囷にされたバカだ。

しかもその上簡単にやられるような雑魚だったとは、聖人が聞いて呆れる」

ズイードの言い分に、上条は殴りたい衝動を押し殺して、ギリッと拳を握りしめる。

あの兄弟はローマ正教を憎んでいた。

それは認めよう。

だが、その憎しみに漬け込んで利用するなんてことは、況してやその憎しみを利用した挙げ句にバカにするなんてことは、上条には絶対に許せなかった。

「デメエ……、あの兄弟がどんな思いで戦ったのか分かってんのか……？」

「さあな。知りたくもないし、知る必要すらない。

そんなくだらん話より、さっさとあの兄弟を倒した力を俺に見せて

みろ、上条当麻」

ズイードは挑発的な笑みを浮かべて上条に戦いを促す。
いい加減に我慢の限界に達した上条は、拳を力強く握りしめ動いた。

「いや、あの兄弟の内のひとりは俺様が倒したんだがな」

上条とズイードの耳に声が響いた。

瞬間、真横から炎の柱が直線を描いてズイードへと放たれた。

「フツッ！！」

ズイードは慌てる様子を垣間見せずに槌を横に一閃した。

すると槌の先から雷の柱が飛び出し、炎の柱目掛けて同じように直線を描いて飛んでいった。

ドンッ！！と

柱と柱がぶつかり衝撃と振動を発生させる。

だが炎の柱は雷の柱の質量のとの差が大きく、次第に炎の柱はその勢いを無くし、雷の柱によって中心から貫かれ消滅した。

雷と炎の光がその周囲を包み明るくしていたが、炎の消滅と共にその輝きは失われた。

「ふん、なかなかの力だな。さすがは神の力と言ったところか」

そう言って現れた人物、右方のフィアンマは、崩壊した女子寮の一角に立ちズイードを見据えていた。

フィアンマを視界に捕らえた神裂やキヤーリサがその姿に驚き、

目を見開く。このタイミングで現れれば、誰であろうと上条当麻と右方のフィアンマと一緒に行動していたことは誰でも察しがつく。
第三次世界大戦においてその力と力をぶつけあった両者が、共に行動していることに驚愕し疑問に思った。

「神裂」

神裂達が疑問の声を口に出そうとした間際、上条は神裂に対し口を開いた。

「神裂達は怪我の治療をしてきてくれ。ここは俺とフィアンマがやる」

「い、いや、しかしッ!」「大丈夫だ」

とっさに反論に出ようとした神裂を、上条はゆっくりと優しい声色で話しかける。

「絶対に勝つからさ。安心してくれ」

その上条の顔には笑みが浮かんでいた。

神の力を振るうズイドに対して、勝つ自信の表れなのか。それとも再会の喜びによるものなのか。

神裂にはまったく解らず、上条の笑みを見て、反論する気力と言葉を失った。そんな神裂にキヤリリサが声を掛ける。

「行くぞ神裂。そんなに戦いたいなら、さっさと治療してさっさとここに帰ってくればいいし」

「……分かりました」

キヤリリサに後押しされ、体のあまり動かない神裂はキヤリリサの肩を借りて立ち上がり、女子寮の中にいるシスター達に回復魔術を施してもらう為に、向かいにいる上条から背を向けた。

だが、スツと上条のほうを振り向き、声を掛ける。「頼みます。

上条当麻」

”おう”と返事をした上条から再び背を向けて歩き出した神裂の顔には僅かに笑みが浮かんでいた。

そしてキヤリリサと共に女子寮への道を歩き、その手前で立っているフィアンマを見てふたりは足を止めた。

なぜあの右方のフィアンマが上条当麻と共に行動しているかは分からない。

この人物には、今女子寮に在るであろう自分の友人を駒として扱われたこともあるので、あまりいい感情は抱けない。

だが、ひとつだけ言いたいことがあった。

「上条当麻を頼みます」

「……言われるまでもない。さつさと失せろ」

それだけ口にしたフィアンマに少し頭を下げた神裂は、キヤールサの肩を借りて歩き、フィアンマを通りすぎた。

崩壊した女子寮の穴から中に入り、そのまま壊れていない方に向けて歩き出す。アニーゼ達は既に行った後であり、そこにはオルソラなどもいるだろう。

そして恐らくインデックスも。

着いたらすぐにみんなに、あの子に彼が、上条当麻が戻って来たことを伝えたいが、それは今の状況ではあまり良いこととは言えない。

彼の生存が無事だと分かれば、あの子はみんなの忠告など無視して、一目散に彼の元に向かうだろう。

だがあそこには今神の力を振るう強大な敵がいる。魔術師としてはあまり力を持たないあの子を行かせれば怪我をしてもおかしくない。

だからこそ今はこのことは伏せておこう。

そう心に決めた神裂はキヤールサの肩を借りて痛みが襲う体を動かして静かに歩いていく。

上条は神裂達が行く姿を自分と同じようにずっと見ていたズィードに言葉を掛ける。

この男の性格だと、神裂達が行く姿を黙って見ているはずがないと思っていた上条は、神裂達に目をやりながらも意識はずっとズィードの動作に集中していた。

だが幸か不幸か、ズィードは特に何の反応も見せずじただじっと見つめているだけだった。

そして神裂とキヤリリサが女子寮の内部に入って姿が見えなくなり、上条はズィードに疑問を投げ掛けた。

そしてズィードの解答は、

「あんな奴らは気にするまでもない。俺の目的は今から上条当麻、お前を動けなくなるまで痛めつけてから」奴”のところまで導くことだ」

”それに”とズィードは言葉を続ける。

「戦争を止めた英雄の上条当麻に、神の右席のトップである右方のフィアンマ。こんなビックゲストが来てくれるとは嬉しい予想外だった。

だから”奴”と戦う前に貴様らで確認しておこうと思ってな。俺自身の手を」

「”奴”？誰だよそれ？」

ズィードの言う”奴”とやらはローマでのオルシユアとの戦いの時も、オルシユアがその言葉を口にしていたことを上条は思い出した。

オルシユアはそいつも復讐の対象のように話していた。

一体それが誰なのか、上条にはあの時からずっと疑問に感じていた。

そしてその疑問を解消する言葉をズィードが口にする。

「魔術師、”アレイスター・クロウリー”さ」

「なッ！！」

アレイスター・クロウリー。

オルシユア達の父親と同じく、魔術師でありながら科学に手を出した異端であり、歴史的に最強と謳われた伝説の魔術師。

上条はその名前を聞いて、ロシアのあの山小屋でのオッレルスの言葉を思い出した。

歴史では死んだと伝えられているその魔術師は、今は科学の総本山である学園都市の頂点だと。

ズイードの目的はアレイスターⅡクロウリーとの戦い。

つまりそれは。

「てめえ、まさか……学園都市を襲うつもりなのか!？」

9月30日。

後の『0930』事件は、学園都市へと襲撃を開始した前方のヴェントによって引き起こされ、この事件がきっかけで科学サイドと魔術サイドの衝突を明るみに出させ、そしてその結果”第三次世界大戦”という巨大な戦いにまで発展した。

その影で暗躍していたのは、今自分と協力しているフィアンマだが、彼曰く、戦争を引き起こしたのは人々の中にある暗い欲望や思想だと。

ようやく一時的な収まりがついた科学と魔術の争いも、とてもギリギリなバランスの中で保っている。

そしてそのバランスは、誰もが壊そうと考えればすぐに壊れてしまう脆弱なものだ。

今、何かのきっかけがあれば、ふたつの相対する力は再び争いを始めるだろう。

ズイードという男がやるうとしていることは、そのバランスを再び跡形もなく破壊するということなのだ。

「そんなことをしたら、また戦争が始まっちゃうだろうが!!」

「ふん、だが何か忘れてはいないか上条当麻」

「忘れてる? 一体何を?」
「アレイスターⅡクロウリーは元々魔術側の人間だ。そして奴は科学に手を出した異端者として魔術師達に始末された。大多数の奴らはこう思っているだろう。だが、奴が死

んでなどなくしかも科学の総本山の長についていると知れば、魔術師達はとう思うと思う？」「そんなこと……あッ……」「気づいたか？」

ズイードの言葉に上条は思考を働かせたが、その答えはものの数秒で上条の頭に浮かんだ。

殺したと思っていた人間が、実は死んでいなかった。
それが分かれば再びその人間を殺そうと動くだろう。

「アレキスター」「クロウリー」が生きていると判れば、魔術師達は一齐に奴のいる学園都市へ侵攻を開始するぞ。そうすれば9月30日に起こった事件よりもさらに規模の大きな事件になるだろう。
アレキスターが学園都市の長についている時点で、学園都市そのものが攻撃の対象なのさ。奴がああ街を支配している限りな」

「くっ……」

「ここで俺を倒したところで、魔術師達は次々に攻撃を始めるだろう。貴様にそれを止めることが出来るのか？上条当麻」

ズイードの問いに上条は少し戸惑いを見せた。

全ての魔術師を止めることなど、出来るかなんて分からない。

自分がちっぽけな存在だなんてことは自分が一番理解している。
だが。

「それがどうした」

ちっぽけでも勇気を出せば何だって乗り越えられる。

いつもそうだったじゃないか。

「無理でもなんでも、やらなきゃ始まらねえだろ！俺が何かをやることで少しでも救われる奴がいるなら、なんだってやってやる！だからこそ、お前を学園都市へ行かせるわけには行かねえ！やっ」と手に入れた平穏なんだ！！

そいつを壊すってんなら、今ここでぶち殺すッ！」「やってみろ！まとめてかかってこい。神の力をその体に刻みつけてやるッ！」

ふたりの叫びが空に響き渡る中、ズイードは持っている槌を体の

前で円を描くように回し、螺旋状の風が少し上条の髪を揺らす中、ズイードは槌の先の部分を地面に突き刺した。

ドンッ！！と

音と共に地面と槌の密着している部分から雷の凶器が全包围に拡散した。

パターンなど持たずに無差別に拡散し周囲のものを破壊し尽くしていく雷の渦の中、フィアンマは自分に向かってきた雷を腕のない右肩から出した微弱な『第三の腕』の力で薙ぎ払う。だが『第三の腕』はその出力を安定させることなく雷を薙ぎ払った直後に空気中に砕け散った。

上条は足を使って回避行動を取り、自身の持つ幻想殺しにを横殴りに薙ぎ、複数の雷の凶器の軌道を上にそらす。

だが、そんな中でもズイードの攻撃はさらにその速度を増す。

ズイードは槌を真横から上に半円状に動かす。

すると槌が通り過ぎたところの虚空から、閃光の剣が綺麗な列になって出現した。

何をするでもなくただ浮かんでいるいくつもの閃光の剣は、ズイードの手の動きに合わせて宙を舞った。剣は今も炸裂する雷の凶器とは違い、まるで意志があるように標的に定めた上条とフィアンマに襲いかかる。

「チィッ！」

「おおおおッ！！」

雷の凶器を避けながら襲い来る剣を避ける。

上条とフィアンマの戦いは防戦一方だった。

弱まった『第三の腕』をカバーする為に自らの足で回避行動を取るフィアンマは、最小限は足のステップを使って回避しているが、ここぞという時に『第三の腕』を使い、ズイードの放つ攻撃を薙ぎ払う。

上条も走りながら攻撃を避け、肝心な時は右腕を振るい攻撃をそらす。

「そらそらアツ！！避けるばかりじゃ俺には勝てないぞ！！」

ズイードの声が雷のスパーク音と共に響き渡る。

さらにズイードは槌を振り上げて思いきり地面に叩きつけた。

ゴンッ！！と

衝撃音が響いたが、その動作による攻撃は何も起こらない。

「……ッ！なんだ！？」

幻想殺しで攻撃を防ぐ中、上条がズイードの行動の意味を掴みかねていると、「上条！！上だッ！！」

フィアンマの怒号にも似た声が響く。

次の瞬間、

ドンッ！！！！と、

大地を揺らすほどの衝撃波がフィアンマの体を揺らした。

大地が震えるのを体全体で感じる中、フィアンマの視界にはひとつの光景が目映る。

「ぐッ、おおおおおおおおおおおおおおッ！！！！」

天空から降り注ぐ莫大な光の柱を、片腕ひとつで支えている上条の姿がフィアンマの瞳に映る。

「ぐウウウッ！！」

莫大な質量の雷を一身に受ける上条の右腕には、あり得ない程の激痛が走る。（……ッ！！こいつ、オルシュアの攻撃よりもさらに強い攻撃をッ！！）

以前ローマで受けたオルシュアの最後の攻撃。

ズイードの攻撃はそれを軽く上回り、上条の右腕に激痛を与える。そこに影がひとつ。

フィアンマの『第三の腕』が上条の幻想殺しの受けている負荷を分散した。

ドンッ！！と、

衝撃音と共に突風を巻き起こして消滅した莫大な雷の柱と共に、フィアンマの『第三の腕』もそれに続くように形を崩して分散した。

その時、

ビュンツ！！と

何かが空気を裂くような音が上条とフィアンマの耳に届いた。辺りを見ようとフィアンマが首を動かそうとすると、

「フィアンマツ！！」

上条の叫びと共にフィアンマは上条に腰をギュツと抱きつかれてそのまま地面へと横向きに倒れた。

体が痛む中、上条に抗議の言葉を言おうとしたフィアンマの真上を何かが通り過ぎた。

通り過ぎた”それ”はビュンツ！！と音を立てて、そのまま女子寮に突っ込んで行った。

激しく音を立てて崩壊する女子寮を見ていた上条とフィアンマだったが、そこにズイードの声が響く。

「よく避けたな。褒めてやろう」

そう言ったズイードは片手を前に出して手のひらを大きく開いた。すると、崩壊した女子寮の一角から何かが再び音を立てて飛んでいくのが見えた。

上条とフィアンマが、それを真下から見ていると、その飛んでいたものは見事にズイードの出していた片手の中に収まった。

上条達がズイードの片手を見ると、それは先ほどからズイードが振るっていた槌だった。

「な、なんだよそれ。手元に戻ってくるなんて、反則だろ」

上条の驚愕の色を帯びた言葉にズイードは、

「反則？それをいうなら貴様が一番そうだろ。」

その不可思議な右腕、それこそが一番の反則だ。これくらいなんてことない」

幻想殺しは、超能力も魔術も大天使の存在すら打ち消せる。

確かに他の魔術師や超能力者に見れば、それ以上の反則はない。

そのことを上条当麻本人が自覚していないだけだ。「そこでボサ

ッとしてる暇はないぞッ!!」

瞬間、ズイードは先ほどのように雷の凶器を炸裂させるのではなく、槌と閃光の剣を持って上条達に接近した。

神の力をコントロールするズイードは、聖人と同等、それ以上の身体能力を備えており、その身体能力を生かした結果、上条達のいる場所に一瞬でたどり着いた。

いくら奇怪な右腕を持つ上条と云えど、その攻撃に反応出来なければ幻想殺しはなんの効果も生み出さない。

そして上条はズイードの恐るべき速度に反応することが出来なかった。

そしてズイードの槌が上条目掛けて振り降ろされる。

だが、

ギイイイイイイン!!と、音を鳴り響かせ、ズイードの槌と『第三の腕』を圧縮し、フィアンマの属性である火との魔術的な組み合わせによって完成した、フィアンマの新たな炎の右腕から生成した炎の剣が、ぶつかりあう。

「引っ込んでろ上条!!」 フィアンマの声が響くと同時に、ズイードの槌と閃光の剣が交互にフィアンマに振り降ろされる。

ガギガギガッギギギイイツ!!

と、互いの持つ武器から鳴り響く音と同時に火花が散る。

(チッ!!俺のこの右腕はそう長くは持たない!!)

ズイードの槌と剣を受け止める中で、フィアンマは自分の右腕に意識を向ける。

フィアンマの今の右腕は『第三の腕』とは違い、すぐに形を失ない消滅することはない。それがこの右腕の強みだ。

しかしそれでも『第三の腕』ほどの力は出せない。 この炎の右腕は確かに相手の強さに応じて出力を調整する。

それに変わりはない。

だが、その出力は”相手の強さよりも上の出力への調整”ではなく、相手の強さに拮抗した出力の調整”に変化してしまっている。

つまり以前とは違い、ただ右腕を振り回すだけでは勝てない。

『第三の腕』の力だけではなく、それを振るう、フィアンマ自身の力が重要になってくる。

しかもこの右腕は、非常に無茶な、例えるなら歯車の欠けた部分にその欠けた部分のパーツに似た異物を無理矢理挟み込んで強制的に動かしているようなものだ。

近いうちに無理がたたり、あっという間に使い物にならなくなる。故にこの右腕は長時間この右腕としての状態を保っていることが出来ない。

それがこの右腕の弱みだ。

そして今も出力の調整によって、フィアンマはズイードとの拮抗したつばぜり合いを繰り広げる。

そんな中で、炎の剣を振るうフィアンマの目にズイード以外の影が映る。

フィアンマとズイードの剣撃を見ていた上条は、ふたりがその力をぶつけあう中で、出来る限り気配を殺しひっそりとズイードの後方に回り込んだ。

そしてフィアンマとの剣撃をするズイードの背中目掛けてその右手の拳を振るう。

「おおおおッ!」

上条の叫びが響き、拳がズイードに命中するとフィアンマも、上条自身も思った。

だが、

「甘いな」

ズイードの声が響く。

瞬間、

バリバリバリバリッ! ! !と、大気中に音を鳴り響かせ、輝きと共にズイードの全身から雷の凶器が炸裂し、全包围に拡散した。

「ッ! ! !」

上条はとっさに右手を動かして目に見える範囲の雷を消滅させる。

だが、それでも雷の凶器はその数と勢いを無くさない。

しかも右手で防ぐには範囲的に限界がある。

上条の体に複数の雷の凶器が押し寄せ、身体中のありとあらゆる部分を切り刻む。

「ぐッ！が、あッ……ぎッ！！」

上条の体を雷が切り刻む中、フィアンマの体にも雷の凶器が炸裂する。

雷を薙ぎ払うにしても至近距離であり、その薙ぎ払った時の僅かなタイムラグによって雷はさらに速度を増して襲いかかる。

「ごッ！……ご……がッ！！」　ズイードを中心に、雷光が上条とフィアンマを包み込み、その光の中でふたりの血飛沫が飛ぶ。

やがて、雷光はその輝きを徐々に失ない、その雷光の発生した中心には傷ひとつすることなく立つズイードと、近くには体の至る箇所から血を流してうつ伏せに倒れる上条とフィアンマの姿があった。

「……ッ……う、あ……くっそッ……」

「……ッ……やつ、て……くれた、なあ……」

血を止める訳でもなく、ただ体を起こす上条とフィアンマを見て、ズイードが口を開く。

「貴様らの力はそんなものか。とんだ期待外れだぞ。力試しにもならないな」

期待外れという言葉を使うズイードだが、その声色は意気消沈というよりも、血を流す上条達の姿を見て自分の力が凄いと知ってはしゃぐ子供のような楽しい雰囲気をかもし出していた。

「もっと全力で来い。上条当麻、右方のフィアンマ」「う、うるせえ……」

「言われなくても……そのつもりだ……」

瞬間、フィアンマは左の手のひらを前にかざした。

ゴバッ……と

大質量の炎が噴き出し、直線を描いてズイードへと飛んで行く。

「そんなものが俺に通用するかッ!!」

ズイードは高飛車に声を上げ、閃光の剣の切っ先を飛んで来る炎に向けた。

すると、閃光の剣は切っ先からその姿を一瞬で崩壊させ、莫大な雷の塊になって炎に衝突した。

ドンッ!!と

衝撃音が大気中に響き、その中で質量の差がありすぎる炎と雷の攻防は、徐々に雷がその力を持つて炎を押し始め、やがて呑み込み、炎そのものを雷の光が包み込むと、衝撃波を発生させて破裂した。

そして、雷と炎の残視を視界に納めているズイードの後方に影がひとつ。

「おおおおッ!!」

再び後方に回り込んだ上条は、その奇怪な右手をズイードの持つ槌に向かって伸ばす。

幻想殺しを持つ上条の、魔術師に対する戦闘のスタイルは、その魔術師を倒すか、或いは魔術師が利用する術式や霊装を壊すか。

超能力者と違って魔術師は、自身が使用する術式や霊装に頼るものが多く、その霊装などが破壊されれば、魔術師はもはや魔術師としての力を失なう。

それが普段から特別な力を持つ超能力者達との決定的な違いだ。

だがズイードの場合は、霊装などでは無く、ズイード自身が神の力を有しており、そこらの魔術師とは違う。

だからまずはその力を少しでも半減させる為に、上条は先ほどからズイードが振るっている槌に狙いを定めた。

(これを壊せば少しはまともに戦える!!)

そして上条の右手はズイードの持つている槌に手を伸ばす。

だが、その手前で、槌は上条の右手の届く範囲内を抜け、上条の右手は虚空を掴んだ。

「甘いなア!上条オッ!!」

瞬間、

ゴッ！！と、

上条の脇腹に衝撃が走る。

ズイードの槌が上条の脇腹に食い込み、上条の体勢を無理矢理変化させる。

「ゴッッ……がッ、ア……」

体が強制的に横に曲がり、脇腹がメキメキと音を立て、体の中を血が上向きに流れ、口から血を吐く。

そして、上条の体はズイードの槌が振りきれると同時に空に浮き上がり、飛んでいく。

「上条ッ！！」

フィアンマの声が響くと同時に、上条は浮き上がった体を地面に叩きつけた。「ぐッ……ぎッ……がはアッ！！……ッ」

口から吐血を繰り返しながらも、上条は脇腹の痛みを堪えながら立ち上がる為に力を入れる。

だが上条の体は全体にうまく力が入らず、なかなか立ち上がれない。

そんな上条を見てフィアンマは苦く顔を歪める。

（あいつの体もそろそろ限界に近い。ローマでの戦闘の後、すぐにイギリスに向かったせいでもう体に回復出来ない）

オルシユアとの戦闘の後、すぐにイギリスに向かったせいでもう回復が出来ていない上条の体は、もうボロボロだったのだ。

ほとんどの時間を移動の為に使い、体力の回復など微塵も出来ない。

回復魔術などを使えばいいのかもしれないが、もちろんそれは出来ない。

上条当麻自身が持っている、右腕の力によって。

「……ッ……ウ、くッ……」

だが、それでも、上条は立ち上がる為に体に入力を入れる。

（こんなところで……敗けられない。ここで敗けたら学園都市が……）
今自分が相対している男によって、学園都市にいるみんなが、知

り合い達が傷つくかもしれない。

そしてもうひとつ。

恐らくこのイギリスのどこかに。

もしかしたらこの女子寮のどこかにいるかもしれない”自分の謝るべき人”に、（こんなところで敗けてから、頭なんて下げたくねえッー！）

その為に、上条は全身に力を入れる。

ズイードに勝ち、自分の目的を果たす為に。

「……………当麻……」

その時、

声が聞こえた。

今まで何度も聞いた自分の名前を呼ぶ『彼女』の声を……。

第十五章 大切な人の為に・後（前書き）

やっとイギリス編も終わりに近づいていきます。
最後までお楽しみください！！

第十五章 大切な人の為に・後

1
2

少々時間を遡り……。

「急いで術式の準備を！！」

「そっちの方はこちらに移して！！」

衝撃音と振動が響き、崩壊の足音が聞こえる女子寮の、上条やフイアンマ達が戦いを繰り広げる正反対の、まだ崩壊などが進んでいない場所。

そこに、女子寮に住む大半のシスターなどが集まっていた。

「あたしは大丈夫ですから、早いところあっちの方を治しちまってください」

「し、しかし隊長！隊長も怪我を！！」

その一角に、頭から少し出血をして、地面に腰を降ろしているアニエーゼの姿があった。

神裂やキヤリリサがズイドと戦いを繰り広げている内に倒れているシスター達を連れてここに来たアニエーゼは、怪我をしている自分の部下と同様に怪我の手当てを受けている。

その時、

ドンッ……と

アニエーゼの耳に爆音が響き、それと同時に女子寮全体が揺れ動

くの感じた。「向こうはかなり激しくなっちまってるようですね」

「ええ、そのようでございますね」

アニエーゼの言葉に返答をしたのは、怪我をしたシスター達を回復魔術を使って治療を施しているオルソラだった。

「それにしても、神裂様達は大丈夫でしょうか？」

傷だらけのシスター達を引き連れて来たアニエーゼから、敵の相手を神裂やキヤーリサがしていることを聞かされていたオルソラは、アニエーゼ達をこんなめに会わせた敵の力に恐怖を感じ、そして今現在その敵と戦っている神裂達の安否を心配する。

そんなオルソラにアニエーゼは、

「大丈夫ですよ。イギリスきつての聖人と第二王女が戦ってるんです。負けるわけがありません」

そう、確かに自分が戦っていたあの男は並の魔術師では到底たちうち出来ないほどの実力を持っていた。だが今あの男と戦っているのは、自分などとは比べようのない力を持っている聖人と、あのナイトリーダーの率いる騎士団を手中に納めるほどの力を持つこの国の第二王女。

負けるはずがない。

アニエーゼはそう考えていた。

いや、そう確信していた。

だが、

ザワツと、アニエーゼとオルソラのいる場所から遠く離れたところでざわめきが起こった。

「一体なんでございましょうか？」

オルソラがその方角に視線を向けながら疑問の声をあげ、対しアニエーゼは何も言わずにその方角を見つめていた。

やがてそのざわめきは、どよめきに变化し、周りのシスター達から驚きの声色を帯びた言葉が次々に発せられる。

アニエーゼはその状況を目にして、何か良からぬことが起きたと勘づき、腰を降ろしていた体を起こす。そんなアニエーゼの体を

気遣って、オルソラはアニーゼの体を支える。

そんなふたりの目の前が、シスター達が一斉に後ろに引くことにより、まるで何かに分断されたように大きく開かれる。

そしてアニーゼとオルソラはその先にあるものを目撃する。

「なッ……!!」

アニーゼの驚きの声と共に、オルソラも口元を両手で抑えて息を呑む。

ふたりの驚愕によって見開かれた瞳の先には、額と口から血を流し、キヤーリサに肩を貸してもらいながら、ボロボロの体をアニーゼ達の方に引きずる神裂火織の姿があった。

神裂に肩を貸しているキヤーリサも、その真紅のドレスはところどころが無惨に破れ、少し額から血を流していた。

一同が呆然とその姿を見つめる中、その視線を集めている神裂とキヤーリサは、神裂の膝がカクツと力無く折れ、そのせいでキヤーリサの肩にかかる重さが、先ほどよりも増し、ふたりは崩れるように倒れた。

「ッ、大丈夫でございますか!？」

崩れ落ち、倒れたふたりに駆け寄ったオルソラの声に神裂は、痛みをこらえながら口を開く。

「す、すいません……こんな、不甲斐ない姿で……」「いえ、それより早く怪我の治療をッ……」

オルソラは早速、神裂の怪我に対する回復魔術を施し始めた。

そばにいたキヤーリサも他のシスター達の手によって、回復魔術に取りかかる。

アニーゼはそんな光景を未だに呆然として見つめていた。

先ほど向こうから聞こえた爆発音からして、ここまでの距離を、爆発音がしてから短時間で移動出来るはずがない。

つまりあの爆発音がした時には、このふたりは既に戦いが繰り広げられる場所から離れ、ここに来る道を歩いていた。

そしてあの爆発音からして、あの男はまだ倒されてはいない。

つまり、神裂火織とキャーリサはあの男に敗北し、自分達と同じように怪我を治す為にここに逃げて来たと考えられる。

（まさか……このふたりが敗けちまうなんて……）

聖人と軍事的な力を持つ第二王女が負けた事実から、自分が先ほどまで相対していた男の力が、聖人を上回っていることに驚きと恐怖の感情が沸き上がるが、それ以上に、疑問という感情が、アニエーゼの中に沸き上がる。

このふたりがここにいるということは、先ほどの爆発音は一体なんなのだろうか？

あれが戦闘によるものなら、今現在あの男と戦う者がいるということには違いないが、アニエーゼにはその人物が想像出来ない。

いくらなんでも、このふたりが自分達より弱い人間に後を任せるような、そんな気弱な人間とは到底思えない。

自分達より弱い人間が来れば、このふたりは自分達の持てる全ての力を使ってあの男を倒そうとするだろう。

だが実際はそうしなかった。

つまり聖人である神裂火織が、自分よりも弱くはない人間が来たということだ。

魔術の世界では核兵器に匹敵すると言われる聖人と同等の力を持つ魔術師が、アニエーゼには想像出来なかった。

だからアニエーゼはオルソラの回復魔術を横に仰向けに倒れて施されている神裂に、

「神裂さん、ひとつ聞きたいことがあるですがね」

神裂は仰向けに倒れたまま首を動かし、声をかけてきたアニエーゼの顔を視界に捉える。

「何でしょうか？」

「今あそこでは、誰があの男と戦ってんですか？」

その言葉に神裂は少し躊躇ったように口をつぐんだ。

それを見てアニエーゼはいぶかしげに眉を寄せ、続けて言葉を口にする。

「どうしちまつたんですか？、私はただあの男と戦っている人のことを聞きたいだけです」

「そ、それは……」

神裂は言葉をとどころ切りながら、辺りにチラチラと目線を動かす。

そんな神裂を、アニエーゼやオルソラ、他のシスター達が不思議そうに見ていたが、少しチラチラと視線を動かした後、神裂は何かを警戒したような慎重な口調で言葉を口にする。

「あの、あの子は？」

「あの子？……インデックス様のことでございますか」

オルソラの言葉に神裂は首をコクリと上下に動かして肯定した。

そんな神裂にオルソラは首をキョロキョロと左右に動かして辺りを見回す。

「そういえば、先ほどチラツ見かけたのですが、いつの間にいなくなって……」「な、なんですって！？」　オルソラの言葉に、神裂は治療中にもかかわらず上半身をガバツと起こしたが、案の定、体全体に激痛が走り再び仰向けに倒れた。　ハアハアと苦しげに息継ぎをする神裂は、自分を心配そうに見つめるオルソラに声を掛ける。

「あ、あの子は……いつここにいたんですか？」

「ええーと、本当についさっきまででございましたよ。途中、「この力……もしかして……」などと口ずさんでいましたが、その後すぐに離れてしまわれて……」

「……ッ、しまった……」

神裂はしくじったと言わんばかりに下唇を噛み締め、天井を睨み付けた。

そんな神裂の様子を見て、アニエーゼやオルソラは眉をひそめて見ていたが、オルソラは意を決して、神裂に話し掛ける。

「あの……神裂さ……」

しかし、オルソラの言葉を遮るように神裂は再び治療中の体を起こした。

オルソラの回復魔術によって多少は傷が癒えてきているのだろう。今度は激痛に屈することなく体を立たせよう試みたが、神裂の治療を担当しているオルソラが、それを許すはずがない。

「か、神裂さん！？まだだめでございますよ。治療の途中です！」
案の定、オルソラは立ち上がろうとした神裂の両肩を手で抑え込んだ。

だが神裂は、

「離してください！！このままではあの子が危ないんです！！」

「で、ですけど……神裂さんのお体はまだ……」

「では、すぐに治療を終わらせてください！！すぐにです！！」

神裂の切羽詰まった表情に圧されて、オルソラは再び回復魔術による治療を開始した。

（あの子はあそこに行つてはいけない。あそこには神の力を持つ怪物が。

それに……あそこには彼も……）

神裂の表情はますます不安げなものへと変化していった。

行間・2

白い修道服、しかしただの修道服ではなく霊装の中でも稀少価値の高い霊装、『歩く教会』を身に纏うその姿は、以前と全く変わっていない。

だが、その霊装を身に纏っている少女は、以前よりも少しやつれており、目の下にもあからさまに隈が貼っていて、以前から彼女を知っている者からすれば、見るのに少し躊躇いを持ってしまふ容姿だろう。

その少女、インデックスは今、崩壊が進み不規則に揺れを起こす女子寮の廊下を小走りで進んでいた。

向かっているのは、先ほどから爆発音が絶えず続くあの場所。
（この感じ……今まで感じたことのない異質な魔力の流れ……。しかもそこらの属性にほとんど当てはまらない。当てはまるとすれば……）

天使。

その二文字がインデックスの頭の中をよぎる。

（でも、天使とどこか違う……、一体何なんだろう）

いつものように部屋にいと、突然爆音と揺れを感じたインデックスは、部屋の外が騒がしくなっていることに気付き、一目散に外に出た。

その後、偶然落ち合ったオルソラと一緒にシスター達のほとんどが集合している場所に出向いた後、血を流してやってきたアニエーゼ達を目にし、神裂達が戦っているという場所から何か異質な魔力の流れを感じたインデックスは、オルソラ達から離れ、ひとりその魔力の元のところへと走り出した。

だがひとり走る中で、インデックスはある事を考えていた。

自分が行ったところで、一体何が出来るのだろうか？

自分には、10万3000冊の魔導書があるにしても、それを戦いに使用することは出来ない。

自分に出来るのは、その知識を誰かに伝えることで勝つための道を切り開くことだけ。

自分自身の力で戦うことは出来ない。

そんなインデックスの近くには、いつも自分の力を頼りしてくれる、自分を信じてくれる彼がいた。

だがその彼はもういない。

彼は自分やみんなを助ける為に、その命を犠牲にした。

(……当麻……)

心の中で上条の名前を呟いたインデックスは、少し目元に涙を溜めたが、すぐに袖でそれを拭う。

乗り越えなきゃいけないのは分かっている。

だが、インデックスの目元には涙が溜まり続けた。 彼が生きて帰ってくることを信じているから。

周りの誰もが諦めたとしても、自分だけは諦めない。

だって彼は自分に言ったから。

”必ず戻る”と……。

目元に溜まる涙を流さないように堪えながら走るインデックスは、遂に異質な魔力の発生源にたどり着いた。

その時、インデックスの耳に声が聞こえた。

「上条ツー!!」

その瞬間、小走りで息切れしたインデックスは、呼吸を整えるどころか、呼吸を止めた。

名前を叫んだ男の声には何処と無く聞き覚えがあるような気がした。

そしてその男が叫んだ名前には、強烈に聞き覚えがあった。 仮にその名字の人がこの世界に何人いようと、インデックスの頭に浮かぶのは、自分の大切な『彼』のことだけ。

そしてインデックスは見た。

血を吐きながらなんとか立ち上がるようにする『彼』の姿を。

自分が今まで待ち続けていた『彼』が今、自分の目線の先にいる。瞬間、インデックスの頬を一筋の涙が伝い、地面へと落ちていく。もはや我慢などという言葉は、インデックスの頭の中から消えていた。

ただ涙が目から流れ堕ちていくのを感じながら、立ち上がるように

する『彼』の姿を瞳に映す。

そしてインデックスは、一言だけ呟いた。

それが意識的なのか、無意識的なのかは分からない。

自然と『彼』の名前が口から出ていた。

「……………当麻…」

13

上条は一瞬動きを止めた。

いや、正確には止まった。

自分の名前を呼ぶその声を聞いた瞬間、体が金縛りにあったように動かなくなった。

ポタポタと汗と共に血が肌を流れていく感覚と、徐々に金縛りのようなものが解けていくのを感じながら、上条はゆっくりとその声のした方向に首を動かした。

自分の顔を見て、驚愕の表情を浮かべて目を見開いている少女の姿を見た上条は、少女の名前を呟く。

「インデックス……………」

上条とインデックスは、互いの顔を見つめたまま硬直していたが、そこに、

「ほづ、禁書目録か」

ズイードの楽しそうな声色を帯びた言葉が響く。

「せっつかくだから、禁書目録も連れていくのも悪くないか、どちらかが使い物にならなかった時にちょうど良い」

瞬間、

ゴバツ！！と

幾千の雷の凶器が放たれ、インデックス目掛けて容赦なく襲いかかる。

「……はッ！！」

突然自分に放たれた雷の凶器に、驚きの声を上げたインデックスだが、彼女にはその攻撃に対抗する為の力はない。

10万3000冊の魔導書を有するインデックスだが、彼女にはその力を意識的に操ることはほとんど出来ない。

しかも、今のインデックスは、上条の消失に心を大きく痛め、あまり食事も取らずにいた為に、以前よりも体の調子が悪くなっている。

そんなインデックスに、ズイードの放つ幾千の雷を避けられるはずがない。

インデックスはただそこで雷が迫ってくるのを見ているしかなかった。

だが、そんなことを上条が赦すはずがない。

「くッ… おおおッ！！」 インデックスに放たれた雷の凶器に鋭い目付きを持って視線を向けた上条は、あまり動かない体は無我夢中で叩き起こし、インデックスの元に走り出した。

「はああああッ！！」 上条は右手の拳を力強く握りしめ、雷の凶器のひとつを拳を叩き込んだ。

パァンッ！！と、

音を立てて拡散した雷の凶器は、その欠片のひとつひとつが破壊されていない雷の凶器にぶつかり、本来の向きを変え、地面に爆散する。

吹きあがる爆風を防ぐ為に目を瞑って『歩く教会』で顔を隠した

インデックスは、爆風が勢いを失っていくのを確認すると、目の前に目を向けた。

そこにいたのは、ところどころが不規則に破れた黒いコートを身に纏って、体のあちこちから血を流している、ツンツン頭の少年。

その姿に、インデックスの目元に再び涙が浮かぶ。そんなインデックスの目の前に立つ上条は、ゆっくりとインデックスの方を振り向く。

そして上条とインデックスの目が合う。

「…と、とうま……」

恐る恐る、今自分の目の前にいるのが本当に上条当麻なのか、それを確認しようとしているのか、インデックスを怯えたように上条の名前を口に出す。

「本当に…とうま、なの……？」

「……………ああ、インデックス、ちよつと待ってろ」

そう言つて上条は目の前で笑みを浮かべて立っているズイードをまっすぐに見つめ、言い放つ。

「すぐにあいつを倒すから。その後、お前に言うことがあるんだ」

上条の瞳には再び闘志が宿り、ズイードを睨み付けた。

ズイードは笑みを浮かべたまま上条に言葉を掛ける。

「“すぐに倒す”？ならさっさとやって見る。その実現はほぼ不可能なことを」

瞬間、

ゴバツ！と、

ズイードの後方に炎が沸き上がる。

直後にズイードの真後ろに迫る人影がひとつ。

右腕の力を再び発動させたフィアンマは、その右腕の手のひらに炎を集める。螺旋の形になって集合していく炎は、やがて先ほどよりも巨大な剣の姿に形を取り、フィアンマはその巨大な炎の剣をズイードの後頭部に振り降ろした。

だが、ズイードの手にする槌がその行く手を阻み、莫大な火花を

散らせ、剣と槌が衝突する。

槌に阻まれたフィアンマは、剣を構えたまま後退し、両足を地に着け、剣を両手で強く握りしめて横殴りに一閃した。

瞬間、ゴバツ！と、

炎の剣からその巨大な剣と比例するほどの巨大な炎の塊がズィードに襲いかかった。

自分に襲いくる炎の塊に対し、ズィードは再び槌を勢いよく炎に向かつて投げつけた。

高速の速さで投げられた槌は、一点にその力を集中させ、いとも容易く炎の塊の横に真っ二つに裂き、槌はその勢いを弱めることなくフィアンマ目掛けて回転して飛んで行く。

「チィッ！！」

フィアンマは先ほどのように体を地面に倒し、槌を回避する。

そして地面に倒れた瞬間、フィアンマは左手を地面にバンツ！と勢いよく叩きつけた。

すると、ズィードの立っている場所が、徐々に真紅の色に染まっていた。

「ツツ！！」

自分の立つ場所が不気味に変化したことに気づいたズィードが、後ろに後退した瞬間、立っていた場所から炎の柱が天空に向けて勢いよく伸びていった。

「おおおッ！！」

後ろに後退したことで一瞬隙を見せたズィードに対し、フィアンマはチャンスと言わんばかりに炎の剣を何度も振り降ろしていく。振り降ろされていく炎の剣からいくつもの斬撃が放たれ、飛んでいく炎の斬撃は一斉にズィードに襲いかかる。

炎の斬撃が飛んでいく中で、ズィードは右腕を虚空に伸ばした。次の瞬間、フィアンマの真横を槌が再び回転しながら通過し、主の元へと飛んでいく。

そして槌を掴んだズィードは、フィアンマと同じように槌を何度

も振り降ろしていき、雷の斬撃を発生させていく。

次々と衝突する炎と雷の斬撃は、爆音と衝撃波を生み、やがて双方の斬撃はひとつも残らずに大気中に塵となって消えた。

瞬間、フィアンマとズイードは同時に地面を踏み込み、視線を合わせたまま駆け出していく。

そして互いの武器を構え、その力をぶつけていく。

「ここにいてくれ!!」

フィアンマとズイードの攻防を見ていた上条、自らもあの中に飛び込む為に、後ろにいるインデックスに告げると、互いの武器をぶつけ合うふたりの元に駆け出す。

「待って!!」

だが、服の袖をインデックスに掴まれ、上条は駆け出そうとしていた足を止め、インデックスの方を振り向く。

「ついてくるなんて言うんじゃないよな」

「違うよ。あの真っ赤な髪の人ので教えておきたいことがあるの」

「教えておきたいこと?」 上条はそう言ってインデックスの顔を見つめる。

そこにあつたのは先ほどの泣きそうな顔などではなく、オルソラやヴェントの時に見た真剣な顔だった。インデックスには、戦う為の力はあまりないが、それを補うように、彼女が持つ10万3000冊の魔導書の知識が、何度も上条達を助ける為の重要な物になっている。

そして今回も、インデックスは上条達を助ける為に、その知識を使う。

「あの人の力は天使の属性に近いけど、でも天使の属性にしても明らかに違う力が働いているんだよ」

「どういうことだ?」

「これまで幾つもの術式を見てきたけど、あんな術式は見たことがない。あれは天使よりも、神の力にとっても似てる。」

それにあの人が持つてるあの槌。あれは北欧神話に出てくる”トール”の持っている”ミヨルニル”によく似てる。

さつき手元に戻っていたのがその証拠」

「どうやったら倒せる」

「あの人は聖人とは比べものにならない力で、神の力を操っているけど、どうやって操っているのかさっぱり分からないんだよ。

だからそこじゃなくて、別の部分を叩こう。

とうまは見える？あの人の槌を握っている方の手」

「手？」

上条がインデックスの指した指の後を辿って行くと、フィアンマと剣撃を繰り広げるズイードの槌を握っている手にたどり着いた。

上条はズイードを倒すことや、槌を破壊することに夢中で気づいていなかったが、ズイードの槌を握る手には、鉄で出来た籠手のようなものが装着されている。

「あれは”ヤールングレイプル”だよ。

神話ではあれを手につけることで、トールは強大な力を持つミヨルニルを振るうことが出来たんだよ」

「じゃあ、あれを破壊すれば……」

「うん、強大なミヨルニルの力を抑えられず、あの槌を操ることは出来なくなる」

「そうと分かれば……」

上条はズイードの手に装着されている”ヤールングレイプル”に視線を集中させ、破壊する為に動く。

「とうま……」

上条の耳にインデックスの声が届いた。

だがその声は先ほどのような真剣な話をしている時の声ではなく、それ以前の泣きそうな声に戻っていた。

「ちゃんと、戻ってくるよね……」

「ああ……約束する」

そう言って上条はインデックスから背を向け、さらに言葉を続け

る。

「必ず、戻るから」

そう言うと、上条は駆け足でフィアンマ達のところへ向かった。そして自分から背を向けて走っていく上条の姿を、インデックスは不安げな瞳で見つめていた。

その中で、フィアンマとズイードは互いの持つ武器と武器をぶつけ合い、幾つもの剣撃を放つ。

「さすがは『神の右席』のトップ。なかなかやるな」「それはもう昔の話だ」

幾多の斬撃が飛び交い、互いがその攻撃を受け止め、放っていく。だが次の瞬間、ズイードは剣撃の嵐から後退し、右手に持つ槌を大地に叩きつけた。

それを見たフィアンマは、先ほどの天空から降り注ぐ雷の柱を、上条が受け止めていた光景を思い出す。（…ッ！まさかッ！）

そう思い、フィアンマが空を見上げた瞬間、フィアンマの視界が光によって包まれた。

瞬間、

ドンッ！！！と、

再び大地が激しく揺れ動き、悲鳴をあげる。

フィアンマは天空から降り注ぐ雷の柱の輝きによって目を瞑ってしまい、雷がぶつかる前に、右腕を『第三の腕』の形に戻すことが出来なかった。

だが、それにもかかわらず、フィアンマに雷の柱が降り注ぐことはなかった。「うおおおおおおおおおおおおッ！！」

上条が再び天空から降り注ぐ雷をその右手一身に受け止めていたのだ。

「上条ッ！！」

「フィアンマ！聞けッ！！」

雷の柱が右腕を徐々に押していく中、上条は後方にいるフィアンマに言葉を告げる。

「あいつの右手にある鉄の籠手だ！！それを狙う！！援護してくれッ！！」

その瞬間、上条は右足に全体重を乗せ、勢いをつけ雷の柱をグッと鷲掴みにして右腕を斜め上に振り上げた。

上条の右腕の動きに合わせて、雷は斜め上にそらされ、天空の雲に突き刺さりそのまま空高く登って行った。

「なにッ！？」

まさか雷の軌道をそらして攻撃を回避するとは思っていなかったズイードは、初めて驚愕の表情を浮かべたが、すぐに冷静になり、上条達への次なる攻撃に打って出ようとした。

が、その動作の前に、ズイードの視界の先にいたフィアンマが右腕を地面に叩きつけた。

炎が波のように地面を伝っていき、左右に伸びた炎がズイードを囲い込むように円の形を作ると、円の形を作っていた炎の波が一斉に爆発した。

ドンッ！！と、

爆発と共に爆煙が発生し、それは炎の波と同じように円状にズイードを囲んだ。

「ふんッ、ただの目眩ましなど、俺には何の意味も無いぞ」

ズイードは楽しげにそう呟くと、自分の周りを囲んでいる煙の中から抜け出そうとせず、煙が渦巻く円の中心でただじっと立っていた。

ズイードには、何が来ても絶対に負けることはないと確信していた。

自身の絶対的な神の力を信じて。

そして次の瞬間、煙の一角から炎の塊が飛び出し、ズイード目掛けて飛んで行った。

「そんなものが俺には通用しないと、何度言ったら分かるんだ貴様らはッ!!」　ズイードはその炎を、いとも容易く槌で薙ぎ払った。だが、そのズイードの後方から煙を突っ切って駆け出してくる人物が。

ズイードはそのことに気づいており、そして炎が出てきた方向からして、後方から自分に向かってくる人物は限られてくる。

そしてその人物が自分の近くに來たことを足音の近さで判断し、ズイードは左の手に閃光の剣を出現させ、その人物の名前を叫びながら後方を振り向いた。

「そろそろ楽になれ!!」

上条当麻アツ!!」

瞬間、

ズンッ!!と、

閃光の剣がその男の右腕を貫いた。

だが……。

「なッ……」

ズイードの瞳は驚愕によって、再び見開かれた。

ズイードが閃光の剣を突き立てた人物。

自分の髪と同じ赤のコートを身に纏った男、上条当麻ではない、右方のフィアンマ。

その人だった。

そしてズイードが斬った部分には、胴体などがなかった。

右腕の力を解いたフィアンマの右腕には、もちろんはなから腕などとはついていない。

ゆっくりと切り取られたコートの右腕の部分が風に揺られながら地面へと落ちていく。

そして、ズイードの読みが外れ、今ここにいるのがフィアンマならば、炎が飛んできた方向にいたのは……。

そう思っただズイードが振り返った時には、もう遅かった。

既に自分の目の前で、その異質な右腕を大きく振り上げている上

条当麻の姿がズイードの両目に焼き付いた。

閃光の剣が、フィアンマに付いていない右腕を貫いたことで、自らの勢いを止められず、ズイードは体勢を整えることも、反撃の一手を打つことも出来なかった。

そして何の防御もされていないズイードの槌を握る鉄の籠手をつけた手に、上条の右手が触れた。

瞬間、

壊れていく音と共に槌を握るズイードの手から重みが消えた。

「あ……がアツ……」

同時に、ヤールングレイプルを失っても槌を握っていたズイードの右手に、何か得たいのしれない感覚が押し寄せた。

やがてそれは激痛へと変わり、ミヨルニルの槌の部分から突如発生した複数の雷が、ズイードの右手を串刺しにした。

「があああああああああああああああッ！！！！」

ズイードの絶叫が辺りに響き、ズイードは激痛のあまり既に血まみれになっていた右手を槌から離れた。その瞬間、槌はその暴走ともとれる行動をやめ、ゴンツという音と共に地面に転がった。

「ガッ、くうおおおおおおッ！！き、貴様らッ！よくもオツ！！」

血まみれの手を震えながら抑えているズイードは、憎しみの対象である上条とフィアンマを睨み付けた。体からは雷がバチバチとスパーク音を響かせ、ズイードはさらに言葉を、もはや呪いを呟くように口を開く。

「貴様らアツ！！殺す殺す殺す殺すッ！！殺してやるウツ！！」ズイードの言葉を聞いている上条とフィアンマは、目の前にいる男の攻撃に備えて構えを取る。

「もう、幻想殺しなどしたことかアツ！！跡形もなくぐちゃぐちゃにしてやる！！」

「いえ、そこまですよ。ズイード」

だが、そこにひとつの声が上条達の耳に響いた。

瞬間、

ドンッ！と、

衝撃音と共に、いつの間にかズイードの目の前に立っている男が、ズイードの腹部に拳を入れていた。

「ッ……ぐオッ……ユベリス、貴様あ……」

「大人しくして下さい、私はあなたの暴走を止める為にここにいます。少し眠っていて貰いますよ」

「な……んだ……と……」

そう言って気絶したズイードを、ユベリスは両腕で抱え込む。

そして地面に堕ちているミヨルニルに視線を向けると、片手を出して指を鳴らした。

すると、パチンツという音と共に、そこにあつたはずのミヨルニルが跡形もなく消え失せた。

「まったく、ヤールングレイブルを無くしてしまうなんて、とんだ失態ですよ」 そう言ったユベリスは、気絶しているズイードをバカにしたように見下した目で見つめていた。

すると、今までその光景をずっと見ていた上条とフィアンマの方に顔を向け、「すみませんね、彼がバカなことをして。僕の方から厳しく叱っておきますから。今日のところはお許し下さい。では……」

……

「おい！ちよつと待て！！」

あまりに突然のことに呆然としていた上条は、とつさにユベリスに声を掛けたが、時既に遅く、ユベリスは待つことなくズイードと共に、ミヨルニルと同じく一瞬でそこから消えてしまった。

突然のことに静寂に包まれていた上条だったが、そこにフィアンマが言葉を掛ける。

「……ふう……とりあえずは終わったのか……」

「……ああ、そうだな……」 あまり納得の行かない結末だと上条も

フィアンマも感じていたが、敵が消えてしまった以上、納得するしかない。

それにふたり共、体中から出血していて正直限界だったのだ。ここで連戦をしていたら、ほぼ間違いなくあの男にやられていただろう。

「ありがとなフィアンマ、作戦に協力してくれて」

「ん、作戦？」

「ああ、あの煙の中でさ。」俺に向けて炎を撃ってくれ”って言うて、すぐに作戦に協力してくれただろ」「まあ、奴を攪乱する為に役立つと思ったからな。

煙の中から炎が放たれば、大抵の奴は当然そこにいるのが、先ほどから炎を行使している俺だろうと思うだろう。

だがそこで俺が放ったものをお前が跳ね返したら話は別だからな。

おかげでまんまと引っ掛かってくれた」そう言つと、フィアンマは上条から背を向けて歩き出した。

「行くのか？」

「ああ」

上条の問いにフィアンマは足を止め、上条の方を振り返ることなく話を続ける。

「もうローマ正教に興味はない。俺はオッレルス達と行動する」

「お前がいたことは、やっぱり言わない方がいいのか？ヴェントにも頼んでおいたけど」

「そうしてくれ」

「……フィアンマ」

「なんだ……」

上条は自分に背中を向けるフィアンマに精一杯の笑みを浮かべる。なんやかんや言つて、少しの間旅をしていた仲なのだ。

上条の頭に思い出が蘇る。

「ありがとな。お前がいてくれて良かった」

「……ふっ……」

フィアンマはそう言って歩き出し、上条はその背中を笑みを浮かべたまま見つめていた。

すると、フィアンマは不意に立ち止まり、呟いた。

「感謝する。上条当麻。」

また会おう」

それが上条に聞こえていたかは、分からない。

ただ上条は去っていくフィアンマの背中を笑顔で見つめているだけだった。

そしてフィアンマの姿が見えなくなったところ、上条はとりあえずの終わりを迎えた戦いの疲れなのか、深く溜め息を吐き、それから決心したように後方を振り返った。

そこに見えるのは、自分が謝ると誓った少女。

ベツレヘムの星で、霊装越しに記憶喪失のことを話して、許してくれた少女。上条は傷だらけの体を引きずって少女の方にゆつくりと歩いて行く。

そして少女の手前に来ると立ち止まり、少女の顔を見た。

「……とうま」

インデックスは目元に涙を溜めながら傷だらけの上条の顔を見た。そんなインデックスの顔を見て、罪悪感に襲われたが、そんな罪悪感を感じている前に、上条にはやることがあった。

たとえインデックスが許してくれたとしても、自分がそれをまだ許せない。

自分がインデックスを騙していたことには変わらないのだから。

だから、上条はゆつくりと膝を地面につけ、その次に両手を地面につけ頭を下げた。

そしてずっと言おうと心に決めていた言葉を、ベツレヘムの星にいた時にインデックスに言った言葉を、上条は頭を下げたまま口にする。

「じゅめん」

その一言だった。

その一言をずっと言いたかった。

彼女が許してくれているとしても、この言葉だけはどうしても言いたかった。自分の目の前で、傷だらけの体で土下座して謝ってくる上条に、インデックスはただ涙を流すだけだった。

そして謝って来た彼に、インデックスの言う言葉は、

「どうでもいいよ……」

一見冷めたような言葉だが、上条にはその言葉が暖かいものとして、体の中に流れ込んできた。

そしてインデックスはさらに言葉を続ける。

「どうでもいい。どうでもいいよ。とうまが無事に戻ってきてくれたら、そんなのどうだっていい」

インデックスは両目から大量の涙を流していく。

「寂しかったんだよ？……とうまが居なくなって」

上条はそんなインデックスの言葉をただ聞いていくだけだった。

「悲しかったんだよ？……とうまが私のそばに居なくて、私ひとりで……ずっと……ずっと待ってたんだよ……」

ポタポタと涙が地面を濡らしていく。

「謝るなら……もうッ……ひとりにしちゃ……嫌だよ………とうま……」

その瞬間、インデックスは上条に抱きついた。

上条のコートをインデックスの涙が濡らしていく。「とうまっ……」

とうま……」「……ごめん……もう大丈夫だから……そばにいるからさ……」

「う、あああッ……あああああああッ！！」

インデックスの泣き声が戦いの終結した場所に響き渡る。

ふたりの再会を見届ける者は誰もいない。

これはふたりだけの物語だと主張するように。

ふたりは互いの存在を確認するように体を抱きしめ、上条はインデックスの泣く声をただ黙って聞いていた……。

そして、少し時間が立ち、インデックスの涙は次第に止まっていた。

「落ち着いたか？」

「………うん……」

インデックスは一言だけ呟くと、抱きしめられていた上条の腕の中から出た。瞬間、

「え？」

上条とインデックスは揃って声を上げた。

インデックスの着ている服がなんの迷いもなくインデックスから弾け飛んだからだ。

インデックスの着ている服は、魔術の力が働いた『歩く教会』。

そしてその服ごとインデックスを抱きしめた上条の右手の幻想殺し。

疑問はすぐに解消された。

「とおおとううまあああ……」

体を両手で隠しながら、その体から黒いオーラを放つインデックスは、既に以前のインデックスに戻っていた。

「い、いやいやいやい！、流れ的にあそこは抱きしめなきゃい

けないパターンではなかったでしょうか！？

あんなワンワン泣かれたら俺もなんかグツとくるものがあつたし」

「ワツ、ワンワンなんか泣いてないんだよ！！」

「あれえ？そうだったけ？

泣きながら俺の名前を呼んでたのは、どこの誰だったけ？……って、

あれ？インデックスさん？

何ゆえ歯をカチカチさせてこちらに歩み寄ってくるんでせうか？」

上条の目の前に、黒いオーラを放出しながら歯をカチカチと、餌を求めてうごめく獣。

もとい、インデックスの姿があつた。

全裸の。

「とうま……私は誰かさんが私を放っておいたせいでお腹がペコペコなんだよ……」

「い、いや、放っておいたことは謝るけど、腹の具合まで上条さんのせいにされては困るんですが……」

「うるさいッ！！いいからさっさと喰われるッ！！」「ええええッ

！！喰われるつてもはや命令形ですか！？ていうか本当に待って！

今上条さんは体が傷だらけのボロボロで、その上頭部にダメージを喰らったら、本当に死んでしますよってッ！！……、ぎゃああああああああああッ！！不幸だああああああああああッ！！

！！」

イギリスの空に、上条の絶叫が轟く。

その絶叫に反応して、他のシスター達が駆けつけ、全裸のインデックスに頭部を噛みつかれて気絶している上条の姿を見て、みんなが再会の喜びの前に、少し引いてしまったことは、ここだけの秘密だ。

第十五章 大切な人の為に・後（後書き）

次の話しは後日談のようなものにする予定ですので、しばしお待ちください。

第十六章 科学の街へと（前書き）

この章で一応完結ということになります。

あまり完結っぽくないですが、一応は完結です。

重要な事は後書きに書きましたので、本文を読んだ後に読んでくれるとありがたいです。

ではどうぞ。

第十六章 科学の街へと

14

11月9日。

上条当麻の帰還から2日が明けた。

聖ジョージ大聖堂。

イギリスの中心街に存在するその聖堂は、その歴史ある姿を醜く歪めている。インデックスの『自動書記』の力によって地盤そのものが沈下していたが、

後日、イギリス清教に属する魔術師の力で、元の姿の4分の3ほどは復興しているその聖堂の内部に、ひとりの人間の姿がある。

「ええ、了解したにけるわ」

建物は既に完成はしているものの、建物に施す防衛の為の術式や霊装の配置が依然として進んでおらず、聖堂のあちこちに杖や剣などが置かれている中、場違いと言わんばかりに木製の椅子が無造作に置かれ、その椅子に腰掛ける人物。

ローラ＝スチュワートは、目の前に置かれた大型のテレビ電話に映る人物に話し掛けている。

「存在が確認された以上、上条当麻が学園都市に戻りしことは当然のことにつきるわ」

《そう言ってくれるとありがたい……》

ローラの話し相手。

学園都市統括理事長であるアレクスター＝クロウリーは、ローラの言葉に対し話を続ける。

《上条当麻は学園都市の人間だ。彼が超能力者の街に住んでいる以

上、たとえ力を持たない無能力者といえど、例外はない。

即刻、学園都市に戻って来てもらう必要がある」

学園都市の超能力者達は、外に出ることは極力制限をされており、学園都市の外などで怪我をした場合、一般の病院に行くことなどは許可されていない。

特殊な力を持つ超能力者達の体は、学園都市内部の医療機関でしか、治療することが出来ない。

一般の人間達が超能力者達に触れ、その力に対し、何か余計な考えや、調査に似た行為を防ぐためだ。

以前、アドリア海の事件で上条が、あの非人道的な物体にさせられて学園都市に送還されたのが良い例だ。

「彼を如何様にして戻せるのかしら？」

《こちらから回収の為の部隊を送る。それまでは上条当麻の身柄を保護してくれるとありがたい》

”了解したりけるわ”

と、言っただけでその地面まで伸びた髪を両手で解し始めたローラは、目の前にある画面から顔を隠すようにして口を開いた。

「それにしても、そちらの言う、ただの無能力者に戦争を止めるだけの力がありしけるなんて、どういう仕掛けがありけるのかしら……」

《……………》

ローラの言葉に、アレイスターは口をつぐむ。

画面越しに映る女が、自分に何を問いかけているか、十分に理解しているからだ。

すなわち、上条当麻の存在。

そして彼の右手に宿る力、幻想殺し（イマジンプレイカー）。

今まであらゆる事件を解決に導き、そして遂には第三次世界大戦という巨大なものさえも終結に導いた少年。

超能力や魔術、あらゆる異能の力を打ち消す、他のもの達と同じく異能の力を持つ少年が、学園都市においてただの無能力者には到

底思えない。

何か秘密がある。

ローラはそう考えているが、今や他の者達、学園都市の研究機関、世界中に存在する魔術結社なども、上条当麻の持つ力に強い疑問を抱いている。

そしてその疑問の答えを知っている人物。

その上条当麻が住んでいる学園都市の長。

そのアレイスターは、画面の先にいるローラをただじつと見つめていた。

しかし、アレイスターは突然顔に笑みを浮かべ、口を開いた。

《そうだな。それについては私も疑問に思っていたんだ…》

「……今まで調べたことがなかりしなの？」

《私も暇ではない。それに学園都市にいるすべての学生達を把握しているわけではないのでな…》

「……そう。何か分かりしことがあれば、連絡してただけりね」

《ああ、真っ先に連絡しよう……》

「では、また……」

ローラがそう言葉を口にした瞬間、アレイスターを映していた画面がまるで操作されたように消え、画面は真っ黒に染まったまま、再び輝きを放つことはなかった。

そして先ほどまでアレイスターを映していた、真っ黒に染まった画面をローラはじつと見つめていた。

（ふん……分かりやすきシラの切りかたね…）

ローラには、アレイスターが何かを隠していることが手に取るように分かっていた。

何せ相手はあの伝説級の魔術師、アレイスター・クロウリーだ。

こちらが下手をすれば、奴はどんな反撃を繰り出してくるか分からない。

恐らくアレイスターも、こちらに気づかれることを前提にシラを

切ったのだろう。

そしてアレイスターは、既に上条当麻のことを全て理解していて、こちらに教えるつもりは全くと言っていいほどない。

どちらにしろアレイスターは連絡などしてこないだろう。

ならば。

「……知りたいならば自分達で調べると、そういうことにけるのね

……」

そう言うところらは顔に笑みを浮かべた。

もう誰も映っていない真っ黒な画面に向けて。

15

「申し訳ない」

それが、先ほど上条と面会したローマ教皇マタイ・リースの最初の言葉だった。

戦いから2日が過ぎ、今までの戦いによる疲労と頭部損傷で丸一日、女子寮の損壊の被害を受けていない部屋で床に伏していた上条は、今日になってすっかり回復し、上条の帰還を聞いたマタイ・リースが面会を求めてきたのだ。

イギリス王室のエリザードの厚意に甘え、バッキンガム宮殿で上条と面会したマタイ・リースは、突然上条に頭を下げて謝罪の言葉を口にした。

ローマ正教の教皇が、なんの地位も持たない学生に頭を下げる光景など、想像も出来ないことだが、実際にそれをやらしてしまった上条は、なんやかんや言って不幸な人間とは言い難いかもしれない。ふたりの面会している部屋には、マタイ・リースの頼みもあって、上条とふたりきりの面会となり、ローマ教皇が頭を下げる場面上条以外見る者はいなかった。

それから30分ほど、部屋にあった椅子に腰かけて、上条とマタイ・リースは話をした。

マタイ・リースがローマ教皇というポストを降り、後の者にローマ正教を任せるということ。

そして秘密にするとの約束だったが、上条は自分と共に行動していたフィアンマのことを、マタイ・リースにだけこっそりと教えた。そのことを聞いてマタイ・リースの顔が少し柔らかげに微笑んでいたことが、上条の印象に強く焼きついている。

そんな話をしている内に時間は過ぎ去り、現在もローマ教皇をしているマタイ・リースは、仕事の為に急遽イタリアに帰ることになり、上条は最後に挨拶をしてマタイ・リースと別れた。

その後、バッキンガム宮殿を出ようとした上条だったが、途中たまたま居合わせたキヤリサに捕まり、”新しい携帯が手に入ったら連絡を入れる”と、恐喝まがいに言われ、キヤリサから電話番号の書かれた紙を受け取った。

上条が誰の番号か聞いたところ…、

「まあ、あとのお楽しみって奴だ」

と言って足早に去って行った。

実は上条は、ロシアで大天使にベツレヘムの星ごと突撃した際に携帯を消失し、以降新しい携帯を持つことなく過ごしてきたのだ。だが学園都市に戻れば安い値段で売っている携帯など腐るほどある。

だからその為にも、早く学園都市に帰らなければ。

そして、新しい携帯に今までの携帯に登録していた人達の番号を

聞く。

その人達の顔を思い浮かべながらそう思うと、上条はインデックスの他にも謝らなきゃいけない人達がいることに気づいた。

心配かけたであろう自分の両親。

一緒に苦楽を共にしたクラスメイト達。

他にも自分に接してくれていた色々な人達。

そして常盤台のビリビリ少女。

ベツレヘムの星に飛んでまで来てくれたのに、すんでのところで突き放してしまった御坂美琴の驚愕の表情が上条の脳裏に浮かぶ。

（ビリビリにも、頭下げて謝ったほうがいいかもな……）

そう考えながら、自分に向かってお得意の電撃を放つビリビリ少女の姿を思い出して少し苦笑いを浮かべた上条は、美琴の顔から浮かんでくるもうひとりの少女を思い出した。

「そっついや……打ち止めは大丈夫かな？」

御坂美琴の分身である妹達の司令塔の役割を持った美琴にそっくりの小さな少女。

ロシアで偶然会った時、打ち止めは何か得体の知れないもので苦しんでいたが、その後どうなったのかは上条は知らない。

そしてその打ち止めの側にいた人物。

以前学園都市で妹達の事件の時に戦い、さらにロシアの地でも相対した学園都市最強の超能力者。

一方通行。

どちらの戦いも上条は勝利したが、後者の戦いの時は一方通行は明らかに錯乱しているような状態だった。

そして一方通行とも打ち止めともロシアの地で別れ、そのまま現在まで会うことはなかった。

学園都市に戻ったのだろうか？

そうも思ったが、打ち止めのあの状態と、ロシアにいたことを考えるとただの旅行などで学園都市を出たのではないと、上条は考えた。

また何か妹達に関連した事件が起こり、そのせいで打ち止めはあんな状態になり、ロシアに逃げてきたのだろうか。

どちらにしろ、あのふたりがどうなっているかは学園都市に戻ってからじゃないとどうしようもない。

様々な思惑が頭の中で飛び交い、上条は改めて学園都市へと戻る決意を固める。

そんなことを考えている内に、上条は目的の場所にたどり着いた。イギリス清教の女子寮。そこが目的の場所であることに激しく疑問を覚えるが、それについては諸々の事情がある。

インデックスに噛みつかれて気絶したあと、神裂がその聖人の有り余る力でインデックスを引き剥がし、全裸で男の子に飛び付いていたことに軽く叱りつけている間に、他のシスター達によって運ばれた上条は、壊れていない部屋でそのまま丸一日眠った。

そして今日、人がまばらに活動を始め、朝日が昇る頃に目が覚めた上条は、最初はここが何処だか分からなかったが、片方の手に温かいものを感じ、そちらを見てみると、自分の片手を両手でギュッと握りしめ、ベッドに顔を埋めて寝ているインデックスの姿を見た。昨日自分が気絶した場所と、インデックスがいることを考えた結果、ここが男の禁断の花園、女子寮だということに気づき、なぜかここから出なければならぬと感じた上条だったが、インデックスの姿を見るとかなり躊躇われた。

このまま自分がいなくなり、空っぽになったベッドを見たインデックスは一体どう思うだろうか。

またこの間のように泣いてしまうのではないか。

そう思い、上条は男としての信念と、感情を衝突させた結果。感情に負けた。

その後、ローマ教皇のマタイ・リースが自分に会いたがっていると聞いた上条は、早速どこからか用意された男物の服に着替え女子寮を出た。

起きてからご飯を食べていなかった上条だが、バッキンガム宮殿へと出掛ける間に、オルソラから、

「美味しいものを沢山ご用意して、帰りをお待ちしているのでございますよ」

などと満面の笑みで言われてしまったら、あの禁断の花園に戻るしかないじゃないか。

上条は諦めたように溜め息をつきながら、襲撃によって倒壊し、修理が行われている女子寮の中に入っていった。

周囲の人に怪しまれないよう、こっそりと。

（こうなったら流れに任せよう！よし、そうだ！

さっさとオルソラの飯を食おうかな！！）

もはや、男の信念など知ったことではない。

そう思いながら、上条は倒壊の危機をまぬがれた食堂に足を進める。

「いやあー！シスターさんの飯は俺の妹と同じくらい旨いぜよ！でもやっぱり妹の方が旨いにゃー！！」

禁断の花園。

その花園の食堂になぜか響く男の声。

「……なにやってんだ……お前……」

食堂の長いテーブルの一角に乘せられた大量の料理。

そしてそれについている聞いたことのある声と独特な口調。

見たことのある金髪とグラサンの男。

土御門元春。

上条の頭の中に出てきたクラスメイトの内のひとり。

そしてイギリス清教に所属する陰陽師。

近くに立ってニコニコと笑みを浮かべているオルソラの目の前で、土御門はオルソラの作ったであろう料理、数時間前のオルソラの発言からして、上条の為の料理をインデックスに劣らない速度で食している。

「はむツうぐ…あーん、はぐ…」

その土御門の向かい側の席で同じようにオルソラの料理を食いあさっているインデックスは、この際スルーしよう。

そんな光景を、顔を少し引きつらせて見ている上条の視線に気づいたのか、土御門はフォークを握りながら上条の方に首を動かす。そして上条の顔を見ると、フォークを持ったまま手を上に掲げながら、

「おーうカミヤん！！久しぶりだぜい、元気にしてたかにゃー？」

「ああ……してたよ。遂さつきまではな…」

「ん？カミヤん、なんかテンションが低くないかにゃー？久しぶりに友人にあつたんだぜい、もつと喜んでくれても良いんじゃないかにゃー？」

俺は嬉しいぜよ。カミヤんとかうしてまた会えて」

「そりや…まあ…」

”俺だつて”と上条は思う。

たとえ土御門元春という男が魔術師だとしても、上条にとっては同じ高校に通う友人のクラスメイトという印象の方が強い。

久しぶりの再会はそりや嬉しいものがあるに違いない。

現に今、上条はなんやかんや言つて内心ではとても喜びに満ち溢れている。

久々の友人との他愛もない話を、こうしてまた出来るのだから。

「そんなことより、カミヤんもソラちんの作った料理食おうぜよ！めちやくちや美味しんだにゃー！」

「”ソラちゃん”て誰！？

まさかオルソラのこと言つてんのか！！」

「まあまあいいじゃねえか！ほら、リラックスの為に俺特製のコーヒーを飲むんだにゃー」

相変わらずの土御門の態度に呆れつつも、友人の変わらない姿に少しホッとしている上条は、土御門の隣の席に腰掛け、オルソラが上条のフォークやスプーンを取りに行っている内に、上条は土御門

の渡してきたコーヒを一口飲んでから、隣に座っている土御門に話し掛ける。

「で？お前は何でこんなところにいるんだ？」

男の禁断の花園。

もとい女子寮に同じくいる上条が言うのもなんだが、それは当然の疑問だった。

女子寮にすることもなんだが、土御門がイギリスにすることが上条には疑問だった。

土御門元春という男がイギリス清教に所属しているのは知っているが、上条の記憶では今まで土御門とはフランスなどは行ったが、イギリスには行ったことがなかった。

そしてイギリスに来たにしろ、どんな理由で来ているのか。

それが上条の最大の疑問だ。

まさかまたなにか良からぬことが起こったのではないか。

そんなことを考える上条の眉間にシワが寄り、そんな上条に土御門は、

「ああ、それはなカミヤん……」

瞬間、上条の体が前にぐらついた。

(……ッ……あれ？……)

それ以前に、上条の意識そのものが得体の知れない感覚によってぐらついていく。

体が言うことを聞かずに、勝手に力が抜けていき、意識が闇に持っていられる。

上条の耳にオルソラの心配そうな声がぼんやりと聞こえたが、それよりもなぜかはつきりと、土御門の声が上条のぼやけていく五感に響き渡るように伝わった。

「カミヤんの回収の為だ」

その瞬間、上条から五感全ての感覚が消えた。

” なにか ” がもう片方の ” なにか ” にぶつかり擦られ、摩擦されているような、キイイイイイイン！という音が聴覚を覚醒させた上条のうつすらとした意識の中で、耳に響いた。

やがて五感全ての感覚が徐々に覚醒していった。

「……ん……？」

そして覚醒した感覚によって気がついた。

自分の体が座り心地の良いファーストクラスに見えなくもない椅子に場違いな形で縛られていることを。 視界の両側に映る窓、窓、窓。

この耳に響く音。

そして上条は思い出す。 あの忌まわしい悪夢を。

最大時速7000キロオーバー。

あの凄まじいGと圧迫感。

あの悪魔に見えてくる怪物飛行機の姿。

（ま…、ま、さ、か…これは……）

「あれ？カミヤん起きちまったのか？相変わらずの不幸っぷりだにやー」

動かない体に冷や汗を流していく上条の耳に、今は憎しみの対象とも取れる楽しそうな声が聞こえた。

あの女子寮で突然襲ってきた眠気。

そしてその直前に口にしたコーヒー。

そのコーヒーを渡してきた人物。

上条は顔を引きつらせながら、首を声のした方に動かす。
そこに優雅に座っている人物。

「土御門さん？ 一体どういうことなんですかねこれは……」

上条の視線の先にいる土御門には、当然のごとく体を椅子に固定しているものなどない。

それだけでも上条の中に軽く殺意が沸いてくる。

「いやいや、カミヤンにはあそこで眠ってもらって、そのまま学園都市に帰ろうと思ってただけだよー」

「ふざけんなよ！ 急に現れたと思ったら急に睡眠薬入りのコーヒー飲まされた挙げ句に、起きた時に椅子に縛りつけられてるなんて、上条さんがあなたに何かしたっていうんですか！？」「いんや、俺個人としては何の怨みもないぜよ」

”ただ……”と土御門は先ほどの能天気な雰囲気消して、何かトラブルが起きた時に見せる真剣な顔つきになった。

それを見て上条は”何か自分が土御門を怒らすようなことをしたっけ”と思い、冷や汗を流しながら、土御門の次の言葉を待つ。

そして。

「カミヤン。カミヤンがいなくなったことで、舞夏の、舞夏の悲しそうな顔を見る羽目になったんだにゃー！！」

「……………はい？」

突然の土御門のカミングアウトに上条が呆然とする中、土御門は悔しそうに拳を握りながら語り始める。「カミヤンとインデックスがいなくなっってから、舞夏はじつと暗い顔をして、時たま料理を焦がしたりして、俺はそんな舞夏を見ていられなかったんだにゃー！それもこれもカミヤン！！全部お前のせいだ！！」

「いや、そんなこと言われても……って、つかそれってやっぱお前の個人的な怨みじゃねえか！！」

「ここでカミヤンが目を覚ましたのも、きっと天が俺に味方してくれてるからだにゃー！！」

つと、そろそろ出発だぜい。じゃあなカ・ミ・や・ん」

「おい！！ふざけんな！！こんな理不尽なことがあつてたまるか！！」

そんな叫びを上げている内に、いつの間にかシートベルト着用のサインが上がり、上条達の乗る怪物飛行機が徐々にスピードを上げ始めた。

離陸体勢に入ったのだ。「えッ！嘘嘘嘘！マジで勘弁して！！」
徐々に加速していく怪物飛行機に比例して上条は落ち着き無くしていく。

するとその時、上条の視線に白い服が目止まる。インデックスが首を斜めにしながら寝息を立てて寝ていたのだ。

恐らくインデックスも睡眠薬を盛られたのだろうと考えられるが、今の上条にはそのことを考える余裕など微塵もなかった。

上条は起きているのが自分ひとりだということに恐怖し、インデックスを起こそうと大きな声で呼び掛ける。

「イ、インデックス！！」

インデックス起きてくれ頼むから！！」

だがそんな上条の思いとは裏腹に、インデックスは「えへへ」と笑いながら寝言を呟く。

「とうみゃー、ハンバーグ、ちゅくつて……」

「っ、作るッ！いくらでも作ってやるから今だけいいから起きて！！マジで！！」

そんなことをしている内に怪物飛行機の加速は続き、上条にあの恐怖が蘇ってくる。

「インデックスさん！！」

インデックスさん本当に頼みますから起きてください！！なんで俺起きちゃったんだよ！！俺をひとりにしないでくれえええッ！！ぎゃあああああああああッ！！！！」

上条当麻の絶叫と共に、怪物飛行機は加速し空を滑空していく。

科学の街、学園都市に向けて……。

第十六章 科学の街へと（後書き）

この章で学園都市へと帰り、上条当麻とインデックスの物語は一応終了です。

ですがこのまま終わらせるつもりは全然ありません。
一応自分としては、

この完結は”この章の完結”という感じだと思っています。

今度からは、科学の街へと帰還した上条達の新しい。”新章”が始まると思うてくれた方が早いです。

その章では満をじして、

科学サイドの主役達を活躍させるつもりです。

ぶっちゃけると、最近の章に出した人を活躍させるつもりです。
他にも色々出すつもりなので、どうかこれからも応援よろしく願います。

『新章』に向けて

これはただの前書きのつもりです。

この次から”新章”ということになります。

第三次世界大戦を終え、

インデックス達の前に行き、学園都市へと帰還した上条当麻の新しい物語の始まりです。

個人的には魔術サイドの話よりも科学サイドの話の方が好きなので、結構気合いが入っています。

しかし、すぐに戦闘になるわけではありません。

初めの方は”パロディ”でやらせていただきます。

簡単に言えば原作の12巻のようなものだと考えてください。

次の話から始まります。

それではどうぞ。

第一章 新しい日々（前書き）

第一章 新しい日々

「御坂、本当にごめん。」

あの時手を伸ばしてくれたのに」

「ふん、何よ。突然帰ってきたと思ったら、その何の感情も込もっていい謝罪は」

「そんなことない。本当に悪いと思ってる。」

大切な人を悲しませたことをさ」

「た、大切な人って……、変なこと言わないでよね」「変なことじゃない。」

俺さ、気づいたんだ。自分が誰を好きなのか……御坂、お前だ」

「えっ……な、なによ突然……」

「御坂、いや……美琴……」「ちよつ、ちよつと……そ、そんないきなりっ……ひゃっ……」

瞬間、御坂美琴の意識は、まるで体が重力が無くなったように軽くなり、浮き上がった。

が、浮き上がっていた体は、突然浮遊感を失い、なんの抵抗も出ずに仰向けに落下した。

「にゃっ……!」

目を覚ました御坂美琴の目の前には、先ほどまでいたツンツン頭の少年など存在せず、寮の自室の天井が美琴の視界に広がっていた。

「……夢か……ははっ、なんてありきたりな……」

” あんな夢を見るなんて我ながら恥ずかしい”。

天井を見上げて、自分の見た夢に対して呆れ気味に苦笑いを浮かべた美琴は、スッと首を動かして、隣のベッドを見つめた。

「じゅ、じゅるる……うへ、へへへ……お姉さまぁ……」

後輩の白井黒子は相変わらずと言った感じで、涎を必死に吸い上げながら新品のように真っ白な輝きを放つ枕に頬擦りして眠っていた。

どんな夢を見ているのかは、この際無視しよう。

変わらない後輩の姿に深い溜め息をついた美琴は、次に自分のお気に入りゲコ太の時計に目をやり、そこに映されている時間を見た。

時間的には起きるにはまだ余裕がある。

どうやら今日は早く目が覚めてしまったと感じたが、

（あんな夢見たら、起きるに決まってるでしょうが……）

夢の内容を思い出して少し頬を赤く染める美琴だったが、不意に思い出す。

彼が帰ってきてから、もう1週間近く立ったのだと。

1

11月15日。

第三次世界大戦を止めたと騒がれている、あのツンツン頭の少年上条当麻が学園都市に帰還してから、既に1週間近くが過ぎていた。

あの怪物飛行機によって、軽いトラウマになりかけていた瞬間、上条のトラウマになりかけていた怪物飛行機は、その凄まじい速度によってイギリスから日本へと帰還した。

久々の学園都市にインデックスが目キラキラと輝かせている中、その隣に立つ上条はどんよりとした黒い雰囲気をもし出していた。

その後上条への怨みが晴れたのか、爽やかな笑みを浮かべながら降りて立った土御門に連れられて、上条とインデックスは第七学区にある、上条や土御門の通う高校へと連れてこられ、そこで待っていた青髪ピアスや姫神、吹寄、そして小萌先生などと再会を果たした。上条との再会に、青髪ピアスや姫神、小萌先生が目には涙を溜めながら笑顔を見せ、吹寄も憎まれ口を言いながらも顔には笑みを浮かべていたのを上条は見た。クラスメイト達との再会を喜んでいた上条だったが、それからが悪夢だった。

第三次世界大戦を止めた上条当麻の帰還を聞いた学校中の学生達が、上条の元に押し寄せ、復活したばかりの体でみんなから逃げ回る羽目になり、上条は学園都市中を走り回っていたが、そこで、走り去っていく上条当麻の姿を見た他の学校に在籍する学生などが、同じように上条を追いかけてきたのだ。

汗だくになって逃げ回り、そろそろ脱水症状を起こすんじゃないかというところで、上条はある人物と遭遇した。

学園都市に7人しかいないレベル5。

その3番目の位置に立つ常盤台の超電磁砲。

御坂美琴だ。

ロシアの地で、正確にはベツレヘムの星で顔を合わせ、そして別れたままだったふたりがようやく再会した瞬間だった。

感動の涙の再会。

インデックスの時のように、それを少々期待した上条だったが、その幻想は簡単には打ち砕かれた。

美琴は顔を合わせた瞬間、自身の力の象徴である超電磁砲を、何の迷いも見せずに上条に向けて放ったのだ。

連続で超電磁砲を放ってくる美琴に対し、上条はそれを右手で打ち消しながら説得していた。

すると、上条の説得が効果を発揮したのか、美琴は超電磁砲を連発した後、顔を俯かせ、言葉を何も発することなく黙り込んでしまった。

そんな美琴を上条は少々警戒しながら見つめていた。

いつあの超電磁砲を放たれるか分からないのだ。

もしかしたら自分が油断したところを狙っているのかもしれない。今まで、散々超電磁砲の的になっていた上条の当然の警戒だった。だが、上条は恐る恐る顔を俯かせたままの美琴に摺り足で近づいていくと、俯かせている美琴から何かが地面に零れていくのを見た。さらには少し肩を震わせている美琴を見て上条はすぐに、あの御坂美琴が泣いていることを悟った。

滅多に見ることのない美琴のその姿に、上条は深く罪悪感を覚え、先ほどのまでの警戒した様子など見せずに、ゆっくりと美琴の側へと歩いていき、俯かせて頭にポンツと右手を置いた。上条が「よ、よしよし……」と言つて軽く頭を撫でると、美琴は子供扱いされたことに腹が立つたのか、目元に涙を溜めたまま顔を上げ、電撃を放とうとした。

が、それは出来なかった。

美琴の頭の上に置かれた上条の幻想殺しの力によって、美琴の超能力は完全に封印されてしまった。

そのことに味を占めた上条は、美琴の頭から手を離そうとせず、逆に美琴の頭を先ほどよりも強い力で撫で始めていた。

しかし、そこに現れたひとりの人物によって、上条の三日天下もとい、僅か十数分の天下は過ぎ去った。

「とうま……」

という声によって、上条は無意識なのか、美琴の頭に乗っけていた手をスツとゆっくりとした動きで離していった。

そして上条はゆっくりとの声がした方向に顔を向けた。

その瞬間、上条の意識は突如としてブラックアウトした。

最後に上条が見たのは、真っ白な修道服の切れ端と、吸血鬼のように尖らせた歯を見せる大きく開かれた口だった。

そんなこんなで時間は流れていき、上条当麻とインデックスが学

園都市に戻り、早くも1週間以上が過ぎた。
そして、今日。

11月15日も、いつもと変わらない平穏な日々が訪れる。

2

「う……ん……」

広大な土地を有する学園都市。

その一角に存在するとある学生寮のひとつの部屋。 自宅である
その部屋で目を覚ました上条当麻は、朦朧とする意識の中で、いつ
もと変わらず、朝ご飯の支度をするためにあまり寝心地の良いとは
言えない風呂場のバスタブの中から起き上がる。

はずだった。

少なくとも以前学園都市にいた頃は。

現在、上条の寝ている場所はバスタブなどではなく、リビングに
あるこの部屋にひとつしかないベッドだ。

この部屋の住人が、この部屋のベッドで寝ることにおかしなところ
はひとつもないが、生憎この部屋の住人はひとりではない。

上条当麻ともうひとり、インデックスだ。

8月からこの部屋の住人と化したインデックスは、自らの寝床を
ベッドにしたことにより、上条は仕方なく風呂場で寝ることになっ
たのだ。

だが、インデックスは必ずというべきか、ベッドの端に寄り、ま
るで誰かの為にスペースを取っているような寝方をしていた。

敢えてそのことをスルーしていた上条だが、学園都市に戻ってき
て、事情が変わってしまった。

「ん……んう?……」

ベッドに倒していた体を起こそうとしていた上条だったが、不意
に着ている服の一部が、何かに引つ張られるような感覚に襲われた。
目線を辿っていくと、そこには自分の服の袖をギュツと掴んだま
ま寝ているインデックスの姿があった。そう、学園都市に帰還し
てから、ふたりは一緒に寝ているのだ。

だが、その事実があつたとしても、別に上条がロリコンなどにな
つたわけではない。

これにはちよつとした理由がある。

インデックスが最近、上条にやたらと甘えてくるのだ。

（学園都市に戻って、最初の夜からこの調子なんだよな。インデッ
クスは奴。

「インデックスと寝るの…嫌?……」なんて、涙目で言われたら、
断れないだろ……）」

上条が行方不明になり、ひとり寂しい思いをしていた分、インデ
ックスには、「上条の側に少しでも長くいたい」という欲求が強くな
っていったのだ。

そういつた事情に薄々勘づいている上条も、原因が自分である為
インデックスの頼みを断われなかったのだ。

同じ部屋で暮らしているどころか、一緒に同じベッドで寝ている
なんてことがバレたら、美琴やステイル、その他諸々の人がどんな
反応をするか、想像に難くない。

だが幸いなことに、この事実はまだ誰にもバレてはいないので、
別に大丈夫かと上条は少し安心の息をついた。

そしていつまでも休んでいるわけにはいかないので、服の袖を掴
んだまま寝ているインデックスに、小さな声で「ごめんな」と呟い
てから、上条はインデックスの手を服からそつと離した。

早く自分とインデックスのご飯を作らなければならぬ。

そうしなければ、まだご飯が出来ていないと分かったインデックスにどんなことをされるか分かったものではない。

（って……あれ？インデックスが俺を起こさないようにしてるのに、それで自分が起きた時に俺が作った料理が出来てなかったら怒られるって、なんか理不尽じゃね？……）

自分の支度する為の行動を阻止しようとしてくるのに、なぜ支度が出来ていないという理由で怒られなければならない。

と、まあ、そんな疑問は頭の隅にしまい込み、早速朝ご飯の準備をしなければならない。

今日はちよつとした予定が入っているの。

3

「……やっぱ来ない」

とつくに朝日が登り、人々が午後の時間を満喫している中、御坂美琴はコンサートホール前にいた。

美琴の呟いた言葉と、今立っている場所は、以前あのツンツン頭と待ち合わせをした時に利用しており、彼女が誰を待っているかと言え、言うまでもなく、以前ここで待ち合わせをしたことのある、あのツンツン頭だ。

「たくっ……補習は昼には終わるとか言ってたくせに、なにやってるのよあいつ……」

上条は戦争を止めた功労と引き換えに、今まで散々学校をなんの

連絡もせずに休み続けた結果、当然というように補習の日々が待っていた。

平日はもちろんのこと、普通の学生達が羽根を伸ばすはずの土曜日と日曜日でさえ、上条には補習が待っていた。

美琴が上条に聞いたところ、本格的に進級が危ぶまれるらしく、さすがに上条もその事実に見せ、今日も必死に小萌先生などの補習を受けている。

だが、今日はその後に、美琴との約束が入っているのだ。

わざわざロシアまで行ったのに、自分の助けを拒否したことや、あまりおおっぱらにしたくはないが、散々心配をかけたお詫びとして、美琴は上条に”一日だけなんでも言うことを聞くように”ということを言ったのだ。

上条もインデックスと同様に、美琴に対し罪悪感を感じていたので断る理由がなく、即座に了承した。

そして今日、11月15日は土曜日。

美琴は当然休みであるので、美琴は上条の補習が終わり、ここに現れるのを、こうして待っているわけなのだ。

だがしかし…、

「ぜんっぜん！来ないじゃない！！」

時刻は既に午後1時半。

上条の話だと、1時までには終わるとのことだったので、1時からこうして待っているのだが、上条は一向に来る気配を見せない。美琴がイライラを募らせていたその時、美琴の携帯が音を立てて鳴り始めた。(…ッ！もしかして！！)

あのバカではないか。

そう思い、素早い動きで携帯を手にした美琴が、着信画面を見ている。

その瞬間、美琴は若干頬を引きつらせたが、すぐに元の表情に戻り、いつもと変わらない口調で電話に出た。

「はい、もしもし？」

《おつ姉さまぁー！！今どこにいらつしやるんですのー！！？》

相変わらずタイミングなどを無視して突っ込んでくる後輩の白井黒子に、呆れ気味に溜め息をつきながら、美琴は黒子に対し返事を返す。

「んう？別に良いでしょどこだって」

《今、初春と佐天さんと一緒にいるのですけど、もしよろしかったらお姉様も一緒に遊びませんか？》

「ああー……そうね……」

瞬間、美琴の中に強い警戒心が生まれた。

ここで黒子に余計なことを言えば、またしても余計なことを考えて行動してくるだろうと。

9月30日に得意の瞬間移動を使って散々あのバカとの行動を邪魔された記憶が美琴の脳裏に蘇る。

すると、美琴がなにかを躊躇っているように言葉を区切ったことを不審に思ったのだろう。

黒子は探るような声色で電話越しに美琴に話しかける。

《……お姉様。もしかとは思いますが、まさかあの類人猿と……》

「は、はぁ！？

そんなわけないでしょ！！今日は……そう！母親が来るのよ！黒子も会ったでしょ、あたしの母親！！」

美琴は大覇星祭の記憶を頭の中からなんとか引きずりだす。

あの時は、黒子を見た自分の母親に変な勘違いをされそうになっ
てかなり焦ったことが美琴の頭の中で蘇ってくる。

「だから今日は遊べそうにないから！！初春さんと佐天さんによろしく言うておいて！！」

《……まあ、そういうことなら仕方ありませんわね。分かりました。お母様に白井黒子がよろしくお伝えくださいと言っていたとおっしゃっておいってくださいませ。では……》

黒子は最後まで不審そうな声色だったが、結局納得したようにして電話を切った。

黒子の声が聞こえなくなった携帯を耳元から離れた美琴は、安堵の溜め息をつき、自分が後輩に嘘をついてまでここで待っているのに、いつまでもやってこないあのツンツン頭の気楽そうな顔が頭の中に浮かんで、美琴は立ち尽くしながらますますイライラを募らせていった。

（…………あのバカ…………来たただじゃおかないわよ……）

行間・1

「……………」

「白井さん、どうしたんですか？携帯じい〜と見つめて」

学園都市にあるファミレスのテーブル席の一角に、携帯をじっと見つめたまま固まっている白井に、テーブルの向かい側の席に座っているふたりの内のひとり、初春飾利が話しかけていた。

「御坂さん、やっぱりダメだったんですか？」

「まあ、予定が入ってるなら仕方ないよね」

注文してあったチヨコレートパフェを口に運びながら喋る初春に返事をしたのは、向かいにいる黒子ではなく、初春の隣にいるもうひとりの人物、佐天涙子だ。

佐天は初春に話しかけながら、手に持っている小さめのスプーンで、初春の食べるパフェを少量掬って口に入れる。

「あ！佐天さん！勝手に人のパフェ食べないでくださいよー！」

「良いじゃん一口くらい」 笑顔で受け流す佐天に

”もっ……！”と言って少し頬を膨らます初春。

仲睦まじい光景だったが、ふたりの向かい側にいた黒子は、突然スツと立ち上がった。

「白井さん？どうしたんですか？」

突然の黒子の行動に、キョトンとした感じを醸し出しながら見つめる初春と佐天に、黒子は、

「……少々用事が出来てしまいましたわ。おふたりはどうされますか？」

黒子の問いに相変わらずキョトンとしていたふたりだったが、佐天は”楽しそうなことがありそう”だと直感的に察知し、顔を不気味なほどニヤリと笑みに変えた。

「行きます行きます！！」

一緒に行きます！ほら、初春も行こう！！」

「え、え！？ちょ、ちよつと佐天さん！！」

背を向けて歩いていく黒子を追いかけようと、佐天は満面の笑みを浮かべながら初春の手首を掴み、無理矢理立ち上げらせ、ふたりは小走りで黒子の元へと駆けていった。

「ああー！！パフェまだ全部食べてないのにー！！」

佐天の満面の笑みとは裏腹に、後方のテーブルに置かれた食べかけのパフェに向けて腕を伸ばす初春の顔は、絶望に満ちていた。が、佐天に手首を掴まれ、パフェにありつくことが出来ない。

黒子、佐天、初春。

3人はそれぞれに違う表情を顔に浮かべながら、目的の為に足を動かしていく。

「……っかよオ…なんで1日中こんなところにいなきゃいけねエ
ンだよ…」

一方通行は杖を立て掛けているベンチに腰を降ろし、両足をだら
んと前に伸ばして、やる気が全くないことを表現したような体勢を
作り、同様にやる気がない口調で呟いた。

そんな一方通行の目線の先には、髪型が瓜二つの身長差だけが
目立つふたりの少女。

その少女達は、女の子らしくプリクラなどを撮るわけでもなく、
パンチングマシーンに熱中していた。

そして一方通行の耳に、再びストレートパンチを繰り出した音が
響く。

「67点。へえ、やっぱり打ち止めにも不満があったんだね。ミサ
力はちよつとびっくりしたよ」

「ふふん。当たり前だよ！一方通行には色々と苦労をかけさせられ
てるもん！！って、ミサ力はミサ力は腰に手を当てて宣言してみる
！！」

「不満を高らかに宣言する奴なんて始めて見たよ…」 そんな打ち
止めと番外個体を見ていた一方通行は、深く溜め息をついた。

学園都市の地下街。

一方通行達3人は、そこにあるゲームセンターに出向いていた。
と言っても、一方通行は別にゲームに興味はない。大まかなと
ころは、打ち止めと番外個体にせがまれて仕方無く来たのだ。

それにしても…、

（一体こいつら、いつまでここにいてるつもりだア……？）

一方通行の言っていることはもつともだった。

何せ、一方通行達がここに来たのは午前中の早い時間であり、午

後になった今もここにいるのだ。

ずっと座っているにしろさすがに飽きてくる。

かと言って、ゲームをする気など微塵も思わない一方通行の飽きは、ますます募っていく。

飽きが来ている一方通行は、なにか面白いものでもないかと、だるそうに左右に首を動かしてみる。

その時……、

「……………ン？」

キョロキョロと左右を見回していた一方通行の視界の先に、見覚えのある真つ白な修道服を着た少女がいた。

（ありや…確か……）

一方通行の頭の中で、今までの記憶が駆け巡る。

9月30日の事件で何回も顔を合わせた少女であったが、それ以降はあまり出会うことはなかった。

だが、その無数に存在する記憶の中で、一方通行はある言葉を思い出し、小さな声で呟く。

インデックス

「禁書目録……………」

9月30日。

今、自分がある地下街へと降りる階段の手前で行き倒れていたあの少女を、ファーストフード店に連れていき、そこで一方通行はあの少女の名前を聞いた。

『私の名前は、インデックスって言うんだよ！！』

そしてその後、エイウスから告げられロシアに行き、さらにそこで、自分が負けたあの無能力者のメモに書き残してあった単語。

”禁書目録”。

そしてあの少女が探していた人物の名前。

”とうま”という名前の人物。

今なら分かる。

あの少女が探していたのは、あの戦争を終戦に導き、つい先日、この街に舞い戻って来たあの無能力者。あの少年とは色々あったが、一方通行は彼の名前を知らなかったので、以前はその名前を聞いてもなんの感情も湧かなかった。

だがあの戦争のせいで、幸か不幸か、あの少年の名前はあの街に広まり、そこで初めて一方通行は、あのツンツン頭の少年の名前を知った。

”上条当麻”という名を。もし、あの少女の言っていた人物が、上条当麻なら……。

そう考えた時には、一方通行の足は既に動いていた。

一方通行の目には、自分に背を向けてトコトコと歩く少女の背中しか映っていない。

追いつく為に少し早い動作で杖を前方に動かし、早足で少女へと近寄る。

そして……。

「おい、お前……」

一方通行の声に反応して、少女は驚いたように肩を一瞬上下に動かしたが、すぐに声のした後方を振り返った。

一方通行とインデックス。

ふたりは再び顔を合わせる。

「不幸だ……」

学園都市に存在するひとつの交差点で、上条はだるそうに体を前にかがめ、信号待ちをしながら呟き、深く溜め息をついた。

（補習のためだけに学校に行ったのに、土御門や青髪に強制的に決めつけられた挙げ句、御坂との約束も遅れちまうなんて……上条さんがなにかしたって言うんですか？）

朝、インデックスの為に昼食を作り置きした上条は、そのまま補習の為に学校に向き、もはや補習仲間である土御門や青髪ピアスと共に小萌先生らの授業を受けていた。

そのまま何事もなく授業は、終了し、上条はこの後の御坂美琴との約束の為にカバンを持って早々に学校から出ていこうと考えていたのだが、そこに「ちょっと待つぜよ、カミヤん」と土御門から声をかけられた。

「ん？なんだよ？」

「カミヤん、お前まさか忘れてはないかやー、もうすぐ”一端覧祭”の準備期間だぜい」

「え、ああ。」

そういえばそうだったな。すっかり忘れてた」

”一端覧祭”。

”大覇星祭”と同様に、学園都市の主催によりおこなわれる超文化的行事。

しかし、”一端覧祭”は

”大覇星祭”とは根本的に違うところがある。

”一端覧祭”は一般人向けの行事ではなく、主催する学園都市へと進学を希望する、”新入生”達の為の行事だ。

当然、学園都市に無数に存在するあらゆる学校は、新しい学生達を自分達の学校に招こうと色々なパフォーマンズをおこなう。

御坂美琴の在籍する常盤台中学は、その中でもトップクラスの学

校と言えるだろう。

学校自体のレベルが高ければ高いほど、おこなうパフォーマンスのレベルも高いものなるというのが、この学園都市の常識と化している。

そしてそのパフォーマンスをおこなうのは、上条が在籍するこの高校とて例外ではない。

「一端覧祭」は学年は関係なく、学校全体でとりおこなう行事なんだぜい？

当然俺達もなんかするに決まってるにゃー」

「でも、どうせ大したパフォーマンスなんてしないんじゃないか？この高校」

上条の言うことは最もな意見だった。

上条や土御門のいるこの高校は、学園都市の中でも学校自体はそこまでレベルの高い高校ではない。

御坂美琴などのレベル5がいるわけでもなく、逆にレベルが限りなく0に近い者が集まる高校なのだ。

上条も幻想殺しという異能の力を有しているが、判定などでは相変わらず0のままであり、そんな高校に好き好んで入学したい奴などいるわけがない。

だが……、

「おいおい、なにを言っとるんやカミヤん」

「そうだにゃー。今年は力入れるに決まってるぜよ」「……なんで？」

青髪と土御門の言葉に疑問を覚えたが上条は、なぜかニヤニヤと笑みを浮かべているふたりに質問をすると、土御門はこう返答した。
「そんなの決まってるぜよ。カミヤんがいるからだにゃー」

「……………え？」

土御門の返答に言葉を失なう上条を尻目に、土御門と青髪は言葉を続ける。

「カミヤん。カミヤんは自分の立場がまるで分かってないにゃー」

「カミヤんは今や、戦争を止めた英雄やで。そないな人間が通つてはる学校なら、学校見学者もぎょうさん来るやろなあ……」

青髪という言葉の通り、上条当麻という人間は今や時の人となっている。

学園都市の外であっても、それは変わらない。

そんな有名な人間が在籍する学校ならば、学校に見学に来る者は計り知れない。

上条は今や、学園都市にいるレベル5と同じくらい新入生達を引き寄せる対象になっているのだ。

「というわけで、一端覧祭はカミヤん押しでガンガンアピールしていくぜよー!!」

その言葉に反応したのか、いつの間にか上条達の教室に集まっている学校中の生徒が「おおおおおっ!!」と片腕を上突き上げながら雄叫びを上げていた。

そんな中、当の本人は、「い、いやいや! ちょっと待つて!! 俺はまだ了承とかしてないですよ!!」

勝手に盛り上がられても!!」

「ぐちぐちうるさいわよ上条!! それくらい別に良いじゃない!!」

「いや、せめて了承は取りましようよ!

っ! か吹寄さん!! なぜ補習のないあなたがここにいらっしゃるんですか!

」

「うつ…、い、良いじゃない別に!! それこそなんで上条の了承が必要なのよ!!」

「いや別に良いけど……って! そうじゃなくて、みんな上条さんの話を!……」 教室に上条の叫びが響くが、テンションの上がつている土御門達に、上条の叫びは届かない。

土御門達が勝手に自分に関係する案を出しているのを見ていた上条は、

「やつぱり不幸だああああああッ!……!」

叫び声を上げた。

にもかかわらず、土御門達にその叫びは届かなかった。

そして、上条は今に至る。

（なんでこんなことに……。もう上条さんには、成す術などないんですか？……）

ひとり疑問を呈する上条は、信号が赤から青になったことを確認し、横断歩道をトボトボと歩いていく。その時、

「あら、あなたは……」

誰かが、声を出すのを聞いた上条は、一瞬誰に向かって声をかけたのか分からなかったが、視線を感じたことで、その声が自分に向けられたのではないかと思い、その声のした方向に顔を向ける。

「誰かと思えば類じ……。上条さんではありませんか」「今、なにか聞き捨てならない言葉が聞こえた気がするけど、今はそのことにツツコンでいる体力は、上条さんは残っていないです……。……はぁ……。なんだ……白井か……」

上条の目線の先にいる御坂美琴の後輩。

白井黒子が上条の目の前に立っていた。

「ん？」

上条がよく見てみると、目の前にいる黒子の後ろに、黒子の着ている常盤台中学の制服とは違う学生服を着たふたりの少女が立っていた。

上条の視線が、自分ではなく後ろのふたりに向いていると気づいた黒子は、体を横向きに動かし、上条に、自分の後ろにいたふたりが見えるようにしてから、再び上条に口を開いた。

「ああ、ご紹介しますわ。こちらのふたりはお姉様と私のご友人の、初春と佐天さんです」

黒子の言葉に、紹介された佐天は初春より先に上条に対して口を開いた。

「どうも！佐天涙子って言います！」

「ああ、俺は……」

「知ってます!!」

「へ？」

自己紹介してきた佐天に対して、上条も同様に自己紹介しようとした矢先、佐天の方から制止が入った。上条が佐天の顔をよく見ていると、佐天の瞳は面白いものを見つけたようにキラキラと輝いているように見えた。

「上条当麻さんですよー!!」

「あ、ああ、そうだけ……」

「御坂さんと白井さんから上条と知り合いだってことは聞いてたんですけど、本当に会えるなんて思ってたんですけど!!」

あの、握手してください!!」

「え、あ、うん……」

そう言って勢いよく迫ってきた佐天に、上条は少しついていけずにいたが、差し出された手に上条は片手を出して握りしめた。

まさか握手を求められるなんて、上条の人生では生まれて初めての経験だった。

そんな中、佐天と握手をしている上条に対して、後方にいた初春は上条の困っているような顔を見ながら、いぶかしげに眉を潜めていた。

（以前……どこかで会ったことがあるような……）

上条がインデックスと出会う前。

すなわちまだ記憶を失っていなかった上条と初春は出会っているのだ。

後の虚空爆破事件と呼ばれる事件で、セブンスミストの店内で爆発から美琴や初春を救うために、幻想殺しを振るった上条だが、あの時はかなり切迫した状況であり、初春は上条のことをあまり覚えていないのだ。

それは記憶を失った上条も言えることなのだが。

（どこであつたんだっけ……）

初春は記憶の中を探るが、今自分の目の前にいる人との記憶がさっぱり出てこない。

すると、そんな初春の視線に気づいた上条が、初春の方に視線を向けた。

上条の視線を受けた初春は記憶の中を探るのを止め、先ほどの佐天のように挨拶に徹した。

「ど、どうも！初春飾利って言います！！」

「よろしく。俺は上条当麻！好きなように呼んでくれていいぞ」

「あ、はい！え、え」と、か、上条さん…」

”おう！”と元気よく返事をする上条や、挨拶した佐天や初春を見ていた黒子は、目を細め、なにかを探るような口調で今まで閉じていた口を開いた。

「それより上条さん、貴方は一体どこに向かっていたんですの？」

黒子の質問に、上条は”なんでそんなことを聞くのか”と少々疑問を感じたが、別に隠すことはないだろうと思い、これからのことを口にした。

「え？ああ、待ち合わせしてるんだよ」

”御坂と”。

その言葉を聞いた瞬間、黒子は先ほどの自分の抱いた疑問が確信に変わるのを感じた。

電話越しに聞こえた美琴の慌てたような声も、凶星を突かれたのだとも確信することが出来た。

そしてそれを隠すために自分に嘘をついたことも。（お姉様…私に嘘をつくなんて…。そこまでこの類人猿とふたりきりに…）

そう考えると、今すぐ自分の目の前にいる男を排除しようかと考えた黒子だが、それだと美琴がどこにいるのか分からない。

ならば…。

「上条さん。実は私達、お姉様に用があるんですの。よろしかったら一緒にさせていだいてよろしいでしょうか？」

「おう。別にいいぜ。んじゃ、行くか」

上条に美琴の元まで案内してもらおう。

そうすればふたりきりになることもないし、美琴に嘘をついたことを問い詰められる。

黒子は上条に向ける優しそうな笑みの裏に、黒い笑みを隠しながら、美琴の元に向かって歩いていく上条についていく。

そしてそんな黒子を見ていた佐天と初春は、

「なんか白井さん……凄く怖くない？」

「ええ、そうですね。あれはたまに見せる、なにか得体のしれないものを隠している時の笑みですね。」

仕事の時に何度か見たことがあります」

黒子の邪悪なものに薄々勘づいていたが、それを上条に言うこともなく、上条と黒子のあとに続いて歩いていった。

行間・2

「あれ？あの人は？ってミサカはミサカはキョロキョロと辺りを見回しながら尋ねてみたり」

パンチングマシンで一通り鬱憤を晴らした打ち止めは、疲れから来る喉の渇きから、なにか飲み物でも買ってもらおうと、すぐそばのベンチにだるそうに腰を降ろしていた一方通行の元へと出向いた。

だが肝心の一方通行の姿はそこにはなく、打ち止めは自分と一瞬にいた人物に話しかける。

「さあ？トイレにでも行っただんじやないの？」

番外個体は打ち止めにそう言うと、打ち止めから背を向け、

「連れシヨンてわけじゃないけど、あたしもトイレ行ってくるわ。

お子様はそこで大人しく待ってなよ」

「お子様じゃない！！ってミサカはミサカは番外個体の背中に怒号を浴びせかけてみる！！」

”はいはい”と適当に相づちを打った番外個体はさつさとトイレに歩いて行った。

打ち止めはそんな番外個体の背中を頬を膨らましなが睨み付けていたが、番外個体の姿が見えなくなると、頬を膨らましたまま一方通行の座っていたベンチに、腕を組みながら座った。

「まったく、いつもいつもお子様扱いしてって、ミサカはミサカは頬を膨らませながら……」

不満を口にする打ち止めだったが、自分の周りに誰もいないとなると、さすがに寂しさが募ってくる。

番外個体もそうだが、やはり一方通行が自分のそばにいないのが、なんとなく寂しい。

(……一体どこ行ったの？一方通行……って、ミサカはミサカは少しシユン……としながら名前を呟いてみる……)

悲しげに眉を寄せる打ち止めだったが、そこに。

「あれ？あんたは……」

打ち止めにとっては、一方通行と同じくらいかけがえのない存在である人の声が聞こえた。

そして打ち止めはその声のした方向を見た。

そこにいたのはやはりと言っべきか、自分と同じ髪型と顔をし、違うのはその身長のみだけ。

「こんなところで、ひとりでなにやってんのあんた？」

「お姉様……」

打ち止めを含む妹達、さらに番外個体の生みの親。 常盤台の超

電磁砲。

御坂美琴がそこにいた。

第一章 新しい日々（後書き）

とりあえず、

「とある科学の超電磁砲」のキャラクターである佐天涙子は出ずつもりでした。初春飾利も出し、これからも色々と登場させるつもりです。

これからも応援よろしくお願いします。

第二章 交差する者達（前書き）

やっとの更新です。

短いですがご覧ください。

第二章 交差する者達

行間・3

「それで？お姉様はどこにいらつしやるんですの？」「いや……おつかしいな。御坂のことだからまだ待つてるかなあと思ったんだけど、やっぱり遅れ過ぎたかな……」

あの後、15分ほどでコンサートホール前にたどり着いた上条や白井達は、ここで待っているはずの御坂美琴の姿をキョロキョロと辺りを見回して探していた。だが、上条達の視界に、目当ての人物の姿は映らない。

「どこに行っちゃったんでしょかね、御坂さん」

「いつそのこと、みんなで手分けして探してみよつか？」

佐天の言葉に一樣に頷いた上条達は、

「じゃあ、俺はあっち行くから、白井達は向こうを頼むわ」

「分かりましたわ」

「そんじゃ」

そう言っ駆け足で去っていく上条の背中を見ていた黒子達も、

「では、私たちも行きましょう」

「はい！！」

そして黒子達も去り、上条達の御坂美琴の搜索が始まった。

何故またこうなる。

ファーストフード店の窓際のテーブル席に座って、手を顎の下に添え、人々が行き交うのを、一方通行は視界に納めていた。

そしてテーブル席の向かい側にチラリと視線を移す。

「はぐむぐう、ああんはむはむ……」

テーブルに散りばめられたハンバーガーなどにむさぼりつき、”じゅるじゅるるる”とストローを口にくわえ、盛大に音を立てて中に入っている飲み物を吸う白い物体。

汚れない真っ白な修道服を身につけ、それとは真逆に口元をソースなどで汚している、珍しい銀髪をした美少女。

美少女が”はむはむ”と言って食事をしている光景に癒しを覚える人もいるかもしれないが、残念なことにその食事の量が明らかに尋常ではない。

見たところ小さな体をしているのに、一体その体のどこにこれだけのものを食べられるのか。

そんな疑問を覚えながらも、一方通行はただじつと目の前の少女が食べ物をもさぼり喰うのを見ていた。すると、目の前の少女は一旦休憩を取ったのか、テーブルに置かれたハンバーガーなどに手をつけるのを止め、”ごくごく”とストローを口にくわえて飲み物を飲んでいった。

そして、”ぷはぁぁー”と言って大きく息を吐いた少女、インデックスは、目の前で自分の食べている姿をじつと見つめていた一方通行に言葉をかける。

「ありがとね！！また奢ってもらっちゃって！！」

「それを言うならせめてツラを拭くことを学習しとけそガキ」

テーブルの隅に置いてある布巾を取り、インデックスに突き出した一方通行は、インデックスが布巾を自分の手から取るのを確認すると、両手でソースまみれになった口元を拭くインデックスを再びじつと見つめた。

自分の考えが正しければ、今、目の前にいる少女がエイワスやあの無能力者の言っていた”禁書目録”ということになる。

それはつまり、この少女が打ち止めを助けるための重要な人物だったということになる。

肝心の打ち止めは既に治っているが、この少女のどこに打ち止めを治すほどの力があるのか。

情けない話であるが、自分が手も足も出なかったあのエイワスが口にしていたほどの存在。

その人物が今自分の目の前にいる。

一方通行は個人的な興味でインデックスに声をかけたのだ。

そんな一方通行の目の前いるインデックスは、口元を拭き終わり、布巾をクシャクシャにまとめてテーブルに置き、一方通行に聞こえるように言葉を口にする。

「まったくとうまったら、インデックスを放ってどこに行っただよ。昼食だって全然足りなかったし。」

あとできつーく叱ったほうがいいかも」

”とうま”。

その言葉に、一方通行は少し反応を見せる。

そして一方通行は、目の前にいる少女への疑問よりも、自分がそれ以上に聞きたかったことをインデックスに告げる。

「おい…」

「ん？なに？」

「その”とうま”ってのは誰なんだ？」

一方通行の頭の中に、あのツンツン頭の顔がよぎる。

だが、少女の言っている”とうま”が本当に自分の考えている人物か分らない。

そして一方通行のその疑問を解消することが出来る人物が、今彼の前にいる。そして一方通行の疑問にインデックスは言葉を口にする。

「誰って…とうまはとうまだよ」

「んなこと聞いてンじゃねエ。そいつの上の名前はなんだ……」

「”かみじょう”だよ。かみじょうとうま」

瞬間、一方通行の頭の中で、バラバラだった複数のパーツがひとつの物体として完成していくのを感じた。

何故打ち止めに治せる人物を。

エイワスの言っていた言葉を、あの無能力者もロシアの地で自分に残していったのか。

あの無能力者も、エイワス同様にこの少女の力を知っていて、だからこそロシアで打ち止めに治す手掛かりに、”禁書目録”という言葉を残した。

それが分かると、自分の中にあるもうひとつの疑問も解消したくなってしまう。

一体この少女の力はなんなのか？

あのエイワスや、少女のいう上条当麻が手掛かりとして残しているほどだ。

よほどの力があるのだろう。

一方通行はその力のことを知りたかった。

そして再び、インデックスに対して口を開く。

その時……、

「あつ！！とうまだ！！」

口を開こうとした一方通行の耳に、どこか嬉しそうな声色のインデックスの言葉が耳に響いた。

いきなりのインデックスの小さいとは言えない声に、少し驚いたと言えは嘘ではないが、それ以上に、一方通行にはインデックスの言った言葉の方に驚いた。

今、この少女はなんと言った？

「とうまとつまー！こつちだよー！」

一方通行の疑問に答えるように、インデックスは外と遮られた窓越しに、名前を叫びながら手を振る。

店にいる他の客達がチラチラとインデックスと一方通行の見るが、インデックスも一方通行も、そんな視線は気になっていない。

ふたりの意識は完全に窓の向かい側の少し離れたところにいるひとりの人物に注がれていた。

そしてその人物は、なにかを探すよう辺りをキョロキョロと見回していたが、不意にインデックスが手を振っている方向に目を向けた。

その瞬間、一方通行はその人物と目が合ったことを、かなり距離が離れていながらも理解することが出来た。

一方通行と上条当麻。

学園都市とロシアの地で相対したふたりが、再び巡り合った。

それは本当に偶然だった。

待ち合わせ場所にいなかった御坂美琴を探していた上条が、学園都市の中を歩き回っていると、不意にどこからか視線を感じ、そちらを振り返った上条が見たものは…、

寮の部屋にいるはずの同居人のインデックス。

そして、ロシアの地で再び激闘を繰り広げた、この学園都市の誇る最強の能力者。

上条にとってあり得ない組み合わせのそのふたりが、ファーストフード店の中からこちらを見ている光景だった。

そして現在。

「とうま？なんでそんな静かなの？なんか変だよ？」「い、いや…別に…いつもの上条さんでござりますですよ」

「………やっぱり変だよとうま」

上条は真横に座っているインデックスの不思議そうなものを見るような視線を浴びながら、向かいに座る一方通行に意識を集中させていた。

「……………」

その一方通行はというと、目を閉じたままズボンのポケットに手を入れ、じっとしていた。

気まずい。

その言葉が、上条の頭の中で何度もリピートされる。

上条当麻と一方通行が普通に会話をしたのは、9月30日の事件で、上条が打ち止めの携帯を使って電話越しに話したのが最後だ。

しかもその時も、ふたりは電話の相手の正体をまったく知らずにいた。

妹達の事件の時はもちろん、ロシアの地でも、出会った時は、番外個体の策略によって精神的にダメージを負っていた一方通行は、なんの迷いもなく上条を襲い、そして再び敗戦した。つまり、こ

うやって戦うでもなく顔を合わせて喋るのは、ふたり共初めてなのだ。

当然なにを話していいのか分からない上条は、チラチラと目を閉じている一方通行を見て、一瞬寝ているのかと思ったのだが、

「あれ？もしかして寝てるの？」

「……違エよ」

まったくこのふたりの間に流れる気まずい空気に気づかないインデックスの言葉に、最低限の返事をしているので、寝ているのではないと分かる。

だが、それならそれで、なにか会話をしなければ。冷や汗が頬を伝っていく中で、上条はありったけの勇気を振り絞り、言葉を口にする。

「ええ…あの……一方通行……さん？」

「……………」

横にいるインデックスの言葉には反応するのに、自分の言葉に反応を見せない一方通行に少しショックを受けるが、上条はめげずに声をかける。

「や、やっぱり学園都市に戻ってきてたんだな…」

「……………」

会話が成立しない。

その事実を重く受け止めた上条は、これ以上何を話せばいいのかまったく分からなくなり、一方通行同様に黙り込んだ。

上条の横にいたインデックスは、上条と一方通行に因縁があることなどまったく知らないの、ふたりの微妙な空気に頭を傾げていた。

だが…、

「……ちッ、俺に2回も勝ったヤロオがこんなアホッぽい奴だったとはなア…」沈黙に閉ざされた空気の中で、一方通行が不満そうに声を上げた。

それに続いて上条も会話を成立させようと声を発する。

「に、2回って…ロシアの時は数に入らないだろ。あの時はなんか変だったし」 上条の言葉に、当然自分のことを言っているんだろうと思った一方通行は、ロシアでの戦いを振り返る。確かにあの時は、番外個体の精神的な攻撃にやられて錯乱していた。

そしてその時偶然近くを車で通っていた上条当麻を視界に捉え、強襲した。

結果として負けてしまったが、一方通行にしても、もしあそこで自分が勝ってしまったら、それこそ自分はどうなっていたか想像出来ない。

錯乱状態のまま破壊と殺戮のかぎりを続け、そのまま自分自身をも壊していたかもしれない。

そう考えると、あそこで負けたことは正解だったのではないかと思える。

あの戦闘の中で、今自分の目の前にいる男に、” なにかを守りたい気持ちに善も悪も関係ない ”、と諭され、そこからは自分が守りたいものの為に、血へどを吐いて戦えた。

そしてその結果、自分はこうして打ち止めや番外个体などと共に学園都市に舞い戻り、かりそめであるかもしれないが、今のところ平穏な生活を送れている。改めて一方通行は、自分がこの男に変えられたのだと思った。

目の前で自分を不安げに見ている上条を見て、” こんな奴に ” と思ったが、この男に負けたのは変わらない事実であり、一方通行は上条に対して口を開いた。

が、その時、一方通行の携帯が音を鳴らして震え始めた。

「け、携帯鳴ってるぞ」

「…あア…わかッてる」

上条の慎ましげな言葉に返事を返した一方通行は、未だに震え続ける携帯を手に取り、着信画面に映る名前を見ることなく通話ボタンを押し、耳に当てる。

そこから聞こえてきたのは……、

《やつほゝ一方通行ゝ、ささやかな平穩を楽しんでるか？》

「…なんの用だ」

《ヒドイね。ミサカは誰かさん達がいなくなったせいで、少し寂しさを覚えているんだよねー》

そう言った番外個体の言葉に、一方通行は携帯を握っていた指をピクツと動かした。

今、番外個体が口にした言葉に聞き捨てならない事実があったのだ。

「誰かさん」達だとオ…？あのくそガキはどオした……」

番外個体の言っているのが事実なら自分の他にも側を離れた人物がいるということ。

そうすると、その事実に当てはまるのは打ち止めしかない。

一方通行の言葉に番外個体の返事は、

《ミサカがトイレに行ってる間にどっか行っちゃったらしいね。てつきり一方通行もトイレだと思ったんだけど、全然戻ってこないから電話したのさ。》

もう少しで男子トイレに突っ込むところだったよ》

おどけたような口調で喋る番外個体に舌打ちをした一方通行は、自分を不思議そうに見つめる上条とインデックスに一瞬チラリと視線をやったあと、再び携帯に向けて口を開く。

「そこで待ッてる。すぐ戻る。もし動いたら二度と動けねエよオに、デメエについてるその2ほんの足を引きちぎッてやらア……」

《りょゝかい、首ならぬ足を長くして待ッてるよ》

”相変わらずの減らず口が”。

と心の中で呟き再び舌打ちをして耳元から携帯離して通話を切った一方通行は、さっさと番外個体のところに向かうため、座っていた席から腰を上げた。

「なにか予定があるの？」「あア……」

腰を上げた一方通行を見ていたインデックスが疑問の声を上げ、それに簡単には答えた一方通行は、そのまま行くかと思ったが、首

を上条達の方に向けた。

何も言わない一方通行にパチパチと瞬きを繰り返す上条だったが、一方通行は不意に首を上条達から背け歩き出した。

「またねー！！」

一方通行の背中にインデックスの音が響いていくが、一方通行は特に返事する言葉も動作もすることなく杖をつきながらゆっくりと歩いて行った。

そんな光景を上条は少し口をポカンと開けて見ていた。

上条の印象からして、一方通行はそんなに人付き合いのいいタイプには見えなかった。

しかし、不意に上条が横に目をやると、インデックスが満面の笑みを浮かべて一方通行に手を振っている。

そんなインデックスを見ると、上条の中で一方通行の印象が大きく変わっていった。

以前会った打ち止めも、えらく一方通行になついていたし、案外子供に好かれる人間なのかもしれない。そう思うと、上条はなんだが嬉しくなって、遠ざかって行く一方通行の背中を見て優しい笑みを浮かべていた。

自分には何が出来たのかは分からないが、だが少しでも、一方通行に変わるきっかけを与えることが出来たのなら、自分が今までやっていたことにも意味があると、上条は思えることが出来た。

上条の目線の先にいる一方通行は、けして後ろを振り返ることなく、以前よりも遅しくなった背中を上条に見せながら、杖と共に足を動かし、自らの進むべき道を歩んでいく…。

学園都市に多々あるカフェテリア。

屋外に用意された円形のテーブル席に注文しておいた飲み物を置き、そこにあつたふたつの椅子に座っているまったく同じ顔をしたふたりの少女がいた。

「それでね！あの人はミサカを放ってどこかに遊びに行っちゃったんだよ！って、ミサカはミサカは愚痴をこぼしてみる！！」

「ああ…そうなんだ…」

御坂美琴は、待ち合わせしていたツンツン頭が一向に来る気配を見せないことにイライラが募りに募り、いい加減太陽を直接浴びることに嫌気がさし、地下街へと足を運んだ。

どうせなら溜まったストレスを発散させるためにと、美琴は以前のようにパンチングマシーンのあるゲームコーナーに足を運んでいたが、その手前にあるベンチに、以前見たことがある自分とまったく同じ顔をした自分よりもかなり身長の高い少女が、落ち込んでいるように顔を俯かせて座っているのを目撃した。

自分と同じ顔をした少女が、ひとりベンチに座って元氣のないようにしている光景を目撃し、さすがに放っておく訳にもいかないのので、声をかけた瞬間、打ち止めは瞳をキラキラと輝かせながら、美琴にあれこれと言葉を投げかけていたが、”もっとゆっくり話せる場所に行こう！！”って、ミサカはミサカはお姉様の服の袖を引っ張りながら足を動かしてみる！！”という打ち止めに引っ張られ、いつの間にかこのカフェの椅子に腰を降ろし、打ち止めの愚痴を延々と聞いていた。

そしてそれは今も止むことなく、
「まったく、いつもいつもミサカを放っていつて、いい加減家出し

てやる！つてミサカはミサカは手を握りしめて決意を固めてみたり
！！」

「アンタも苦労してんのねえ……」

終わりを見せない打ち止めの愚痴を聞きながら、美琴は自分が待ち合わせしていたツンツン頭を思い出す。

一体自分との約束を放つぽってどこで何をしているのだろうか。

（とりあえず、会ったら一発ぶちかましてやろうかしら……）

ポケットの中に入っているコインを服の上から触りながら、美琴は決意を固める。

恐らく効かないとは思うが、自分にこんな想いをさせているのだから、一発くらい超電磁砲を撃つてもバチは当たらないだろう。

そんな中で、美琴は向かいの椅子に座っている打ち止めに目をやる。

絶えず愚痴をこぼしてはいるが、その愚痴の中にたまにのろけのような発言が見え隠れしているのに気づいている美琴は、打ち止めに対し、穏やかな笑みを浮かべる。

あの最悪の実験から3ヶ月ほどが過ぎ、実験のために短期間で体を成長させたせいもあり、体の調整をおこなうために世界各地に散らばった”妹達”。

学園都市に残っている妹達から、美琴はたまに世界各地に散らばっている妹達の状態を聞いたりしている。

調整の中でも元気に過ごしていると聞いている美琴は、本当にある実験を阻止することが出来て良かったと、心から思えることが出来た。

それは今、自分の目の前にいる打ち止めの元気な姿を見ると、改めて実感することが出来た。

打ち止めの言う”あの人”が誰なのかは知らないが、その人にもお礼を言いたい気持ちになっていく。

”自分の妹を見守ってくれてありがとう”と。

「お姉様？どうしたの？つてミサカはミサカは黙り込んでしまった

お姉様に恐る恐る尋ねてみたり」

「うつん…なんでもない」 問いかけてくる打ち止めに、美琴は短く答える。

その顔には、妹を見守る暖かい笑みが浮かんでいた。

行間・4

待ち合わせ場所の地下街から外に出た一方通行と番外個体は、学園都市の中をひたすら歩いていった。

「やっぱダメだね。携帯は電源入ってないかバッテリーが切れてるかで繋がらないし。まったくこれだからお子様は」

「四の五の言ッてねエでさッさと探すぞ。たくツめんどくせエ…」

「ミサカが打ち止めの側を離れたこともあるけどさ、一方通行だってミサカ達を放っぱってどっか行っちゃったじゃん。

責任は一方通行にもあると思うね」

「……うッせエよ…」

番外個体の言葉もあながち間違ってはいないことを、一方通行自身理解しているので、あまりでかい態度を取ることが出来ない。

確かに自分にも責任があるからだ。

そんな一方通行を見た番外個体は、ニヤリと不気味に頬を歪ませ、
「あゝあ、なんかミサカ喉が渴いたなあ」

「水でも飲ンでろ…」

「ああ！あそこにカフェがあるからあそこで飲み物でも！…って、あれ？」

わざとらしく遠方に看板が見えるカフェに指をさして言葉を口にし始めた番外個体の声が、途中で声色を変えた。

番外個体の声は面白いものを見つけた子供のような声色だった。

「へえ、一方通行。ミサカは初めてだけど、アンタは久しぶりなんじゃないかい？」

「ああ？…いたいなの……」

”ことだ？”と、続けたかった一方通行だが、その言葉は喉の奥に詰まり出てこなかった。

番外個体が指さす先。

そこに一方通行達の探し求める小さな茶髪の少女。打ち止めがいた。

カフェの屋外にある椅子に座っている打ち止めと一緒にいる人物。打ち止めがそのまま大きくなったような体型で、違うのは着ている服だけ。

常盤台中学の制服に身を包み、打ち止めと楽しそうに喋っているその人物。

常盤台の超電磁砲。

御坂美琴。

今とは真逆の暑い8月の夜に、先ほど遭遇した上条当麻と共に実験場に現れ、あの実験の阻止の一部始終を目撃していた少女。

打ち止めを含む妹達。

さらには、今現在一方通行が共にいる番外個体の原型であり生みの親でもある少女。

その人物が、打ち止めと共にいた。

その光景に、一方通行は一瞬固まってしまったが、すぐに思考を働かせ始める。

打ち止めの持つ携帯は恐らく使用できないので電話をかけて呼び戻すことは出来ない。

かといって、ここでこのまま立ち尽くしているのも躊躇われる。未だに因縁のある一方通行にとって、御坂美琴は接触したくない

人物だった。きっと彼女は自分のことをまだ恨んでいるだろう。いや、恨んでいると確信することが出来る。

自分はそれだけのことをしたのだ。

たとえば自分がどんなに悔やんでいたとしても、その事実は変わらずに存在している。

出来ればこのまま、再び出会うことなどなく生活していききたかった。

だが…。

「一方通行？」

「……テメエはここで待ッてるオ……。いいか、絶対にツラ見せんじやねエぞ。絶対だア……」

一方通行は番外個体に命令口調で話すと、杖について歩き出す。出来れば会いたくなかった。

その気持ちは一方通行の中で変わることはない。

だがそんな中で、もうひとつ。

一方通行に芽生えた気持ち、彼の体を突き動かす。

(いい加減…決着つけなきゃいけねエよなア……)

”因縁を断ち切る”。

そのために、一方通行は杖と共に足を踏み出す。

同じ容姿をしたふたりに着実に近づいていく。

そして……。

「あ！一方通行！！」

近づいてくる一方通行を発見し、声を出して彼を呼ぶ打ち止めの笑み。

そして、向かいにいた御坂美琴の顔が驚愕の表情を帯びていく。

そんな中で、一方通行は心の中で呟く。

(今日は…なんでこんなにめんどくせエ奴らと出会ッちまうんだア

……)

そして、上条当麻に続いて、一方通行は再会を果たす。
上条よりも深い因縁のある常盤台の超電磁砲。
御坂美琴と。

第三章 因縁の邂逅（前書き）

やっとう更新です。

”パロディ”やるつもりだったんですが、気づいたら”シリアス”なムードに変わってしまったて、そんなに笑えない状況になってしまいました。

それともうひとつ。

この新章では浜面やアイテムの面々は出すつもりがありません。彼らには違う時に活躍してもらうつもりです。

浜面や麦野が好きな人には本当に申し訳ないです。

それではどうぞ。

第三章 因縁の邂逅

9

御坂美琴は驚愕の連続だった。

楽しそうに話をする打ち止めの豊かな表情を見ていた美琴だったが、不意に打ち止めが美琴に向けていた視線を横に向けた。すると打ち止めは、何かを発見したように嬉しそうに表情を緩めた。

そして次に打ち止めの口にした言葉によって、美琴は一瞬、思考や心臓までもが止まったような感覚に襲われた。

そして美琴は、打ち止めが向いている方向にゆっくりと首を動かす。

そして見てしまった。

嬉しそうにしている打ち止めと自分に近づいてくる、真っ白な髪をし、真紅の瞳で自分達を視界に捉えながら、杖をついてゆっくりと、しかし着実に近づいてくる人物。

あの最悪の実験の実行者であり、妹達を殺戮の限りを尽くし殺していた人物。学園都市第三位と呼ばれる自分でも手も足も出なくその圧倒的な力の差を見せつけられた。

そして8月のあの夜に、今や戦争を止めた英雄とも呼ばれている上条当麻に敗れ、その後、姿を一切見ることなくいた人物。

だが、その事実はこの瞬間くつがえった。

そして打ち止めと美琴の目の前に立つひとりの人物。

御坂美琴と一方通行は、今再び邂逅を果たした。

「ア、アンタ……なん……で……」

目の前に立つ一方通行に対し、美琴の言った言葉は明らかに動揺の色を帯びていた。

”無理もない” と言えば納得出来る。

なにせ御坂美琴にとって一方通行は未だに、あの最悪の実験に關与していた恐怖の対象でしかない。

上条当麻も、一方通行とは色々あった仲だが、それでも上条は一方通行が打ち止めを守る為に命を懸けて戦ってきたという事実を知っている。

その事実、上条の中の一方通行の印象を大きく変化させるキツカケになった。

だが、御坂美琴は、一方通行と打ち止めが知り合いだという事実すら知らなかった。

当然、一方通行が打ち止めを守ってきたという事実も知らないということだ。その事実、未だにふたりの間に確執を生む。

「くっ！……」

ガタンッ！と音を鳴らしながら美琴は腰掛けていた椅子から立ち上がった。

眉をひそめながら一方通行を見つめる美琴は、左手をポケットの上に添え、いつでもコインを出せるようにと身構える。

だがそんな行動をしている中でも、美琴の頭の中で良いイメージが浮かばない。

いくら自分が素早く超電磁砲を撃てたとしても、学園都市最強を誇る一方通行の”反射”によって跳ね返されてしまうだろう。

そうして自分以前、絶望的にそびえ立っている一方通行との壁を実感してしまった。

そしてその時の壁は、今でも変わらずに存在していると美琴は感

じている。

そう分かっているのだ。 ”自分では一方通行には勝てない”と。そう理解していながらも、美琴は一方通行に対して身を構える。そしてそんな美琴を、一方通行はなにも言葉を発せずじつと美琴の向けてくる視線を受け止めていた。

すると…、

「待つて！お姉様！！」

ふたりの間に発生していた言い知れぬ空気を打ち破るように、打ち止めがふたり間に入り、言葉を発する。

「もうこの人をそんなに警戒しなくていいと思うよって、ミサカはミサカはお姉様に真摯に投げかけてみる！」

「……ッ……でも、こいつは……」

打ち止めの言葉を聞いた美琴は、少しの動揺を見せた。

打ち止め自身も、あの実験で死んでいった妹達と同じような存在であることに変わりはない。

その打ち止めが一方通行を庇っているという事実は、美琴にとって信じられない光景だった。

そんな美琴の目の前で、打ち止めはさらに言葉を続ける。

「この人はもうむやみに周りの人を傷つけたりしないって、ミサカはミサカは……」

「もういい……」

だが、一方通行は自分のために美琴に一生懸命話しかけている打ち止めの言葉を遮った。

一方通行の言葉に、美琴のほうを見ていた打ち止めは驚きの表情を浮かべながら一方通行のほうに振り返った。

振り返った打ち止めが一方通行に視線をやると、一方通行は打ち止めのほうを見てなどいなく、美琴の顔をじっと見つめていた。

そして一方通行は再び口を開く。

「文句があんならいくらでも聞いてやる。どうしても納得いかねえなら力づくで納得させてやるよ」

「一方通行……」

一方通行の言葉を聞いて不安そうに瞳を揺らし、一方通行の名前を呟く打ち止めを尻目に、一方通行は携帯を取りだし、耳に当てる。コール音が一方通行の耳に響き、やがて入ったノイズの数秒後、一方通行のよく知る人物の声が耳に響く。

《またしても何か用かい？ 一方通行》

「今どこにいる？……」

《お約束通り、影でこっそりと君たちを見守っているよ。で、何の用なんだい？》

軽い口調で喋る番外個体の声を聞きながら、一方通行は美琴達を視界から外し、ふたりに聞かれないようにわずかに声のトーンを下げて次の言葉を口にする。「俺は第三位と話がある。お前は打ち止めを連れて先に帰れ……」

《あれまー、一方通行。アンタミサカのお姉様になにするつもりだい？

まさか打ち止めみたいな子供に見せられないようなことをお姉様にするつもりじゃ……》

「今すぐ息の根止めてほしいかア……？」

《了解した。で、いつそつちに行けばいいのかな？》「俺と第三位が消えてからだ。いいなア……俺達がいる前でツラ見センじゃねエぞ

……」

一方通行の言葉に、番外個体は”ハハッ”と笑い声を出した。

《一方通行。それってもしかしてお姉様のためかい？お姉様がミサカが存在を知ってまた危険なことを考えないように……》

その番外個体の言葉に、一方通行はなにも返すことが出来なかった。

番外個体はサードシーズンの妹達であり、当然御坂美琴は彼女の存在を知らない。

一方通行でさえ、番外個体の存在を知ったのはロシアの地で自分達を殺しにきた時に知ったのだ。

あの実験以降、学園都市の闇にあまり関わっていない御坂美琴が、その存在を知っているわけがない。

もし、ここで番外個体の存在と、サードシーズンのことを御坂美琴が知れば、彼女は必ず何か行動を起こすはずだ。

それは実験の当事者である一方通行がよく知っている。

たとえ、一方通行の言葉によって、今現在学園都市の闇が限り無く薄くなっているとしても、それでも御坂美琴は必ず何かしらの行動を取る。

だからこそ、御坂美琴と番外個体を会わせるのは極力避けるべきだと考えられた。

一方通行はそのことを理解していて、美琴と番外個体の接触を避けるようにしていた。

だが、彼はそれを肯定するような発言はしないだろう。

一方通行はあくまで、自分にとって都合の悪いことが起こるのが煩わしい、という理由で動くだろう。

《まあいいさ。分かったよ。一方通行とお姉様がいなくなったら姿を現すとするよ》

「分かればいい……」

《んじゃ、お姉様によろしく》

番外個体の言葉と共に、一方通行は電話を切った。そしてすぐに美琴達のほうに顔を向け、

「話がついた。迎えが来るまでくそガキはここで待ってる。来い、

第三位」

一方通行はそう言うのと、美琴と打ち止めから背を向け、杖をついて歩き出した。

その一方通行の背中を見ながら、美琴も打ち止めに一瞬チラリと視線をやったあと一方通行のあとを追って歩き出す。

そしてそんなふたりの背中を、打ち止めは不安そうに見つめていた。

打ち止めから段々と離れていく一方通行の美琴の背後で、こっそ

りと番外個体が打ち止め目指して歩いていく。

一方通行の背中に集中している美琴は番外個体の存在に気づかない。

やがて、打ち止めと番外個体の視界から一方通行と美琴の姿が消えた。

残されたふたりの少女は、自分達の暮らしている場所へと引き返していく。

10

広大な土地を持つ学園都市には、多くの施設が点在しているが、その中でも、稼働している施設などがほとんどないと言ってもいい場所が多々ある。

学園都市・第一九学区。 学園都市の急速な発展に遅れをとり、その結果廃れてしまった人口がほとんどいない学区。

蒸気機関関係の研究所などが存在しているが、今現在は活発な活動はしてはなく、ほぼ無人と言っても過言ではない。

辺りにゴミが散らばり、稼働していない施設の鉄で出来ている部分は茶色に錆び、コンクリートで出来ている部分には大きくヒビが入っている。

そんな学区の空き地とも取れるなにもない場所に、ふたりの人間が向かい合って立ち尽くしている。

一方通行と御坂美琴。

既に時間は午後4時を過ぎ、学園都市には夕焼けの光が射し込み、

その光が御坂美琴と、反射を使用していない一方通行の顔を照らしている。

打ち止めと別れたあと、一方通行を追っていた御坂美琴はいつのまにか人影のまったくないこの学区に足を踏み込んでいた。

だが、それは御坂美琴にとって好都合だ。

まったく人影のないここなら、手加減せずに力を使うことが出来る。

恐らく一方通行もそれを考慮してここを訪れたのだろう。

一方通行がそんなことを考慮するなどどうにも信じられない美琴だが、実際人がまったくいないここに来てしまったのだから信じるほかない。

美琴は自分の目の前で、自分をその真紅の瞳でじっと見ている一方通行に対して言葉を口にする。

「アンタにひとつ聞きたいことがある」

「……………」

「何でアンタが”あの子”と一緒にいるの？」

「……………」

美琴の質問に、一方通行は黙ったままにも喋らない。

そんな一方通行に対し、美琴はさらに質問を続ける。

「まさかアンタ、あの子になにかしたんじゃないわよね……」

カフェで打ち止めの愚痴を聞いていた美琴は、最初は打ち止めが誰に対して愚痴を言っていたのか分からなかったが、今ならはつきりと、あれが一方通行に対する愚痴だと理解出来る。そして一方通行を視界に捉えた時の打ち止めの嬉しそうな顔。

あんなものを見たら、なにかあったのか問いただしたくなるのも無理はない。だが、一方通行は変わらずに沈黙を続ける。

「……………答えなさいよ」

沈黙を続ける一方通行にいい加減痺れを切らした美琴は、一方通行に答えるように促す。

すると、一方通行は”はアア…”と溜め息をつき、言葉を発する。

「ここで俺が答えたとして、お前はどうするつもりだ…」

「アンタの答えによるわ」「……そうか…」

美琴の言葉に一旦言葉を切った一方通行は、少しの沈黙を挟み、再び言葉を発する。

「なにもしたつもりはねエ。俺にとっちゃあいつはただのくそガキだ。」

それ以上でもそれ以下でもねエよ…」

「じゃあ何でアンタのそばにいのよ。何であんなに……」

美琴はそう言って、打ち止めの嬉しそうな笑みを思い出す。

それに対し、一方通行は、

「お前に話す必要はねエ」「なんですって…」

「テメエには関係ねエ。話したところでなんの意味がある。なんの得もねエよ」 その言葉に美琴が堪えていたなにかが爆発した。

”関係がない”。

妹達の事件で重要人物のひとりだった御坂美琴にとって、その言葉は耐え難いものだった。

あの実験によって、自分のクローンが製造され、そして殺戮の限りを尽くされた事実。

打ち止めも妹達と同様の存在であり、そしてその殺戮の実行していた一方通行。

その打ち止めが一方通行の側にいて、心配しないわけがない。

にも関わらず、一方通行は美琴に対して”関係ない”と言った。

そして、その発言により美琴の怒りが爆発する。

「ふざけんじゃないわッ!!!」

美琴は怒号と共にポケットに入っていたコインに手を伸ばす。

怒りのせいか、美琴の動きはいつもよりもすばやいものに変化しており、数秒ののち美琴はコインを持つ左手を一方通行に突き出した。

瞬間、

ドンッ!!!と

衝撃音と衝撃波を発生させ、美琴の左手からひとつの巨大な閃光が放たれた。空気を摩擦させ、キィィイツ！という耳鳴りに近い音を出しながら、超電磁砲は一方通行に向かって一直線に駆け抜ける。

自分めがけて放たれた超電磁砲に対し、一方通行はなんの動作も見せず、ただ杖を地面につけて立ち尽くしていた。

着々と一方通行に超電磁砲が近づいているが、それでも一方通行はなんの動きも見せない。

そして超電磁砲が一方通行にぶつかろうとした瞬間、一方通行が動いた。

一方通行は空いている左手を首筋に付いているチョーカーに添えた。

瞬間、チョーカーの起動する音と共に、超電磁砲が一方通行にぶつかり、炸裂した。

爆音と共に土煙を纏った風が吹き荒れ、美琴の髪をなびかせながらやがて風は消えていき、辺りは再び静寂に包まれる。

「……………」

美琴は何をするでもなくただじっと一方通行のいた場所に視線を向ける。

そして徐々に煙が消え、煙の中から白いものが美琴の視線に映った。

一方通行。

彼はかすり傷ひとつすることなく先ほど変わらない体勢で平然と立っていた。美琴は驚きはしない。

以前、一方通行と相對した時の記憶が頭の隅から引っ張りだされる。

あの時に感じた一方通行と自分との圧倒的な力の差。

自分のクローンが殺された現場を目撃し、一方通行に対し放った攻撃をことごとく反射させられ、結局途中に現れた他の妹達によって場を納められてしまった。

学園都市第三位の自分と、学園都市第一位の一方通行。

その力を差を存分に見せつけられ、恐怖した。

「……なんなのよ、アンタ」 美琴は再び確信する。

自分では一方通行には勝てない。

今の超電磁砲は最大の力で撃つたつもりだ。

そしてその最大の力をいとも簡単に防がれた。

火傷どころかかすり傷ひとつ付けられない。

それがとてつもなく苦く歯痒い。

これが一位と三位の階級の違いなのかと。

だからこそ、不満が募る。

これだけの力の差を見せつけられたからこそ、美琴は心の底に溜まっていたことを口にする。

「なんでそんなに強いのに、あの子達を助けてくれなかったのよッ
……」

「……………」

美琴の叫びが静寂に包まれた空気の中で重く響き渡った。

そして一方通行はその言葉黙って聞いていた。

御坂美琴は知らない。

一方通行が打ち止めのためにどんなことをしてきたか。

出会った日に、打ち止めを使い、妹達をコントロールしようとした天井の計画を阻止し。

9月30日、木原から打ち止めを助けた。

そして第三次世界大戦終戦間近のロシアの地で、血だらけになりながらも魔術を行使し、エイワスの影響で体調が悪化していた打ち止めを治療した。

一方通行の行為を知らない美琴の言葉は、そんな一方通行の胸に突き刺さる。だが、否定はできない。御坂美琴の言うことが正しいと、一方通行自身が考えているから。

あの実験の中で、自分はろくに抗いもせずになだ殺して殺し尽くした。

殺すことで、妹達が自分に恐怖を覚え、実験にならなくしようと言葉の中に諭すような言葉を交え、実験を止めさせようとした。だが、全ては無駄。

一方通行の行動は実を結ぶことはなかった。

自分のしていたことはただ、妹達を無意味に殺していただけ。

それを分かっていたながら、他の行動などはしようとせず、無意味と分かっている行動を続けた。

そして自分は結局、ただ妹達を殺していただけで、実験はあのツンツン頭によって終わりを迎えた。

”後悔”という言葉は自分の中にまだある。

”もしあの時に他の行動を起こして実験を止めていたら”。

だが、どこかで”後悔”をしてもなんの意味もないと割りきっている自分もいる。

だからこそもう後悔をしないために、一方通行は打ち止め達を守っていく。

この腐りきった街の闇から自分の大切なものを守る。

そして大切な人が大切に思っている人も。

だからこそ…。

「用件はそれだけか…。なら帰らせてもらうぜ」

チョーカーのスイッチをOFFに切り替え、一方通行は美琴から背を向け、杖について歩き出す。

だが、ここから去る前にもう一言。

一方通行は体を横にして首を美琴のほうに向ける。「もうこれ以上関わるんじゃない。俺にも、あのガキにもなア…。

テメエはこの街でのうのうと過ごしてりゃいい」

「…待ちなさいよ……」

一方通行の言葉に反応した美琴の言葉は、どこか弱気で憔悴したような声色だった。

「関係ならあるわよ…。アンタよりもあたしのほうがよっぽど関係ある……」

そんな弱気な美琴の言葉に対し、一方通行は、

「……もうひとつ言っておくぞ、第三位……」

そう言った一方通行の声はどこかドスの聞いた不気味な声だった。その声に比例するように、一方通行の真紅の瞳が怪しく光り、美琴を睨み付ける。

「この街の闇をちつとも理解しちゃいねエ一般人が、分かったような口聞くんじゃねエ……」

暗部に墜ちた一方通行だからこそ解る。

この街の闇がどれだけ濃く、恐ろしいか。

人を人と思わず、ただの実験のための材料としか思っていない研究者達。

この街に必要なない人間を殺し、骨も残らないほどの熱でその人間の存在を消滅させ、処分する暗部の人間達。

その暗部にいたからこそ、一方通行は改めてこの街のドス黒さを理解した。

だが御坂美琴はこの街の闇をほんの端の部分しか知らない。

だからこそ突き放す。

これ以上自分達に関わってこの街の闇に触れないように。

冷たく突き放すことで、守れるものがあるなら、一方通行は間違いない、その道を選ぶだろう。

そして今も、一方通行はその道を選ぶ。

一方通行の言葉に美琴は何も返さなかった。

それがどういう理由でなのかは一方通行は知らない。

一方通行は再び美琴から背を向け、ゆっくりと歩きだす。

夕暮れの光と静寂に包まれた場所に一方通行の足音と杖をつく音だけが響いた。

美琴は顔を俯かせていた。

両手の拳を血が滲むほどに握りしめながら。

ふたりの人間はゆつくりと確実に離れていく。

ふたりの間に生まれた道はまるでふたりの壁のように立ち塞がり、自分から離れていく一方通行を追いかけるれない。

一方通行と御坂美琴。

ふたりは夕暮れの光りに照らされながらひとりとは黙々と歩き続け、もうひとりとは顔を俯かせ立ち尽くしていた。

ふたりの邂逅は太陽が沈むことで徐々に光りを失い、照らされた世界の終わりと共に終幕を迎えた。

第四章 うごめく『何か』（前書き）

更新久しぶりです。

とても短いです。

本当に申し訳ありません。こちら辺で区切っておいた方が良くと考え、このように短くさせていただきました。

第四章 うごめく『何か』

1
1

既に夜のとばりが降り、あちこちで点灯している光が学園都市を照らしていた。

そんな学園都市の一角にひとりの少女がいた。
御坂美琴だ。

「……………」

彼女はまるで暗闇に溶け込むような暗い雰囲気を放ちながら自身の住む寮へと足を運んでいる。

美琴の顔はあからさまにショックを受けたような表情をしており、そんな表情と共に体から暗いオーラを周囲に撒き散らしている。
そんな美琴に近づく影が後方からひとつ。

「お姉様あー！ー！」

美琴の耳に、後輩である白井黒子の声が響き、それと同時に黒子の両腕が美琴の背中から首に回され、抱きつかれたカタチになった。
「心配していたんですのお姉様！一向に見つかからないんですもの！すっかり日も暮れて一緒に探していた初春達を帰してからずっとひとりで探していたんですの！！」

「ああ……ごめんね。迷惑かけちゃったわね……」

「…………お姉様？」

素直に謝罪をした美琴に違和感を感じた黒子は、美琴に対し質問の言葉を放つ。

「何かあったんですの？……」

「……別に。なにも無いわよ。帰りましょ……」

「え、ええ……」

美琴の暗いものを感じた黒子は、首に回していた腕を離れた。歩き出した美琴の背中をすぐにでも追いかけてい黒子だったが、美琴のあの雰囲気を見るとなぜかそれを躊躇われた。

暗闇の中へと歩いていく美琴が黒子の視界から徐々に闇へと溶け込み見えなくなっていく。

それに言い知れぬ不安感を覚えた黒子は、慌てて美琴の元へと急ぐ。

何があつたのかを聞きたかつた黒子だったが、無理に聞きたいとは思わない。今の美琴はそんな雰囲気放っているからだ。

だがこれだけははっきりと分かる。

御坂美琴に得たいのしれない何か良からぬことがあつたのだと。

そんな不安を感じながら、黒子は前をいく美琴のいつもよりも小さく見える背中を見つめていた。

行間・5

学園都市のとある路地裏に複数の人間が集まっていた。

この学園都市で警備員アンチスキルと呼ばれる人々だ。

その中のひとり、黄泉川愛穂が目の前にある『物』を見ながら苦そうに眉を寄せる。

「たくつ、悪趣味なものの見せやがるじゃん」

その言葉に、黄泉川の隣にいた鉄装綴里は片手で口元を抑えながらコクンと頷いた。

少し顔を青白くしている綴里と黄泉川の視線の先にある『物』。
アスファルトの地面に、まるで高いところから一気に流し落としたように円形に広がっている血液。

その上にその『物』は倒れていた。

その真紅の血液に汚れた白衣の腕の部分から出る指や、血痕の付着した靴が、その『物』がかつて『人』だったことを物語っていた。だが『人』にあるべきもの、『顔』がその『物』にはついていなかった。

正確には『顔』の部分だったものが位置的に顔だったらしいところに転がっていた。

赤く染まったアスファルトの上に、白く光る歯と人にふたつ付いているはずの眼球のひとつが無造作に転がっている。

ぐちゃぐちゃと言っても過言ではないその死体に、アンチスキル警備員の面々は背中になにか冷たいものが流れ落ちていく感じがした。

今までも何度か惨い死体を見たことはあるが、この死体からは、これだけの殺戮をやらかした者の憎悪のようなものを感じとった。

この『人』だったものに対するその殺戮者の感情。それがはつきりと憎悪という感情、それしかなかったと思えた。

（はあ…… ホントにこの街はどうしようもないじゃんな……）

その『物』が着ている白衣のようなものからして、かつてこの『人』が何かの研究職に就いていたと考えられるのは容易なことだった。

黄泉川愛穂は、この学園都市にいる研究者達にあまり良い感情を持っではない。

自分の知人にも研究者はいるが、彼女にはあまりそんな感情は抱いてはいない。

彼女からは悪意のようなものを感じたことがないからだ。

そんな彼女のような研究者はこの学園都市では貴重な存在と言えるだろう。

この街の研究者は人を人として見ていないような研究者がたくさん

んいる。

以前、黄泉川たち警備員が制圧した研究所では、子供たちを実験台にして非人道的な実験をしていた。

そこで見た地面に無造作に倒れていた幾多の子供たち。

そんなものを見ている内に、黄泉川は研究者という人間たちに対して良い感情を持っていない。

この人は一体どっちだったのだろうか。

だがこの無惨な姿を見るに、恐らくは良い方ではないと思える。

この殺戮者はどれだけの憎しみを抱えていたのだろうか。

顔をぐちゃぐちゃにされ全身から血を流して倒れている『物』を見ながら、黄泉川はそんなことを考えていた。

そんな黄泉川の耳に自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

彼女は人だった『物』から背を向け、自分を呼んだ者の方に顔を向ける。

だが、彼女はすぐさまその『物』がある方に顔を再び向き直す。

「っ！」

彼女は感じたのだ。

自分に一瞬向けられた殺気を。

だが後ろには地面に転がっている『物』以外なにも存在していない。

（な……なんなんじゃん…今の……）

冷や汗を流す黄泉川の視線の先には『物』以外なにも映っていない。

映っているのはどこまでも広がる暗闇。

それが日の沈んだ夜の町の『闇』か。

それとも学園都市にはびこる『闇』か。

『闇』の深さを知らない黄泉川にはそれがどちらなのか分からない。

番外編 s s 1（前書き）

タイトルの通り今回から番外編になっています。

番外編と言っても、前回からの続きとして見てもらって結構です。

そしてこの番外編の後、いよいよバトル展開になっていきますので、どうかご了承ください。

1

11月22日

一端覧祭を来週に控えた土曜日。

上条は未だに続く補習から家に帰宅したあと、飼い猫であるスフィンクスのノミ問題が浮上し、スフィンクスの体の清めるついでに部屋の掃除を始めた。

そして今も…、

「おい、インデックス。そこにあるぞうきん取ってくれー」

「んー、これー？」

インデックスが差し出した少し黒く汚れているぞうきんを受け取った上条は、いそいそとキッチンを拭き始める。

そんな上条の横には先ほどからスフィンクスが、体が綺麗になったことを自慢したいのか、「ねえ、どう自分凄く綺麗になってない？」と言わんばかりに、上条の視界にやたらと入ってくる。

が、そんなことは気にも止めずに上条はキッチンを拭いている。

そんなキッチンの向かい側にいるインデックスは、散らばった本などを両手いっぱい抱え、本棚に元に戻す作業をしている。

「ねえとうま、もうお腹すいたんだよ。掃除はこれくらいにしようよ」

「だめ！ただでさえ家でグータラしてる誰かさんが掃除さえもしな

いんだから、こういう時に全部やらないと後で面倒くさくなるだろうがい!!」

「とうま…それはもしかして私のことを言ってるの!？」

「他に誰がいるんですか!？」

キッチンを挟みながら互いに睨みあうふたりだったが、突然床に積んであった本の山が倒れる音を聞いたふたりは睨みあうのも忘れ、そちらに視線を向けた。崩れ落ちた本の数々を見て、インデックスは怒ったように頬を膨らませながら再び上条の方に視線を向ける。「もう!とうまが騒ぐからせつかく積み上げた本の山が崩れちゃったんだよ!!」

「俺のせいだよ!!」

睨みあうふたりは同時に「ふんっ!!」という声を出して相手から顔を背け、上条は再びキッチンの掃除を。

インデックスは崩れた本の山にドンドンツ!と足音を立てながら近づいていき、崩れた本の山を再び積み直し始めた。

不機嫌そうにしながら本を手取るインデックスは、”自分はとても不機嫌です”ということを上条に表現しようとしているのか、本をひとつずつダンツ!と音を立てながら徐々に積み重ねていく。

と、その時。

手に取った本の下から本を上にあげる時に発生した風によって宙に一枚の紙がヒラヒラと揺れて姿を現した。

「……?」

一瞬その光景をボーッと見つめていたインデックスだったが、そのあとすぐにその紙をキャッチすることが頭に浮かんだ。

目を細め両手を構えたインデックスは、その紙が自分の目線に並んだ瞬間、ビタアンツ!!と音をたててヒラヒラと風になびきながら地面へと落下していく紙を両手でキャッチした。

そしてなにも書いていない白紙の紙をまじまじと見ながら裏返してみると、そこには数字の羅列が並んでいた。

当然見覚えのないインデックスは、今までの不穏な空気など忘れ

たのか、自然と上条に話しかけた。

「とうま、この紙なんなのか知ってる？」

「ん？紙？」

先ほどまでのケンカを忘れたかのように、普通にインデックスに話しかけられた上条は少し動揺をしたが、インデックスがヒラヒラと揺らしながら持っている紙を見て、上条は一旦キッチンの拭き掃除を中止し、インデックスのいるリビングへと歩いていく。

そしてインデックスから紙を受け取り、上条は紙に書いてある数字に目を向ける。

そして、

「あ。」

思い出したかのように声を上げた上条を、インデックスは近くに来たスフィックスを抱え上げ、膝に乗せながらいぶかしげに見つめる。

そんな上条の頭の中にある記憶が蘇る。

隣の部屋の住人である土御門に睡眠薬を盛られ、無理矢理あの“トラウマ怪物飛行機”に乗せられる前。

ローマ教皇と面会した後、イギリス王室の第二王女・キャーリサに手渡された白い紙。

『新しい携帯が手に入ったら連絡を入れる』

と、言われて手渡された誰かの電話番号。

「やべ、すっかり忘れてた」

もうあれから2週間以上たっているというのに、未だに連絡を入れてない。

それどころか紙を放置して、携帯をとくに手に入れていたというのに、電話することを思い出すこともなく過ごしていた。

これでもし、この電話番号がキャーリサのものだったとしたら…。

（確実に怒っておられるに違いない…）

いくらなんでも2週間以上たっているのに未だに携帯を手に入れないなんて、自分でも考えられない。

絶対にこう思うはずだ。『電話を忘れている』と。　まずい。

上条の頬に冷や汗が流れる。

ここで電話しても確実に怒られるだけ。

それは十分分かるが、これ以上相手を待たせるわけにはいかない。

（覚悟を決める！上条当麻！！）

”すう”と深呼吸をして気持ちを落ち着かせた上条は、覚悟を決め自分のズボンのポケットにしまっていた携帯を取り出し、紙に書いてある番号を打っていく。

先ほどから自分をいぶかしげに見ているインデックスに目もくれずに、上条は携帯を耳に当てる。

コール音が上条の鼓膜に響き渡り、その数秒後にブツツと一旦回線が繋がる音が上条の耳に届く。

その瞬間、上条は聞こえてくるであろうキヤ－リサの怒号が自分の耳に響き渡るのを覚悟した。

一旦携帯を耳元から離せばいいと思うかもしれないが、元はと言えば悪いのは今まですっかり忘れていた自分の愚かさ。

そして上条はそんな自分の愚かさをしっかりと受け止め、キヤ－リサの怒号を聞くことにした。

そして……。

《はあゝい、一体誰でしようなのかしら？》

甘ったるいような声が上条の耳に響き渡った。

番外編 S S 1（後書き）

はてさて、電話の相手が誰なのかは分かる人は分かると思います。

この電話相手を誰にしようか迷っていたんですが、最終的に『あの
人』に決めました。

番外編 s s 2 (前書き)

『コメディ』ものを作ろうと考え、作っていたのですが、とりあえずひとつ言っと『禁書目録』はコメディ書くのがすごく難しいと分かりました。

あまり執筆が進まず結局短い文章になってしまいました。

なので今回も短いです。

本当にすいません。

行間・1

神裂火織はイギリス清教の長・ローラ＝スチュワートの住まいである”ランベスの宮”に足を運んでいる。

もちろん遊びなどではない。

仕事関係の用事だ。

以前の女子寮での戦闘による怪我はすっかり癒え、その間に貯まっていた仕事に復帰している神裂は、次の仕事の案件について、上司であるローラに意見を求めに来たのだ。

そして神裂は、最近の上司のお気に入り場所である部屋の前にたどり着いた。

イギリス清教と友好関係を築いている学園都市から贈られてきた大量のバスタブが並んでいる部屋だ。

その内の幾つかのバスタブは同僚のステイル＝マグヌスによって焼かれてしまったのは知っているが、それでも未だに部屋には数えるのも面倒なほどのバスタブが置かれている。

その同僚のステイルはローラに対して少し礼儀知らずなところがあるが、一方の神裂はそれなりに礼儀をわけまえており、律儀に部屋のドアをコンコンとノックしてからドアノブに手を回した。

開けたドアの隙間から生暖かい空気が神裂の感覚神経の触れた。

その生暖かいもの感じながら神裂はゆっくりとドアを開けていき、中にいるはずのローラに声をかけた。

「失礼します。アークビショップ（最大主教）少しお話が……」

「はぁーい、一体誰でしょうなのかしら？」

一瞬自分に向けて発された言葉だと思った神裂は、自らの名前を

口にしようとしながら、自分の上司の声のした方に目を向けた。

だが、肝心の上司はバスタブの淵に腰掛けて、ちょうど足首が浸かるほどまであるお湯に両足を入れ、足湯のような状態にして耳元に当てた携帯に話し掛けていた。

バスタブや洗濯機やマッサージ機に続いて今度は携帯も貰ったのかと、若干呆れ気味になっている神裂だが、当人のローラは彼女に気づいていないのか、お湯に浸かっている両足を楽しそうにバタバタを上下に動かしながら、電話相手に向けて喋っている。

そんな光景を見て、一体上司は誰と話しているのだろうか、ふと疑問に思った神裂だったが、ふいに聞こえてきたローラの言葉に驚きを隠せなかった。

「改めて”よろしく、上条当麻くん”」

2

携帯から聞こえてきたその言葉は上条の想像とはあまりにも違っていた。

いや、正確にはその言葉も声も言葉遣いも、何もかもが違っていた。

イギリス王室・第二王女のキャーリサの怒号が聞こえてくると思っていた上条にとって、その甘ったるいような声はあまりにも衝撃的すぎたのだろう。

上条は携帯を耳元に当てたまま硬直していた。

数十秒その状態のままの上条にさすがに違和感を感じたのか、インデックスが心配そうに「とうま？とうま？」と呟く声も、今の上条の聴覚には届いていなかった。

だがいつまでもその状態を保ってはられない。

上条の耳元にある携帯から「もしもし」という声が聞こえ、それが引き金になったのか、上条はハッ！と小さく息を吸い込み、意識を取り戻した。

それに合わせたかのように、上条の電話相手は再び言葉を発する。
《ようやく電話をしてきしようね。わたくしずつとお待ちになりてたのよ？》

「ああ…えっと…す、すみません」

《ふふ、良いわ。だって今こうして話しているのだから》

一応の会話をしている上条だが、頭の中は今自分が会話をしている相手が誰なのか考えるのに必死だ。

当然聞いたことのない声だし、なにより相手は”自分から電話が掛かってくるのを待っていた”というような発言をしている辺り、間違い電話でもなさそうだ。

だが上条の頭にはこの声とマッチする人の顔がまったく思い浮かばない。

すると、上条の電話相手はまるで上条がその疑問を持つのが分かっていたのか、次に自分の名前を電話越しに呟いた。

《ああ、自己紹介はまだたりてたわね。ローラよ。ローラ＝スチュワート》

「はあ、どうも…。えっと俺は――」

《知りえているわ。”上条当麻”でしょう？》

「なんで俺の名前を？」

《『イギリス清教』に所属したる者であなたの名前を知らぬ者はいないもの》

イギリス清教。

上条の隣で猫とじやれている白い修道服を着ている少女はもちろん、なんやかんやで色々な事件で共闘したことのあるステイル＝マクス。

さらにはクラスメイトの土御門や天草式のトップである神裂や部

下の建宮に五和など、他にもたくさん知り合いが所属している宗派だ。

そして上条の電話相手のローラ＝スチュワート。

彼女こそイギリス清教のトップであるが、上条はその事実を知らない。

イギリス清教のトップという人間の存在は知っているが、それがどんな『名前』でどんな『人物』なのかを知らないのだ。

故に上条はローラの名前を聞いても、ローラがイギリス清教のトップとは分らない。

ステイルや神裂たちと同じく、イギリス清教に所属している人間の内のひとりくらいにしか認識していない。

「つまりお前もステイル達の同僚なのか」

《ええ、その通りなのよ》「つーかさつきから気になってただけど、その変な日本語は何なんだ？」

その瞬間、電話越しにローラが息を飲むような音を上条は耳にした。

《えっ……、そ、そこまでおかしきことはないでしょう？日本語とはこのようなものであると教わりしなのよ！？》

「えっと……ちなみにそれは誰から教わったんでしょうか？」

《土御門元春の奴よ》

やっぱりろくな奴じゃねえ。

そう思った上条の頭に金髪のグラサン男の「ちょっとした遊び心だにやー。カミヤンなら分かってくれるだろうー！」という声が思ひ浮かぶ。

「まあ喋り方は人それぞれじゃねえか。俺はその喋り方でも十分良いと思うぞ」《そ、そうでしょう。別におかしきところはないにつきしよね。まったくステイルたちときたら……》

「え？ステイル？」

《い、いえ、なんでもないわ》

何か不満のようなものを聞いたような気がする上条だが、今の上

条はそんなことよりも思うことがあった。

考えてみればイギリス清教の人間とこんな普通の会話をしたのは初めてだ。と上条はふと思った。

ステイルはもちろん、土御門や神裂や五和。

オルソラなどは話が噛み合わない。

だが大体がトラブルの時にしか会わないので、そんな日常的な会話をしようというのが無理なのだ。

そう考えると、今こうやって会話をしているのが奇跡のようにも思えた。

《ま、まあ喋り方は置きにしたりて、改めて”よろしく、上条当麻くん”》

「こちらこそよろしく、えっと…ローラ、さん」

《仰々しき呼び名はいいわ。”ローラ”と呼びたりて結構よ》

「そっか、じゃあ——」

そこまで言った瞬間、上条の言葉を遮るような言葉が響く。

《アークビショップ！なぜ彼と電話をしているのですか！？》

「ロー…え？」

突然上条の耳に携帯と離れたところから大声で言葉を発するような感覚で聞こえてきた声は、上条にとってとても聞き覚えのある声だった。

「神裂？」

上条は聞こえてきた声の主の名前を呟いた。

上条と話をしていたローラは携帯を耳元に当てたまま、突然現れてなにやら叫び声を上げた部下の神裂をいぶかしげに見つめながら言葉を口にする。

《いきなり大声を出したりて如何様のつもり神裂。せっかく彼と楽しく会話をしていたというのに》

《そうではなくて、なぜ彼の電話番号を知っているのですか！？》

《なに？あなたも知りたくて？教えてあげてもよきにつきたるわよ》

《えっ、い、いえ別に私は……》

《おやゝ？そのわりには物欲しそうに目を輝かしたるけど？》

《うるせえっ！！ド素人がッ！！》

《へ？》

《こっちは汗かいて働いてるっつーのに、テメエは風呂に浸かって楽しそうにペラペラとくっちゃべりやがって！！》

《ちょ…神裂、さん？》

《もう二度とそんなことできないように、この部屋にあるもの全部ぶっ壊してやる！！》

《ちよつと待ちたりて欲しいわ神裂さん！？て、なぜ七天七刀を取り出しているの！！以前スタイルに燃やされたりてショックなのに、その上また燃やされたるなんて堪えられないって、やめてええええええええええッ！！！！》

瞬間、ブチッ。

という音と共にローラの悲痛な叫びが上条の聴覚から消え、変わりにツーツーという回線の切れた音が響いた。

「……………」

上条はその音を口元をひきつらせながら聞いていたが、ゆっくりと携帯を耳元から離していった。

「とうま？」

インデックスの呼び声に反応し、上条はゆっくりと彼女の方に視線を向ける。「どうしたのとうま？」

「いや…なんつーか……」 改めて実感した事実を上条はゆっくりとした口調で語りかける。

「やっぱりイギリス清教の人間との日常的な会話は無理だ…」

そう言った上条の頭に一番まともだったかもしれない天草式の少女、五和の顔が一緒チラツと浮かんた。だが電話越しに聞こえてきた彼女のボスの姿を思い出すと、いつか五和もあんな風になってしまうのではないかと考えてしまう。

結局トラブルのない会話など無理だ。

そう思うと、上条は溜め息混じりに呟く。

「不幸だ」

番外編 SS 2（後書き）

さて、番外編はこれで終了ということなので、次の話から『第五章』になります。

とりあえず上条はもちろん科学サイドのメンバーを活躍させようと思っ
ていますが、結局活躍するのは大体主役たちです。
しばしお待ちください。

第五章 科学の街の『闇』（前書き）

更新遅くなりました。

少し短いですがご了承ください。

良ければ感想をお願いします。
それではどうぞ。

第五章 科学の街の『闇』

11月29日。

土曜日ということもあり休日の楽しい自由な時間を過ごす学生達が多くいるのが学園都市の常識のようなものだが、この日だけは色々な意味で学生達が賑わいを見せていた。

一端覧祭。

9月におこなわれた大覇星祭と同様に、世界的な行事としてその名を世界中に轟かせる大イベントだ。

そして今この瞬間も、学園都市は、多くの学生があちこちに散らばって動いている。

学年を問わずに活動をしているがその多くはやはり学校ごとの最上級生であり、そして一端覧祭はそんな彼らの為に設けられた行事なのだ。

大覇星祭のようなスポーツ関係の行事ではなく、一端覧祭はオーブンキャンパスや学校説明会のような行事であり、これは『外部の人間』に対する行事ではなく、『内部の人間』の為に行事なのだ。広大な土地を持つ学園都市には、上条の在籍する高等学校はもちろん、大学や短大、中学校、小学校、幼稚園まで存在している。故に学園都市には幼稚園からずっと学園都市での生活をしているような学生達も珍しくはない。

そして多くの教育機関が存在しているということはもちろんそれを見学に来る学年達の量も半端ではない。

現にあちこちの学校はかれこれ何時間待ちということの数えきれないほどの入場者達が列を作っている光景すらあるのだ。

そしてそんな一端覧祭で働くのは学園都市の大人達だけではない。彼らが見学に来る学校に在籍している学生達も、自分の在籍する

学校の宣伝回りに動いている。

そんな多々ある学校の中でも、特に力を入れている学校が複数存在しており、第一八学区に存在する長点上機学園や霧ヶ丘女学院などと言った学校は今も多くの人が見学に訪れている。そして第七学区に存在する常盤台中学校などにも多くの女子が見学に訪れている。

大覇星祭の時には一般公開をしていなかった常盤台中学も、年度の学生達を多く獲得するために一部の場所だけを一般公開しているのだ。

なにより常盤台中学には学園都市に7人しかいないレベル5の内の2人が在籍しており、もちろん彼女達を宣伝に使わないわけがない。

これは云わば学園都市に多々ある学校が、どれだけ自分達の学校に新入生達を獲得することが出来るかという、一種の戦争なのだ。

そしてその戦争の中で、ひとつの高校が注目を浴びていた。

常盤台中学と同じく第七学区に存在しており、今もその高校は多くの学生達で賑わいを見せていた。

レベル的には常盤台中学とは天と地ほどの差があるのだが、そんな中でもその高校は注目を浴びていた。いや、正確に言えば注目を浴びているのは『高校』ではなく、その高校に在籍している1年生の『少年』に注目が集まっていた。

道行く学生はその少年の顔を見る度に、この前終結を迎えた『第三次世界大戦』という単語を口にしており、目からは興奮と期待、憧れなどを含んだ輝きが放たれている。

その中でも女子などはなぜか頬を赤らめながら見つめている者もあり、それを一緒に来た友人などにかかわれているような光景をあちこちで伺い知ることができた。

他の男から見ればそれがどんなに羨ましい光景かは一目瞭然だろう。

だが当の『少年』はそんな視線を浴びてただ『気まずい』という

言葉しか頭に浮かんでいない。

廊下を歩いていれば指を指されながらにやらコソコソと密談をされ、教室に居れば入り口からチラチラと中を窺ってくる学生達の視線を一気に浴びる。

『少年は』そんな視線を一身に受けながら、溜め息をついて心の中で呟く。

（不幸だ……）

その『少年』上条当麻は今も年下や年上の学生達の視線を浴びながらクラスメイト達に頼まれて、近くにあるコンビニにまで買い出しにきていた。

なぜ注目を浴びている張本人が買い出しに来ているかと言えば、金髪のクラスメイト曰く「そんなもん買い出しという名目で道行く人達のための顔見せに決まってるにゃー。カミヤんの顔見たら絶対後ろについてくるはずだぜい」という発言により、クラスメイト達から肉まんだの飲み物だのとさんざん頼まれた挙げ句、今こうして買い出しに出かけている上条当麻であった。

第三次世界大戦後、ローマ教皇マタイⅡリースによって上条当麻を探してくれという言葉が世界中に広がったせいでこうして有名になり、宣伝に使われている上条だが、クラスメイト達に買い出しに駆り出される時点で、クラスメイト達の上条への接し方が以前とまったく変わっていないことがよくわかる。

しかしそんな上条でも、やはり有名のことに変わりはなく、先ほどから道行くことに人々に指を指されながら幾多の視線を浴びている。

（うう…すっげえ気まずい。このまま寮に帰って1日中寝ていたい…）

と思うが、さすがにここで帰るわけにはいかない。上条だってあの高校の生徒として一端覧祭の為に動かなければならないのだ。

しかも上条は今や学園都市の誇る7人の超能力者達と同等の注目を浴びているので、余計に帰られない。一端覧祭は大覇星祭よりは短期間の『3日間』の日程でおこなわれる予定であり、その3日間に学園都市中の学生達が押し寄せるのだ。

結局、今から3日間は上条にとって苦勞の絶えない3日間になるだろう。

（どうかこの3日間が何事もなく平穩に、できるだけ早く終わってくれますように……）

上条は切にそう思いながら、人々の視線を浴びる中をだるさの増した体を動かしてトボトボと学園都市の道を歩いていく。

行間・1

さきなしひちよう
咲梨火蝶。

彼女は学園都市に多く展開している研究所に在籍している研究者だった。

『だった』という過去形の表現の通り、現在の彼女は研究者ではない。ただの学園都市に住んでいる女性だ。

以前の彼女は『とある』研究をしていた。

研究者としての経歴的に同期で、尚且つライバルであつた芳川桔梗に差をつける為に彼女は知り合いである研究者、木原幻生の孫であるテレステイナー^ナ木原との合同の計画を画策していた。

だが、咲梨火蝶とテレステイナー^ナ木原は途中までは共に計画を進めていたが、個々のプランを用いることで計画を二分に分けた。

学園都市の問題となっている置き去り（チャイルドエラー）を実験に使うこと。

そして彼らを使い、未だに未到の領域であるレベル6への道を切

り開こうと画策した。

だが、問題が起きた。

芳川桔梗らが進めていた『絶対能力進化』が頓挫し、その重要な要素であった学園都市第三位の御坂美琴の手によって、テレスティナ＝木原の計画が頓挫されたのだ。

その事実を聞いた咲梨は恐怖した。

いずれ自分の計画も壊されてしまうのではないかと。

ならば、いつそのこと計画を一旦なかったことにすればいい。

そうすれば研究がバレることはない。

人は忘れていく生き物であり、時がたてば次第に研究のことを忘れていくだろう。

研究はその時に再開すればいい。

そして咲梨火蝶は自分の計画を一旦凍結した。

計画にたずさわっていた『物』を文字通り『置き去り』にして。

2

常盤台中学校。

一般公開されている一部の場所は今も大勢の学生達で溢れている。そんな人混みから離れるように、御坂美琴はひとり佇んでいた。

本当ならば常盤台中学校の代表のひとりとして見学者達へのパフォーマンスをしているはずなのだが、美琴はパフォーマンスどころか宣伝回りなどもせずに傷心の渦の中にいた。

理由は簡単。

2週間前にこの学園都市の第一位である一方通行との邂逅の影響だ。

結果的に悪い意味だけでの邂逅によって美琴は2週間前からずっ

とこの状態である。

後輩の白井黒子や他の知人などに心配されていたのだが、生憎今の美琴に彼女達の言葉はあまり意味を持たなかった。彼女達は御坂美琴の抱えている『闇』を知らないのだ。

白井黒子はかつての『残骸』の事件でその一端に触れはしたが、結局美琴の抱えているものを知ることはなかった。

それに美琴自身が彼女を捲き込みたくないと考えているので、当然今から話すつもりなど毛頭ない。

美琴の抱えている『闇』を知る者と言えば、彼女の知る限りでは妹達を除けばあのツンツン頭しか思い浮かばない。

だが彼に話す気もない。彼は今までも多くの事件に関わっていた。

しかし自分も彼のことを全部分かっているわけではないので、恐らく自分が知る以上に多くの事件に関わっているはずだ。

あの戦争からやっと帰ってきた彼をこれ以上危険なことに捲き込みたくない。そんな心情もあり、美琴はひとりで問題を抱え込んでいるのだ。

(一体…どうすればいいのよ……)

美琴の頭に一方通行の言葉が蘇る。

『この街の闇をちつとも理解しちやいねエ一般人が、分かったような口訊くんじゃねエ』

自分は妹達の事件によってこの街の『闇』を知った。

言い返せば、妹達の事件によってしかこの街の『闇』を知らないのだ。

他にも色々な事件に触れてきたが、それらに関しては一方通行の言う『理解』などはしていない。

ただ自分の友達や知り合いが捲き込まれたから。

たまたま事件に遭遇したから。

それらが一体どのようにこの学園都市の『闇』に触れていたかを、美琴は『理解』していない。

だが『理解』したいとはあまり思えない。

美琴は常々にそう思っていたのだ。

元々、一方通行も美琴に対して『理解』などするなと言いたかったので、今の御坂美琴の姿は一方通行にとって理想の形だろう。

だが当人の美琴は、この街の『闇』を理解してでも打ち止め達に関わりたいとも思っている。

例えば実験の為に製造されたクローンの妹達だろうと、彼女達はその由来の通り自分の家族だと思っている。

妹のことをもっと理解したいと思うことは姉として当然だろうと美琴は思っているのだ。

だがどうすれば『理解』出来るのか。

それが美琴には分からない。

（やっぱりもう一度……）

その時、美琴の懐にある携帯が音を立てて鳴り出した。

着信音が耳に響き渡る中で懐から携帯を取り出した美琴は、画面を開いて着信してきた主の名前に目をやった。

そこに表示された名前。

『上条当麻』

3

数時間前。

第三学区にある個室サロンの一角。

その部屋で自分の寢床と化したソファアの上で一方通行は目を覚ました。

眠気が未だに意識を襲う中で、一方通行はゆっくりとソファアに倒していた体を起こす。

「……………あア?…」

瞼が完全に開いていない状態で辺りをキョロキョロと見回し、一方通行は気付いた。

常にやかましいバカ共の姿がない。

シャワーを浴びているのではないか。

そうとも考えたが、いつもシャワー室でギャーギャーと叫び声を上げてうるさい奴らなので、この静けさはおかしい。

とりあえずシャワーではないことは分かる。

だとすれば考えられるのはひとつ。

この部屋にいない。

単純にそれだけだ。

「あのバカ共が……………」

警戒心が無さすぎる。

いくら平穏な日々が続いているといっても、この平穏の前には『飯の』という言葉をつけなければならぬ。

いつ学園都市の『闇』が襲ってくるか分からないのだ。

と思っている一方通行だが、

（あのバカ共がどっかに行くのを止めるどころか寝過ぐすとは……………俺も平和ボケしちまったかア?…）

アイツらのこと言えねエなア。

と、自分の警戒心の無さにも呆れ気味の一方通行は、ズボンのポケットに手を入れ携帯電話を取り出した。

着信履歴にある番外個体の番号を押し、耳元に当てる。

が、それと同時に一方通行の携帯ではなく、どこか別のところから着信音が鳴り、一方通行の耳に届いた。

「あア?」

着信音が鳴り響いているのは今一方通行が腰を降ろしているソファの後ろから聞こえ、一方通行は携帯を耳元に当てたまま、ゆっくりと体を動かしソファの後ろ側に首を伸ばしていく。

そこにはけたたましく音を響かせる携帯電話がひとつ。

番外個体の物であると一方通行にはすぐに分かった。

打ち止めの携帯はお子様用の携帯なので明らかに番外個体の物とは違うからだ。

いい加減着信音がやかましくなってきた一方通行は着信を切り、そして次にその打ち止めのお子様携帯の番号にかける。

そして一方通行の耳に届いたのは着信音ではなく、“電源が入っていないか、電波の届かない場所にいるか”というメッセージだった。

「……………ちっ…」

なんの為に携帯持たせてると思っているんだ。

愚痴を呟きながら、一方通行は軽く舌打ちすると、側に立て掛けてあった杖に手を伸ばし、それで床を突いてソファから立ち上がり、玄関に歩いていった。ガチャとドアを開けてみると、今まで聞こえなかった外の喧騒が耳に入った。日々学生達が往き来する学園都市なので、少しの喧騒は毎日聞こえてくるが、今日のは明らかにいつもの比ではないと感じた。

（そついやア今日は一端覧祭だったか…………ち、面倒くせエ日に出ていきやがって…………）

愉快に部屋から出ていく2人の同居人に軽く苛立ちを覚えながら、一方通行はいつもよりも騒がしい街へと繰り出していく。

「……………重い」

両手いっぱいコンビ二袋を抱えている上条は、両腕にかかる負担に耐えながらいそいそと自身の在籍している高校への道を歩んでいた。

「アイツら……こんなに頼みやがって、覚えてろよな。上条さんを怒らせたらどうなるか……思い知らせてやる……」

クラスメイト達への復讐に燃える上条だが、周囲の人からすればあの有名な『戦争を止めた少年』がコンビ二袋を両手に抱えて歩いていく姿はかなり衝撃的なものだった。

普通に買い物をしているようにも見えるが、一端覧祭が始まっている今、街には多種多様な制服を着た学生達が走り回っており、中には上条と同じように色々なものを両手いっぱい抱えた学生の姿がちらほらと見える。

そんな状況の中で上条の姿を見る人々は一様に思う。

『あの戦争を止めた少年がパシリに使われている』と。

なぜあんなに有名な少年がこき使われているのか。上条の姿を目撃した人々はそんな疑問にさいなまれていた。

中には友達同士で集まってヒソヒソと疑問を呟く者や、大胆に上条に指をさしながら話している者もいる。

そんな彼らの目は一様に語っている。

『なんか……可哀想な人』と。

そんな周りの視線には当の上条は両手に抱えた物を落とさないようにすることで手いっぱい、まったく気がついていない。

だがそんな上条の耳に届いた声がひとつ。

「あああああッ！…つて、ミサカはミサカはあの人を発見したことに打ち震えながら叫んでみる……」

「ん？…今の声……」

どつかで聞いたことのある声だ。

と思い、上条がそちらの方向に首をゆっくりと動かしてみた。

瞬間。

「えっ？」

上条は無意識に声を発した。

上条が声のした方向に首を動かして見たもの。

視界いっぱい広がる学園都市の街並み、普段より人口密度の多い景色。

ではなく、茶色の髪が風に揺られながら自分に近づいてくる光景だった。

回避。

その二文字が上条の脳裏によぎったが、両手に抱えたものの重さと突然の事態に上条の反射神経は脳から体への伝達に若干の遅れを生じた。

そして……。

「つつかまえたああー！！！！！」

がら空きになっている上条の腹部に大声と共に小さな少女の体が食い込むように突っ込んだ。

「ぐはッ！！！」

肺の中の酸素が一気に大気中に排出するはめになった上条の体は、少女の勢いある突進を受け止められず体が仰向けに倒れそうになるが、可能な限り下半身に力を入れ、なんとか持ちこたえようと試みた。

全身の筋肉が引つ張られるような感覚を覚える中、上条はなんとか体の体勢を整えた。

（いてて……はっ！袋の中は！？）

体勢が整えたことに意識を集中していたが、すぐに自分の持っていたクラスメイト達の注目の品に意識が向く。

なにせ上条の右腕の幻想殺しは、あらゆる不幸を呼び起こす。

その右腕のせいで上条は幾つもの不幸を体験してきた。

最近の不幸と言えば、一緒に住んでいる同居人の食欲による食費の問題や。

買い物に行くたびにトラブルに遭遇し、買ったものが跡形もなく消滅するかであり、まさに今がその一歩手前の状況だ。

しかも今回は自分の物ではなくクラスメイト達の物を持っているので、もし落したりして何かが食べ物の形を崩していたりしたら、それこそ不幸としか言い様がない。

そのような理由もあってコンビニ二袋を慎重に扱っていた上条は、袋の中をゴソゴソとあさっていたが、特に問題無しと判断し、ハア安心のため息をついた。

そして次に今現在自分の腰に両腕を巻き付かせている少女に目をやる。

一体どこの誰なのかは既に見当のついている上条は恨めしいような目線をやりながら少女に声をかける。「打ち止め…急に抱きついてこないでくれませんか？上条さんはもう少しでクラスメイト達から死刑判決を言い渡されるところでしたよ」

「ごめんなさい！！」ってミサカはミサカはまったく悪びれることなく反省の言葉を口に出してみたり！！「微塵も反省の色を出していない打ち止めに、上条は今度は呆れ気味にため息をついた。

「つーか、こんなところでなにしてんだ？もしかしてお前ひとりか？」

「ううんって、ミサカはミサカは一緒に行動してる誰かさんに指を指しながら宣言してみる！！」

打ち止めの指さした方向に視線を移した上条は、その瞬間に顔をひきつらせた。

幾つもの木々が列を作るようにして並んでいるのが上条の視界に入るが、その木々の一角に明らかにこちらから見えないようにと木の影に体を隠しているらしいが、それとは裏腹に片方の目だけを木の影からまざまざと出している人物がいたのだ。

「番外個体？一体なにをしてるの？ってミサカはミサカはいつもと

明らかに違う態度に怪訝な顔をして尋ねてみたり」

一方の打ち止めはそんなことは気にもならないようで、いつものように番外個体との会話をおこなっていた。

そして当の番外個体は、「……いや、だって…ミサカの存在理由的に、その人に会うのは躊躇われるというか……」

「御坂妹……じゃないのか？」

番外個体の姿を見た上条は彼女も妹達の内の一ひかりかと考えたが、妹達とは明らかに何か纏っているオーラのようなものが違っていると認識していた。

「えっと、一体どちら様？」

「そっか、あなたは知らなかったんだって、ミサカはミサカはその事実を改めて認識してみる。」

番外個体だよ。妹達の中で言うが一番下の妹」

「番外個体？」

上条が？マークを作るのも無理はない。

なにせ番外個体は上条が一方通行を倒して実験を中止させた8月21日以降に製造された個体なのだ。

当然上条が彼女の存在を知るわけがない。

打ち止めと長く一緒にいた一方通行でさえ、ロシアで邂逅するまでその存在をまったく知らなかったのだ。

サードシーズン
第三次製造計画の妹達。

ただ学園都市の脅威と化した一方通行を抹殺するために製造された存在。

それが番外個体だった。だが今現在是一方通行の抹殺というオーダーでの行動はまったくしておらず、むしろそのオーダーした学園都市に一泡吹かせてやろうと、一方通行と協力関係にある。

そして、そんな番外個体にも苦手なものがある。

今の状況から察すれば理解できるだろう。

上条当麻だ。

番外個体は妹達の”悪意”の塊であり、当然上条への怨みなどは

微塵もない。

怨みがないということはその分代わりの感情が妹達の中にあるということで、上条が妹達のために何か行動するたびに妹達の上条に対する”好意”が増していく。

すると妹達の”悪意”と呼ばれるものが徐々に”好意”という感情に押し流されていき、”悪意”という感情そのものが薄れていつてしまうのではないか。

それはつまり”悪意”の感情を具現化した存在である番外個体の存在そのものを否定することに繋がるのではないか。

そんな理由もあり、番外個体は遠目で注意深く上条の姿を覗きこんでいる。

「つまりアイツは俺が実験を止めた後に作られた妹達なんだな」

「うん。あ、でも大丈夫だと思うよ。一方通行が学園都市に警告をしてから、いくつかの研究なんか中止になったって噂をミサカネツトワークで聞いたからって、ミサカはミサカはあなたに説明してみる」

はつきりと中止になったって断言は出来ないけどね。

そう言った打ち止めの言葉を聞いて、上条は安心と共に不安を覚えた。

中止になったと思っていた実験が秘密裏に進行されていて、その実験によって生まれたのが自分を遠目に見ている番外個体であったという事実。

一方通行のおかげで実験は中止になったと打ち止めは言っていたが、同時に確証は出来ないとも言っていた。

それを聞いて上条の頭に思い浮かんだのは、この学園都市の第三位の顔だった。

（これ、御坂が知ったらまたひとりでなにかしらやりそうだな……）

自分ひとりである実験を止めるために動き、最終的に自分の命を犠牲に妹達を助けようとした御坂美琴。彼女なら、あの実験が極秘に再開されていたなんて知れば、またしても何かやりかねない。

「なあ、そのことは御坂の奴は知ってるのか？」

上条は打ち止めに質問をしたが、意外にもその質問には遠目でこちらを見ていた番外個体が答えた。

「いいや、お姉さまは知らないよ。この街の第一位がミサカがお姉さまに会わないようにいちいち口出ししてきたからね」

「一方通行が？」

「似合わないよねえ。あの一方通行がお姉さまに気を遣うなんて」

「そっか…一方通行の奴がな……」

それを聞いた上条は口元に笑みを浮かべた。

一方通行が御坂美琴に気を遣うなんて、番外個体の言うようにまったく想像出来なかった。

本当に変わったのだと、上条は以前見た一方通行の大きく感じた背中を思い出す。

「ん？」

一方通行のことを考えると、上条の頭にひとつの疑問が浮かぶ。

「ていうかお前ら、ここでなにしてんだ。一方通行はどこにいった？はぐれたのか？」

「はっ、そうだったすっかり用事を忘れていた！！ってミサカはミサカはあなたの的確な発言にひとり感心してみる！！」

「で、一体なんなんだ？」「あのね、携帯を貸して欲しいのって、

ミサカはミサカは上目遣いであなたに交渉してみる」

「携帯？お前持ってないのか？」

「ミサカのはバッテリーが切れちゃってて、番外個体は住んでるところに置いてきちゃったのって、ミサカはミサカは今度は涙目になりながら訴えかけてみる」　いちいち戦法を変えてくる打ち止めに上条は呆れたようにため息をついたあと、ズボンのポケットから携帯電話を取りだし、打ち止めに突き出した。

「ほら、使えよ。ていうか誰に掛けるんだ？俺は一方通行の番号は知らないぞ」「ううん。一方通行じゃなくてお姉さまに掛けるんだよって、ミサカはミサカは質問に答えてみる」

「御坂に？」

「うん。お姉さまと話がしたいんだ。あの人のことについてって、ミサカはミサカは決心を固めながら話してみる」

「一方通行のことをか？」「うん。実はこの前、お姉さまとお話してた時に一方通行がやってきて、そのままミサカ達放ってお姉さまとどっかに行っちゃったんだ」

打ち止めはさらに言葉を続け、

「その後帰ってきてからミサカ達に何も話してくれなかったんだけど、お姉さまが落ち込んでるって情報をミサカネットワークで聞いて、だからお姉さまを元気づけてあげたいんだ！！。それにあの人のこともちゃんと分かって欲しい。

だからこっさり抜け出してきたの。お姉さまのところに行くなんて言ったら、絶対に止められると思ったからって、ミサカはミサカは真摯に打ち明けてみる」

打ち止めは思い出す。

あの実験のことを。

自分の妹達が1万人も殺され、それを阻止しようとしていた御坂美琴。

妹達を殺すことで恐怖心を植え付け、妹達が実験をしたがらないようにすることによって、実験を阻止しようとしていた一方通行。

どちらもがあの実験を阻止しようと考えていたのに、片方がもう片方を理解することが出来ず、結局あいまみえることしか出来なかった。

ふたりはただ”妹達”を助けたかったただけなのに。

それだけの為に動いていたふたりだからこそ、彼らが未だに対立しているのが、打ち止めには耐え難かいことだった。

「絶対あのふたりを仲直りさせてみせるんだ！！ってミサカはミサカは決意を新たに宣言してみる！！」

「そっか……」

打ち止めの言葉に上条は優しそうに微笑んだ。

恩返しのもりなのかもしれないと感じたのだ。
今まで自分を守ってくれた美琴や一方通行に対する恩返し。
そう思うと上条はなんだか温かいものを感じた。

5

御坂美琴は以前来たことのあるカフェに来ていた。その時のことはあまり思い出したくはないと考えている。

このカフェで打ち止めと会話をしている時に現れたのだ。

この街の最強の怪物が。(……まだ来ないか……)

カフェのテーブル席に座りながら美琴は辺りをキョロキョロと見回す。

そうここで待ち合わせをしているのだ。

自分の妹である打ち止めという少女と。

30分ほど前にかかって来た電話の表示画面には、明らかに『上条当麻』という名前が表示されていたのだが、いざ通話ボタンを押して携帯を耳元に当てて見ると、そこから聞こえたのは上条当麻の声ではなく、小さな女の子の声で、一瞬誰か分からずにパニックになっていた美琴だったが、その独特な語尾などを聞いてすぐに誰なのか理解した。打ち止めだと。

そして『お姉さまと話がしたいの。出来ればこの前のカフェで待ち合わせたいって、ミサカはミサカは平にお願いしてみる』という言葉聞いて、最初の数秒はどうしようかと迷っていた美琴だったが、意を決し打ち止めの言葉に了承した。

そして見学者で賑わう常盤台中学から、後日寮監などに地獄を見

せられることを分かっている上で、なんとか中学校から抜け出し、今に至る。

「お姉さまー！！」

「ん？」

そしてそんな美琴の耳にひとつの声が届いた。

その声をついさつき聞いていたのでその人物が誰を呼んでいるのかすぐに分かり、美琴はその声のした方向に目を向ける。

「……え？」

美琴は打ち止めの隣で打ち止めと同じくこちらに向かって来ている人物を見て体が硬直したかのように動かなくなった。

打ち止めの隣にいる少女は、打ち止めより背が高いのはいいとして、ひよつとすると自分よりも高いのではないかと感じた。

妹達は背丈や体重などほぼ全てが自分と同じぐらいだと把握している美琴にとって、その少女はあまりにも規格外だった。

打ち止めと比較しているからかもしれないが、明らかに自分よりも背が高く感じ、何よりも胸の辺りが明らかに違々と断言出来るほどに成長している。

ふたりが近づくに連れてその少女の顔などもはっきりと見えてくる。

自分と同じ顔立ちなのは分かるがあそこまで鋭く重そうな雰囲気を持つ目付きなどが明らかに自分や妹達と違う。

結局のところ、その少女は違うところだらけだったのだ。

打ち止めが元気よく手を振っている中で、美琴はその打ち止めの隣にいる少女に釘付けになっていた。

そしてふたりはやっと美琴の座る席の近くに着き、足を止めた。

そして美琴の視線に気づいていた少女、番外个体がニヤリと不気味に笑い、口を開いた。

「やつぽーお姉さま。ミサカと会うのは初めてだったよね。番外個

体だよ、よろしくね『お姉さま』」

行間・2

咲梨火蝶は走っていた。女性らしくヒールを履いているが、それに似合わないくらいに全力疾走だ。

これならいつそのことランニングシューズに履き替えたほうがいいと思うが、あいにく彼女には靴を履き替えている時間は微塵もなかった。

「はあ、はあッ！…ッ…はあはあッ！…はあ…ひいッ！…」

少し赤みの混じった長い髪をバサバサと風に揺らしている彼女は、まるで苦痛が襲いくる時のように瞳孔が開いており、ヒールを履いている足は靴擦れのせいかわくわく擦れているところが目立ち、足の指からは血が滲んでいた。

だがそんなことはお構い無しに彼女は走り続ける。靴擦れなど余裕がある時にやればいい。

怪我をしているなら余裕がある時にやればいい。

しかし今の彼女にはそんな余裕など一秒たりともなかった。

その時、轟！！。

後方から何かが炸裂したかのような音が火蝶の耳に響き渡り、まるで彼女はそれが自分の死刑判決のように聞こえた。

「ひいひいひいッ！…」

彼女は恐怖のあまり走るといふ言葉が頭から吹き飛び、地面に頭

を抱えてうずくまった。

だが、それが幸をそうしたのかその直後に彼女の頭上を何かが突き抜けていった。

その何かは、咲梨火蝶という目標を失ったことで一定の距離を直線に進んだ後、ゴツ！と衝撃と共に破裂するように爆発した。

その衝撃波は近くにあつたありとあらゆるものを根こそぎ吹き飛ばし、中でも爆発した地点に一番近かつた付近にあつたものはその姿を一瞬でこの世から消滅させた。

「ひいッ！た、助けて……」

咲梨火蝶は震えが収まらない体をなんとか起こして再び逃走を開始した。

とにかく逃げなければ。彼女の頭の中はその言葉しかインプットされていない。

逃げなければ死ぬ。

それもどんな残虐な方法で殺されるか。

全身を痛めつけられ、四肢を血管ごと引きちぎられ、眼球を抉り出され。

咲梨火蝶の頭の中にはそんな恐ろしい光景が今も流れている。

死に対する恐怖ではなく、どんな方法で苦しめられ殺されるか。

即死ならば未だしも四肢を引きちぎられ眼球を抉り出されるなど、それこそ死よりも恐ろしい恐怖。

たとえ足の皮が剥がれようと爪が剥がれようと、それくらいはまだマシなものだと思えてくる。

だからこそ今は逃げなければならない。

後方に迫る『闇』に恐怖しながら、咲梨火蝶はただひたすら走り続ける。

が、

「キャアアッ！！」

「イッテッ！！」

人通りの少ない曲がり角で、そのスピードを緩めることなく、咲

梨花蝶は正面から人とぶつかった。

そして咲梨と衝突した人物の慌てたような声が響く。

「す、すいません。大丈夫ですか!？」

その声に反応し咲梨は無意識に顔を上げる。

「……………あ……」

そして同様に無意識に声を発した。

最近、世間でよく騒がれている少年。

自分が知る中では、あの『絶対能力進化』の被験者であったこの学園都市の第一位を倒し、さらに最近は『第三次世界大戦』を止めた人物として今や有名と化している少年。

その少年が今、自分の目の前にいた。

そしてその少年を微かな希望と信じ咲梨花蝶は声を上げる。

「助けてッ!！」

「えっ!？」

「助けて!!お願い!!」 咲梨のあらげるように出されたその声に若干ビビっている少年の表情を見ていた直後。

ドンッ!!!と。

不吉な音が耳に届いた。

『闇』はもう、ふたりのすぐそこまで迫っていた。

第六章 胎動（前書き）

いよいよこの話からバトル展開になります。

短いですが、どうぞご覧ください。

第六章 胎動

6

「やべ、すっかり遅れちゃった」

上条は学園都市に多々ある道の中で、自身の在籍している高校の近道と言われている道を駆け足で疾走していた。

打ち止めと番外個体と一緒にいた上条だったが、さすがにこれ以上ここで時間を潰しているわけにも行かず、上条は打ち止めに貸していた携帯を返してもらったあと、ふたりと別れて学校に続く道を走っているのだ。

（めちゃくちゃ遅れちゃったし、吹寄とかカンカンに怒ってるかもなあ……）

クラスメイトの吹寄や土御門達の怒りの鉄槌を喰らうかもしれないと、苦笑いしながらも上条はそういった覚悟を決めながら、駆け足で学園都市を駆け抜けていく。

いつもなら恐怖のあまり少し逃げ出したくなる気持ちもあるのだが、今日の上条はいつもとは違っていた。

その理由はやはり打ち止め達から一方通行の変化を聞いたからだろ。

あの一方通行が御坂美琴を傷つけないために行動するなんて以前ならまったく考えられないことだと上条は思ったのだ。

あの実験場での戦いやロシアでの戦いで何か自分に課したルールのようなものがあつたようだが、自分はそれを否定し、”守りたいものを守るのに善も悪も関係ない”と一方通行に言った言葉が、影響しているとは上条はまったく思っていなかったのだが、去り際に

打ち止めが、「あの人が変わったのはあなたの言葉があったからだよ。あなたがいなかったらあの人は絶対に変わったり出来なかった、ミサカはミサカはあなたのことを絶賛してみたり!!」という言葉を言ったことで、上条の機嫌はえらく上がっていた。

自分の言葉で誰かが変わったなんて言われたら、誰だって嬉しいに違いない。そんな理由もあって、上条の機嫌はかなり良くなっていた。

そのテンションを維持しながら、上条は在籍している高校への近道を疾走しているのだが、そんな上条の視線の先に細長い十字路が映り、上条は駆け足でその十字路を右へ右折した。

その時。

上条の視界に飛び込んで来たのは、先に続く道ではなく、ひとりの女性の顔だった。

しかもその女性の顔は、瞳孔が開いているかのように大きく見開かれており、その表情は恐怖によって支配されたように醜く歪んでいた。

「ッッ!!」

突然のことに驚きの表情を浮かべた上条は、なんの動作もとれないまま、その女性と正面から衝突した。「キャアアッ!!」

「イッテッ!!」

急なことで回避行動もブレーキも掛けられずに衝突した上条は、ぶつかった女性と同じように仰向けに倒れてしまった。

だが、上半身だけは地面に付けることはなく、尻から地面に倒れてしまった上条は、目の前で自分と同様に尻餅について苦痛で顔を歪めている女性に慌てたように声を掛けた。

「す、すいません。大丈夫ですか!？」

相手方もどうやら急いでいたようすなのを分かっていた上条だったが、そこは男たる上条。

ぶつかっておいて何もなしというわけにはいかない。

そしてそれ以上に上条には気になることがあった。その女性の

見た目だ。

上条の目の前で自分と同じように屍餅をついている女性は、頬などに引つ掻いたような赤い線が数本あり、その部分からは血が滲んでいた。

ヒールを履いている足はほぼ全体が赤く染まっており、足の指先からは頬と同様に血が少量ついていた。上条がその女性の足などに視線を向けていると、どうやらその女性の方も上条の顔をその血が滲んでいる顔でまじまじと見つめていた。

それに気づいた上条は一瞬たじろぐような行動を見せたが、その直後。

「助けてッー!!」

「えっ!?!」

「助けてー!!お願い!!」 女性は必死な形相で上条にそう訴えてきたが、当の上条は急な出来事が続いたことで頭がパニックになり、目の前の女性の言葉になんと答えればいいのか分からず、口を開いたり閉じたりしていた。

だが。

ドンッー!!と。

得たいの知れないその音が、パニックに陥っていた上条の鼓膜に強烈に焼きついた。

「ッー!!」

「ひッー!!」

小さく悲鳴を上げた女性の後方に上条は素早く視線を移した。

その視線の先にあるのは、長く続くちょうど日の光の当たらない日陰になっている通路。

ではなく。

こちらに向かって飛んでくる野球ボールほどの球体に圧縮された空気の凶器だった。

「ちいッ！！」

未だに屍餅をついている女性をその場に残したまま上条は片足で思い切り地面を蹴り出し、空気の凶器に向かって駆け出した。

自分に向かつてまっすぐに飛んでくる空気の凶器を見つめたまま、上条は右手の拳を力強く握りしめ、その凶器に向けて右手の拳を突き出した。

「おおおおおッ！！」

パン！！と。

視界に捕らえていた空気の凶器は上条の右手に触れたとたんに、その球体の形を崩し、ゆっくりと空気中に溶けるように消えていった。

それを視界に納めた上条は視線をあらゆる方向に向けていく。

これがなんらかの攻撃である以上、その攻撃を仕掛けた誰かがいるはずだ。

上条はそう考え、辺りに視線を向けていると、ゾワッ！！と上条の肌に得たいの知れない何かが駆け巡った。

「ッッ！！！！」

それを感じた上条はとつさに後方にバックステップをした。

瞬間、ゴンッ！！と。

先ほどまで上条の立っていた場所が、まるで何かとんでもない重量のものに踏まれたかのように、バコッ！！と、ちょうど上条の体がすっぽり入るほどの窪みが出来たのだ。

とつさに上空に目を向けた上条だが、そこには青く染まった空以外は何も存在していなかった。

（くそッ！どこに隠れてるッ！？）

得たいの知れない『何か』に若干の苛立ちと恐怖を覚えながら苦い顔をした上条は、とりあえず自分の後方にいる女性をどこかに連れていこうと駆け足で女性の方に寄っていく。

だが次の瞬間、上条の視界の隅にあった正方形の木材で作られている箱のようなものが、突如バガンッ！！と鼓膜に響く強烈な音を

立てた。

まるで内側から何かが破裂したように破壊された木箱の複数の破片が、飛来する鋭い凶器と化して、上条の視線の先にいる女性に向かって放たれた。

「えっ——」

「危ないッ——！」

突然のことになんの反応も出来なかった女性を、上条は前方にジャンプし、押し倒すような形で上に乗った。

そして放たれた複数の木材の凶器はちょうど女性の上に乗っかっている上条の背中ギリギリ上を通って直線に進み、その先にあったコンクリートの壁に突き刺さった。

硬度的にはコンクリートにはまったく敵わない木材が、その常識を覆す瞬間を見た上条は、とにかくここから逃げなければと思い、すぐさま体を起こして倒れていた女性の手を引っ張って体を地面から起こした。「こっちへ——！」

恐怖に怯えている女性に一声掛け、上条は女性の手を引っ張って走り出した。

学園都市の中には巨大な建造物が多くある。

同時にそれらの隙間、いわゆる路地裏のようなものも多く存在している。

まさに今、上条達がいるような場所なのだが、とにかく入り組んでいて、しかもその道が広範囲に続いている。

そんな状況の中で戦う人間にとって厄介なのは、狙われている方の人間が、狙っている方の人間を探さなければいけないということだ。

狙われている方からしてみれば、この入り組んだ迷路のような場所では攻撃を繰り出す範囲も限られているので対処をしやすいかもしれないが、なんと言ってもここは学園都市。

特殊な力を持つ能力者たちが腐るほど存在しており、能力の使い

方によつてはどんなに狭い場所だろうと、あらゆる場所からの攻撃を可能に出来てしまう。

そして入り組んでいるのを利用して姿を隠すことも出来、狙う方としては標的を狙う絶好の場所だ。

上条はそんなことも考えながら女性の手を引いて道を走っていく。
（とにかく広いところに出たほうがいい！！こんなところじゃこつちからは遮るものがありすぎて、敵の姿が全然掴めねえ！！）

広い場所に出ればそれこそかつこつこの的だと思うかもしれないが、あえて広い場所に出ることで敵の攻撃が発射されたポイントを見極めることで敵の位置を割り出すことも出来るのだ。 考えを頭の中で張り巡らせていく上条だが、前方にあつた下水道へと続くマンホールの蓋がガンッ！！と鉄の鳴り響く音と共に下から思い切り突き上げられたように空中へと舞い上がった。

「うわッ！！」

突然のことにさすがに驚きを覚えた上条だったが、蓋がなくなつたことで姿を現した下へと続く暗い穴の中から、レーザー光線のように直線を描いた複数の風が上条達を襲つた。

「まずッ！！」

上条は左手で女性の手首を掴んだまま、右手の拳で風の光線のひとつを横向きに殴りつけた。

すると幻想殺しによつて軌道を強制的に変えられた風の光線が、他の風の光線に衝突し、互いにぶつかりあい相殺することでその形を失い、上条は女性の手を引っ張り、消滅し隙間と化した部分に体を上手く隠し、残りの風の光線を回避した。

（このままじゃキリがねえ！！こつなつたらッ！！） 上条はひとつの考えを頭の中に浮かべ、先ほどのように女性の手を引っ張って走り出す。

すると、バンッ！！と。

後方から地面が砂ぼこりを伴って爆発を起こし、そしてその爆発は、まるでそれ自体が意思を持っているかのように、上条達を追って地面を爆破しながら進んでくる。

それを横目で見ていた上条は、自分達を追ってくる爆発の規則性を考えていた。

（あの爆発は等間隔で俺たちを追ってきてる。だとすればッ！）

上条は必死に動かしていた足を止め、慣性の法則を利用して女性を自分の前にやり、自分達を追ってくる爆発目掛けて右の掌を構えた。

（次に爆発する地点は——ここだッ！）

上条が右の掌を地面に押しやるのと同時に、その地点から爆発が起こり、爆発という存在そのものが消えたただの砂ぼこりが上条達のいた場所を広範囲に覆い隠した。

時間とともに砂ぼこりが消えていくと、そこにはすでに上条と女性の姿はなかった。

上条は爆発の発生する地点を探りだし、そして爆発が地面を碎いた瞬間に右手の幻想殺しを使い、砂ぼこりだけを発生させたのだ。

煙の中に紛れて逃げるために。

やがて砂ぼこりは完全に消え、そこには等間隔に破壊された地面だけがその場所の異様さを匂わせていた。

だが、そこには影がひとつ。

「がっ……ぎ、があ……」

上条でもあの女性でもない。

もうひとりの人物。

狙われていた上条達の逆、上条達を狙っていた存在。

「あ……があ、が、が、変……える」

不気味に声を発したその存在は、次の瞬間にはそこからすでに姿を消していた。

次なる標的を探すために、その『存在』は静かに動き始める。

この街の『闇』が再び。学園都市最強の能力者、一方通行によって解体されたはずの『闇』が、今再び動き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8046q/>

とある魔術の禁書目録 外典

2011年9月1日14時01分発行